
ねじまげ世界の冒険

木下善博

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねじまげ世界の冒険

【Nコード】

N1851A

【作者名】

木下善博

【あらすじ】

三十七歳の絵本作家、高村利菜は幻覚や不眠症といった症状になやまされていた。どうやら、小学五年生の夏に原因があるらしい。故郷の神保町では殺人事件が多発して……。世界の崩壊がふたたびはじまるなか、六人仲間たちは再び結集し、勇気と信頼を寄せ集める。世界のねじまげに立ち向かうには、互いを信じる心を、力とすることだ！本格冒険SF小説！

第一章 両神山にて（前書き）

自信とは、自分を信じる力である。……たぶん

第一章 両神山にて

自信とは、自分を信じる力である。……たぶん

『ねじまげ世界の冒険』

第一部 おまもりさま

章前 二〇二〇年 梅雨

一

またあの夢だ。

彼女は布団の重みを感じ、かつと目を見開いた。暗闇のなかで目をしばたく。汗をびっしょりかいている。悪夢のために体はこわばり息を詰めてさえいたが、そこが自宅の寝室だとわかると、やっと呼吸をつくことができた。

女はやせこけて、おもやつれがしている。暗闇で、目がランランと光っている。うすいピンクのパジャマを着ているが、その明るい色合いは女の深刻な心境をかんがみるに、なんとも不釣り合いな感じだ。布団のなかで曲がった膝をのばすと、こわばった背筋がきしんで痛かった。彼女は眉をひそめながら、目を覚ますたびに浮かぶあの言葉を、忌々しい思いで受け止める。世界はねじ曲げられている……という言葉。

「またあの夢か……」

彼女は泣きたい気分で一人ごちると、額に手をやり、大粒の汗をぬぐった。辺りは暗く、部屋はしんとしている。時計の音が、ほとほと鳴るばかりで、あとは夫の寝息がするだけだった。

彼女は37才の主婦で、名前は高村利菜といった。高村秀男とは

結婚して十二年がたち、小五の娘を一人もつけている。昨年絵本を出版したこと以外は、ごくふつうの主婦だと自分では思っていた。

不眠症、不眠症という言葉が浮かぶ。昨晩は何時に眠ったのかと焦燥にかられる。最後に針を確認したときは夜中の二時を指していた。いまは三時半である。その間、熟睡の感覚は一度もなかった。

睡眠時間が減り始めたのは昨年十二月からだ、今では一時間も眠ればいい方だった。最初の一ヶ月は寝付きが悪いていどだった。二ヶ月目にはいると明瞭な悪夢をみはじめた。そうして睡眠が、本格的に遠ざかっていったのである。

身を起こそうとすると、関節が軋んだ。体はオーバーヒート寸前のエンジンみたいだ。不眠症と悪夢が始まって五ヶ月がたち、彼女は自分が限界に来ていることを知った。

ベッドのうえで身をよじらせ、夫を起こさないよう注意をしてふとんをどかした。鏡を見ると頬のこけた女がいて、その女の瞳が光るのが見え、泣いていたんだと彼女は思っ、鼻をすすり夫に背を向けた。泣くほど怖がっていたのに、夢の内容はさっぱり思い出せない。

床に足をおろし、冷たい板間の感触に吐息をつき、動悸がおさまるのを待った。ゆっくりと立ち上がるが、体がふらついた。利菜は体勢を立て直すと、すっくと身を立て、胃袋の中身がさかのぼるのをこらえる。時計とにらめっこをするうちに吐き気が遠ざかる。部屋を歩くと足下もしっかりした。彼女は額と腰に手を当てるおなじみのポーズで、おなじみの不眠症問題にとりくんだ。

はじめのうちは体を使っていないのが原因かと思った。ジョギングもしたし水泳もやった。つまらない本を読んだりコーヒーを断ったり蜂蜜を食べたり呼吸を深くしてみたり、あらゆる努力をおこなったが効果はなかった。自立訓練法を試みたこともある。ヨガもやってみた。かかりつけの医者に相談もしたが無駄だった。だいいち睡眠とは努力をするようなことなのだろうか？ 眠るのは自然なことではないのか？ 眠いときに眠るのは天国だと思う。要求と行為

が合致する。眠れる健全人は神経の問題だと彼女に言うが、それならば彼女はこのところずっとトゲトゲしていた。朝がきても疲れが抜けないのだから当然だし、じわじわとだが自分が鈍くなっていくのがわかる。精神を満たしているのは不安と強迫観念だ。頭が回らない、気が利かなくなる、注意力は散漫で神経過敏になっている。娘に手を挙げたこともある。それに対し反省もしてはいる。

彼女は右のこめかみをもみながら　実のところ頭痛もしていたのである　部屋を歩き回った。

「こんなことをしたってどうせ名案なんか浮かばないわよっ」

壁を殴りつけたくなつた。疲れをとるために眠るのに、眠るために疲れ果てるとはどういうことだ？

彼女はとほうにくれた。不眠症がすべてを鈍らせていた。判断力も思考力も記憶力も、生きる気力も削りとつた。今では感情を抑えることも難しい。人に比べれば寛大な方だったのに、神経過敏でヒステリーの兆候が常にある。最悪なのは娘に手をあげたことだ。

(口答えをしたからなに？)

口の中でつぶやく。あの子の顔を張り飛ばしたのに、正当な理由などなかった。八つ当たりをしたのである。いまでは鉢植えにさえ腹が立つ。体調はつねに崩れて貧血気味だし、それに幻覚をよく見るのである。声を聞くと、誰もいないのに人の気配を感じたりする。脳腫瘍でもあるのだろうか？

医者にはストレスをためないことなどと言われたが、そのことにもまたぞろ腹が立つてきた。「ストレスがたまつてなにが悪いの？ ストレスをためるな？ 助言をどうも役に立つわよっ。ついでにストレスをためない方法も教えてんだっ。眠れないからストレスがたまるんだ！ 人の百倍高給とるくせに、旦那とおなじことしか言えないのかっ。不眠症はたいしたことじゃない？ 夜中に死にたいぐらいイラつくのがたいしたことじゃない？ たいしたことじゃないんならっ、今すぐ治せ！」

「利菜？」

声をかけられ、利菜は自分が一人ごとをつぶやいていたことに気がついた（つぶやくというより怒鳴っていたが）。彼女はばつの悪い気持ちで振り向いた。秀男がベッドの上で体を起こしていた。

秀男とは講文社の職場で知り合った。利菜は大学の頃から原稿の持ちこみをしており、そのままその出版社に就職をしたのである。秀男は三つ年上で彼女の上司だった。気の強い彼女は仕事の上ではなんどもぶつかりあったが、一年後には結婚しその一年後には子どもが生まれたので仕事をやめた。その後秀男は編集長になり、雑誌をいくつもかかえている。利菜に絵本の仕事をもちかけたのもこの秀男である。彼女自身は中学生のころから絵を描いていたものの、たんなる趣味のつもりでいた。ライターの仕事は家にはいつてもつづけていたが（腕のいいライターは仕事にあぶれない。秀男論）、自分に絵本が書けるとは思えなかったし、秀男は面白がつて言っているだけだと思った。夫がしつこくこの話を持ちかけたとき彼女はこう言った。

「書いたことないじゃない。書き方も知らないのよ？ 花や風景を写実すのと、頭のなかにある空想を紙にうつすのはぜんぜん別なわけ。無理よ無理無理あんたが何言おうとだめなもんはだめ。おだてんのもすかすのも金輪際やめてちょうだい」

と彼女は言ったのだが秀男の返事は、「じゃあ、今から覚えればいいじゃないか」

であつて、彼女の主婦は忙しいあたしは忙しいそもそも気が乗らないんだけど、といった論理にはまったく応じてくれなかった。応じたのは彼女のほうで、仕事のと時からずっとそうだが、彼は彼女をのせるのが職人のようにうまいのである。

それに秀男は他人の才能を見抜く目をもっていた。しばらく打ちこんでみると、自分には絵本の本質を見抜く天賦があるらしいということが利菜にもわかってきた。他人の絵本を読んでいると、どこをどのように書いているかがわかるし、そうした評論的な視点だけでなく、自分ならこう書くという独自の視点ももっていた。彼女は

その筋にそって仕事を進めた。できあがったものは娘にみせた。ライターのとくと同じく、やはり純子が審査員だった。

娘の評価は、これいけるよ、の一言だったが、彼女はそのとき娘の視線にやどった驚嘆や賛美ともとれるなにかを喜んだ。彼女はいきおいにのって仕事をすすめ、半年で絵本を完成させると、その年の十月には出版にこぎつけた。あれを書いていたころは、彼女にも不眠症の症状はなく健康そのものだった。今では仕事に戻ろうにも構想すらわからない始末だった。結局不眠症は、睡眠だけでなく、彼女の才能もかすめとったわけである。

「眠れないのか？」

秀男はベッドの上から体をのびしナイトテーブルの明かりをつけた。部屋がすこし明るくなった。彼女は鼻で笑いとばした。

「おもしろい質問するじゃない。眠ってるように見えるんなら、そう言つて」

「また八つ当たりか」

秀男はグラスを手にとった。錠剤入りのびんをもう片方の腕にもち、今年いくどめかになる質問を繰り返した。

「薬は飲んでるか？」

「飲んでない……」彼女は爪をかみはじめ、秀男はその手元を見ている。

「飲んだ方がいい」

彼はペットボトルを手にとりミネラルウォーターをコップについだ。薬瓶のふたを回すと錠剤を手に落とした。ベッドを降り、近づいてきた。

「欲しくない……」彼女は涙声で言った。

「そんなに苦いのか？」秀男は鼻を錠剤に近づける。「においは悪くないぞ。飲め」

利菜は強情に腕を組んだ。「いやよ」

「飲めよ」

秀男がなお手をつきだしてくると、彼女は薬を奪いとった。

「いらんわよ！」

と壁に叩きつける。錠剤の一粒は粉々になり床に落ちた。他の粒は周囲に散った。彼女はあとじさった。

「欲しくない……欲しくないのよっ……飲んでも効かないんだもん」「はじめは効いたじゃないか」

秀男の落ち着きぶりに利菜はまた腹を立てた。「それは最初だよ！」怒りでふるえながら秀男をにらむ。「それはね確かに眠れたわよ。でもあのときだっけすぐに目が覚めたのよっ。あなたには言わなかったけど……」

「そうなのか？」

「そうよ。間抜け面しないで。すぐに眠れたけどすぐに目が覚めたのよ。もう薬なんて飲まないわ。眠れなくなっけっこうよっ」

「そうやってやけをおこすのはやめろよ」秀男は我慢強く腰に手を当てた。「眠らなくて平気なのか？ まいってるのはわかるだろう？」

「当然よ。あたしがいつも通りに見えるの？ あんたこんな女に惚れたわけ？」彼女は両腕を広げて、首を左右に振りたてる。「まいて何が悪いわけ？ ろくに眠れなくてごめんなさいねっ」

「その早口と身振りは変わってないぞ」彼は彼女の真似をした。「オーバーアクション」

「あんたもあたしを怒らすのはあいかわらずね」利菜は腕を組んだ。秀男が肩をすくめた。彼女の物真似をまだやめない。「あんたは働いてるころからいつつもそうよ。あたしがいらついでるのが見えな
い？」

「感情は見えないし、おまえは怒ると頭が回る」

「今はあんたにキレてんのよ」と吐き捨てた。「八つ当たりだけど
ね」

「それも変わってない」秀男は含み笑いを漏らす。

「そうね。絵本を書き出してまたぞろ上司と部下に戻ったわけだし。礼でも言おうか？」

「ごほびに薬を飲めよ」

「いやよ」

「効くかもしれないだろう」

彼女は本気で腹を立てきつく言った。「薬を飲むともっと自分がだめになるのよ。にぶくなんの。わかったっ？」

秀男は彼女の語気に口ごもった。ふざけるのをやめて本腰になつたが方途はなかった。彼女はもともと不眠症になるような性格をしていない。絵本の仕事が終わって燃え尽き症候群でも出たのかライターズブロックかと思つたが、そんなありきたりなものせいにするには彼女の症状は重かつた。毎日小一時間と眠れていないし日頃の拳動もおかしいのである。認めたくはなかつたが、精神的な病に見えた。不眠症がここまで来た以上薬を試してみるのは良策だと思えたが、当の妻兼部下が拒否している。秀男は腕をくんだまま弱り果てた。

「どうしてやつたらいいんだ。眠れない理由がわからないし……ストレスが……」

「ストレスのせいじゃないって言うてるでしょ！」

利菜の大声が切り裂くように部屋を満たした。秀男は表情を硬くした。

「おい、大声を出すな。純子が起きるだろう」

二人は黙つた。ややあつて彼女は言つた。

「起きたからなんなの。あの子はいつでも眠れるじゃない」

秀男は傷ついた表情を見せたが顔は伏せなかつた。

「そんなふうになつて言つなよ。そこはおまえらしくないね」

利菜は黙つた。不眠症がすすむとばかな言葉が出るもんだ、と唇をかみしめた。

秀男は黙つてポケットに手をつこんだ。今度は小さく肩をすくめた。「仕事はすすんでるか？」と彼は聞いた。

秀男は利菜の気晴らしになるかと思ひ、ライターの仕事をいくつか持ちかけていた。

「ぜんぜん。あんたが編集長じゃなきゃとつくにお払い箱かもね」
「心配ないよ」秀男は言った。「おまえは才能あるから」

利菜は鼻で笑ったがべつに嫌みな笑いではなかった。「あたしを乗せんのも相変わらず上手よね」

「ああ」秀男は一瞬とまどうように顔をふせたが、まっすぐにみつめ、「おまえが不眠症でも幻覚を見ても。夜中に起きておれに当たっても、関係は変わらないよ。いまでも惚れてるからな」

と秀男は言った。彼の目は強く、おかげで彼女は彼の言葉を信じた。ときどき率直なこと言っただけ喜ばすのもかわらないな、と彼女は思った。このところ二人の関係はうまくいっていなかったが、彼女だって今でも彼が好きだった。

秀男は、「俺もストレスが原因とは思ってない。おまえここんとこ、ほんとにおかしいもんな」

率直なご意見どうも、と利菜は思った。

二人は思い思いの行動をとった。利菜はポケットに手をつっこむとぶらぶらと歩き回り、秀男は同じ場所で踵を浮かせてはおろすのをくりかえし腕を組んで考えている。

秀男はやがてぼつりと、「実家に戻るか？」

利菜は立ち止まり険のある表情を見せた。

「なによそれ」

「純子も春休みだろう。寛ちゃんところで泊まって、のんびりしてきたらどうだ？」

「女二人追い出して、浮気相手でも連れこむ気？」彼女は意地悪い笑顔を見せた。

「浮気相手はいない」秀男はにやけた。「もてるけど」

二人は互いにつつむいてにやりと笑った。

彼らはまた部屋をぶらつきはじめた。ときおり互いに目をやった。

「あんた何考えてんの？」

「明日の仕事のこと」

「また雑誌を立ち上げるんだって？」彼女はあきれたように言った。

「そう」秀男は思いついたように付け足す。「ああ、心配すんなよな。おまえの助けはいらぬから」

「そんなこと言って。仕事がつまったら原稿を回すじゃない。いつもいつもいっつも」

「腕が落ちてなきやこんども回してやる」

「もちろん落ちてるわよ……」

彼女が落ちこんだ声で言うと、秀男はそつと近づく。「できることがあつたら、なんでもするよ」と彼女を抱き寄せる。

「不眠症は治せないけど？」

秀男は少し体を離して、彼女の額にキスをした。「不眠症は治せないし文も書けない。絵もだめだし。だから原稿はおまえに任す」

「頼りにしてるわよ、編集長」

「おれもおまえを頼りにしてる」と彼は言った。「わかるよなあ。

お互いさまだつてことぐらい」

「もちろん」と彼女は言う。「あたしだってあんたを頼りにしてる」

秀男は利菜の髪をなでおろす。利菜はほつと吐息をつく。秀ちゃんはまだ私が好きだな、とのんびり思った。いかげん愛想を尽かされるかと思っていた。このところ八つ当たりばかりしていたからだ。でも、八つ当たりをするところは秀男にだつてある。秀男の言うとおり、確かにおたがいさまで、まだ互いが必要だった。

「こんな女と離婚したら？」彼女は心にもないことを言った。

「よせよ」と彼が言う。「おれにほれてるくせに」

「ほれてるのはあんたの方でしょ」利菜は秀男の肩をそつと噛む。

「一目ぼれだつたくせに」

「先に告白したのはそつちだ」

「最初のデートでせまってきたの誰？」

「それはおれじゃない」と秀男は笑った。「別の相手」

秀男は彼女の背をなではじめた。二人はいつもの言い合いを続けた。そのうち彼は体をぴたりとくっつけ、体を軽くゆすりだした。彼女の右手をとった。

彼女はさも愉快げに声をたてた。「なにしてんの？」

「おどつてる」

二人はわりと長い間踊った。やがて二人でベッドについた。行為を終えたあと、利菜は秀男の隣で天井をみつめた。不安は消えていなかったが、今は安心感も生まれている。彼は彼女と手をつないでる。互いを信じる気持ちは消えていない。二人が仕事上の上司と部下でしかなかったとき、秀男はよくこう言った。「問題が見つかってよかった」そういつて、肩をすくめてみせるのである。「直せばもつとよくなる」

彼女は眠れなかったが起きる前より前向きだった。ただ彼女はこうも思った。悪夢や幻覚の遠因は、このなぜとは知らない不安感にあるのだと。彼女は不安だ、医者というストレスなど関係なかった。強い不安を感じていた。強迫観念が空気のように彼女をとりまいている。それでも利菜は秀男のことを思い一人娘を思いあきらめないことを決めた。不眠症だつていつかは解決するに違いない。ところが彼女の心中にはあの言葉が浮かんでもいた……世界はねじ曲がっている　　という言葉。

彼女は言った。

「世界はねじ曲がってなんかないよ。曲がってるのはあたしの性根の方」

結局彼女は彼女の夫を信じ、彼女自身を信じたのである。問題を抱えるのもお互いさまだが、今まで前向きに解決してきたのだ。だめだったことはあるが、だめにしたことは一度もない。

利菜は隣で眠る秀男にそつとつぶやいた。

「不眠症には一番効果があるわよ」

二

事態が動き始めたのは数日後のことだった。その日は前日からの雨が近づいた。家には彼女だけがいた。夫は仕事に行き娘は学校だ

った。午前十時すぎ、クロネコヤマトの宅配が、彼女に荷物を届けてきた。

高村利菜の郷里は千葉県多賀郡の神保町だが、いまは東京の戸建てに暮らしている。荷物を送ってきたのはその郷里にすむ竹村佳代子で、利菜とは幼稚園のころからつづく幼なじみの親友である。

佳代子はこれも小学校からの腐れ縁だった寛太と結婚し、十九年がたった今では二人で自然農園をやっている。利菜は中学の卒業とともに県外の女子校に通い始め、大学も就職も東京だった。神保町とはずっと疎遠だったのだが、佳代子と数人の仲間とだけはずっと交友がつづいている。

利菜は段ボールを居間まで運んだ。佳代子がホームセンターからもらってきた段ボールには薄く土がついている。いつものように野菜を送ってきたらしく、かなり重かった。箱を開くと新聞紙でくるまれた野菜があった。佳代子が野菜を届けてくるのは毎月のことので宅配など珍しくなかったが、今回は新聞の上に封筒がある。茶色の便箋がのっていた。

佳代子が手紙を？ と彼女はいぶかしんだ。用があるのなら電話をかけてくればいいと思った。佳代子は筆まめな方ではなかったからだ。

そういえば……と彼女は気がつく。この数ヶ月は電話のやりとりすらしていない。以前は三日と開けずに連絡を取り合っていたのに？ 彼女がかけなかったのではなく、向こうからもかかってはこなかった。封筒を裏返した、これと書いて署名はない。胸騒ぎがした封筒を机に置き直した。佳代子にも何かあったのではないか、という直観がした。不眠症では半年も悩んでいたのに、佳代子に相談する気にならなかつたこと自体が不思議だ。友達は大勢いるが、格別思い入れのある親友といえば佳代子をおいて他にない。出版された絵本をまず見せたのは佳代子だし、結婚の報告をまつさきにしたのも佳代子だった。誰にも打ち明けきれない悩みも、佳代子なら相談できた。ともに初潮を経験した友人とはそういうものではないの

か？ 幼なじみといえは自然と恥ずかしいところも知ってしまうものだし、なんといつても、佳代子は利菜に関するいろんな秘密をにぎっていたのである。

彼女は表に面したガラス戸に目を向けた。そのとき六人の子どもたちが小雨の中に立っているように見えたが気のせいだったようだ。彼女は大きく息をついて、封筒に視線を戻した。

不眠症がはじまったのが昨年十二月……三月の半ばからは夢遊病がはじまった。ロフトに隠れていたこともあるし、庭に出ていることもある。二日前は風呂場に隠れていた。目を覚ますとバスタブにうずくまっていた。シャワーからは小雨のように水が落ち、彼女はしぶぬれになって、泣きながら膝をかかえていた。部屋は真っ暗闇だったが、突如として明かりがついた。彼女は自分がどこにいるかを悟った。バスタブのカーテンはしまっていたが、そこに人影がうつっていた。

「誰……」と彼女はつぶやいた。夫のはずはない。輪郭でそれを察した。

彼女は立ち上がってカーテンを開けた。

そこにはずぶ濡れの女が、着物と長い髪を垂らして立っていた。彼女は溺死女だと思い悲鳴を上げ尻餅をついた、激痛に顔をしかめそれでも急いで顔を上げたがそこではカーテンが微かに揺れているだけで何もいなかった。誰も。

彼女はシャワーを止めた。ずぶぬれの体を見下ろした。いつもの幻覚にしてはできすぎだな、と暗い笑みをもらし、服を着替え台所の椅子にすわりながに起こったのかを考えた。包丁をもち、なにごとかを考えながらほうれんそうを切った。みそしるをつくり目玉焼きをつくり食卓に並べていると家族が起きてきた。たまたま早く起きたのよ、と説明した。たまたま不眠症になったし、たまたま幻覚を見るようになったのよと考えた。二日前のことである。

彼女自身は、そうした幻覚などの症状にはすべてなにかしらの遠因があるのだと考えていた。無作為に起こっているのではなく、あ

る一定のまとまりがあったからだ。無意識のうちに行動しているときは、何かから逃げようとしていることが多かったし、例の悪夢も同じ内容のものをくりかえし見ているようだった。

佳代子の文面は次のようなものだった。

『まいどっ。ゲンキでやってるか？ お久しぶりです、竹村佳代子でございます。梅雨もちかごろ盛りがついて、こっちじゃあざんざんぶりがつづいてる。ここんとこあなたともご無沙汰だったんで手紙を書こうかと思う。こっちじゃあ近所の小学生を十人ばかり引き受けて、農園を手伝ってもらった。収穫があったんであなたに送る。そっちはどう？ あなたは元気か？』

佳代子は簡単にご無沙汰だったと書いているが、彼女たちはメールのやりとりすらしていない。不眠症がはじまってからは、ふつつりと連絡が途絶えていたのではないかと思っただけで彼女は眉をしかめた。半年もご無沙汰がつづけば、身の上を心配しだしてもおかしくはない。

佳代子の手紙はこう続いた。『最近電話もしてなかったけど、あなたのことは気にはしてる。あなただってあたしのことを気にかけてくれているとは思っけど』

「ほんとというと、あなたのことはかけらも思い出さなかったよ……」
利菜は茶をいれた。手がふるえていたので彼女はますます落ちこんだ。体の病気ならまだ対処のしようがあるよと彼女は思っただけで、熱い玄米茶を一口飲んだ。

『最近こっちは物騒でね、ちっぽけな町のくせに犯罪はよくあるし、こどもが連れ去られる事件が頻発して、うちの坊主も集団下校なんてやってる。東京より不安安全なぐらいよ。割に合わないと思わない？ うちの農園もちっぽかいを出されて参ってる。警察にとどけたりはしてないけどね。いやがらせをされる覚えはないんだけどね……。できのいいスイカはぜんぶ踏み潰されてるし、温室のビニールを引っぺがされたこともある。そんなわけであなたには聞いてほしい愚痴がいっぱいあるのよ。電話をしたかったけど、それだとうま

く伝えられるか自信がない。根暗な話になりそうだしね……」

「だからなにがあったのよ」

手紙に話しかけながら無意識のうちにポットを撫でた。猫がいればいいのだが、二ヶ月前に家出をしてそれきり戻ってきていない。

一枚目の紙をめくったとき、彼女が目にしたのは不眠症という文字だった。

『こうい子どもじみたいたずらもたまらないけれど、いちばんまいつてるのは眠れないことなのよ。去年の暮れあたりから寝付きが悪くなってるのに気づいたけど、それがよくならなまま今もつづいてる。今じゃあ一時間と眠れない。悪い夢ばかりみるし。あんただけは打ち明けるけど、幻覚までみるようになった』

佳代子の文字は急速に殴り書きになり、読むのも難しいぐらいの字面が続いた。利菜は苦労しながらも必死に読んだ。佳代子が夢中になってペンを走らす姿が、彼女には容易に想像できた。理不尽だが、同じ悩みをもつ人間をみつけて彼女はどっと安心したのである。『寛太のやつも同じだった。眠れないし幻覚をみてるらしい。別に夜の営みに精を出してるわけじゃない。つまり夫婦そろって不眠症にかかったというわけ。あたしたちはそのうち好転するものと思いきみ、互いにその話しをしなかつたけど、症状はだんだん重くなってくるし黙っているなんて不可能だった。二ヶ月前、あたしたちは悩みをうち明け合った』

「それはうらやましい限りね」

といらだちをにじませる。彼女は同じ症状で苦しむ相手がそばにいない。秀男も不眠症にかかれればいいのに。

佳代子は本当に思いつくままに、一人思索にふけりながら筆を走らせたらしい。手紙はだんだんと自己独白めいてくる。

『あたしたちは話すうちに、子どものころ似たような体験があったことを思い出した。たしか小学四年か五年の頃だ。あたしたちは不眠症にかかり、集団で幻覚をみるようになった。子どもの頃そんなことがあったなんて、思い出しても信じることができなかった。不

眠症が伝染するなんてあたしは訊いたことがないし、そんな強烈な体験をすっかり忘れてたりするものだろうか？ 寛太とあたしは新ちゃんや達郎ちゃんにもこのことを話した。すると、二人も不眠症で悩んでいることがわかった」

新治と達郎というのは、郷里に住む尾上兄弟だ。今も交友がつつく幼なじみたちである。

「症状が出始めたのはみんな同じ時期で、悪夢をみるという点でも共通している。あたしはあの夏、同じような経験をした仲間のことを思いだした。あたしたち四人をのぞけば、後はあんたと紗英がいる。あんたも紗英も不眠症にかかっているんじゃないだろうか？ あたしたちはよくよく話し合ったが、あの夏に関するあたしたちの記憶はほとんど抜け落ちていた。あたしにはあんたが覚えているかどうか確認がない。だけど、あんたはあたしたちとちがう体験をしている。」

四人で集まって話をするうちに、新ちゃんはとっぜん思い出したように立ち上がってわめいた。稲光にあったみたいな顔だった。あの夏に利菜が両神山で遭難した、と。あんたは二十五年前、あの山で一人遭難した。ちょうどみんなで幻覚をみていた時期だった。二十年以上もわすれていたけれど、でもあたしは思い出すことができた、あたしたちは。あんたはどうなの？」

「覚えてないわよ！」

利菜は手紙を投げ捨てた。しかし覚えていたのである。佳代子の手紙は彼女の記憶も呼び戻した、朝礼台にのぼる自分の姿が浮かんでくる。あれは無事帰ったことをみんなに知らせる集会だと彼女は悟り、佳代子たちと自転車を走らす姿や、あの子たちと笑い合う姿を思い出す。あのころ 佳代子、紗英、新治、達郎、寛太の五人はいちばんの親友だった。今にいたっても交友がづくほど親密な友達だった。だけど、二十五年前に自分たちが抱えた悩みことは、すっかり忘れていたのである。大人になって、昔のことを話し合うのは幼なじみの特権だ。しかし、これまでに不眠症の話が出たこと

は一度もなかった。遭難のことも。幻覚を見たことも。

彼女は再び外に目をやった。すると、二十五年前の子どもたちが、ずぶ濡れの庭に立っていた。六人の子どもたちが、雨に濡れながら、彼女は手紙を取り落とした。

「あんたたち、あんたたちも苦しんでんだ……」

と彼女は言った。彼女はこわごわしながら、ちらばった手紙をかきあつめる。外では雨が吹きしぶいている。しまい忘れたタオルが風になびいている。子どもたちは一様に暗い表情をして彼女をみつめる。あの子たちが寄って来はしないかと彼女は不安になる。二十五年前の佳代子が、子ども時代の自分のとなり立っていた。おさげを編んで、そばかすを散らした顔の佳代子。二十五年もたつのに、ここにいる佳代子はあの頃とおなじ格好をしている。デニムのつなぎを着て両手をポケットに突っこんでいる。何でも入れられるから、でかいポケットのついたのが好きで、寛太を殴るのが趣味だった。同じ県営マンションに住んでいた佳代子。兄弟が多くていつもめんどうを押しつけられるんだと腹立ち紛れに愚痴をこぼした佳代子が、どんよりと濁った目をして立っている。あの頃、県営マンションにはあと二人の親友がいて、それが達郎と新治の兄弟だった。達郎は一つ年上で、リトルリーグのヒーローだった。高校のとき肩を壊して職人の道に進んだが、当時はプロを囑望された逸材でもあった。そこにいる一同の中ではいちばん背が高い。ほお骨がぐりぐりと突き出て、佳代子にはホームベースとあだ名された。達郎のとなり立つ、ちっちゃなネズミ男が新治である。二人の兄弟は同じTシャツを着ている。本が好きで、利菜が絵本を書くことをいちばんに喜んだのが新治だった。のび太がかけるみたいなまん丸めがねに水滴がつき、彼の目玉は見えなくなっている（あの奥には目玉なんてないんだと思って利菜はぞつとする）。列のはじっこですなたように口をとがらせている丸坊主の小僧が寛太だ。小学生当時の寛太は、じいさんにいつも丸刈りにされて、それで坊主頭だったのである。彼の顔を流れる雨の筋は、子どもたちのなかでもいちばん多く太い。

喧嘩つぱやくて神保小では問題児扱い。でも今では立派に仕事をこなし、トライアルウィークの生徒の受け入れだつてやっている。反対端にいるのは、紗英だ。中学に入学すると同時に急速に背をのばし、男の子たちにかかわれた背の高い紗英も、このころは利菜たちと頭を並べている。肩までの髪からしずくが垂れている。黒いフリルのついたお上品なワンピースを着てる。彼女たちがママゴンと呼んだ母親がいつもそんな服を着せるのである。

「あんたもなの？」

と彼女は言った。この中で町を離れているのは、彼女と紗英だけだった。紗英は今ではスチューワデスになり世界中を飛び回っている。結局ママゴンはこの子に足かせをつけるなんてできなかったのだ。線の細かった紗英も人一倍の粘りをみせ、文字通りにあの町を巣立っていったのである。

新治と達郎は、今では二人で木工房を開いている。木に関するものならなんでもつくってしまう、手作り工場を立ち上げたのだ。利菜がデザインを手伝うこともある。二人とも絵の趣味を知っていたし、彼女の腕をかってもいた。だけど、そこにいる子どもたちにとってはまだ遠い未来の話だった。あのころは、大人になるなんて夢にも思わなかった。小学校生活のおしまいなんて、まだまだ考えられなかった。

一同の真ん中にいるのが利菜だった。小学五年生の彼女は、長く髪を伸ばしている。やせっぽちの脚にジーンズがぺったりとはりつく。まつげを通して雨が目にはいるのか、まぶたをしばたいている。「あんたたちみんな……」と彼女は言葉を失う。「でも……なんでよ、なんでわたしたちはそんな目にあつたの？ どうやって解決したのよっ」

気がつくくと、彼女はいつにない行動に出ていた、幻覚に話しかけ、あまつさえ幻覚に近づこうとしたのである。あれは幻覚じゃないと、なぜとはしらない確信をもった。今まで見てきたものも、全部幻覚などではなかったのだ、あの子たちの足はぬかるみにめりこんでい

る、影までであった。溺死女は髪を落としていった。自分のものだとごまかしたが、ちがう。彼女の髪はストレートなのにあの髪は縮れていた。旦那が他の女でも入れたんでしょ、と彼女はあのとき笑ってごまかそうとしたが、そんなはずはなかったのだ。

戸口のすぐそばまで来て急に恐ろしくなり、利菜はサツシをあけるかわりにカーテンを閉めた。ガラスに背をくつつけた。心臓が激しく鳴った。佳代子は記憶がないと言った。記憶が抜け落ちていると書いていた。利菜もまた遭難の日々とその後の記憶がない。思い出せないのではなく、その部分の記憶がすっぽりと抜け落ちている感じだった。佳代子たちはなにかを思い出した様子だが、彼女には戻ってこないのだ……。

そのとき背中で声がした。ガラスに子どもの利菜が口をつけ、そつとささやいてくる。「両神山に戻るのよ……」

「帰りなさいよつ。あんたはあたしじゃないつ、あたしの友達なんかじゃない。あんたたちみんな……」

みんな？ みんな、何だというのだ？ 幻覚なのか？

彼女にはとても幻覚だとは思えなかった。だから、「偽物じゃない……」とそれだけを言った。ひどく正確な表現に思えた。

彼女は鼻をすすりながら机に戻った。手紙をおいて気が落ち着くのを待った。秀男が戻ってくれば、そんなばかなと一笑にふしてくれるにちがいない。幻覚に話しかけるなんて馬鹿だと言ってくれるに違いないと彼女は思ったのだが、読みかけの手紙はまだ目の前にあり記憶は確かに戻ってきていた。利菜は紗英の心配もした。不眠症と幻覚があこのころの仲間を起こっているのなら、あの子もおなじ体験をしていて不思議はない。

利菜は佳代子の手紙に目をやり、「まいった。頭がいかれたのがあただけじゃないなんて」と額を抱えた。

「頼りのあんたまでいかれてるとはね」

佳代子の手紙を、読まずに畳んで物思いにふけた。そういえばあこのころはみんなが問題を抱えていた。佳代子には片親しかなくて、

なのにその母親は娘も知らない男の子どもを産んだ。だから、当時は佳代子も白い目で見られていた。佳代子の母親は情緒不安定なところがあつた。機嫌がよいときはいいが、かつとなると娘に暴力をふるうのである。佳代子はいつも妹や弟をかばっていた。だから、母親の暴力はもつとも佳代子に向けられた。頬を張らしたり、体に傷をつくっていることがよくあつた。そんなときは利菜も佳代子の母親に憎しみを覚えたものである。彼女は考える。あの子はどうなんでしょうか？ あの子も母親を憎んでいたんでしょうか？

ガラス戸を、ドン！ とはたかれた。子ども頃の声で佳代子が叫んだ。「もちろん憎んでたわよ！ あいつが嫌いだったんだ！ 殺してやろうと思つてたんだ！」

「消えなさいよ！ 佳代子はそんなこと思ひやしないわ！ あんたは佳代子じゃない！」

利菜は、そちらを見もせずと言つたのだが、「ひどいよ……」と佳代子の傷ついた声が聞こえたときは、さすがに表に目を向けた。カーテンには人影すら映つていなかった。

佳代子だけではない、新治と達郎の兄弟だつて大問題だつた。佳代子も利菜も当時は自分たちよりあの兄弟に関心をもっていた。他人の問題に目を向けることで、自分たちの問題から顔を背けていたのかもしれないが。尾上兄弟が小学二年と三年だつたころ、二人の両親が離婚した。母親が子どもたちをひきとつたのだが、その二年後には再婚してしまつた。新しい父親はとてもいい人だつたのだが、達郎は大きくなつていたせい、まるでなつこうとしなかつた。ボロアパートに住む本物の父親をしょっちゅう訪ねていた。泊まることもあるみたいよ、と当時からゴシップ好きだつた佳代子が話してくれたこともある。一方で新治は新しい父親になつくようになった。家族がうまくいくよう新治なりに心を配っていたようで、そのせいか彼は他人の顔色をひどく気にする子供になつた。兄弟は今でこそ同じ仕事についているが、あのころはうまくいっていなかったのだ。話もせず顔を合わせることもなく、互いにさけているようだつた。

別にどっちになつこうがかまわないと思うのだが、二人は子どもだったからお互いにどう接していいかわからなかったようだ。その後、どうやってか知らないが、あの兄弟なりに折り合いをつけたわけだ。紗英はカナダからの帰国子女だったが、やはり両親がうまくいっていないかった。カナダにいたころは仲良くやっていたそうだが、工場が倒産し家族が日本に戻ってからは、父親は家に寄りつかなくなっていた。あの子の母親は、娘にすべての関心をそそぐようになつた。そうしないと娘も離れていくというかのように。紗英を規則と塾で縛りづけにし、友達にすら口を出した。暴力こそふるわなかったが、ヒステリーで、言葉で紗英を傷つけた。

両親が離婚したのは、寛太のところも同じである。寛太は鷹揚で男っぽいところのあるやつだったが、なにかのひょうしにひどくひねくれた面を見せることがあつた。学校でけんかをしては、じいちゃんと呼び出されていた。利菜たちが彼の家に泊まりに行くようになったからには乱暴も少しは収まつたが、あいかわらずのじいちゃん子で母親にあまりかまっていないようだった。こどもが母親にかまうとはおかしな言い方だが。

「あんたはどうなのよ……」子供の利菜の音がすぐ近くでした。
「そうね、わたしも問題はあつた……」

彼女は悲しい気持ちで思う。子どもの頃はひどい貧乏で、あの町で住む最底辺のぼろアパートで暮らしていた。県営マンションにうつる前のことだ。中野区の克美荘というところにいた。父親はあまり働かず、職を転々とした。母親はいつも苦労していた。妊娠もしていた。彼女はいまでもあのアパートを思い出す。割れたガラスをテープで止めた窓、軋む床、暗い階段、そこに住む零細な、人、人。トイレは共同で風呂はなく、洗濯機は表にあり二階建てで、瓦屋根で、廊下は窓に接していて明るいがすきま風に底冷えがした。春よりも冬の木枯らしが似合い、日中の日差しよりも夜の暗がりが見合う。貧乏な学生が騒ぎ、おばさんたちは母親をいじめた。

「片桐さん……片桐さんにいじめられてた」

片桐さんには髪をきってもらった思い出がある。彼女が三つの時である。さんばらの髪にされたのか虎刈りにされたのか（まさかそこまでひどくないだろう）今となっては思い出せない。けれど、母親が頭を撫でながら泣いていたのを覚えている。学生たちが怒ったが、片桐には文句すらいえなかった。あのアパートでは、主のような存在だった。片桐の亭主はいい人ではあったが、嫁には文句も言えずに小さくなっていった。母親はあそこで流産をした。

そのうち父親が県営マンションのくじをひきあて、暮らし向きは好転した。父親は仕事についた。二人は今も問題を抱えながら、あの県営マンションに暮らしている。だけど、あの年に佳代子の母親が子どもを産んだ。利菜の母親が信子という名前をつけた。生まれるはずだった子供のために考えていた名前だった。そのせいか夫婦の仲は再び冷めはじめた。利菜はまた克美荘にもどるのではないかと、恐々としたものである。

彼女はまた思いだした。あの頃母親は新興宗教にはまっていたのだ。何という名の宗教だったか？

当時彼女たちはそれぞれの問題を抱え、そのために結束を強くした。だれか問題を抱えた仲間をそばにおくことで安心していたのかもしれない。あの子たちだけは本当の仲間だったが、集団で不眠症や幻覚にかかるなど、今の彼女には考えられなかった。彼女は手紙に目を落とし、佳代子が両神山と不眠症を結びつけたように書いているのを不思議に思った。

彼女は手紙をひらく、ごくりと唾を飲みながら続きを読み始める。『当時の事件を覚えていたのは寛太だった。あたしたちは、少しづつ記憶を取り戻していった。あたしたちはまわりの状況も二十五年前と似通っていることに気がついた。あのころも神保町とまわりの町では犯罪が多発していた。行方不明や傷害事件がかなりあったし、それに両神山では殺人事件があった。あんたが遭難したときは、殺人犯にさらわれたと噂がたったほどだ。あの山で死体が発見されたのは遭難の直前だったんじゃないかと慎ちゃんは言っていたけど。』

ねえ、あたしたちこの話題を二十年以上も口にしなかった。子どものころのことは会えば必ず口にするのに、このことは話題にするのぼらなかつた。だって思い出すことすらなかつたんだから！

寛太が遭難事件を思い出したのは、今回もあの山で殺人事件が起こつたからだつた。亡くなつたのは六十代の男性で、林の中で絞殺されていた。テレビでもちらつとやつたし、新聞にも小さく載つた。狭い町でのことだから自然知つてはいたのに、あたしたちは四人で集まるまであの頃のことを思い出すことができなかつた。それで、あの日、寛太のやつが言い出したのだ。両神山に今から行こうと」

手紙を持つ手がふるえた。彼女は指の震えにすら気づかなかつた。佳代子たちは両神山に出かけたのだ。子どもの頃はたびたびピクニックに出かけた。両神山の中腹には草原があり、そこへ家族ぐるみでよくでかけた。アスレチックがあり、確か草原までの山道にはハイキングコースもあつた。

彼女は吐息を乱し、額の汗をぬぐつた。

さきほどカーテンをひいたので、部屋は薄暗くなつている。立ち上がつて電気をつけると部屋の戸口に誰かがいて彼女は悲鳴を上げたが、次の瞬間には人影は消えて、彼女は今見えたのは野球帽をかぶつた子どもの水死体だつたのかと推測をめぐらさばかりだつた。すわりなおした彼女が目にしたものは、畳の上にできた水たまりだつた。佳代子はその夏に殺人事件が頻発したと書いてる……この幻覚もあの夏と関係があるのではないか。水死体を見たことがあるんだらうか？

利菜は呼吸を整えた。冷や汗がひくとまた手紙に目を落とし、佳代子の打ち明け話にもどつていった。

『両神山には二十年間出かけてない。あなたの事件があつてからは一度も。子どもを行かせたこともない。あの山のことはずっと忘れてたのよ……。両神山につくと草原はすっかり様変わりして、ロッジがいくつも建ちならんでいつの間にかキャンプ場になつていた。信じられる？ ロッジはかなりでかく、小中学の林間学校のチラシ

が貼られている。記憶にあった場所とずいぶんちがうんでめんくらった。小川だけが昔と同じとこを流れてた。けれど流れに沿って石がそえられていたし、アスレチックも新しくなっていた。駐車場の脇にはでっかい管理施設も建っていた。子供のころはジュースも買えないって不満をもらしたものだけど、今では販売機もあるし、ジュースどころかビールもたばこも買える。食堂もできてたわ。

平日のせいか管理所はしまっていて、話を聞くことはできなかった。あたしたちは草原をみてまわった。子どもころはただっぴろく感じたけど、大人になってきてみると狭くなった感じだ（本当は杉を切り倒して丘を広げてしまったらしい）。新ちゃんはどう言ってたわ。キャンプ場のパンフレットは前に見たことがあるって。だけど、両神山のことだとは気づかなかったし、行こうとも思わなかった。彼、アスレチックには興味あるじゃない？ 達兄とくんで、神保小の校庭に寄付もしたよね。だから、見にいきもしなかったのは、不思議だって言っていた。あたしたちはロツジの間をぬけて斜面をのぼった。あたしはお守り様の蔓壁がなくなってるのに気がついた』

「おまもりさま……」

彼女は肘をついて両手で顔をおおった。草原の上にある杉林いつたいを、地元の人はおまもりさまと呼んでいた。林と草原の境界には網がはられて、そこに低木と杉の木から垂れた蔓草が何重にもからみつき、分厚いカーテンのように林の縁を覆っていた。彼女たちは見たままの印象から「蔓壁」と名付けたのである。大人は子どもたちがおまもりさまに近づくのをやがった。蔓壁は子どもたちを林から遠ざけるのに格好の役目を果たしていた。あそこに近づくと大人たちが大慌てで飛んできた。休日に人があふれかえるようになっても林の縁にごさを広げる人はいなかったし、林を切り倒して草原を広げようなどと言う環境破壊団体もいなかった。奥には沼地があるという話だったし、まむしも出たからである。蔓草を刈りこもつとしないのは不思議だったが、子ども目にも薄気味が悪かったのを覚えてる。

佳代子はおまもりさまのことをひとしきりつづっていた。

「こどものころは草原がかつこうの遊び場だったけど、大人になって来てみるとあたしたちは怖くて仕方なかった。山にいるのはあたしたちだけだった。草原は静かだった。鳥の声がいやによく聞こえた。蔓壁がなくなつたせいかな、あたしにはおまもりさまが口をあけて待ちかまえているクジラに見えた。あなたには馬鹿代子と笑い飛ばして欲しい。誰が蔓を切つたのか聞いてみたかったけど、手近には人がいなかった。管理所にも人をおいてないっ。閉鎖されたわけでもあるまいに……。あたしたちは林に入ってみるか話あったけど、無人のロッジはなんとも不気味で尻こみをするままに帰ってしまった。

不眠症とあの山が関係あるのか、あたしにはなんともいえない。だけど、二十五年前のあなたの遭難と集団幻覚は、ときをおなじくして起こってる。寛太はあなたがあなたの事件のことは覚えてないんじゃないかと言ってる。手紙を書くのも反対してた。あなたまで不眠症にかかっているなんてばかけた話だと寛太は言った。あの人らしくはないけれど、そんなふうには考えたくもない様子だった。だけど、今まで音信不通だったこと自体あたしにとっては不安だった。あなたの身になにも起こっていないのならいい。だけど、もしあなたの身にあたしたちとおなじことが起こっているんなら気をつけて欲しい。あなたの身に起こっているのは単なる不眠症ではないし、幻覚にもよく注意すること！

どうにもならなくなつたら電話しておいで。あたしたちはあなたの味方だし、なにが起こっているか理解もできる。もしかしたら、あたしの方があなたを必要としているのかもしれないけど。まわりがたとえ頼りにできなくとも、あたしだけは頼りにして欲しい。以上

読み終わると、最初のページを上にした。彼女は手紙をにらみつけながら、これは容易ならぬと考えた。佳代子は長々と書いてあるが、なんのことはない、これは警告の文面なのである。

あんたはなにを思い出したの？ と利菜は佳代子に問いかけた。事件のことを思い出すために山にいったはずなのに、手紙は核心にはふれないままにおわっている。何も思い出さなかったとは考えられない。佳代子は手紙の文面をこんな形で終えていたからである。

『最後に一つだけ。ひまわりは咲いてなかったわ』

ひまわり？ 草原にひまわりなんて咲いていただろうか？

手紙を読み返しながら彼女はこうつぶやいた。

「あの山でなにがあったのよ」

彼女には佳代子の心配のほどが理解できた。電話をかけてこなかったのは、慎重に慎重を重ねたからだろう。そうでなければ手紙をよこすはずはない。利菜はこう考えた。佳代子のやつ、あたしも山に行くなんて言い出すのを怖がったんじゃないだろうか？

利菜は殺人事件のことを確かめるために置きためた新聞を取りに行きたかったが、なかなか。腰を上げるには勇気がいった。手紙を読む間も見られている気配をずっと感じていたからだ。彼女は表にはげつたいに顔を向けないと決めていたが、居間の畳には子どもたちの人型が長く影を落としていた。電話が必要になるのはまもなくらしい。

そうして、娘がもどってくるのを心待ちにしながら、彼女は立ち上がるうともせず、佳代子の手紙を何度も何度も読み返していった。そこに隠されたメッセージがあるというかのように。

今夜はますます、眠れそうになかった。

第一章 両神山にて

三

一九九五年 八月十三日～十四日

全てのはじまりは、一九九五年、八月十四日に帰着する。この時

点で、すでに二人の子供が殺されていた。一人は斉藤秀幸という神保北小学校の生徒で、もう一人はさくら幼稚園に通う小野田美由紀という五歳の女の子である。学校では臨時集会が開かれた、子供の遊びは制限された。地区外への外出（おかしな言い方だが）の禁止、子供のみによる川遊びの禁止（前からだが）、その他、ジャスコなどへの立ち入りは親同伴が義務づけられた。夜間の外出は厳禁で、見つかった場合、親が厳重に注意された。自治会による夜回りも始まった。殺人事件以外にも行方不明が二件あり（家出人の届け出を加えるともう少し多くなる）、自殺が四件あった。外に出れば葬式に行き当たつたし、町中を走るパトカーが、いつだつて目を引いたころでもある。神保警察の人員はふだんの三倍にふくれあがったが、今年にはいつて起こつた殺人事件のうち、四件までは解決できていなかった。六件の殺人はここ十年、神保町で起こつた殺人事件の総計よりも多く、また事件はこれで終わつたわけではなかった。表面化されなかつた事件もふくめて、神保町は誰にも気づかないうちに、東日本でもっとも事件の集中する犯罪スポットになりつつあった。

あれはたしか八月十三日。終業式の日、佳代子が「またウルトラな休みがやってきたね」と言つてから、三週ばかりが過ぎていた。その夏、彼女たちは寛太の家で寝泊まりすることが多かった。そこでは寛太郎という風変わりな老人が趣味で農園をやつていた。寛太郎は周囲の畑を全て買い取り、米や野菜をつくつている。

彼の古い農家で、今は瓦屋根だが昔は藁葺きだつたらしい。作りは純日本風、戸を開け放せば広々とした一個の居間が出現し、雨戸を開け放せば、すずとした風が通り抜けるといつた次第である。昔は牛を入れていたという広い土間がいまだにあつた。まわりには民家がなく、田園のなかにぼつんと家がある感じだ。

神保町はそのころ、人口四万人ほどの小さな町だつた。ジャスコはあつたが、移転して大きくなるのは十年も先の話。あとはホームセンターが一軒、スーパーが二軒。商店街がまだまだ活発だつたころの話である。

その日、利菜は縁下にすわって、スイカの種を庭に飛ばすのに忙しかつた。寛太の家は庭が広く、にわとりが放し飼いにされている。目前には畑があり、スイカかぼちゃに人参とうもろこし、ピーマン、キャベツにイチゴに白菜と、闇鍋の勢いで植えてある。畑の向こうには一車線の道路があつたが、通る車はまばらである。

利菜たちは、町がいま断頭台の刃みたいに危険なことに気づいていなかった（なんとなく不気味な気配は感じていたが）。大人たちは町で起こった事件について子供の前では話したがらなかった。むごたらしい悲惨な話が多かつたし、こどもが殺されているというのが、大人たちが話題にあげることすら自粛する理由の一つだつた。ともあれ、その夏子どもたちは暇をもてあましていたのである。今年には祭りも自粛ムードで、PTAは保護者がいない場所での子供たちの遊びを（禁じきれるものではなかつたけれど）禁じていた、小学五年生の利菜としては、寛太の家から種を飛ばして鶏がつつくの眺めているしかなかつたのである。寛太の家は町中からは離れた場所であり、殺人事件などどうそみたいにはのぼのしている。そのとき、寛太の家に集まつていたのは、佳代子、利菜、紗英、新治の四人だつた。寛太郎じいさんは耕耘機に乗つてどこかへ出かけ、母親はパートに出ていた。家の中では祖母の歌が豆の皮をむいている。古い着物を着て頭にはほっかむりをし、草花については一過言をもつ人だ。話好きの聞き上手だつたから、こどもたちはみななついていた。

その日みんなは両神山について話し合つていた。寛太だけはあの山に行つたことがない。

「あんた両神山にいつたことがないなんて遅れてるね」種とばしが下手な佳代子は、真下に種をはき出しながら言つた。佳代子は三月生まれの遅いきで、新治のつぎに体が小さかつたが、クラスでは女子の先頭に立つて男子とやりあう質だ。どのクラスでも女の子といふのはいくつものグループにわかれるものだが、佳代子は誰にでも好かれる方だつた。目下、幸田頼子がいちばんのライバルである。

「そんなもん、行かなくなつていいんだ」

寛太は種とばしもせず、ひまつぶしに鶏を捕まえては物干し竿に乗っけている。将来佳代子の旦那になり、この辺り一帯に自然農園を開いてやりくりする寛太も、このときはただのいがくり坊主である。ガキ大将というより一匹オオカミタイプの少年だったが、女子が佳代子をかつぎだしたときは、寛太が担ぎ出されるのが常だった。佳代子は女の子のくせに、拳で寛太をぶん殴る（利菜は、母親とのうつぶんをはらしてるな、と思ったことがある。もちろん佳代子は寛太以外を殴ったりしないけど）。

利菜が縁下に寝転がりながら、「あの山はなかなかおもしろいんだよ。でっかい滑り台もあるし。ソリ滑りもできるしさ」といった。二十五年後には不眠症に悩まされるこの娘もこのときは発症しておらず、目の下にはくまもなく若さと長髪をもてあまし佳代子のあとについて回った。二人は幼稚園のころからのつきあいで、小学生ながら悩みをうち明けあい、息も合ってなかなかいいコンビである。

彼女が言うソリ滑りとは、ふくろを重ねて丘の上から滑り降りる遊びなのだが、そのスピードと尾骨を岩で打つこともあって、なかなかスリルがある。両神山の草原にはキャンプ場こそできていなかったが、アスレチック施設はすでにととのっていた。山の滑り台は木製だが、滑走部にはステンレスを使用している。学校にあるちゃん滑り台ではなく、三人ならんですべれるぐらい大きなものだ。幅だけでなく長さもあり、滑り終わるのにとろい子なら五分はかかるしるものである。このように、両神山のアスレチックはなかなかの規模だった。子供たちが行きたがるのも無理のないことだったのだ。

最近行ってないよね、紗英が物惜しそうに言った。彼女は四年のときの転校生で、将来スッチーになるだけあって、なかなかの美人顔で男子に人気がある。転校したてのときは幸田頼子にねたまれいじめをうけた。そこに顔をだしたのがなんにでも首をつっこむ杉浦佳代子で、この野次馬は二十五年後もかわらない。佳代子と利菜は

幸田頼子の向こうをはった。頼子とはもともと仲がよくなかったが、このときの大げんかで決定的に仲違いをしてしまった。三人の女の子はそれ以来の親友で、紗英が塾でがんじがらめの時はやっぱり首をだし、おばさんに叱られて泣いているときはやっぱり口を出したりした。紗英を寛太の家まで引つ張ってきたのもこの二人で、紗英が他人の家に泊まると言い出したときはママゴンは火を噴いて（とは佳代子の表現である）許さなかったのだが、そのときは寛太郎が得意の弁舌で説得した。紗英はカナダ時代は活発な娘だったが、環境の変化ですっかり大人しい娘に変わっている。しかし、寛太郎の家にいるときだけはのびのびとしているようだ。紗英のそばで黙りこくっているのが眼鏡ネズミの新治で、彼は両親が離婚しただけでもショックなのに、母親が今年再婚してしまい二重にふさぎこんでいた。勉強もあまりできず、不器用でそのうえ運動音痴でもあった。三拍子が悪い方に揃っていたのである。先年までは達郎のあとをついて回っていたのに、その兄とも今ではうまくいかず悩める夏を過ごしている。この夏は寛太郎のひらく朗読会が彼の楽しみである。そして、一同のなかではなんでも言い出しっぺの佳代子がやっぱりこのときも口火を切った。

「じゃあ、ひさびさに行こうよ。行きたくてしょうがなくなっちゃったよ。利菜のせいよ。うんとこさ山の上から滑り降りたいよね。最近おもしろいことないしさ。ジャスコの屋上には入れなくなっちゃうし（屋上にはちよっとしたゲーム施設があるが、斉藤秀幸という少年の死体が見つかったのでは閉鎖も仕方がない）、行きたいなあ」

「行きたいよねえ」

「行こうよ、みんなでさあ」佳代子は流し目で、冷たい視線を寛太に送った。「寛太はばかだけど、じいちゃんには世話になってるし。連れてってやらなくもないよ」

「えらそうに言わない馬鹿代子」

「あんた、ほんとにくたらしいね」

とはいえ、寛太家のお泊まりはとてすてきなことである。みんなは農作業に手を貸すかわりに寝泊まりをさせてもらっていたが、寛太郎がいるとんでも遊びに早変わりしたし、農作業自体もなかなかに味があることだった。寛太郎は子どもだからといって手加減はしなかった、本格的な農業をしこんでくれた。寛太が母親に冷たくするのは困りものだが、じいちゃんとはあちゃんが間にいるし、自然農法でできた野菜をふんだんにつけた朝昼夕食はなかなかうまかったのである。

佳代子はその家での暮らしが好きだった。彼女の自宅は狭く、人口密度の高い都会みたいだ。寛太の家はど田舎みたいに懐が深い。五右衛門風呂なんて入れる機会はめったにないし、薪で風呂をたくなんてすてきだ（屋根には朝日ソーラーがついているが、寛太郎は子どもたちのためにかまどを使ってくれる）。寛太郎が乗せてくれる耕耘機も味なもんだ。

利菜が、暑そうにうつぶせになり、脚を縁下に突きだしてぶらぶらさせた。一段下の踏み石に座る紗英が、そのつま先をつまんで遊びだす。

「行くのは賛成だけど、日曜まで待たなきゃね。父さんたちは夏休みもないもん」と利菜が言った。

「なんで待たなきゃいけないんだよ」寛太が利菜に訊いた。

「だって、車もないしさあ。親がついてないと遠くにいつちゃだめなんですよ。終業式で言われたじゃん」

と佳代子は言ったが、本当は両親が連れて行ってってくれるか自信がなかった。今年はデイズツーランドにも行けなくなった。というより、夏休みになってからというもの、みんなには出かけた記憶がほとんどなかった。町に縛り付けられているような気がして、気味が悪かった。一同が両神山に行きたがったのはそのうつぶんを晴らすためでもあったのだ。しかし、寛太は、

「両神山ぐらい自転車で行けらあ」

みんなはしばらく話し合った。自転車で行くのなら大人は抜きだ。

寛太の家に泊まると言っているから、山に出かけてもばれる心配がない。五人は町で起こっている殺人事件のことを思うとさすがにちよつと不安がったが、達郎に付いてきてもらおうと言うことで一決した。達郎は小学六年生で大人では全然無いのだが、利菜たちの感覚では準大人のようなものだった。理屈では誰も納得しない話だが、こどもは感覚で生きているから親に黙っていくという罪悪感にはけりがついた。佳代子は母親にいつもひどい目に合わされていたから黙っていくのには賛成だった。母親をだますことにちよつとした快感すら覚えた。利菜の方はこの夏母親が宗教にはまりこんでいて、まだまだ家には帰りたくなかった。理解できないことを熱心に話されることぐらい苦痛なことはない。だいいち彼女は他の子供と同じで訊くより話す方が好きだったのだ（佳代子が人気者なのはみんなの話をよく訊くからだ）。両神山は自転車で行くには少し遠いが、サイクリングもたまになら悪くないな、とみんなが思った。紗英だけはこの秘密が母親に漏れはしないか不安がったが（たしかにあなたのおばさんの目玉はどこにでも届きそうだとみんなは思った）、あなたのおばさんの心配をしていたら指一本動かすのにも気を使わなきゃいけない。新治は兄ちゃんが行くと言っていて暗い顔を見せた。そのころ新治と達郎の仲は最悪で、なんとなく互いを避けるようになっていた。利菜と佳代子は、二人を仲直りさせるいい機会だと考えた。達郎はその日野球場にいた。一同はリトルの練習場まで達郎を誘うに行つた。球場にきて、達郎を呼び出すと彼は野球場のはじからすでに飛び抜けてでかくなった体を、ゆったりゆたりと運んできた。佳代子は、あなたたちだけじゃ不安だし達さん達郎兄ちゃんよ、あなたあたしたちだけに行かせて心配じゃないわけ？ でも、父さんたちにはだまつといてよね行くの行かないのと得意の弁舌で達郎を説得した。彼はしぶつたが（規則をやぶるなんて大反対だった）、けつきよく最後には同意した。達郎だって本心では弟と仲直りがしたかったのである。

後年になり思い返すと、一同が町に殺人が吹き荒れているこの時

期に自分たちだけで両神山に出かけることにしたこと自体が不思議なことだった。その意味では、おさそいは山に着く前からはじまっていたともいえるのだった。

子供たちは翌日の早朝には町を出た。車通りは少なくアスファルトは濡れていた。快晴で、国道には木陰とともに木漏れ日が落ちていた。八時頃には山へとつづく上り坂についた。道の途中にあるＴ字路を右折すれば、草原までは上り坂がつづく。Ｔ字路のわきにはドライブイン愛宕がある。あたこの対岸には駐車スペースと休息所があり、利菜たちはジュースを買いこむと道を渡ってベンチに腰をおろした。山道にはいるまえにいったん休憩だ。

脇を流れる揖保川では、釣りや網掛けをしているおじさんたちがいる。男の子たちは河原に下りて石をほうってふざけはじめ、大人に向こうでやれと怒鳴られるとにやにやしながらまたふざける。

佳代子はそれを眺めながら三矢サイダーを片手に言った。「疲れたよ。やっぱり車でくりやよかった」

佳代子がベンチにもたれかかる。机に脚をのせると、紗英にそのすねをたたかれた。

利菜は、「しんどいんなら引き返せばいいじゃん。こつからは上り坂しかないよ」

「しょうわる女め」

「誰が性悪だよ、この馬鹿代子」

利菜が言い返すと、紗英がケタケタと声をあげる。寛太たちが見上げたから、三人はあいそよく手をふった。

「やめてよね、寛太がいよいよ真似すんじゃない。あんただから我慢してるけどさ、あいつがそれ言ったら、あたしゃ絞め殺すよ」

「それ見てみたい」

それから女の子たちは男の子の様子を観察した。新治と達郎は互いに距離を置いているようだが、寛太が気を利かせて、二人にさかんに話しかけている。彼は前日、佳代子から二人の仲を取り持つよ

う、言い聞かせられていた。彼は二十五年たつても佳代子の尻に敷かれつづけることになる。

「今日は人が少ないね」

紗英は駐車をみた。休憩所のまわりにも人がいなかった。両神山には二宮町の方が近く、その町からは自転車で来る子たちが多い。今日はその姿もなかった。両神山のある方角を見た紗英はぞくりと身を震わせる。理屈ではない怖気を感じた。草原にねっころがって風に吹かれるのは気分爽快だが、今日はそんな気分にはなれない気がした。

「そりゃ平日だからね」

佳代子はすまして気にも止めなかった。大人たちの注意を思い出すと、不安が胸にきざしたが、考えないことにした。少なくとも、そのときは。

四

ふざけながら自転車を押し押し山をのぼると意外に時間をくうもので、草原の駐車場に自転車を止めたときには、時刻は十時近かった。車は二台あった。親子連れなのか小さな子どもたちの歓声が聞こえた。

青葉はすでに陽に焼けていたが風が渡って涼やかだ。

草原のアスレチックは国村という老人が、ボランティアで作りに上げたものである。三年前、国村が奇妙な情熱をもってこの事業にとりくみだすと、周囲はきちがい扱いをした。ところが、国村は大工だったらしく、草原に椅子やテーブルを置くと、かなり立派な吊り橋や滑り台をつくってしまった。草原の下の溜池には、昔からブラックバスをねらって釣り人が集まっていた。彼らはアスレチックがととのいだすと家族を連れてくるようになった。草原までのじやり道がアスファルトにかわってからは、休日の人出は相当な数にのぼりはじめた。日曜大工の片手間にアスレチックづくりを手伝う男親

も多くなつた。国村はこの一年前に二宮町から表彰されたのだが、そのときにはキャンプ場の計画が進められていたのである。二十五年後には丘はさらに広げられ、アスレチックは解体移動されロツジが景観をしめるようになるのだが、この当時のアスレチックもかなり充実したものだつた。

その日、夏休みにしては、草原には人影が少なかった。利菜たちは事件の影響だと考えた。隣町の二宮町でも、同様の事件は起こっていたからである。

彼らは草原の小道をのぼっていった。山草が道を彩り、吹き上げる風が疲れた体に心地よかつた。吊り橋の下にシートをひろげ、自分たちで用意したお菓子と、寛太の母親が用意した弁当を食べた。ちなみに寛太は母親に誰にも言うなよとおどしをかけ、佳代子に頭をはりとばされた。母親は子どもたちだけで行くのを心配をしたがこのところ息子は気むずかしくて（たぶん寛太は、寛太郎を尊敬するほどには、母親を尊敬できなかつたのだと思う）話をするのも難しくなっていた。それになんでも禁止する学校側のやり方には反対でもあつたのだ。

昼飯まえなのに寛太はがつがつ食い始め、佳代子がみとがめた。

「少しは残しなよ。帰りだつておなかは減んじやん」

寛太はポケットの小銭を叩いて気にもしない。「あたごで、うどん食うからいい。金はあるもんな」寛太はサンドイッチを食べながら、丘の林に目を向けた。「ほんとにへんな蔦が生えてるな」

寛太の目は丘の上に向けられている。草原の先は杉林が山頂までつづいている。林の縁には防獣ネットをわたして入れないようにしてあつた。蔓と低木が網にからみつき、人の進入を阻止していた。蔓草のネットを利菜たちは蔓壁と呼んでいる。その一帯は雑草も茂り放題だ。ネットにからみついた蔓草がじゃまをしてここからでは林の奥はよく見えない。奥には沼地があるそう、まむしも出るという話だつた。大人も国村も、子どもたちが蔓壁の網を超えるのをいやがつたよう、立ち入り禁止の看板を立て、草むらの周囲に杭

を打ちこんだ。ロープまで渡してある。

「秘密基地みたいだな」と寛太は言った。

「蔓壁だよ」利葉がサンドイッチに手を伸ばす。

「おまもりさまだよ」佳代子が剣呑な目つきでコーラをのみほす。

「あんた、あそこには近づいちゃだめよ。探検すんのもなしつ。まむしもいるしさ」

「お化けも出るって？」寛太はお茶を飲む手を止める。「あほくさ」彼はコップの残りを雑草に与えはじめる。

「あんたもつたいたいなことやめてよね」と佳代子が言う。「のどが乾いてもあんたにはなんにもやんない」

「いらねえよ。ぶさいくのお茶なんか」

彼は水筒をしめ、口元をシャツでぬぐった。食事は終わりのようだった。

「風があつてよかつたな」

達郎が言った。彼はこの面子の中では引率者のようなものだ。達郎は久々にリラックスしているらしく、額のしわをほどいている。

「たっちゃん、あの林まで行ってみようぜ」

寛太が言った。達郎の野球の腕をみこんでいるので、この六年生の言うことはなかなか聞いた。

「いくわけないじゃん。一人で行けば」

佳代子は枝を手にすると、地面にはえたおおばこを乱暴にはらいとばした。

「今日は国村さんいないのかな」

新治が言った。国村はソリ滑りをするこどものために、米ぶくろを貸し出していたから、今日は当てがはずれてしまった。その夏国村は両神山自体にいないようで、姿を見る機会があまりなかった。

佳代子は国村さんがいないなんておかしいと思った。両神山にきて国村の姿を見ないことは、まずないと言つてよかつた。

国村以前に今日の山は人出がなかった。しばらくこないうちにアスレチックは数をふやしていたが、下の溜池でブラックバスを狙う

大人たちの姿もなければ、平らなところでベースボールをやっている子どもたちの姿もない。みんなは親にも言わずに自分たちだけできたのは、本当はまずかつたんじやないかと思ひ始めた。

佳代子はそのことも気にして、「国村さんがいたら、ぜったい止めるよ。あの林はほんとにあぶないんだから。誰も手入れしてないって言つてたし、まむしもいるもん」

そういえば、おまもりさまの幽霊話も、たいはんは国村から仕入れたものだった。

国村は怪談の名人で、話は細部まで真にせまっていた。

佳代子はその手の話が嫌いだった。寛太の冒険心に蓋がしたくて、大人たちから聞かされた怪談のたぐいを話して聞かせた。それは子どもたちをおまもりさまから遠ざけるための、ちよつとした作り話ではあつたが、林の不気味さが話の裏付けに一役買っていた。

子どもたちは食事も忘れてお化けの話に夢中になつた。利菜は蔓草に食べられた子どものお話を、佳代子は人食い鬼のお話をした。達郎は迷つて死んだ子どもの話をしたし、紗英は底なし沼で巨大な手にぺしゃんこにされてしまうという話をした（国村が話すと内臓の飛び出すさまがなかなかリアルだったが、この子はそのたぐいのお話を大幅にはぶいていた）。新治のは大男に魂を抜かれる話（ネズミ男の新治がぐるぐる眼鏡の向こうで目を見開いて語るとなかなか真に迫っていた）。

子どもたちの大半がこんな話を信じていなかったし、だから、おまもりさまに探検に行く男の子たちもときおりはいたのである。彼らはおつかない目にかなりあつたし、怪我もした。林の中は誰も手をつけず、荒れ地のようになっていたからだ。それに帰つてこなかった子もいた。達郎が切り出した迷つて死んだ子どもの話は、つまりほんとうにおこつたことなのである。

寛太はその手の話が大好きだった。肝試しに墓の卒塔婆をひっこぬくようなやつだ。その卒塔婆で佳代子の背中をつつくようなやつだ（あのとき、佳代子はちびつたんじやないか、と利菜はおもつ

ている)。こどもたちは国村のような雰囲気もだせず、声色もつかうことができなかった。

寛太は女の子と新治が本気で不安がったので満足だった。「そんなのいるわけねえな」彼は勝ち誇ると自慢げに鼻をこすった。「そんなお化けがいたら、こんなところでピクニックなんかするもんか。あつほくさ、おまもりさまだつて？ ぜんぜん怖くないね、そんな名前」

「わたしがつけた名前じゃないよ」佳代子は枝を投げ捨てた。「怪談がどうこういうんじゃないよ。あの林ってほんとに危ないもん。あたしたちだけで来てるのにさ、けがしたらどうすんの？ 寛太、うちらのかあさんになんていうつもり？」（佳代子は紗英のおばさんになんていうつもりと思つたが、それは口にしなかつた）

寛太は怒つたように言つた。「なにいつてんだ。おまえはほんとに馬鹿だよな。おまもりさまが怖いんならそう言えよ」

「怖いよ、悪い」と佳代子はむきになつて寛太をにらむ。「でも、お化けの話が怖いんじゃない。あの林じたいが嫌いなやつ」

利菜と紗英はうなずいた。佳代子の言つとおりおまもりさまは不気味な林だった。林自体は大きくないのに（山自体がさほど高くない）、鬱蒼としたジャングルを思わせる。近づくときじめめとつけているし、沼があるというのも本当かもしれない（国村の話の通りなら、底なし沼のはずだ）。みんなはなんとなく黙りこんで、おまもりさまと呼ばれる林をみつめる。みんながそんなふうにおまもりさまを特別視するのは、大人たちが本気で心配していたからだった。林に近づくとき親が飛んできて連れ戻したし、なによりも大人たち自体がああ林のことを気味悪がつていた。

利菜がこう切り出した。「はじめちゃんつて知ってる？ 三年生の子よ」

「知ってる。鼻水垂れでしょ」佳代子は自分のおさげで鼻をこすつている。

利菜はうなずいた。「鼻水は垂れてるね。でもあの子は馬鹿じゃ

ない」と彼女は言った。「あの子たち、四月に林に入ったんだ。はじめちゃん、足首をつかまれてさ、転んだんだって。手につかまらたって言った。他の子も怪我したんだ」

「モグラがほった穴にはまったんだ」寛太が言った。「どんくさいよな。おっかながるのがいけないんだ。足首をつかんだのだったよ。どうせ木の枝かなんかだよ。それがへんなもんにみえたんだ。そいつは洩垂れじゃなくて、ヘタレだね。いいか、俺、いい話し教えてやるよ。これじいちゃんに訊いた話だから、全部ほんとだ。いっとくけどじいちゃんはヘタレじゃねえぞ」と寛太は断った。「じいちゃん戦争でビルマにいったる。前線つてとこで（寛太は前線を地名だと思ってる）逃げ回ってたんだ。前線を下げてたんだって（この意味はいまだによくわからない）。じいちゃんは度胸があるけどさ、お化けもなんもこわがねえもんな。おれ、子供んとき（彼はいまでも子供だが）幽霊屋敷でさ、こんによくになでられたときはさすがにびっくりしたけど、じいちゃん笑いながらこんにやくつかんでるもんな。まいったよ。でも、そういうじいちゃんなのにさ、ビルマじゃただの木が敵にみえたっていうんだ。じいちゃんはそいつを撃とうとしたんだ」

「撃つたのかもしれないな」

達郎がおごそかに言った。寛太が祖父のことを熱心に話すので（寛太郎は彼にとつてのヒーローであり、寛太が度胸があるところを見せよう見せようとするのは、寛太郎にあこがれてのことだった）おもしろがつてもいたが、寛太郎に対してはみんながそれぞれに畏敬の念を抱いていた。寛太郎はどこか人と違っていた。おもしろい、いい人なのだが、なんとなく迫力のある人だった。寛太郎の世代なら、あの人は人間の出来が違うな、とでも言ったかもしれない。寛太郎はどんなときでも人を和ませるのが得意だったが、同時に誇り高い人間でもあった。彼には統率力があつたし、いつもごく自然なかたちで人を従わせてしまうのだった。寛太郎はその人生で学んだ独特の哲学で子どもたちを教育した。人見知りする紗英でさえ、寛

太郎にはなついていた。紗英の母親ですら寛太郎が出ていくといつものヒステリーを起こせなかった。寛太郎はいつも道理をもって話したから、ママゴンもそうやすやすと反駁はできないのだ。

寛太郎は算数は苦手だ。でも、どう振る舞えばいいか、どう振る舞えば立派なのかを教えてくれる。こどもたちはふだんから彼に接してその影響を受けていたし、なにより寛太郎のことはみんなが好きだった。寛太郎は子ども目から見ても信頼のできるリーダーだった。

「撃つたかもな」達郎に向かって、寛太はうなずいた。「でも、ほんとに運の悪いやつらは、仲間同士で撃ちあつたつて言つてた」「そういうこともあるかもね」佳代子は気がなさそうだ。ちよっと泣き出しそうなくらいしよげている。

「うそじゃないぞ。じいちゃんの肩、鉄砲の穴があいてるだろ」「知ってる。まだ弾が入つたままだつて言つてた」と利菜が言つた。「うそに決まつてるよ。弾がはいつてたらあんな器用に手は動かせない」

佳代子が言うと、寛太は、「ほんとなんだ。じいちゃんの手ときどきしびれるもんな。これ、おれが言つたつていうなよ。ほんとここの話だ。じいちゃんはさ。ほんと左利きだつたのに、今は右利きになつてるもんな」寛太は秘密をもらすときの顔をして、「あれは味方に撃たれたんだよ」

「ひえ」新治が肩をすくめた。
「すげえな」と達郎が言つた。

寛太はキラキラした目で、「じいちゃんはいろいろ体験してるんだ。味方の手榴弾がさ、近くで破裂して吹っ飛ばされたつて言つた。これ、すごいだろ？」

佳代子は眉をしかめた。「すごいけどさ、それつておまもりさまと関係ないじゃん」

「だからさ、ビルマの山奥つてすごいジャングルなんだぞ。それにくらべたら、あんな林たいしたことないんだよな」と寛太は自分が

ジャングルに行つたみたいに言った。「じいちゃんはな、血まみれで三日も森んなかでうめいてたらしいんだ」

「ふつとばされたときにか？」

達郎が訊いた。

寛太はうなずいた。「手榴弾でやられたときだ」

達郎は感心した。彼はリトルでキャプテンをつとめるような少年だったから、みんなより大人びていたし、お化けの話など全く信じていなかった(だけど、あそこに行くのと漆にかぶれるのはほんのだ)。寛太郎のことは素直にすごいと思つたのである。

「よく助かつたなあ。オオカミや熊にやられたかもしれないぜ。ビルマなら虎もいたかもな」

と達郎は言つた。

みんなは去年学校でみた、『ビルマの豎琴』という映画を思い出した。子供にとつては難しい内容だったし細かなことは忘れてしまつたが、切々と心に響くいい映画であつたことは覚えている。映画の登場人物と若いころの寛太郎を重ねてみたりもした。

「そうだろ？ だから、おれ、おまもりさまのお化けはほんとかつて訊いたんだよな。そんな不気味なところならさ、おまもりさまより不気味だとおれは思うんだよ。じゃあ、おまもりさまにお化けが出るぐらいなら、ビルマにはぜつたいいるよなつて思つたもんな」

「じいちゃん、なんて言つた？」 利菜が訊いた。ちよつと興味をそられたのだ。

「たぶん、うそだろうなつて言つたよ」

寛太は言つたが、じいちゃんの言葉にはつづきがあつた。あそこには近づくんじやないぞ、と寛太郎は言つたのだ、おかしいことが起こる場所はほんとにあるからな。でも、寛太はそのことを意図的に黙つておいた(寛太は自分でも気づかなかつたが、心の中にしるびこんだ誰かがその言葉を封じたみたいな感じた。今まで味わつたことのない奇妙な感じだったので彼は顔をしかめて黙りこんだ)。

佳代子が、「たぶんじゃん。じいちゃん、たぶんつて言つたんじ

「やん。ぜつたいなんて言っただけだ」と言うと、利菜はふくれた。「そんなのぜつたいとおんなじだよ。でも寛太が言うことなんか信用できないね」

「おれはうそなんか言っただけだ」

佳代子と寛太の間で、言った言わない戦争が勃発する。

「やめろって」達郎が口をはさんだ。「おまもりさまになんか誰も近づかない。今日は大人が少ないからな。国村さんもいないみたいだし」

「それってほんとにあぶないことがあるみたいない方だよ」

利菜は言った。国村さんがいないのがいちばん不安だよ、と佳代子は思った。国村はひょうひょうとした老人で、どこかしら寛太郎に似ていた。寛太郎にくらべると人間に重みが足りなかったが、行動的で、山を行楽地に変えることに、凡人ばなれした情熱を傾けていた。小さなアスレチックは独力でつくったし、巨大な物になると町役場までおしかけて人出を集めてくる。怪談話を思い起こすだけでも、なかなかのアイディアマンだった。

達郎は二人を見た。「そうだよ。お化けなんかいなかったって危ないことはあるんだ。だから、おまもりさまの話はもうなしだ。いいな」

五

それからみんなは氷鬼ごっこをして遊んだ。それは鬼ごっこに特別ルールをくわえたもので、一人の鬼がみんなを追いかけるという点では同じだが、逃げる方が「氷」というと鬼はさわれなくなってしまう（氷になるときは胸の前で腕をくむ）。そのかわり氷になると誰かがタツチしてくれるまでその場に固まったまま動けなくなる。氷になった友達を救出しなければならぬが、鬼も身を隠したりして交代のチャンスをとらねらっており、なかなかスリルのある遊びだった。足が遅くても参加しやすく、小学校では人気があった。

アスレチックのまわりで鬼の寛太が足の遅い新治をおいつめたが、あと一步のところまで新治は氷になった。寛太はちくしょうと悔しがり新治のまわりをくるくる廻りながらみんながどこにいるか観察した。氷になりそうな仲間がいます、救出にむけて配置につくのが常である。草原にはでつかい岩がいくつかそのまま残されているが、利菜はその裏に隠れていた。水っぽい草地のかけから、佳代子に合図を送った。鬼は「氷」のそばをあまり離れたがらないから、救出には誰かがおとりになる作戦が多かった。新治が氷になったのは、滑り台のすぐそば。みんなが隠れて近づくには絶好の場所だ。彼なりに必死になってそこまで逃げたのだ。

達郎が滑り台の上から顔を出した。

「降りてこいよ、降りろよばか達」

と寛太が挑発したので達郎は大笑いした。紗英が坂の下からこそそと近づいたが（この子は素直すぎておとりがあまりうまくなかった）、寛太はすぐにそれと気づいた。達郎が滑り台の上に行ったのはまったくうまくいった。飛び降りればタッチはすぐだから、寛太は目が離せないのだ。利菜は岩の後ろを飛び出し、息を弾ませながら柱の蔭にとびこんだ。新治が近くなり、寛太からは死角になる。このように鬼にさとられないよう行動するのも、氷鬼の醍醐味のひとつだ。利菜は手振り目振りで佳代子と連絡を取り合った。二人は二方向から新治に近づいていった。佳代子が草をかき分ける音でおとりになった。寛太が気をとられたすきに、利菜が走り寄り、新治にあざやかにタッチをした。

利菜たちが氷鬼に興じているあいだ、草原からは最後に残った家族がせきたてられるように帰っていった。父親は遊園地行きをさけるためにこどもたちを山につれてきたのだが（飲み会がたたって小遣いはほとんど残っていなかった）、今ではそのことを後悔していた。大人しく妻に謝って、遊園地に行けばよかったと思った。彼はいわゆる靈感の強いタイプで、金縛りにはたびたび合う。山の雰囲気は、金縛りにあうときの感覚にとてもよく似ていた。彼はもとも

と両神山が好きではなかったが、今日の山はいつそう不気味である。国村が来てからはかつこうの行楽地になったが、子どものころは神隠しや行方不明の話など聞こえの悪いうわさでいっぱいだった。

家族を車に乗せるとき、草原にいる子どもたちに気がついた。が、その姿はすぐにアスレチックの蔭にかくれてしまった。車は他に停まっていなしい（そのことが彼に帰宅を決意させたのだが）、みまちがいだろうと彼は思った。確認もしなければ声をかけようとも思わなかったし、注意しようとも思わなかった。そんな考えすら抜け落ちていた。彼は最後まで駐車場に止まった自転車に気づかなかつた。車のなかでは子どもたちが泣いていたし、妻は文句を言い通した。

みろ、みんな逃げかえっちまって、残ってるのはおれたちだけだ。

そんな考え自体がいつそう不気味で、急いでバンに乗りこんだ、早くおまもりさまから離れたかった。一刻も早く。

そして、草原では子どもたちの姿が草場に消えた。

六

子どもたちは、最初のうちは大人しくアスレチックのまわりで遊んでいた。氷鬼はだたっぴろい場所でやるよりも、入り組んだ場所の方がおもしろい。寛太は滑り台の頂上に陣取ると、腰にさしたペットボトルの水を口から吹いて虹を作った。利菜と紗英は隠れていゝるすきに花輪をつくっていたが、そのすきに鬼にタッチされてしまゝう始末だった。彼らはビニールボールをぶつけ合ったりしてふざけていたが、自分たちが、少しずつ丘の上を目指していることには気づいていなかった。

当時、アスレチックからおまもりさまの林までは、二十メートルばかり空間があった。国村はその空間を草刈り機で手入れしたうゑに草場のふちには杭をうちこんでロープを渡していた。その奥にあ

るのが例の蔓壁だ（蔓壁があり、草むらがあり、草刈りで手入れされた空間がアスレチックまでつづいている）。草むらの中央には看板が立っている。書かれている文字は、「この先立ち入るべからず」。利菜が、林の杭がみんな引き抜かれていることに気がついたのは、自分たちがいつのまにか走り回るのをやめて「蔓壁」の前に並んでいたからだった。

利菜は驚いてとなりに立つ佳代子の肩をゆすった。佳代子も驚いてまわりを見回す、居眠りでもしていたようなそぶりだった。佳代子は紗英をゆりおこし、利菜は右隣の達郎を、達郎は寛太を、寛太は新治をゆりおこした。みんなはおまもりさまの杉木立を呆然とみつめる。彼女たちはこれほど蔓壁の近くに来たことはなかったから、蔓壁はもつと分厚いものだと思っていた。おまもりさまが覗けるとは知らなかった。蔓と網の隙間からは林の奥がほんのり見えた。蔓壁との間には、五メートルばかりの草むらしかない。

「いつのまにのぼったんだ？」

達郎が誰にもなく訊いた。誰も答えられなかった。利菜は考えた。おまもりさまに入った子どもたちのうち（無事にもどってきた賢明な子どもたちのうち）一人はこんなことを言っていなかっただろうか。あの林に引き寄せられたって。いつのまにか入っていた……って。そんな話を一度だが、聞いた気がする……。

となると、入る前に目を覚ましたのは幸運だったわけだ。

杭のあった場所にはすすきが長くのびていた。草原から風が吹き上げ、そのすすきをゆらしている。子どもたちは顔を見合わせた。国村が立てた看板はひん曲がりススキのかげに隠れている。この間までは（そんなに昔じゃない）ニスをぬられて光っていたのに、いまでは朽ち果て虫食いだらけになっている。そこだけ時間がたつて風化してしまつたみたいだった。看板だけが年をとつたみたいに。国村が書いた文字は見えない。利菜には別の言葉が書いてあるように思えた。

みるよ……達郎が地面を指さす。ススキの一角に日本手ぬぐいが

引つかかっている。国村さんのだ、と言って佳代子が手を伸ばし、利菜がとめた。

「なんでわかんよ。誰のかなんてわかんないじゃん」

「あんなの持つてんのあの人がらいしかないよっ」

「そんなのわかるもんかっ」

と利菜は言ったのだが、国村さんのものだと彼女は彼女にも思えた。

佳代子にはあの手ぬぐいに手をふれてほしくないと思った。茶色のシミができていたからだ。

血だるうか？

あんなのただの手ぬぐいだ、達郎は思った。彼はみんなを寛太郎の家まで送り届ける義務があった。この面子のリーダーだし、寛太郎には今朝みんなを頼むぞと肩をたたかれたばかりだ（達郎が言いつけを破ってまで両神山行きを決意したのは寛太郎が反対しなかったからだ。達郎にとつて親や先生が本部長なら、寛太郎は警視總監ぐらいにあたる。本部長より警視總監の言いつけを優先するのは子供も大人も同じである）。じっちゃんの期待は裏切れない。達郎はみんなに下まで降りようと言おうとした。もう昼前だ。お菓子を食べに降りてもいいし、もう帰ってもいい……っ

蔓の向こうから声がしたのはそのときだった。「佳代ちゃんかい？」

「国村さんの声だ……」佳代子は呆然と言った。利菜は国村がおまもりさまにしているのはおかしいと思った。大人はおまもりさまに行かない。行くのは馬鹿でむこうみずな子どもだけだから。

利菜は佳代子に向かって言った。なんとなく網の向こうには声をかけられなかった。国村は姿を見せないし、声の調子もいつもとちがった。暗い、重苦しい声だった。「うそだよ、なんでおまもりさまにいんの？ 網の向こうにいんのっ？」

「きつと入っていいんだよ」佳代子の目は輝いて、頬は赤く染まっている。

「そんなのおかしいよっ」

利菜の肘が達郎にとられた、新治には左手を、紗英には腰を押された。みんないつのまにか彼女のそばに回りこんでいた。利菜はやめてよと声をかけようとしたが、誰も自分と目を合わせないので声をつまらせる。彼女は恐ろしくなり、達郎の肩にかみついた。肉に歯が食いこむと、達郎が悲鳴を上げ、新治と紗英がぱつと離れた。「なにしてんのよっ」佳代子が言った、利菜は言い返した。「そんなのこっちのせりふだよっ。悪ふざけのつもりならこっぴどい目に遭わせてやる！」

紗英は泣き声を出した。「ねえ、わたしたちなにしてんの？ いま、利菜のこと、おまもりさまに連れてこうとした？」

みんなは黙りこんで林を見返した。林の奥を見ようとしたが、その光景はビデオの写りが悪い時みたいにちかちかしている。じっと見ていると頭がおかしくなりそうだった。みんなは殺人事件のことを思い出し、駐車場にパトカーがサイレンを鳴らして集まっているのを想像した。神保町ではその年そんな光景をよく目にしたから、みんなが連想したのも当然だが、それが未来のそれも近い未来の光景だとは、誰も気づいていなかった。

「もう帰ろっ……」

新治がこわごわ言って身を返すと、急に突風が吹きつけてきた。

彼は動きを止めた。草原には人がいなかった。アスレチックは無人だった。駐車場から大急ぎで車が出ていくのが見えた。達郎が、震え声で、「ここにいるのはおれたちだけだ」

「変な言い方やめてよっ」

佳代子が小声で言い返した。利菜も降りたかったがそうもいかなくなる、国村がこう話かけてきたからだ。「ちよつと助けてくれなにかっ」

佳代子はみんながびっくりするぐらいの速さで林に向きなあった。「どうしたのっ？」佳代子は半べそをかいている。「国村さん、おまもりさまに近づくなつて言ったじゃん。あたしたち下に降りるよ」「待ってくれないかっ。助けてくれっ」

彼女たちは顔を見合わせとまどった。助けてくれとは自分たちに言っているのか？ 国村はいつも助ける側だ、それに助けるには林にはいらなくてはならない。

「だから、なにがあつたのよっ」佳代子が訊いた。

「国村さん、怪我したの？」利菜も訊いた。風はいよいよ子どもたちにもわかっておしよせ、ススキを吹き流し、網にからまる蔓をはらいとばした。うずくまる人影が見えた。国村は座りこんでいるようだ。返事はなかったが、みんなは怪我をしたんだと思いこんだ。

「どうしたらいい？」

佳代子が言うと、みんなは年長者の達郎を見た。達郎は、草原に人がいないだけじゃなく、ここには大人がいないんだということに気がついた。もちろん国村をのぞいての話だが。その国村は怪我をしている。達郎はその場の責任が石みたいのしかかってくるのを感じた。

彼は額に手をあて、うろたえを隠そうとした。「けがをしてるんなら、人を呼ばないと」

達郎は独り言のように言うと、林にむかって怒鳴り声を上げた。

「国村さん、大人が誰もいないんだよ！ おれたち親と来てないからっ。寛太、下まで降りて人を呼んできてくれないか」

「待つてよ。国村さんほんとに怪我したの？ 大けがなの？」利菜が訊くと、達郎は「わからないよっ」と叫んで答えた。風がうなりを上げて、草や木立をゆさぶった。達郎が大声を出したのは、不安なのはもちろんだが、風がすごい勢いで渦を巻いていたからでもあった。紗英が、「国村さん、歩けないのかな？」と聞くと、佳代子の手ぬぐいを指さした。「見てよ……」

手ぬぐいは先ほどと同じくススキにかかったままだった。ススキとともに右に左に揺れていた。だけど今では鮮血がしたり落ちていたり。さっきは茶色の染みに見えたのに今は真っ赤になっている。血が新しくなつたみたい。利菜も佳代子も、さっきは乾いていたと思つた。佳代子はさわろうとまでしたからみまぢがいとは思わな

かった。だけど二人は、血を見たショックで深くは考えなかった。きつとみまちがいだと、遠かったからみまちがえたんだと利菜は思った。

ススキの壁を越して、国村が言った。「ここから出してくれないかっ」

「じゃあ、自分で出られないのねっ」佳代子が訊いた。つかまつとるんだ、と国村は言った。みんながその意味を深く考えないうちに、草場からは血が流れ落ちてくる。達郎は思った。うわあ、こいつはびっくりするぐらいの大げがだ。達郎は、そばの枝を素早く拾って、ススキをばしと叩き始めた。寛太も同じことをはじめた。寛太は今日はおまもりさまの蔓壁をみた。あときはススキなんて生えていなかったのだが、誰かが大げがをしているときに、そんな疑問をはさむゆとりなんてあるだろうか？ 二人は一心にススキを叩き続ける。達郎が首を伸ばしてススキの中を覗いた。

「なにしてんのよ」佳代子がこわごわ訊いた。
「mamushiを追っ払ってるんだ」達郎は答えた。

利菜が、「国村さんとちがうんじゃない……」と言った。国村も年寄りだが、声の主はもつとずつと年寄りに聞こえた。声は……単に古びて聞こえた。遠くからか、あるいはとんでもない大昔から響いてくるみたいに。達郎は怖かった。だけど、どうしてもおまもりさまに近づかなくては気がすまなくなっていた。こんな変だと心の片隅では思ったが。だけど、町で殺人犯が野放しになっているのはほんとだし、リトルのコーチたちが連続殺人の可能性について話しているのも知っていた。国村さんがそいつにやられたんじゃないかと思うと、気が気ではなかったのだ。達郎は枝を伸ばしてススキをかき分けると、まむしがはいっていないことを確かめた。振り向くと仲間の確認を待った。寛太がうなずき、新治がうなずいてめがねを上げた。女子たちは手をつなぎ合っている。寛太と達郎がススキ林に踏みいった。血を踏まないようおっかなびっくり。達郎が腕をのばして、枝のさきの手ぬぐいをひっかけた。手ぬぐいの先端

からは血が幾筋もしたたり落ちる。傷口がそこにあるみたいに。寛太は、こいつは血の蛇口だあと思い、達郎が振り向いた。「やばいぞ、信じらんないぐらいの大けがだ」

辺りには生臭い血の臭いがただよっている。紗英が吐きそうな顔であえいでいる。利菜がその手を引いた。四人は達郎と寛太の後につづく。

こんなに血が出たら、生きてるわけないよ、と利菜は思い、血をかわして足をふみおろす。国村の血液は地面に染みこまずに流れてくるが、子どもたちは誰もそのことに気づかない。

「包帯かなにかないのかっ」と達郎は女の子たちに怒っていったが、そんなものをもつてくるはずがない。達郎はパニックをかみ殺すみたいに唇を噛んだ。なんで今に限って大人がいないんだと、彼は困惑した。

「みんないなくなっちゃまったのかっ？」

国村の声がある。なんだか怒っているみたいな声だった。ここにいるわよっ、と佳代子は答えた。達郎は枝ごと手ぬぐいを捨てた。

利菜は、手ぬぐいが真っ赤に染まっているのを見た。白い部分はほとんどなくなっている。まるで手ぬぐいが血を流したみたいだと彼女は思った。達郎が振り向いた。

「たんかがいるっ。新治、棒をみつけてこい。男はシャツをぬぐんだぞっ」

「棒なんてないよ」

「はやくしてくれっ」

国村の声が言った。子どもたちはさらに林に近づいた。蔓網まではまさに一步の距離だった。利菜が

「ねえ、なんか変じゃない」

とみんなに言った。彼女はさつき友だちに林に連れこまれそうになった。そのせいだか知らないが、人一倍冷静で慎重だった。少しいやな言い方だが、国村の身の安全より自分の身の心配をしていたのだ。みんなの目は、そんなのわかってるよと言っていた。だけど

黙ってツルアミを見返したただけだ。網にも蔓にも血がついている。さつきはついてなかった、と、利菜は心中で悲鳴を上げた。

「ここはいいぞ」

国村が言う。六人は顔を見合わせる。

「なにがいいの」佳代子が訊いた。「けがをしてるんでしょ？」

国村は答えなかった。かわりに想像力が働きだす、子供たちの頭はおもりさまの力が想像力をかきたてたみたいにフル回転をしはじめる。利菜は蔓で首を吊って死んだ女の姿を頭に描いた、彼女は女の垂らす鼻水を感じ、首に食いこむ蔓の感触をまざまざと肌に受ける。佳代子は網をくぐろうとして、頭を引きちぎられた女の子を、新治は野良犬にかまれて狂犬病になった男の子を、紗英はテントに寝ていて熊に襲われた男性の話を（とはいえ、彼女がこの話を聞いたのは両神山でなくカナダのことだったが。彼女は腸をくわれる男の姿を想像した）、寛太は山中で腐っていく兵隊の話を頭に描いた。その中でも、達郎の記憶だけはもつとも現実に近かった。彼が思いだしたのは、網の近くで脛の骨を折った男の子で、運び出されるところを間近に見ていたからだ。

「おかしいよ、こんなのぜったいおかしい……」

利菜はささやくようにつぶやき呆然と足を見下ろす。と、血が靴をとりまいていた。彼女を中心に血だまりがあった。ちくしゅう、中に染みこんだりしたら気を失うに決まってるよ。だけど、硬直して足を引き抜くことができない。佳代に手を伸ばし袖をひいた。佳代子は利菜が指さす方を見た。

「やっぱり大人を呼んできた方がいいよ……」と言って利菜は咳きこんだ。空気にまで血液が噴霧のようにまじってる。利菜がつばを吐くと、血だまりに落ちた。佳代子はそれをじっと見た。

「でも、手遅れになったらどうするのよ」佳代子は震え声で言い返す。「おつかないなんて言ったららないよ」

国村さんじゃないかもしれないじゃないかと利菜は思った。このとき考えたのは四年のとき先生からキャンプ場できかされた怪談のこと

だった。こんなことを考えるなんて恥ずかしい。友だちにはれたらヘタレ呼ばわりされるかもしれない。だけど、ここにいるのはみんな親友だったから、彼女はその考えを口にする事ができた。

「なめ太郎っておぼえてる？」利菜は言った。「紗英ちゃんだって知ってるでしょ？ 四年のときの話しだもん。いたっしょ？ トイレに付いてきてもらったもん」

紗英も同じ考えに達したようだ。「知ってる、そいつ人の声を真似すんのよ」紗英はみんなにも聞こえないような小声で言った。国村には訊かれなくなかったのだ。「血をなめるお化けの話でしょ。男の子も訊いたって言った」

達郎は振り向いた。「その話ならオレも知ってる。話したのは片山うちだろ」片山うちという言い方は耳慣れなかったから、年下の子たちは頭のなかで、片山先生のことだなと翻訳した。達郎はこう続けた。「キャンプに連れてくときは必ずその話をするんだ。作り話だ。でたらめだよ。朝になるとかならずいうんだ。あれは作り話だ。夜中怖がらすんだ」

達郎は言ったが、みんなは不安げに顔を見合わせるばかりだ。

「今は国村さんを助けないと、みんなばかな話しないで協力……」

達郎は黙った。達郎はみんなの方を向いていたから、林を見ていなかった。蔓の隙間から痩せて（すごく痩せて）、薄汚れた手が出てきたことに気づかなかった。その手は指がうんと長く、爪もうんとのびている。十センチはある。その爪はまっすぐで、鋭利だ。その手が、達郎の手首をそつとつかんだ。

「助けならいらぬよ」と手の主は言った。

達郎が振り向くと蔓をかきわけるようにして顔があった。髪はぼさぼさに伸びて、その髪がくつきあっているのはヘアトニックのせいじゃなく、垢と泥と血のせいだった。達郎は先生の話をおぼえていなかったが、なにせ二年前の話だ。その瞬間、記憶のなかにある映像と現実の像が一致した。目玉は病的に黄色い、鼻からふうふう息を吸ってる。そのせいで鼻の穴がいっぱいにくくらむ。

なめ太郎は目を見開いたまま笑う。歯は黄色く尖ってギザギザで、血糊がいつぱい残っていた。

「うわあ……」と達郎は言った。

「よう！」

なめ太郎が手を引いたので、達郎はよろめき屈んだ。なめ太郎の顔が近くなり、そいつが舌をのばして耳をなめた。二メートルはありそうな長い舌だった、達郎はその悪臭と舌先の感触に身を凍らせる。

「うそだ、うそだ、ありえない！」利菜は叫んだ。脳が干上がって、神経が切れてしまいそうな感じがする。彼女はなめ太郎をはつきり見た、あいつの顔を。なめ太郎の舌はへびみたいに二つに割れてる。その声は甲高いのとしわがれたのが重なったような二重音声だ。ひやあ先生の言ったとおりだ。佳代子はいいつが見えるのはあたしだけかな、と考えた。紗英は思考が停止して、何も考えられなくなった（脳パンクだ、と彼女はその言葉を繰り返して考えた）。

「捕まえた」

となめ太郎は言った。新治が「兄ちゃんがつかまった」と金切り声で叫んだとき、蔓の中からもう一本の手がのびて彼の細い足首をつかむ。新治はススキの中に倒れこみ、血の混じった土を跳ね上げる。彼は、地面に頬をうちつけぼんやりする、眼鏡がずれ、顔にはねばねばした血がべったりつく。唾を垂らしながら、ぼんやりと顔をあげたとき、なめ太郎が蔓から身乗り出した。

「捕まえたあつ、捕まえたあつ、こつちに來い小僧ども！」

なめ太郎が思い切りよく腕を引くと、新治の靴が脱げ、その手が足首を離れた、なめ太郎はバランスを失い後ろに倒れかかり、達郎は手を捕まれたままだったから、なめ太郎に引かれるまま横様にころんだ。二人は草むらに倒れこみ、血まみれになった。

「ちくしょう！」

となめ太郎が雄叫びを上げた。

寛太はあまりのことに呆然としていたが、その、ちくしょう、を

訊いてしゃんとなつた。彼はじいちゃんから骨と皮だけになつた人間のことはさんざん聞き出していた。その瞬間彼は、こいつはなめ太郎なんかじゃなくてそのたぐいのこじきなんだと考えたのだ。なめ太郎が本物だったら、こんなに間抜けじゃない。

寛太はすばやく身をかかめると、石を拾おうとした。だけど、地面はススキまみれで、土も見えない。彼は草をかき分けた、土と草の臭い以上に血の臭いは強烈で、地面は血の海と化している。彼は怖じ気づいたが、しつかりしろ、と寛太郎に腰をたたかれた気がした、腹を据えろと自分に発破をかけると、えいえいとうなり声を上げながら、草をかきわけた、石があつた。

そのとき、なめ太郎によく似たこじきは新治をあきらめ、達郎の腕を握っていた手を両腕にもちかえた。なめ太郎は細腕のくせにすごい力だ。

「ちくしょう、こいつにひっぱられるっ」達郎はふんばろうとしたが、地面は血でできた汚泥にかわり、彼の足を滑らせる。

一方寛太は立ち上がって石をぶつけようとした、だがなめ太郎はすぐ近くにいて、あいつの顔を見ていると腕が震えて手元が狂いそつだ。彼はなめ太郎よりも達郎や新治に当ててしまうことの方が怖かった。寛太は一步踏み出した、また一步、なめ太郎が彼の目玉で大きくなつた。達郎を見ていたなめ太郎が、こちらを向いた。

寛太が拾つたのはてのひらほどの割合大きな石で、ずっしりと重い。彼はこんな重さの石を投げたことはない。だから、近づいてよかつたと思つた。投げたりしたら、とてもこいつをひるませるほどの威力は出せなかつたらう。なめ太郎ににらまれたとき、彼は脳髓を一撃されるような感触を受けたが、体は無意識のうちに動きだしていた。寛太はわめき声を上げると、なめ太郎のあごに石をたたきつけた。骨と肉の碎けるぐしゃりとした鈍い感覚が腕に伝わつた。

「やつた」と達郎は言つた。なめ太郎の手が腕から離れた。なめ太郎のあごから飛沫があがり、服にかかつたが、達郎は気づかない。

「やつたぞ、寛太っ」

寛太は怖気を感じたが達郎の腕は自由になった。二人は後ろにはいずって逃げた。そして、転がっていた新治につまづき、ふらついた。

「わ、悪ふざけをした、おまえが悪いんだ！」

寛太が叫ぶのと、なめ太郎が腕をふるうのは同時だった。すごい勢いだったが、寛太はしゃがもうとしたし、達郎が彼の腰に組み付いて転ばせたから、二人は鋭くどがった爪の餌食にならずにすんだ。二人は新治のうえに倒れこみ、達郎は弟とすすきを踏み潰す格好となった。なめ太郎は首のかわりに寛太の帽子を握りしめていた。ぐしゃぐしゃにつぶれるほどに強くつかんだ。女の子たちはそれまで息を詰まらせていたが、それをきっかけに悲鳴を上げた。「きゃあああああああああああ！」

「寛ちゃん、逃げてえ！」

利菜がいち早く金切り声を上げた。三人は四つんばいのまま逃げようとしていて後ろを見ていない。なめ太郎の手が寛太の首にむかっつてのびる。達郎は恐怖の罵声を上げながら立ち上がると、寛太を突き飛ばした。なめ太郎の手がまた空をかいた。

「あいつ、あいつ首をしめようとしたっ」

佳代子が非難の叫びを上げる。

達郎が振り向くと、なめ太郎の血まみれの顔の奥で、目玉だけが憎しみの情念に燃えていた。うわあ、こいつはおれたちを憎んでる、と達郎は思った。逆恨みだけ。恐怖の底になぜか喜びもあった。なめ太郎が苦しんでいるのを知ったからだ。達郎は声を限りに号令する。

「みんな逃げろ！」

リトルで鍛えた彼のかけ声はすごかった。みんなは半分ばかり金縛りにかかっていたが、そのひと声で一斉に動き出した。なめ太郎は伸ばした腕を（なんと三メートルばかりにのびている）新治に向けた。

利菜は及び腰が幸いして、一同のいちばん後ろにいた。彼女は一

部始終を目撃した。友達の惨憺たるありさまに、恐怖を怒りが塗りつづした。彼女は手にしたゴムボールを振りかぶると、渾身の力で投げつけた。いつもの手投げでなく松坂みたいな腕の振りで。ピンクのボールは風を切り裂くと一直線にすつとんでいき、滑稽にもなめ太郎は避け損なつて額に受けた。新治はなめ太郎の腕から逃れた。お腹がよじれるくらい恐ろしかったが、彼女も夢中だった。

「ざまあみる！ おまえなんか死ねばいいんだ！」

利菜が怒鳴るとなめ太郎は大口を開けてうなつた、唾と血が重なりあい滝のように糸を引く。なめ太郎は蔓壁をひきさきにかかった。一同はパニツクになつた。達郎が寛太を引きずつて蔓壁から離れた、佳代子と紗英が新治を左右から抱えだす。二人とも「誰か、誰か助けて」と助けを呼んでいる、新治は口を動かすばかりで声もだせない。

達郎は寛太を、女の子たちは新治を抱えてススキの中から引つ張り出した。みんなは血まみれになりながら、夢中で草原を駆け下りた。足に地がつかず誰もが転んだが、なめ太郎に捕まるのではないかと思うと、転びながらも走つて逃げた。利菜はなめ太郎の食事のじゃまをしたから（なめ太郎は死体の血を舐めるからだ）、きつと復讐されると思った。怒りなんて消し飛んで、ひたすらおっかなかった。寛太郎が言ったみたいに、おっかな虫が腹に貼りついたのだ。寛太はさきほどの英雄気分はどこへやら、あいつに捕まって殺されるんだとおもいこんでいたし、佳代子と紗英もなめ太郎をみたシヨックからまるで立ち直れなかつた。新治は片方の靴が脱げて靴下がむきだしだ。彼の靴下は血でずぶぬれだし、ほつぺたにも血がべつとりついている。新治はいますぐ死にたいと思った、みんながまわりにいなけりゃきつとつかまっていたことだろう。達郎だけはみんなを追い立てるのに忙しく、おっかながつているひますらなかつた。

ときおり、ざざざつざざざつと草をかき分けるような音がした。呼び止められる声を聞いた気がしたし、国村の声を聞いた気がした。

利菜が途中で振り向いたとき、おまもりさまからはゴムボールが帰ってきた。力任せに投げつけられたんじゃない、友だちとキャッチボールをやるときみたいなスローボールが帰ってきた。だから、彼女は、無意識のうちにもそのボールをつかんでいたのだった。

七

オオバコをふんだ。スニーカーが草場を蹴った。彼らは走りに走った。アスレチックの間を駆けぬけ駐車場まで下りると、自転車は横倒しになっっている。互いを励まし引き起こしていると、新治が勢いあまつて自転車ごと倒れこむ。彼は膝をすりむいたうえ、胸を痛打し咳きこんだ。新治がふりむくと、おまもりさまは遠く離れていたが、それでも誰かがおいでをしようとしているようだ。

達郎が弟を助け起こしてこう言った。「坂を下りろ、下まで突っ走れっ」

寛太がペダルを踏むと、力が強すぎてチェーンがはずれた。達郎が女の子たちに手を振った。

「さきに行けっ」

男の子たちは乗るのをあきらめ、自転車を押して走りはじめた。女の子たちはあとを気にしながら、カーブを曲がって坂道を下った。駐車場からの長い坂道をおり、直角のカーブを横切ると車止めのスペースがあつた。彼女たちはそこで自転車をとめて三人を待った。男の子たちは坂道に入ったところで自転車に乗ったが、寛太のチェーンははずれたままだった。達郎と新治はペダルをこがずに走った。寛太はなくさめみたいにペダルをこいだ。達郎は何度も後ろを向いた。

女の子たちはなめ太郎が長い手足を飛ばして追ってくるのではないかと気が気ではなかったが、草原から舞い降りてくる人影はない、それでも早く早く男子をせかした。なめ太郎が蔓から出したのは、手と肩と胸がすこしで全身は見えなかった。なのに、利菜はあいつ

の全身をまざまざと思い描くことができた。片山はその話をなんども繰り返し話してきたようで、なめ太郎の描写は細部にわたってこまやかだった。なめ太郎はすごいがに股で、エリマキトカゲみたいなに股を回して追ってくる。ガリガリの餓鬼みたいに痩せたやつ、なのに腹だけはカエルみたいにふくれたやつ。裸のあいつ。

利菜は右手にビニールボールを持ったまままでいた。佳代子が気づいてもぎとった。彼女はそれを、林にはなく池にむかって放り投げた。それは水面に当たって波紋をつくった。ビニールボールはぶかぶか浮いた。

三人が約束をかわした子どものように手をつないで男の子を待ち、それぞれの空想を振り払っているあいだ、達郎は気が狂いそうで、濡れたTシャツの下で身をこわばらせた。国村の声こそなめ太郎の真似っこだったが、流れてきた血は本物だった。達郎のシャツは左半分が真っ赤になっていたし、新治も背中全体が赤くなっている、寛太の灰色の短パンは真っ黒にかわっていた（あとで寛太は達郎だけに、しょんべんをもらしたわけじゃないからな、とことわった）。それに、手首。彼の手首にはなめ太郎の指の痕がべったりとこっけている。あいつの手にあつた、ぬめりと血が。長くのびた爪にひっかかれて擦り傷もある。こんなひっかき傷があつたら、病気になるんじゃないか……と達郎は思う。擦り傷からウイルスがはいって、エイズとかエボラウイルスとか、もつと新種のやつとかにかかるとはじゃないか？ 年下の女の子たちがおんなじ目に遭わなかったのはさいわいだが、それでも彼女たちの服にもあちこち血が飛び跳ねていた。大人たちにはなにがあつたのかとしつこく訊かれるだろう。

どう答えればいいんだ？

彼の頭はあれは連続殺人の犯人だと信じたがつっていたが、心はあれはなめ太郎だと信じていた。頭と心が分裂するようで達郎は吐き気がした。

だが、女の子に追いついて、チェーンを嵌めるのを手伝っていたあいだも、そのことは口にしなかった。達郎も年下の子たちも、だ

まりこくって坂道を降りた、飛ばさなかったけど。

結局、ドライブウェイあたりにいたるまで、口を開いた者はいなかったのである。

第二章 寛太家にて

第二章 寛太家にて

八

達郎がみんなを止めたのは、林の途切れ目からあたごが見える地点だった（登るときはあれほど時間がかかったのに、降りるときは五分とかからない）。彼は自転車を降りると土手に登って、林の上からドライブウェイを見下ろした。ここからカーブを曲がれば国道に出るまで直線の道だ。なだらかな坂がのび、ドライブウェイあたごまでつづいている。彼は大人に会うまでに、ごちゃごちゃになった頭を整理しておきたかった。振り向くと年下の子たちを見下ろした。

五人は自転車のキックスタンドをおろし達郎のあとにつづいた。林の中は樹液の臭いが濃く漂っていた。風はもうやんでいた。木々の隙間から木漏れ日が落ち、達郎の顔に日色のまだら模様を作っていた。年下の子たちはどうしたのかと達郎の顔をうかがった。はやく人のいるところに行きたかった。

「兄ちゃん、はやく行こうっ。着替えたいし、もう家に帰りたいつ」
「だけど新治、おまえ、なんて話すつもりだ？ この血はどうしてついたのかって訊かれるに決まってる」

「そうだよ。なめ太郎におそわれたなんて言えない」
利菜が言った。

「なめ太郎なんているわけない。あれは……」
寛太が言うのを利菜が、「あんな人間いるわけないじゃないっ」とさえぎった。達郎はその言葉にぎっくりした。

「ねえ、あたし、とにかく手を洗いたいよ。みんなもさ。みんなも洗った方がいい。なめ太郎のことなんて今どうでもいいよ。血の

匂いはずつとしてんのよっ？」

佳代子は両手をつきだした。彼女は転ばなかったが、新治にさわったから、彼についた血をもらっていた。男の子たちは自分のシャツをみおろし、互いを見比べた。今必要なのは誰かにどう話すなんてことより、替えのシャツだとは達郎も思った。

「じゃあ、正直にいうのか？」彼は訊いた。

「こう言えいいのよ。お守り様に誰かいて、そいつにやられたって。あいつがなんだったかなんて、達郎ちゃんにわかんの？」

佳代子は杉の脇に立って、みんなを見下ろした。佳代子は半泣きになっていたし、紗英はほんとに泣いていた。利菜も泣きたい気分だった。紗英の手をにぎっていると彼女の震えが伝わってきたし、さきほどの怒りは消えて今はただただ怖く混乱していた。寛太があるのただのこじきだよ、と小声で言った。それはいつになく弱気な声だったから、みんなを元気づける力はまるでなかった。六人のかぶった血は、水とはちがって又メリ気がある、ねっとりしてる。佳代子の言うとおり、血の臭いはずつとしていた。あれがもし食べだったとして持ちをかぶったのは本当だ。

利菜は、

「わたしもさ、スニーカーのなかまでぐしょぐしょだよ。中がどうなってるかなんて、考えたくもないけど……」

でも、靴下まで真っ赤だろうなとは思っていた。

達郎は黙ったままみんなを見返した。それから、「あれはきつと連続殺人犯だよ。なめ太郎のはずない、あれは……っ」

「あれがなんなのかなんてもうどうでもいいよ！」

佳代子が涙目で叫んだ。達郎は自分をすっかりさせようという思いと、早く大人のいるところに（自分より年上の人間がいるところに）行きたいという思いでぐらぐらした。あれがなめ太郎なのか連続殺人犯なのかなんてどうでもよくなってきた。どっちにしろ最悪なやつだったのは本当だ。自分は六年生だという思いとみんなをなんとかしなきゃという責任感が彼を支えていたが、こんなところに

いたらそんな気丈夫もつづかないにちがいない。

「わかった。下まで降りよう。店の人に電話を貸してもらおうからな。親に連絡して着替えをもってきてもらおう。それでいいか？」

五人は納得したようにうなずいた。

坂を下ってあたこの駐車場にはいると、車は三台停まっていた。

みんなは誰にも見られたくないという思いと、もっと大勢人がいればいいのという思いでみじめな気分を味わった。彼らは大騒ぎにならないか心配していた。いつ声をかけられることか……。達郎はすぐさま近くの男性に助けを求めたかったが、その感情をこらえにこらえた。どう話していいかわからなかったのが理由の一つ。自分や弟を襲ったものがなんだったのか、達郎にはわからなかった。自分が見たものが人間だとは本心からは思えなかったのだ。でも、おまもりさまでなめ太郎に会った、なんて、いくらなんでもそんなことを言うのはまずい。みんなをあたごまで連れて行きながら彼の心は迷いに迷っていた。あれが人間で本物の殺人犯だったのなら簡単だ。でもそんなふうにはつけない。自分にはつけても周りにつくわけにはいかない。もし、ここで殺人犯におそわれたなんて切り出したら、とんでもない騒ぎになることは彼にもわかったからである。

地図の看板の前に自転車をとめると、ハンドルやサドルに血がついていた。達郎はみんなに物にさわらないよう気をつけさせた。トイレに行き来する人がいくらかあった。自販機からジュースをとっていた人が、ふと顔を上げた。足早に店に向かうと、一行はさすがに人目をひいた。髪はざんばらで、服も乱れていたし、様子も尋常ではなかった。

達郎が店に踏みこむと、カウンターのおばさんが顔を上げた。ネームプレートには片桐とあった。あたらしく入ったパートのようで、子どもたちは誰も見覚えがなかった。

達郎はすぐさま質問攻めに合うと予想していたのだが、片桐はな

にも言わない。みんなの目が自分に集中するのがわかる。頭に血が上ったが、なんとか唾を飲みこんだ。「あの……」達郎はみんなを見て、それから片桐に目をもどす。「Ｔシャツとタオルを貸してもらえませんか？」

「タオルは売ってあるけど、Ｔシャツはないわよ」

「達郎ちゃん、お金がないよ」

佳代子が小声で袖をひく。片桐は彼女に目をむけた。

「タオルぐらい貸してあげるけどねえ、自転車でおりにきたの？」

ひどい髪になってるわよ。なんでそんな顔してんの？」片桐は一拍子おいて、「なにかあったの？」

片桐幸代子は早口で質問するくせがあった。佳代子とおなじぐらいの年の子もいたからつい娘にするような口調になった。子供たちの様子には、本気でドキリとしたのだ。坂道はきついから競争する男の子たちが大勢いる。でも、子どものうち三人は女の子だし、一人はひどく大人しそうな子に見えた。競争してきたにしても、服装の乱れはすいぶんひどかった。片桐は二宮町の人間だ、最近この辺りでちかみや変質者が多いことも知っている。殺人事件についても耳にしていた。疑念が影みたいに忍び寄り、彼女は身を乗り出した。「あんたたち山から下りてきたの？ 何があったの？ 誰かになにかされたんじゃないでしょうね？」

達郎は面喰らった、口がわなないた。想像していたのとはずいぶんちがった。彼はすぐさま大騒ぎになって、学校まで話が行くと考えていた。みんなの親にも山にきたことがばれてしまうだろう。そんなの最悪だ。もしかしたら、リトルに参加させてもらえなくなるかもしれない。彼はそんな覚悟をかためていた。達郎はどの質問にどう答えるかと言うことで頭が一杯だった。でも、片桐はびしょぬれになったシャツについてふれない。この人には血が見えないんだろうか？

どうしていいかわからなかった。頭は高速で回転した。あいつのことをなんと言うかでいちばん迷った。殺人犯なのか？ ほんとに

なめ太郎なのか？ でも、片桐は答えを待っている。だから、

「上で変なやつにあったんです」咄嗟に答えた。言ってから心の中で胸をなでおろした。変なやつというのはほんとのことだし、これなら精神病院にぶちこまれることもない。片桐は緊張したようだった。

「おかしな人って？ 変質者かね。大人に言った？ 国村さんはいなかったの？」

達郎は口をつぐんだ。国村はいたようでないから。少なくとも、姿は誰も見なかった。片桐は最近あの人は見かけないからね、とひとりごちた。

片桐は表に目を走らせながら、「タオルはなんにつかうの？」と訊いた。

「だって、みんな血まみれですよ」

達郎はリトルでしつけられてるだけあって、受け答えもしつかりしていた。しかし、片桐はおかしそうに笑っただけだった。

「おおげさなこと言ってる。どれ、手を見せてごらん」

片桐がレジによりかかり身を乗り出した。新治が手をつきだした。彼の右手には、倒れこんだときにできた擦り傷がいくらかあった。草場の血も手のひらにべったりついたままだった。拭きようがなかったし、さわりたいくもなかったのだ。

「だけど、片桐はあつくぬったどうらんのような血も気にならないように、新治の手首をやさしくつかんだ。「転んだんだね。おかしな人ってどんなやつ？ 怒ってるんじゃないよ。あんたたちにおかしなまねをしたんなら、警察にも言わなきゃいけないからね。最近町で悪い奴がうるちよろしてるのは知ってるよね。まだ捕まってるんだから……神保町じゃ殺人事件も起こってるんだよ。どうなの？ おばさん警察を呼ぼうと思うんだけど……」というのはここにも警察がきて怪しい奴がいたら通報してくれって言われてるからだけだ。といっても今までそんなやつはいなかったけど。警察をよぶほど大事だと思う？ いたずらだったらあんたたちを叱らなきゃい

けないけどね……そんなふうには見えないし」と新治の手に食いこんだままの小石を、爪で器用にはぎ落とす。

利菜は達郎の真後ろにいたから、彼の広い背中がよく見えた。血は乾きかけている。白いシャツの半分方が真っ赤になっているのに、片桐はまったくそのことにふれなかった。落ち着きはらっている。外にいた大人も興味はしめしたが、駆け寄ってきたりはしなかった。子供が血まみれになってるのに……。心配して当然なのに？

新治の傷は深くはなかったが、泥がついていたし、消毒はしたいた方がいいな、と片桐はつぶやいた。その瞬間、利菜はぴんと来た。この人には血が見えてないんだ。

それは映画や漫画ではよくあることだから、直観でも何でもなく彼女は自然にそう思った、そう感じた。佳代子と目をみかわした。彼女も同じことを考えているようだった。血まみれのこどもを見て、平気な大人なんているはずない。

「ちよつと待ってなさいよ」と片桐は言った。「ふみちゃん、ちよつとレジについてよ」奥に呼びかけ、「消毒ぐらいはした方がいいからね。おかしな人って男の人？」

片桐は新字よりもおかしな人の方に興味があるようだ（それは達郎も同じだった）。若い女の人がエプロンをしめながら奥からき、片桐が変わって姿を消した。新治はその女のネームプレートを讀んだ。

赤川文絵はエプロンをしめながら片桐とおなじことを訊いた。「みんなひどいかったこうね。大急ぎで降りてきたの？」

利菜と佳代子の疑惑は確信に変わった。利菜は達郎をドアの近くまで連れて行きささやいた。「見えてないよ」「

なんだって？」

「見えてないよ、血は見えてないっ」

「そんなばかなことあるわけない」紗英が言った。「あの人、ひどいかったこうって言ったじゃん。外の人もじろじろ見てたっ」

「みんな自分の頭見てみるよ」達郎が頬をひきつらせる、紗英と佳

代子は長髪がみだれてぼさぼさだった。寛太は草を顔につけたままだし、新治のめがねはずれたままだった（めがねにも血がついている、それに彼のスニーカーは片足だけだ）。利菜はアイスの冷凍庫にうつった自分の姿をのぞいた。まったく寝起きの頭よりひどかったし、顔の肉もこわばっている。利菜はクーラーボックスに手をついたまま振り向いた。「こんなかつこうしてたら、注目あびて当然だよ」

片桐という人は奥でおばさんたちとおかしな人の話しをつづけているみたいだ。紗英が言った。「出ようよ。あたし、ゆっくり話したい。外の人がどんなふうにあたしを見るか見たい」

「だめだ」達郎は震えながら首を振る。「そんなことしたらよけい変に思われる」

「どうするつもりよ」佳代子が訊くと、達郎は、

「おれが話すからみんなは黙ってる」

ドアのそばで固まっていると、赤川が、「あんたたち、なにがあったの？ おかしな人ってなによ？」とレジから身を乗り出した。

「その人、厚いコートでも着てなかった？」

彼女がにやにや笑うと、片桐が奥から顔を出した。「ふみちゃん、こどもからかうんじゃないよ」

「だってさあ、みんなぶったまげの顔してんじゃない」

利菜が冷凍庫を離れると、達郎は彼女が手をついたところをあわててふいた。右手の血がガラスにうつったのだ。

片桐は消毒液とタオルを持って姿を現した。追い立てるように子供たちの背に腕をまわした。「みんな、外のベンチ行く？ おばさんが、アイスおごったげる」

達郎が冷凍庫から顔を上げ、「ぼくら、大丈夫です。おっかなく逃げてただけだし……」

片桐はとりあわなかった。はいはいとうなずきながら、新治の手をひき外にいった。利菜たちはあとを追いかけた。片桐は店のとなりにある休息所まで子どもたちを連れて行った。赤川がソフトクリ

ームをかかえてでてきた。片桐は新治に手を洗わせ、傷にマキロンをふりかけた。新治の手についた血は水を受けて薄まり、排水溝に落ちていった。小谷というやせっぽちのおばさんが、アイスを持ってきてくれた。みんなはアイスを渡されたものの、食べる気がしなかったので手に持ったままだった。片桐が顔をしかめた。片桐は新治にちかづきすぎたらしく、エプロンのすそに血がのびている。一同はがまんをして、アイスのカップをはずした。

「なにかされたわけじゃないんです」と達郎は言った。「でも、浮浪者みたいなかんじの人で……」

「服は着てた？」

「ふみちゃん、レジッ」と片桐は言った。

「服もぼろぼろだったし、しつこく話しかけてきたから」

「そんだけ？　ほんとに？」

「ええ」

「あたしたちが怖がって逃げたから、その人追いかけてきたんだと思う」

佳代子が付け足したから、達郎は顔をしかめた。

「そう？」片桐はちよつと身を起こして気を抜いた。「あんたたちも知ってるとおもっけど、さいきんへんな事件が多いからね。ねえ、行方不明の子みつかったっけ」

「まだだねえ、もう三日もたつんだけど……その子もこのへんでいなくなつたのよ」

「そんな具合だからね。おばさんたちも心配なのよ。その人がふつうの人ならいいけど……汚くてもふつうの人はいるし、まあいろんな人がいるからね……」

「ふつうです」達郎はすこし口ごもり、「でも、ひげも髪ものばしっぱなしで、すごい汚い人だったし……新治がころんだから、みんなあわてたんです」

片桐は達郎の目をのぞきこむ。ちよつとうたがっているな、と達郎は思う。今の説明じゃまずかったかな？「みんな、これからどつ

ちに帰るの？ 神保町の方？」

「神保町です。自転車できたんですけど」達郎はその自転車をさがすみたいに駐車場に目を向けた。「これから親に迎えに来てもらうと思います」

「ああ、親御さんがここにくるのね」片桐はほっとした顔をみせた。「そんな汚い身なりの人、この辺で見かけたことはないけどね。山でなにしてたのかしらね」

「おばさん」利菜は片桐の前に手をさしだした。血がついていた方の手だった。「わたしも転んで手をついちゃったんだけど、なんともなっていない？」

片桐はどれどれと利菜の手をもった。「なんともなっていないけどね。心配なら、マキロンぬつとく？」

「うん。消毒しときたい」

「あたしも」

「わたしも」

佳代子と紗英も言った。おばさんがまた三人をじっと見た。佳代子は言った。「その人の服にさわっちゃったから。紗英は手にぎられたから。その人、殺人犯だと思う？」

期待するみたいに片桐を見た。まるで、殺人犯であって欲しいみたいなの言い方だ。

「まさかねえ」片桐は慌てたように言った。「……まさかとは思っただけど。いやね、みんながみんな、誰彼かまわず疑ったり、心配したりするのはよくないと思っつてさ。警察にも通報がたくさん入ってるって言うのよねえ……いたずらもふくめて」

「ぼくらのはいたずらじゃありませんっ」

「わかっているわかってる」

佳代子は噴水式の水道のところについて、手を洗い出した。利菜と紗英が後ろについた。佳代子がちよつとうつむいて、肩を落とすたから、こりゃ泣いてるな、と利菜は思った。自分も泣きたくなつた。佳代子は右手をつぶすほど力を入れて、掌をこすっている。血

はなかなか落ちなかつた。

利菜は佳代子をなぐさめ、泣くのをやめさせなきやと思つたが、小谷という人は佳代子の涙を変な意味にとらなかつた。

「泣かなくてもいいのよ。怖かつたわねえ」

佳代子が泣いたのは同情をひくのによかつたようで、二人のおばさんは急に警戒をとり、みんなをいたわりだした。服をひっぱられたので振り向くと、紗英がシャツをにぎって泣いていた。

泣いてる場合じゃないよ、と利菜は妙に冷えた頭で考えた。血がみえないこと自体おかしいんだから。

佳代子はおばさんたちの見ている前で、家に電話をした。おばさんはひどくどなっているようだった。片桐は新治のためにサンダルをもつてきてくれた。新治が履こうとしないので、おばさんたちはふしぎそうに顔を見合わせた。新治はソックスに血がついたままだったし、そんな足のまま履き替えるのはいやだったのだ。達郎が肩を揺するが、新治はがんこだった。真つ赤なソックスをむきだしにして、つつ立つたままでいた。

「わたしはじいちゃんに来て欲しい」ふだん大人しい紗英が意見を言った。みんなおなじ気持ちだったが、寛太郎は免許をもっていない。「トラクターでくんのか？」達郎が訊いた。みんなは暗い顔をしてだまりこんだ。

利菜が、「そんなの陽がくれちゃうよ」とぼそりと言うと、佳代子はぱつと顔を上げ、目をまんまるにみひらいた。利菜はときどき佳代子の笑いのつぼをついた。彼女は寛太郎が耕耘機をこごとく言わせながら夕陽にむかつて走るさまを想像したのだ。佳代子のおかしみはみんなに伝染したようで、友だちは笑い声こそ上げなかつたが笑顔をかわすことはできた。

利菜は言つてよかつたなと思つた。なんでも、言つてみるもんだ。「中に入って待つてる？ お茶でも入れるわよ」

と片桐が訊いたが、達郎は断つた。断るなんて変だけど、六人だけで話をしたかつた。だから、「河原に降りたい」と言つた。「あ

まり迷惑になるといけませんから」

へんな言い訳だけど、こどもたちは他にうまい言い訳を思いつかなかった。

九

おばさんたちについたうそのなかでこれだけは本当だった。子どもたちは道を渡って河原に降りたからだ。鮎掛けのおじさんはまだ川にいたが、子どもたちからは遠く離れていた。河原で遊んでいた明朝が、うそみたいに利菜には思えた。

新治は草原を走っておりたとき、足の裏をけがしたようで、びっこをひいていた。寛太と達郎が手をかした。手すりをつかみながら階段をおりると、ステンレスの棒には赤い筋が残った。

河原には丸石がころがり高い葦が生えていた。川岸は菱形のコンクリートブロックがみっしりと積み上げられている。子どもたちは砂浜までいった。達郎は血まみれのシャツを慎重に脱いだ、佳代子が「あつ」と声を上げた。達郎の背中が絵の具を塗ったみたいに赤くなっていたからだ。達郎の顔はますます重く沈んだ。体についていたなんて、シヨックだった。

達郎たちが手を離すと、新治は力つきたように尻をついた。達郎はTシャツを浜に落とし、新治の靴下を脱がせにかかった。寛太もシャツを脱いだ。達郎は新治のそばにかがみこんだまま、顔も上げずにシャツを指さし、「みんなには見えてるか？」と訊いた。五人は首を縦にふった。

「おばさんがきたら、見えるかどうか訊かないとね」利菜はぶっきらぼうに答えた。彼女は自分の母親に来て欲しかったが、三津子は免許をもっていない。いつしよにきてと頼めばよかった。「おばさんなら見えるかもしれないよ」

佳代子が訊いた。「なんて訊くのよ。みんなには見えないみたいだけど、母さんには、わたしの服についた血が見えるって？ そんな

なこと訊けないよ」

「こう言えはいいのよ。新ちゃんの傷口にさわっちゃったんだけど、服に血がついてないかって。そんなのつけて帰ったら、母さんに絞め殺されるからね」

利菜が言つと、みんなはまた黙った。空気も黙った。子どもたちは達郎が首を絞められかけたことを思い出していた。利菜が達郎を見ると、首の辺りを恐ろしげに撫でていた。寛太は帽子をとられたから、坊主頭をむき出しにしている。

佳代子が言つた。「そんなの変だよ。自分で見ればわかるもん」
「訊かないよりましたよ。佳代ちゃんは黙ってていいよ、あたしが訊くから。あとでおばさんにあれこれうだうだ訊かれても困るしね」
嘘がばれてぶたれても困るしね、と利菜は思ったが、それは口にしない。

「あんだだつたら、ふだんからおかしなこと言ってるしね」

佳代子にはやつと笑つた。達郎もにやつと笑い、紗英もにんまりした。寛太と利菜もにやりと笑みをもらしたが、新治は笑わなかった。彼は急に残つた片方の靴をぬぐと、川にむかつて放り投げた。靴は川面にぶかり浮いて、みんなが見ているなかを流れていった。

「いいの？」と佳代子がためらいがちに訊いた。

「いいんだ」と新治は答えた。「もういらない。片足しかないし、もう履きたくない」

「後で怒られるんじゃない？」

「いいんだ」

「あたしもこの靴捨てたい」利菜は座りこんだ。靴のかたつぽを脱いだ。靴底には赤い染みができている。靴は布製だったからまわりから染みこむのは仕方ないにしても、厚いゴム底を通してどうやって染みこんだのかがわからなかった。利菜は赤くなつた靴下にも目をとめた。彼女はうんざりして靴を落とした。「もう履かないにしてもさ、下駄箱にあるってだけで気になるもん。でも、靴が減つたら、母さん怒るだろうな」

「わたしもそんなことしたら怒られると思う」

紗英がまた涙目になった。

「二人ともお小遣いは？」佳代子が訊いた。みんなは佳代を見た。

「バザーで、安い靴を買おうよ。それで、みんなで交換したって言うの。どうかな？」

「サイズはどうすんの？」そういえばみんな違っている。

「いっしょだったってことにすればいいじゃん」

「どのみち怒られるよ」

利菜は情けなさそうに言ったが、このときはそれがいちばん現実的な方法に思えた。もう考えるのも億劫だった。

達郎が新治に顔を向けた。面と向かって話し合うのは久しぶりだ。「新治、足出せ。おまえ、靴下だけで走ったから、傷がいつぱいできてる」

「そういえばさ」佳代子が思いついたように言った。「おばさんたち、新ちゃんの靴のことは、どうしたのかって訊かなかったね」

「見落としたんだよ。気づかないときだってある。靴の心配なんかすんな」

達郎は、新治の足首をもった。達郎はハンカチをぬらして、足の裏をそつと拭いた。新治はぼろぼろと涙をこぼした。

達郎が訊いた。「痛むか？」

「痛まないっ」と新治は言った。

寛太は靴をぬぐと、ズボンの裾をたくしあげた。彼は川に入り、いきおいよくシャツを洗いはじめた。川の水が赤くなった。佳代子と同じように川岸で達郎のシャツを洗った。利菜と紗英は、新治のシャツを脱がした。新治の傷は意外に深く、足は赤く腫れている。達郎がその足にハンカチをまきつけた。利菜と紗英は自分たちのハンカチもさしだした。

みんなは作業の間、口もきかずに黙りこみ、むつつりと考えこんでいた。寛太はシャツを洗ったが、血糊は落ちなかった。半ズボンにまでしみこんでいたから、寛太は風呂につかるみたい川のかな

であぐらをかいた。

佳代子はみんなの方をみる、川面から光が照りかえる、彼女の髪は水で濡れていた、佳代子はいつもより美人に見えた。彼女は、みんなが考えていることを、率先して口にした。

「みんなはどう思ってるのよ。あたしたちがおかしいんだと思う？ あいつは確かにいたし、新ちゃんも靴をとられたし、寛ちゃんも帽子をやられたじゃん。でも、今でも信じらんないよ。血は見えるけど……」

佳代子は腰に手をあてて、傲然と立ちながら鼻をすすった。

「わたしも、あんなのうそみたいに思ってる」利菜が言った。

「でも、この血はうそじゃないよ」紗英は新治の体を拭きながら言った。達郎はもらったタオルで体の血を落としはじめた。彼は「なめ太郎は先生の作り話だ」とぼつりと言った。

「わかんないよ、そんなの」利菜は靴を水につけ洗い出す。「わたしたちがあとで訊きに行ったら、あの話しうそでしょって言ったら、先生否定してくんなかった」

「でも、朝になったら、ばかばかしいって思ってたよ」紗英が言った。「あんな話信じるなんて、どうかしてたと思ったもん」

「俺はあいつのことこじきだと思っよ」

と寛太は言った。

「だとしたら、とんでもないこじきだね」

と佳代子は言った。

正直言っつて、こうしていつもの河原に降りてみると（しかも、こつもさんと陽の光のふりそぞく川面に立ってみると）あんな体験が信じられなくなった。うそみたいに、ばかばかしく思えたのだ。体についた血さえなければ、子供たちはうまい言い訳を思いついたにちがいない。

「この話も、明日になったらうそみたいに思えるといいのに」

佳代子は水音をならして川から上がった。寛太も腰を上げた。

「思うにきまつてるよ」利菜が言った。彼女は大きな丸い石の上に

腰をおろした。「靴も服も捨ててさ。それでこのことはもうなし。両神山にも、わたし行かないから。行きたくなってもさそわないでよね」

佳代子は利菜の正面に立ってほおをふくらませた。「行きたいなんて思わないよ。わたしは帰って休みたい」

「みんな、家に帰るつもり？」紗英が不安げに言った。「わたし、一人部屋でしょ。家には母さんしかいないし。それにあの家……」

「空き部屋が多いよね」と佳代子があとをついだ。

「うん、こんなこと言うとはかにされるかもしれないけど……」

「するわけないよ」佳代子はぶつきらぼうに言った。「あんな目にあつたあとなんだよ」

「うん」紗英は素直にうなずいた。「昼間はがまんでできるだろうけど、夜はだめだと思うんだよね。ぜったい眠れないし、音がするだけでも怖いと思う」

紗英は黙った。利菜が口をきいた。

「寛ちゃん泊めてくんない」

利菜が挑発するみたいな目で見たから、寛太はどぎまぎした。「うん？ いいけど」

「みんなも泊めてもらおうよ」利菜は立ち上がると、みんなに訴えた。「わたしはじいちゃんがいるだけでも安心する」

「じいちゃんは妖怪に詳しいからな」

達郎が力なく答えた。いままで張りつめ通しだったから、急に気が抜けたみたいだった。

「でも、訊ける？ あのこと話すの？」利菜がきいた。

「じいちゃんなら、きいてくれるよ」達郎は投げやりだ。寛太郎がなんとかしてくれると思うと、ようやく肩の荷が下りた。「おれ、リトルがあるしさ。大会だって近いから、いつまでも気にしたくないんだ」

「気にしたくないってなにっ？」佳代子はきつと言った。「気にしなきゃすむのっ？ あれはなんて言おうと、なめ太郎だったっ」

「そんなことあると思うか？ そんなもんいると思うか？」

達郎は佳代子の目をのぞきこんだ。おまえ正気か？ と訊きたがっているような視線だった。でも、達郎はリトルのキャプテンだったしみんなの兄貴分だ。そんなことをいうほど意地悪ではなかった。「でなかつたら、あたしたちみんな頭がおかしいってことだよ」と佳代子は言った。「なめ太郎がいらないなら、こどもにだけ見える血もあるわけない」佳代子は達郎にシャツをむけた。「このシャツも捨てないかね。母さんが来たら、濡れてるいいわけもしないといけない。自転車だつて洗わないと」

「大忙しだね」

利菜は川をみながら、ぼんやり言った。こんどはだれも笑わなかった。寛太が川から上がってきた。

「山まで大人についてきてもらうか？」達郎が拳手を求めるようにわざとらしく手を挙げた。「たしかめにもどるか？」

「ぜつたいいやよつ。あんなともう行きたくないっ」

紗英がアゴを膝につけた。すねたみたいにくれつつらになった。寛太が、「でも、国村つて人の声したろ？ほんとに怪我してたらどうする？」

「それはなめ太郎が真似したんだよ」利菜が答えた。

「なめ太郎なんていないって言ってるだろ！」

達郎が大声をだした。寛太は誰かに訊かれなかったかと周囲を見回した。紗英は顔を伏せたまま泣き出した。佳代子は紗英の肩をだし、非難するように達郎をにらんだ。

「おまもりさまに近づいた子がいつてたこと、あれうそじゃなかったんだよ」と利菜は言った。「気がつかないうちになかに入ってたって言つてたもん。大人にはいいわけすんなって怒られたらしいけど……」

「もういいよ」

新治が言った。小声だったが、静かな落ちついた口調だった。みんなは黙った。

達郎はがまんをしてシャツをきた。「自転車を洗おう。新治、シャツを着ろ」

「いやだよ」

「いやでも着ろ。シャツは兄ちゃんが新しいの買ってやる」

達郎はシャツを丸めると新治の頭にかぶせた。彼が背中をさしだすと、新治はおとなしくかぶさった。寛太もだまってシャツを着た。六人は達郎を先頭に階段をのぼった。階段の上になにかが待ち受けているような、それは慎重な足取りだったのである。

十

登美子は娘の電話を自宅で受けた。今年生まれた伸子と、アパートの一室で、蒸し暑さに呻吟しながら寝息をかいていたところだった。彼女はホステスをやめていたが、妊娠のせいでパートもやめ、生活は苦しくなっていた。結局夜の仕事を再びはじめていた。五人の子供を抱えていたが、伸子以外は遊びに出ていない。寝ぼけ眼でいらいらしながら電話に出てみると、かけてきたのは佳代子で、両神山まで迎えに来て欲しいという。

「冗談じゃないわよ！ 両神山に行くなんて聴いてないじゃない！ あんたなんでそんなところにいるの！」とがなりたてたときには伸子は悲鳴のような泣き声を上げていた。「聴きなさいよ！ 聞いているの！ 伸子が泣いてるじゃない！ あんたのせいよ！」

佳代子はおごめんなさいと言った。娘はもう半泣き声だ。「あんたはなにもわかってないわよ。母さんがどれだけ苦労してると思っているの。今日だって夜から仕事なのよ。眠らないで母さん平気だと思ってるの」

登美子の声も怒りで震えていた。娘は、ごめんなさい、だけど、おまもりさまで男の人にさわられて、と言った時点で泣き始めていた。泣いたらどうにかなるの、登美子は思った。腹はかんかに立っていたが、娘の言う、男の人というのは気になった。最近町で殺

人犯が横行しているのは、彼女も知っていたからだ。

「他の子はどうなのよ？ あんた一人でいったんじゃないわよね」

「寛ちゃんたちもいる」

「その子たちの親はどうしてるのよ」

さぞ立派な親がいるんでしょうよ、あたしなんかじゃなくてね、その親に迎えにきてもらえばいいんだ、という言葉が熱い怒りとともに胸をかけめぐって頭まできた。

「寛ちゃんの親はパートに出てるし、利菜の母さんは車に乗れないもん」

寛太の父親はすでに死んでいた。紗英の親は不仲だった。母親の耳には入れたくないはずだ。そのことを思うと、登美子も少しだけ溜飲が降りた。娘の思い通りに動かなければならないのは屈辱だったが、運が悪いのは自分だけではないのだ。

「わかったわよ。行けばいいのね」

娘はみんなとあたごにいとると言った。それは幸い。と彼女は返事もせず電話を切った。佳代子のやつ、あたしを呼んだことを後悔するといいい。痛い目をみせてたつぷり恥もかかせてやる。

登美子はトラックにのりこむと、ドライブイン愛宕を目指した。

伸子は利菜の母親、三津子に預けてきた。三津子は同じ県営マンションに住んでいた。三津子は乳こそ出せないが、伸子が馴れていることと、一人育てた経験を買った。

伸子を産むと、マンシヨンの女たちはあちこちで彼女の噂をするようになった。噂をしていなくなるのと、登美子はそう感じた。風みたいに吹き回っているわよ、と三津子にこぼしたこともある。伸子というのが、流産した三津子の赤ん坊の名前だとは知っていた。だが、三津子は臆病な小心者で、伸子という名前を付けると言い出したときも、ろくに反論できなかったのである。最近宗教にはまっているようだが、どうしようもないばかりだと登美子は思っていた。もったも、怒り出すと金切り声でわめきちらし、どんなに相手がわ

びようと死ぬまで許すものかという気質の登美子にかなうはずがない。宗教をはじめから二度ほど反抗のきざしも見せたが、登美子のマグマみたいな烈気と早口にやり返されてからはとんと大人しくなった。赤ん坊に伸子という名前をつけてからというもの、三津子と旦那の仲がうまくいっていないことを聞いて、登美子はうれしかった。あの女だってきつく言わないとだめなのだ。佳代子なら、なおのことだ。

登美子はラジオを切った。娘のことを考えた。佳代子は夏休みに入ってから、少し野放図になっていようだ。寛太家に入入りしだしてからは、ますます目の遠くに行つた感じた。近づくと言つたのに、おまもりさまには近づくなんて言つたのに。勝手ばかりしているくせに、泣きついたところで知つたことではないと思つた。妹の面倒もみないで遊びほうけていることにも腹が立つてきた。結局佳代子なんてぶつたたかないとわからないのだ。

けれど、不安も感じていた。あの子の電話、あの子の声、あの子の調子……。そりゃあ佳代子は恐がりだけど、伸子が生まれてからは甘えたな部分が出てきたけれど（もちろん兄弟がいるときは見せなかつたけど）、それでもあの声の調子は尋常ではなかつた。佳代子と話していたとき、男の声がわりこんだのを聞いたから、よりいっそう不安は高まつた。心臓を毛ずねで一撫するような声。混線なのか聞き違いなのか、ひよっとすると新治か達郎がなにか話していたのかもしれないが、その声は登美子の胸をかき乱した。山で会つたという男と、まだ一緒にいるのではないかとすら思つた。娘の後ろにべつたりと張りつく奇怪な男の姿が浮かんで消えた。

同時に、登美子は自分に対しても不安を感じていた。頭に血が上ると何をしでかすかわからなかつた。赤ん坊の佳代子の腕を、血がにじむほどひねりつづけたこともあつた。ほんの小さな頃から、佳代子はいらだちのはけ口だった。佳代子は抵抗しなかつたし、なにをしても結局は許してくれたのである。登美子は 基本的には あの子が好きだった。佳代子だって母親を愛していた。憎しみの

目を向けてくることはあるが、根っこにあるのは愛情だ。それに登美子はこう思っていた。はたくのはみんなが言うような悪いことじゃない、教育のためだ。あの子をしゃんとさせるため、（彼女の祖父の言葉を借りるなら）やいとを据えるにすぎない。だけど、頭に血が上りすぎると、自分が大人であの子がごどもであることを忘れて力を入れすぎてしまう。何度も何度もたたいてしまう。あの子が口から血を流したりすると、さすがに彼女もはつとなる。やいとを据えるのはいい、だけど据えすぎてやけどを負わすのは考えものだ。そんなことになったら、隠すしかないか。ドライブインに行くことになったとき、利菜の母親は同行を申し出たが登美子は断った。やいとを据えるのはいい。だけど人に見せるのはかんがえものだ。

弱味はみせるべきじゃない。

そんなわけで、早朝に佳代子が自転車でおった道をトラックでたどる間も、登美子は目がくらむほどに怒っていた。やいとを幾度となく見つめてきた利菜ならば（登美子はちっちゃな子供になら、やいとを見せることも気にとめなかった。どうせなにもできやしないのだ）、おばさんの顔から火が出てるといったことだろう。

車はあたごに続く峠の道にさしかかった。両際に山が迫った。なんだか伸びがないわね、と思っっていると、ギヤが四速のままだった。登美子は、落ち着け、と自分に言いきかせる。クラッチを踏み、ギヤを五速に入れる。車は佳代子の言う「このケートラ限界速度」に達した。登美子はどうやって佳代子にやいとを据えるかで頭はいっぱいだった。やいとのスエカたなら山ほど知っているのだ。佳代子のやつめ、身をもって知るがいい。

「両神山で、おかしな人だつて？ そんなの訊いたこともない……」
登美子は頭に血を上らせていたから、直前になるまで鹿が道の真ん中に飛び出していることに気づかなかった。彼女はブレーキを踏んでハンドルを切る。車はななめにかしきながらズルズルと滑る、タイヤのすれる感触があつたかと思うと、登美子の体は宙に浮いた、

額側面を体ごとガラスにうちつけ、足がブレーキペダルを離れ、車が制御できなくなる。

登美子は恐怖を感じた。

車がとまった。エンジンが切れ、焼けたゴムの臭いがどつと彼女を取り巻いた。登美子はシートにうずくまり額に手をやる。視界がかすみ、状況はぼやけている。

彼女は確かにはねたと思ったが、鹿は道の中央にいた。逃げもせず。視界がはっきりしてくると登美子はドアを開け足をおろした。ぴちぴちのジーンズにおおわれた膝ががくりと折れ曲がり、彼女はドアによりかかる。ハンカチを取り出しこめかみにあてがったが、血は流れていなかった。鹿と目が合うと、なぜか佳代子の顔がちらついた。

登美子は猛然と怒りがわいた。

鹿は二本の角を生やし、堂々とした体格ですつくと四つ足をついている。登美子は車にもどって撥ね殺してやるうかと思っただが、牡鹿の目に射すくめられて動くことができなかった。それにその牡鹿は彼女の背丈ほどもあった。

鹿はひづめをならしながらさらに寄ってきた。

「何おまえ……」

登美子は苦痛に声をにじませる。声には熱い怒りもあったが、同時に恐れも感じていた。

「向こうにいけ」とかすれ声を発しながら、手をふる。路端をみると、林には別の鹿が姿を見せていた。牝鹿もいた。一頭、二頭……林の奥まで無数に姿を見せている。ふいに佳代子の声が「こいつあびつくり仰天玉手箱」と頭にひびいた。佳代子は寛太郎から付け足し言葉をいろいろ教わっていたから、最近よく口にする。登美子はいつも、またばかなことを言っているわねと思っていたが、このときはへんてこな付け足し言葉が妙におかしく感じた。

たしかにびつくり仰天だわね。

空はすでに曇り、風には雨の臭いがまじる。登美子はシートへ

アを額に張りつかせながら向かいあう。樹脂の臭いがぴりぴりとただよい、神経が針のようにささくれ立った。鹿は足踏みをしている。その目がカツと赤く光ったようだった。登美子は佳代子の腕にたばこの火をそつと押しつけたことを思い出す。彼女はやいとを据えるのが好きだ、怒りにまかせて痛めつけるとなにかを支配している気になる、誇らしい気分になった。佳代子の顔を風呂の水に押しつけたこともある、突き飛ばして壁にぶつける、はりとはすのはしよつちゆうだ。拳で殴ったりはしないが、てのひらの骨を（手根骨というのだ）確実にあてるすべは心得ている。一度など佳代子のあごをとらえて脳しんとうを起こさせたものだ。だけど、自分がやいとを据えられている気になるのは久しぶりのことだった。

登美子は言った。「どいてよっ、娘に会いに行かなきゃなんないんだから！」

だが、ぴくりともしなかった。鹿の目からは本能以外の意思のようなものが感じられた。登美子はその目の奥に鹿とはよべない巨大な何かを感じた。登美子はそれを恐れ、車内に手を伸ばすと、助手席の週刊誌をとってなげた。女性セブンは、紙の音をならして鹿の手前に落ちた。そいつはみじろぎもせず、彼女を睨みつけた。登美子はそんなばかなとつぶやき、自らの心に浮かんだ、考えとも感情とも感覚ともつかないようなものを否定してあとずさりをする。踵がなにかを踏んだ、やわらかな物体が靴底でねじれるのを感じ、登美子はきーきーという耳障りな悲鳴を訊く　ネズミだった。道の両脇には鹿だけでなくありとあらゆる山の動物たちが姿を見せている。

「なんなのよ……」

登美子が鹿に目をもどすと、黒々とした大きな目が津々と腹に迫る。もうがまんでできなかった。登美子は車内に戻ると、勢いをつけてドアをしめた。

「どけっ」

クラクシオンをならす。

「どいてよー！」

鹿は像のごとく動かなかった。脇の動物たちが出てこようとして、登美子の全身から血の気が引いた。身に迫るような冷や汗が出た。

「かつてにしろっ」彼女はギヤをニュートラルにし、エンジンをかけた。「牽かれて死ぬまでそこにいればいいんだっ」

車体が震え出すと、少し勇気が出た。車をバツクさせ、反対車線にはいると、牡鹿を迂回していった。登美子は脇を通りぬけるとき、その鹿をじつと見つめた。

鹿はまったく動かず、こちらを見向きもしなかった。

「ばかやろっつ……あぶない、うんとあぶないよ」

登美子は肩越しに振り向いた。鹿は背を向けて立っている。誰か別のやつに轢かれりやいいのに、と彼女は願う。帰り道でも立っているような、そんな気さえした。

佳代子にやいとを据える気分はなくなっていた。

ケートラをがたつかせ、ギアをトップにあげる。道を急いだ。「このケートラ限界速度」には、もうおかまいなしだった。

十一

あたごからはすっかり人氣がひいていた。雲がでて、いやな天気になった。日差しがひいた、風は冷たかった。男の子たちは鳥肌をたてた。シャツがすっかり濡れそぼっていたからだ。彼らは近くの小川で自転車を洗ったが、草の汁をつかったり、たわしを借りてこすったりしたが、乾いた血を落とすのは簡単ではなかった。その血糊は山での出来事が嘘じゃないよと告げているかのようでもある。子供たちはしきりに山の方を気にしたが、林からのぞく人影は見えなかったし、誰かの呼び声は聞こえなかった。とりあえずは。

母親をよびたがったのは佳代子なのだが、彼女は時間がたつほどに不安を覚えるようになった。母親は夜の仕事を再開していたが（ホステスよ、と佳代子は利菜にだけ打ち明けたことがある）その仕

事が好きではなかった。登美子は派手好きだが、社交的な性格ではなかったからだ。そのせいでこのところははずっといらいらしていた。母さんのことは好きだった。でも、佳代子は母親が怖かったし、見られるのも恥ずかしいようなことがたびたびあった。母さんのことを思うときどき不安になる。みんなの前でひっぱたかれることを思うと、身が締めつけられるような気持ちになる。利菜と紗英にはそんな姿を何度か見られたことがあった。母さんにたたかれるのは慣れていない。でも、同情されるのにはいつまでたっても慣れることができない、自分がかわいそうな奴、惨めな奴なんだと思えてくるから。なによりも母親のことを憎む気持ち……そんな感情をもっていることを知られることが怖かった。佳代子はときどき自分が悪いのか母さんが悪いのかわからなくなる。登美子は感情的だから他人を納得させるような論理的な言葉で話すのは苦手だったが（言っていることが、ろくすっぽわけがわからず矛盾もしていた）、佳代子は子供だったし、勢いと不屈の闘志でへし折るやり方がよく利いた。それに母さんだつて怒らないでいるときは、普通にできる。普通の人みたいに見える。だから、自分が悪いのかなと佳代子は思うのだ。母さんを怒らせてる、あたしが悪いんじゃないのかと。

登美子のことを不安に思ったのは利菜と紗英も御同様。今ではなめ太郎よりもおばさんの方が怖いぐらいだ。だから、店の食堂に座って迎えを待ちながらも、駐車場に入ってくるトラックの姿を見かけたときは、女の子たちはいつせいに緊迫したのだった。

店の外では片桐が待ちかまえていた。登美子がトラックを降り、片桐と話しはじめた。赤川と小谷も出ていった。利菜たちはその様子をガラス越しに眺めた。達郎が振り返り、みんなのシャツをまじまじとみた。一生懸命洗ったつもりだが、血糊はうすく残っていた。彼が出ようか、という意味をこめてうなずくとみんなもうなずいた。一同は連れだつて自動ドアをくぐった。

子供たちが表に出ていくと、登美子がさつと顔を上げた。いくぶん青ざめた顔だった。利菜は引きつった赤ら顔を想像していたから

面食らった。怒りくるっているというよりは、泣き出しそうな顔に見えたからだ。登美子は娘と目を合わせたが、すぐに片桐に視線を戻した。怒っているときは、相手の話なんて聞かずにまくしたてるのに、今は真剣な表情でうなずいているだけである。不気味だったか（あのおばさんが考えていることがわかる人なんているのだろうか？）、おばさんが自分たちを無視したことで利菜はすっかり気落ちした。電話の対応でおばさんが怒っているのはわかっていた。でも、登美子は自分たちのシャツには少しも注意を払わなかった。「見たでしょ」と利菜は顔をゆがめて達郎を見た。「おばさんこっちに来もしなかった」

達郎は無言だった。少し引きつった顔で登美子を見ている。

「血が見えてたらさ……」利菜の言葉をさえぎって、紗英が振り向いた。「でも、薄くなってる。みんなよく洗ったから……」

「みなよ、これっ」利菜が寛太のシャツの肩口を、むなぐらを掴むみたいに持って持った。「ぜんぜん落ちてないよっ。液体ハイターだって利くもんかっ。おばさん、こっちに来なかった、ぜんぜんあわてなかった。見えてないんだよ」

みんなは口ごもった。紗英はまた半泣きになったが、利菜は気にしなかった。

「訊かないの？」佳代子が口を利いた。彼女はぼそりと言ったから、利菜にはよく聞こえなかった。

「えっ？」

利菜が訊き返すと、佳代子はぐっと唇をひきむすんでみんなを睨んだ。「訊かないのって言ったのよ。訊かないつもりなわけ？ あんた言ったじゃんかっ、母さんに血が見えるかどうか訊くつもりだつて。新ちゃんの傷にさわっちゃったけど、シャツに血がついてないかって、そう訊くんでしょ？」

「訊くよ」と利菜は言ったが、訊く気がないみたいなぶつきらばつな言い方だ。

「訊かなくていいよ」紗英はつつむきシャツの裾をにじくっている。

利菜はむきになって言った。「なんで？ 訊かなくて平気なの？ わたしにはちゃんと見えてるのに、他の人には見えないって、そんなことって……」

彼女は黙った。金魚の食事みたいに口がぱくぱく動いてる。

佳代子が渋い顔で、「なに？」と訊くと、利菜はようやく言葉のえさにありついた。

「ふしぎじゃん」

すると、みんなは笑いだした。利菜がまた突拍子もないことを言い出すと思っていたのに、返ってきたのは普通の答えだったからだ。利菜は、なによという顔でみんなを見回したが、やがて一緒に笑い出した。大人たちが注目をした。

おばさんたちは警察には電話しないことに決めたようだった（きつと大事にしたくないのだろう）。そんなふうな話が聞こえた。

「みんな黙れよ」達郎はまだ笑いながら言う。「ひよつとしたら、おばさん、血だと思ってないのかもな」

「ほんとに？」佳代子が訊いた。

「ああ。おれたちが大けがして血まみれだったら、まわりはひどい騒ぎになってるだろう？ ただ汚れてるだけだと思ってるんじゃないのかな？」

「そうだね。おばさんただの汚れだって思いこんでるのかも」利菜はまるで信じてない調子で追従した。

登美子がこつちに歩いてきた。

「おかあさん……」

佳代子は抱きつきたそうにしたが、みんなの前だし、足踏みをして我慢をしている。

「みんな……」登美子は一同に視線をむけ、それから平手打ちの代わりに娘の肩に手を置いた。あの鹿の目を思い出すと、なんとなく娘に手を上げる気はなくなってしまった。「佳代子なにがあったの、誰になにされたの？」

佳代子は鼻をすすって答えた。「なにもされてない。ちよつとさ

わられただけ」

「どこを？」登美子は言った。真剣な目で、みんなはなんだか怖く
なった。

達郎が答えた。「ほんとになにもされてないよ。そのおじさんが、
新治におどかさようなこと言ったから……」

「どんなことを？」

「おれはジフテリアだって」

と利菜が言った。彼女はジフテリアがどんな病気か知らなかった
が、言葉だけは知っていた。利菜はこの手の作り話は一番うまい。
達郎は一人で筋書きを考えていたから、苦い顔で目を閉じた。

「ジフテリアだから、さわるとうつるんだぞって言ってた。その人
すごい汚かったから、みんなそんなとき信じちゃってさ」

赤川が、「ジフテリアだって？ そんなもんにかかっているやつが、
のこのこ歩いたりしてないよ」口をはさんだが、みんなに（特に達
郎に）睨まれ引きこんだ。達郎がぐるっと振り向き、ぎよるぎよる
目玉で「おまえら黙れ」の合図をした。しかし、みんなの口はとま
らなかった。

「新治は転んで靴が脱げたんだけ」と寛太が言う。

「ぼく、もうあの靴いらなと思うって捨てちゃった」新治が言った。
「あたしたちあの人押しの手しようとしてさわっちゃって」佳代子が
言うのと、「寛ちゃんたち服まで洗ってんの」

利菜がせせらわらうと、佳代子が振り向き目配せをした。目玉を
ぐいぐいと、二度ほど利菜の方に送るまねをした。あの話、あの話
とその目は言っている。

利菜はあらかじめ用意した言葉を嘘臭く聞こえないよう注意して
しゃべり始めた。「新ちゃんが転んだとき怪我してさ。あたしそこ
にさわっちゃったから……」利菜は血のついたところを探した。彼
女はそこを洗わなかったから（おばさんに見せるためにがまんをし
た。そのがまんは涙ぐましかった）血液は分厚くのこっていた。

「おばさん、ここに血ついてない？ 汚したのばれたら叱られる。」

みつちゃんに」

みつちゃんと言うのは利菜の母親三津子のことだ。みんなからそう呼ばれている。

「わがままぶつこいて買ってもらったやつだもんね」

佳代子は期待するみたいに母親を見つめた。ここにあらずの声だった。登美子は服に目をこらしていたから、娘の視線に気づかない。「なにもついてないわよ。ついてたって、みつちゃん怒ったりしないわよ」

「ほんとに、ほんとについてない？」

「ついてないわよ」登美子はぶつきらぼくに言うと佳代子を脇に立たせ頭を下げさせた。「ほら、みんなお礼を言って。どうもありがとうございました」

みんなは内心の動揺を隠して、ありがとございましたと言った。利菜は達郎が手を貸すまで頭を下げたままだった、紗英と新治は利菜の服を　血の付いたところを　じっと見つめた。寛太は両神山の方を見張るみたいに目をこらしてる。

血は付いてる……利菜は服を見下ろし確かめた。訳がわからなかった。みんなでふざけているのかと思った（そんなはずはないけど）。ついてるもん、見えないはずあるもんか。彼女はむきになった。紗英を見ると、みんなは不安げに顔をしかめている。見えないはずがあるもんかと彼女は思った。

「悪いことをしたわけじゃありませんから」と片桐が答えるのが耳に入った。

「とんでもないお仕事のおじやまをしまして」

登美子が佳代子といっしょにまた頭を下げた。利菜は意を決して、寛太からタオルを奪い取ると、登美子の服をひっぱった。「おばさん、これ」

「なに、利菜ちゃん？　後にしてよ」

「このタオル、この店でもらったの」利菜はよく見えるように登美子の目の高さに持ち上げた。「汚れちゃって返せないから、お金を

払おうと思っただけで、うけとってくれなくて」

おばさんは、利菜の頭をなでた。「あたしからお礼しとくから。みんな自転車はどうする？」

利菜はタオルを手にとりてしげしげと眺めた。洗ったからじつとりとしけっているけれど、血の痕はちゃんとある。佳代子と視線を合わせて、タオルについた痕を確認した。佳代ちゃんには見えてるのに、なんでおばさんは見えないんだろ？

「あとで取りに来るよ」達郎が言った。「おばさん悪いんだけど、寛太の家まで送ってくんないかな」

彼は一刻も早く寛太郎に会いたそうだった。みんなも賛成だ。寛太郎なら筋道をつけてこの出来事にも答えをくれそうな気がしたからだ。

「寛ちゃんの家？ また泊まるの？」登美子は娘を見た。「今日泊まるの？」

「紗英も新治も怖がつてるから」達郎が一同の顔を順に見た。「みんなで寝たいって言ってる」

「母さん、後で達郎ちゃんとき。自転車とりにきてくんないかな」佳代子が控えめに言った。登美子は額に手をあて、「もうっ」とうなった。「みんな、そんな目に合ったときは、家に帰る方がいいと思うよっ」

自転車を取りに来るといふのには登美子はいい顔をしなかった。

佳代子がにらまれたが、みんなの表情は切実だった。登美子は六人の子どもたちじつと見られて根負けをした。彼女は大きく吐息をついた。

「わかった。そう、わかったわよ。でも、達ちゃんは、あたしとまた取りに戻るのよっ」

「わかった」

達郎がつけあうと、寛太が口をはさんだ。

「じいちゃんに野菜もらって、持ってきたらいいよ」

それって名案だ。利菜は内臓が岩になったような気分を考える。

店のおばさんたちだって、お金は受けとらなくても、新鮮野菜は歓迎するにちがいない。

十二

佳代子はおびえて、助手席にのりたがった。説教をされるとわかっていてもそうしたかった。夏休みの後では大きく事情が変わるのだが、このときは友達よりもまだ母親の方を信頼していたのである。他の子たちは荷台に乗った。寛太は服が濡れて寒そうだ。達郎は荷台の後ろによっかかり道の後ろばかり見つめている。新治の足にまかれたハンカチには血がにじんでいる。利菜と紗英はくつきあつて、寒くないように、おっかなくないようにとがんばっていた。紗英ちゃんが寛ちゃん家に泊まりたいって言ったのは、ほんとに名案だったな、と思った。一人で家に戻るなんて最悪だ。

登美子はもうこのケートラ限界速度をだす必要はなかった。人に会って安心したのは、彼女もおなじだったのだ。

両神山を離れ景色がいつもの見慣れた町に戻ったとき、子供たちはようやく安心をした。あのできごとからようやく遠ざかることが出来たと思えたのだ。

だが、数日のうちに、まったく逃れられていなかったことを知ることになる。

結局、林の道でもその後も、鹿は出なかった。

家についた。寛太郎は外出していた。寛太が畑に入り、籠いっばいに野菜をもいだ。自転車を取りに行くついでに、野菜もわたしておこうと考えたのだ。借りはすぐさま返すというのが登美子の信条だった。

登美子が達郎を連れて出かけていった。そのころには黒々した雲が、ぶちまけられたみたいに空をおおった。

利菜は言った。「じいちゃんが、雨で帰ってこれなくなったとし

たらどうする？」

「そしたら、母さんに迎えに行ってもらう」佳代子は意固地になったときの、なにがなんでも口調だった。

女の子たちは浴衣にきがえていた。三人が先をゆずったから、風呂には寛太と新治が入っていた。かれらがぬいだ服は一まとめにして固めてあった。竹のかごに入れて、土間の階段下に置いてある。三人はそれを自分たちの服と合わせて納屋にしまうつもりだった。三人は縁下にすわって外をながめていた。うたは客間にすわってとりこんだ洗濯物をたたんでいる。雨が降るのはまちがいないな、とみんなは思った。寛太の祖母は直観型天気予報みたいなものだった。

「あの服はさ」

佳代子は畑を見つめている。今に雨が落ちて、キャベツを濡らすだろうと彼女は思う。彼女はきっぱりした口調で言う。利菜と紗英は耳をすます。

「捨てるにしても、どこに捨てるかが問題だと思っただ」

利菜はポリ袋に入れて捨てるところを想像していたから驚いた。

「じゃあ、どうすんのよ？」

「わたしは埋めるべきだと思う」紗英が言った。

「穴を掘んの？」

「穴がないと埋めらんないよ」と佳代子は言った。「ときどきあんなの脳みそこそ穴ぼこだらけじゃないかと思うね」

三人はにやりと笑った。

「大森神社がいいと思う。神社なら安全だと思わない？」

佳代子はなにに対して安全なのかは言わなかったが、利菜も紗英も納得をした。佳代子の言う通りだった。人の血がついた服を、粗末に扱っていいはずがない。

「でも神主さんが許可してくれるかな？」と利菜は言った。

「許可はとらないよ」

「でも、前も穴掘って叱られたじゃん」

「あのときは秘密基地なんてつくろうとしたからだよ。穴にビニールシートもかぶせてあったしね」

「もうしませんって約束したじゃん」

「穴を掘るけど、ちゃんと埋める」と佳代子。「でも、うんと深く掘る」と言った。「犬が掘り起こしたらどうする？」

利菜と紗英はその光景を想像した。二人は顔を見合わせたか、怖がるかわりに笑みをかわした。固い笑みだった。

「川に流すっていうのはどうかな」利菜が言った。

「いいねえ。このこともついでに水に流したいよね」佳代子はちやかす。

「わたしは反対」紗英が言った。「どっかにひっかかったら困るよ」

「紗英ちゃんの服って高いんでしょ？ 捨てたりして怒られない」

「たくさんあるから。母さんなくなっても気づいたりしないよ」

紗英はぶつきらぼうに言った、会話はしばらく中断した。利菜はこのとき初めて風が出てきたことに気が付いた。嵐にでもなるんだろうか？ と彼女たちは思った。

「たしかに、川に流したらさ」佳代子が言った。「それはそれで行く先が気になるよね。居場所がわかんないのは不安だよ」

「海まで流れて消えればいいのに」利菜が言った。

「それでも、わたしは安心しないと思う」

佳代子は膝を抱えた。顔はまっすぐ前を向き背筋は伸びていた。

佳代子らしい強がりだが、利菜はそんな彼女を見直した。それに、佳代子は正直だった。

「わたしも、あの服がどこにあるかわかってた方がいい」と彼女は言った。

「神社つてのはいいと思うな」紗英もみとめた。「霊は鎮めるもんだって、じいちゃん言ってたもんね」

「それ、肝試しのときの話だよ」

佳代子は右の脇腹をさすった。ちょうど肝臓がある辺りを。度胸を決めるときは、ここが肝腎だぞ、と言った寛太郎の言葉をよく覚

えていたのだ（あとで漢字も教えてくれた）。その部分を叩きながら教えてくれたから、みんなの印象はかなり強かった。そこは夜の墓場で、街灯がじいさんの顔を照らしていた。だからよけい記憶に残ったのだ。

「お寺の本堂にさ……寛太のばかがひっこぬいたっ」と佳代子は風呂場によく聞こえるように言った。「卒塔婆を返したら、あたしはあれで安心したな」

「じゃあ、お寺に持っていったらどうかな？ 祀ってもらおうよ」
利菜が名案だというふう佳代子をゆすった。

「説明すんのがめんどうだよ。他人の耳に入るし。なめ太郎なんて、名前も出したくない」

「じいちゃんならわかってくれるよ」

「どうかな」佳代子は疑った。「あたしはさ、この話もう誰にもすんのいやなんだよね。あたしたちの胸にしまっときたい。そんではやく忘れたいわけよ。わかる？」

二人にはわかる気がした。

「じいちゃんにだけは、なめ太郎の話はしようと思う。でもだよ。じいちゃんにも見えなかつたらどうする？」

それは重大なことのような気がした。

「それっておしまいだと思うな」と佳代子は会話を締めくくった。子どもたちは、タオルを服とわけ、仏間にしまっておいた。寛太郎に見せるためだ。

利菜は、「国村さんのことはどうすんのよ？」と言った。とつぜんだったから、紗英と佳代子にはなんのことだかわからなかった。「なに？」

「国村さんのことはどう話すの？ ひよつとしたらさ……」
利菜は国村が怪我をしているところを想像したが佳代子が、「いま、ひよつとしたら訊きたくないよ」と言つて遮った。

「でも、連絡はとつてもらった方がいいよ」紗英が言った。「電話してもらつてさ。あの人元気であるってわかつたら、わたしは安

心するもん」

佳代子はうなずいた。「同感だね。でも国村さんって、どこに住んでんの？」

「二宮町の方じゃない」

利菜がいうと、佳代子もうなずいた。「この町ではないと思うな」そのとき、風呂の戸ががしゃんと開く音がして、寛太と新治があがってきた。「上がったぞお、ばっちゃんっ」

寛太がいつもの大声で言ったから、三人は顔を見合わせて笑った。佳代子が言った。「ふりちんだったら、笑えるのにな」

「佳代ちゃんたち、入りなあ」歌が声をよこした。

「ばあちゃんには？」立ち上がった佳代子に、利菜はすばやくささやいた。

「言えないよ。心配するから」と佳代子は答えた。

女の子たちが風呂に入ると、とたんに雨が落ちてきた。最初はばらばらと。やがて烈しく大地をうちだす。寛太の家は風呂場が出張っていて、そこだけはトタン屋根だった。トタンを叩く烈しい雨音を聞いていると、三人は機関銃で撃たれているような気がした。なめ太郎が屋根の上で騒いでいるような気もして、三人は風呂のなかで肩をつぼめた。

結局、寛太郎は雨に濡れて帰ってきた。途中で降られたらしかった。彼が耕耘機を庭にいれ風呂に入っているうちに、子どもたちは話を合わせた。服のことでは男の子たちも同感だった。「もうあの服はおれんじじゃない」と寛太は言った。利菜もその意見に同感だった。今日着ていったのは、お気に入りの一着だったが。さんざん駄々をこねて買ってもらったのに。母さんはその日は一日不機嫌で、翌朝利菜がごきげんとりに抱きつくまで怒ったままだった。彼女はそれでも服が惜しいとは思わなかった。

雨は烈しく、軒下には滝があった。利菜は家のなかに閉じこめられたように感じたし、紗英も佳代子も安心感が減ってしまった。いつまでも風呂にはいるなっ、と、寛太はじいちゃんに怒ったし、新

治は帰りの車を探して、ずっと縁下にいる。

利菜は納屋の中にいる服のことを考えた。ある、のではなく、いる、と考えた。あの服は、証拠みたいなものだった。あのときあったことの。でも、この雨では埋めになんていけない。じきに陽がくれて夜になる。そしたら大森さん（大森神社のことだ）に行くのは明日ということになる。子どもたちは今日のうちに片をつけたかったが、嵐だけはどうにもできなかった。

そのうち、家の私道にはいるトラックがあつて、登美子と達郎が戻ってきた。家の東側は土間になっている。登美子はそのに車をいれた。みんなは自転車をおろすのを手伝った。登美子は寛太の祖母に礼を言つて、佳代子たちには、「おとなしくするのよ」といつものせりふを捨ててそそくさと帰つていった。寛太郎が大の苦手だったのだ。

風呂場からは寛太郎の歌声がひびいてきた。さびれたいい声で唄っている。この人は、詩吟もやれば謡曲もやる。昔は教師だったそうで、子どもたちに朗読もやらせた。彼が長風呂をしているのは、寛太が早くあがれといったからで、その寛太は風呂の釜戸に陣取つて、火吹き竹で、もうもうと火事を起こした。

寛太郎はゆでだこになりながらも、涼しい顔であがってきた。いつもの安っぽいグンゼに、パッチをはいて、白髪頭に湯気を立てている。

雨のせいでいつもより煙が外に逃げないから、家の中は煙たかった。

「坊主、朝日ソーラーがあるのに、なんでわざわざ薪を焚いた」と寛太郎が寛太をなぐつた。彼は男の子の頭をよくこずいたから知らない人を見るとびっくりする。

じいちゃんが寛太の頭を殴ったとき、雨はやや小ぶりになっていた。寛太郎は白髪をタオルでかき上げながら、ぺたりと腰を落ち着けた。子供たちは神妙な顔でじいさんを見ていたから、寛太郎はすぐにみんなの様子に気が付いた。「坊主、山は楽しかったか」

寛太は首をひねった。「いや」

「そうか」

二人は黙った。雨の音がぼつぼつとした。

寛太郎は年はもう七十を越えていたが、座っても背はしゃんとしている、人柄ほどにはくだけていない。子どもでも筋の曲がったやつは許さないという人であったから、寛太以外は正座をしていた。だから、寛太郎はますます山でなにかあったな、と勘ぐった。ぼつちゃんは大事な話があっても、じいちゃんの耳にはあまり入れない。子どもたちは畳んだタオルを、テーブルにおいていた。みんなはそのタオルを見つめる。

達郎はどう切り出していいかわからなかった。じいちゃんなら、どんな話してもばかにしないのはわかってる。だけど、この気持ちをなめ太郎につかまれたときの感触を、わかってくれるかどうかは疑問だ。なめ太郎なんていないと達郎は言った。でも、それはほんとの気持ちじゃない。あのとき、達郎と新治の兄弟だけはなめ太郎につかまれた。二人が感じたのは、純然たる恐怖だ。悪寒の熱波のようなものが体を突き抜ける感触すらした。思い起こすだけでも得たいのしれないおぞましいものが、犬の舌のように魂をなでまわすのだ。あんな感じをおぼえていたら、きつと気が狂うと達郎は思った。それに血まみれになったなんて。血まみれになって、その血が他の人には見えなかったなんて。このことはもう考えたくなかった。あの服も処分して、さつさと忘れてしまいたいと達郎は考えた。彼は年下の子どもたちに対して、いつもあるていどの責任を押しつけられていたけれど、でも、こんなときに正しいもくそもあるんかな？

みんなはそれぞれ不安を抱えていたが、いつまでも引きずりたくないという思いはいっしょだった。寛太郎に話すかどうかも迷った。できれば話したくなかった。両神山では変な人にあっただけだと、うそをつきつづけたかったのだが、それができなくなったのは（つまり正直に話すしかなくなったのは）新治が泣きはじめたからだっ

た。彼は膝のうえで拳をにぎりしめていたが、その手の上にぼたりぼたりと涙が落ちた。女の子のまえで男が泣くなんて最悪だ。だけど、達郎は新治の気持ちがよくわかったから、彼の肩をさするばかりで別になんとも言わなかった。寛太はあぐらを組んだ足を両手でもち、所在なさに顔を伏せた。佳代子はそっぽを向いた。紗英は泣き出した。

利菜も涙が出た。今日一日の苦勞ですっかりくたびれきっていた。納屋の奥の服を思い、なめ太郎のことを考えた、お守りさまのことも考えた。

「じいちゃんあの話、うそなんだ」と彼女は言った。鼻水が垂れた。そいつを吸いこみ、「男の人なんて、ほんとはいなかった。わたしたち、おもりさまのそばまで行った。行ったらいけないって言われてたけど、でも、気が付いたらそばまで行って、そしたら、国村さんの声がした」

利菜は本格的に泣きはじめた。会話がとぎれた。紗英は肩をふるわせ泣いている。達郎も涙はにじんだ。寛太はぐっところえたが、もつと下を向いて涙を隠そうとした。佳代子が後をついだ。「国村さん、ほんとはいなかったのよ。けがしてるから、助けてくれって言われて、わたしたち助けようとしたけど、ほんとは国村さんなんていなかった」

佳代子は泣いた。みんな泣いていた。寛太郎は腕を組んで黙った。みんなのヒステリーが、おさまるのを待った。

「おまえたち、腹はすいとらんか」と訊いた。そういえば、昼飯もまだで、子どもたちは腹ぺこだった。

「空いてる」利菜が小声で言うと、寛太郎は台所のばあさんに「おい飯の支度を頼むぞ」と声をかけた。「それでなにがいた？」

「血が流れてた」と達郎は言った。彼は年長だが、泣けるものはしかたなかった。「そんであいつがいた。おれたちそいつにつかまっただ。うそじゃない」達郎はうそじゃない、というとき、顔をあげてぐっくらんだ。なめ太郎のことはおっかなくって、あいつと

しか言えなかった。寛太郎はぐつとうなずいた。

「でもちがうぞ」と寛太が言った。じいちゃんはなにがちがうんだ、と声に出さずに顔で訊いた。「じいちゃん、ビルマでおっかながった仲間に撃たれたって言ったろ。敵と間違えられたんだろ？ でも、あれはみまちがいなんかじゃぜつたいないつ。みまちがいなら、いっしゅんだとおれは思うけど、おれたちはずつとあいつを見てた」

みんなは寛太の言うとおりだと思った。みんなは見間違いだと思いたがった。でも違ったのだ。あいつは新治や達郎にさわった。寛太の帽子をとった。枝や蔓草だったら、そんないたずらしっこない。こどもたちはみんな心の奥底では気がついていただけけれど、気づかない振りをしていた。それを、寛太は感情を吐き出すのといっしょに言葉にしたのだ。

「あいつつてなめ太郎なんだ。おれたちおまもりさまでなめ太郎を見たんだ。なめ太郎って先生から訊いた妖怪だ。じいちゃん知ってるか？」

「いや」寛太郎は首をふった。なめ太郎なんて知らなかった。寛太郎がなめ太郎のことを知らないと知って、みんなは不安げな顔をしたが、寛太郎がうそをつかなかつたのは、うそをついても見抜かれるとわかっていたからだ。寛太郎は年寄りだがばかではないし、彼なりに子どもを理解していた。

利菜が言葉を選びながら慎重に言った。「妖怪ならさ……ほんとはいないはずなのに……でも、先生の言ったとおりだよ。腹がぼっこり出でて、舌がうんと長くて……」

「汚かった」と新治が言葉を継いだ。そして、熱っぽくまくし立てた。「なめ太郎は垢と泥と血で汚れてるって。先生が言ってたことぜんぶほんとだった」新治の顔に涙と鼻水がたれた。熱い熱い液体みたいなものが胸をふさいだ。彼は胸が詰まってつづきを話すのに苦労した。「おれ、臭いもかいだ。くさかった。あいつの口　牙　がはえてた。あんなの、人間じゃない」

新治の言うことはもっともだった。彼はなめ太郎に引きずり倒さ

れて、下からあいつをじつと見た。血の臭いで、むせかえる喉をこらえ、達郎と寛太を捕まえようとするなめ太郎のことを、誰よりも間近で長く見ることができた。彼の話は詳しく、子供たちの頭に両神山での記憶をよびおこした。利菜は寛太郎の顔を注意深く見た、涙の浮いた目で眉間にしわをよせて。それは子供の目というよりもっと成熟した観察者の視線だったが、その目から見て寛太郎はいまの話に納得しているなと思った。

利菜は少し安心してなめ太郎を思い出した。「髪はざんばら髪で、目玉は黄色かった。腰には布を巻いてたと思う」

「それはおかしいよ。あいつは蔓草のあいだから顔だけ出してたもん、体は見えんもん」と佳代子が涙を拭いた。「でも、ほんととはなめ太郎なんかより、わたしは血が怖かった。新ちゃんたち転んだから、地面に流れてた血で血まみれになった。ちよつとついたんじやなくて、池に落ちたみたいになつたもん」

達郎が静かに言った。「ひどかったよ。あの血暖かくて……」

紗英がとめた。「やめてよ、そんな話ききたくないよ」

達郎はおとなしくなった。

寛太郎が訊いた。「ほんとかい？」

「疑うんだ」利菜が言った。「わたしたち正直にうちあけたのに、疑うんだ」

「疑っちゃおらん。だがねえ……」

「その血、他の人には見えなかつた」また涙がでた。まぶたの裏に水をだす紐があつて、誰かが定期的にひっぱっているみたいだ。「おばさんたちにも、佳代子の母さんにも見えんかつたもん。でも、わたしにはずっと見えてたし、証拠ももってる」利菜はタオルをひるげた。地図みたいに血の染みがあつた。「ここに血の痕がある。わたしたち、これで自転車についた血、ぬぐつた。ピンクになつてるけど、あるでしょ？」

だが、寛太郎は黙つたままだつた。子どもたちのあいだに失望がひろがった、失望の空気が。それはあまりになまなましかつたから、

手でつかめるんじゃないかと思ったほどだ。

「見えない？」佳代子が訊く。

「見えない」寛太郎は腕をくんだままうなりを上げる。ついでにおならをした。

寛太が言った。「やめるよ、じいちゃん」

佳代子はやけっぱちになって言った。「じゃあ、わたしは頭がおかしくなったんだよ。なめ太郎も見えるし、見えない血もみえてる、すごいよねっ？」

「服にも血がついたまんまだよ。見たい？」

利菜が言つと寛太郎はうなずいた。みんなは土間に降り、外にでて、それから納屋の前に立った。雨はまだ降っていて、風は雨より強かった。雨風はぶわぶわとふきよせて、みんなの体にぶつかっている。土の地面と畑の草を叩いている。なすやトウモロコシが風に揺れて、まるで生きているみたいだ。寛太郎は痩せた体をすくくと立て、ガタガタしゃべるシャツターとにらみ合った。みんなは沈黙してその様子を見守った。

やがて長い長い空白の時間が過ぎると、寛太郎は振り向いてみんなをにらんだ。

「えい！」と寛太郎は腹の底からわき起こるような胸間声で、子どもたちに気合いをかけた。「どいつも顔が死んどる。おっかながるな！」

「無理なこというなっ」と寛太が怒った。

「達郎、新治、シャツターをもて、女は後ろにまわれ、寛太は控える」

寛太郎がてきぱきと指示をだすと、固まっていた子どもたちはいつせいに動いた。やたら手慣れているが畑仕事ではいつも寛太郎が指示をだすからだ。

達郎と新治が振り向いた。開けるっ、と寛太郎は言った。二人はがらがらと力をあわせてシャツターをおしあげた。寛太郎は大腿で中にふみこんだ。「寛太、電気をつける。みんな付いてこい」

寛太がシャッターの脇にあるスイッチを押した。裸電球が橙色の光を振りまいた。みんなは固まりあつて寛太郎にひつついた。

「それだよ」佳代子が指さした。納屋の一角は、透明のトタンが窓がわりになっていて、そこから明かりがあつた。服はその明かりの下、カゴに入れて置いてある。靴もいつしよに。みんなはサンダルばきだ。

「こんなところに置くな」寛太郎は子供たちを見下ろしどなった。

「部屋におきたくねえもんっ」と寛太は言った。

「ちがう」寛太郎は怒鳴つた。「こんなとこに置くから妙なもんに思うんだ。いいか、これはたかが服だ。こんなものは、踏みつぶすぐらいの気合をもてっ。わかつたかつ」と言つて寛太を殴つた。「こんなものは、外につるしてしまえっ」

「でも、見たくもないよ。わたしらには血が見えるもん」利菜は言つた。「じいちゃんは見えないから平気なんだ」

「それはちがう。おまえらより度胸があるから平気なんだ」寛太郎は腰に手を当て肚をつきだした。

みんなは考えた。顔を見合せてお互いの意見を確認した。寛太郎に度胸があるのがほんとなら、隠してあるとよけい気になるのもほんとだ。それも納屋なんて薄暗い、あまり人の行かないところにあるとなおさらだつた。

「でも、わたしたち、そいつ、神社の境内に埋めたい。それはいい？」と佳代子は訊いた。

寛太郎はうなずいた。「いいだろう」と言つた。

「みんな、自分の服をもて」

みんなは籠に群がり言われた通りにした。血は八割方落ちていたが、まだしけつている。みんなが服を持つと、達郎が靴下や小物の入つた籠をぶら下げた。

「外にでろ、竹竿にひっかける」

納屋の横には紐で竹竿がつるしてある。洗濯ばさみがかかつていた。そこにばちばちと服をとめた。靴は下に並べて置いた。

「こんな服も着ない。私、靴も捨てる」紗英が言った。新治は半べそをかいていた。雨交じりの風が、こおつと吹いて、子どもたちと服を払った。

「わしには血は見えん。だが、おまえらの見たものは信じる」と寛太郎は言った。

みんなは神妙な顔で訊く。この夏、寛太郎の説法はさんざん耳にしていたから、なにか伝えたがっているのはわかっていた。

「こわがつとるのもわかつとる。わしだって血が流れるのを見たときはおっかなかつたもんだ。だがな、そんなときもおっかながるだけじゃだめだ。えいつ、と、肚を定めてこらえるんだ。そこが肝腎だぞ、肝腎なんだぞ……。いいかつ、腹があがりかけたら、横隔膜をぐつと下げる。呼吸を強く深く吸いこめ。おっかなくたつて筋を曲げるなつ。怖いのをやつつけるぐらいの気合いが大事だ。自分の弱い気持ちをやつつけるんだ。それができれば大丈夫だ」

寛太郎の言っていることは、いつもながらへんてこに聞こえた。使っている言葉も古めかしくて、子供たちにはちよつと難しかった。怖いのが平気だったら、怖がったりしない。だけど、わからないながらも、こどもたちには率直な意見が耳を通った。寛太郎の言葉を借りるなら、頭ではわからなくても肚で（つまり心で）納得したのである。寛太郎は、そんなことはありえないと言わなかった。どうすればいいかという話をした。この老人が大丈夫だとうけおうと、ほんとに大丈夫なような気になった。寛太郎はいつも言っているが、言葉よりも気持ち大事だった。

「さあ、飯にしよう。満腹になればもつと落ちつくぞ」

寛太郎は腕を広げてみんなを追い立てた。

「なめ太郎のことは？ 血のことは？」達郎が訊いた。

「気にするな。わからんことはいつまでたつてもわからんし、わかるときにはわかるんだ。無理をして考えこんではいかんぞ」

と言った。みんなこれには納得しなかったが、納得したふりをした。

一同は雨の降る玄関から、じとりと湿気の漂う土間に行った。寛太家は雨戸を開け放しているから風がびゅーびゅー通り抜ける。寛太郎は、まだ燃えている竈にいくと、鉄の蓋に杭を引っかけて、それを開けた。みんながあつと思ふ間もなく、タオルをほうりこんでしまった。みんなの見える前でタオルはじゅーじゅーと蒸気を放ち、やがて黒くなったかと思うと火がついた。あつけにとられている子どもたちに寛太郎が言った。「なめ太郎がなんだ、血がなんだ、そんなもんを怖がるしみつたれにはなるなつ。達郎、おまえはどうだ？」

「平気だ」達郎が答えた。

「おれ、なめ太郎の顔なぐつた」寛太が言った。「つぎも殴るぞ」男の子たちのうち新治だけはだまつたままだつた、寛太郎が肩に手を置くと、彼はぎゅつとくちびるをかみしめた。「いまだけだ。こわいのだつてみいんな薄れて消えちまう。今、ちゃんとときゃあ、後も大丈夫なんだ。今がこらえどきだぞ」

新治がうずいて涙をぬぐつた。子どもたちはその午後ではじめて息をつくことができた。

居間にあがるとみそ汁と目玉焼きができていた。みんなは熱いのをすすりながら、今後の方針を話し合った。服は明日神社に埋めに行くことで一決した。だから、早めに布団をひいて、蚊帳もつって疲れたからだを休めることにした。寝間着の上に布団を乗せると、ようやく体があたたまり人心地がついた。

「今日は大変だったなあ」

と達郎が言った。夕暮れ時が近づき、雨もあがった。山の稜線には靄がかかった。夕日とその靄をオレンジに染め抜いた。佳代子と寛太は、寝場所の陣取りで叩き合っている。そのうち、紗英が朗読をやりはじめたからみんなもそれに追唱した。寛太郎と歌も蚊帳の中に入ってきた。古い家に、みんなの声が朗々と響いた。

アルファポリス あなたの出資が私を変える

ドリームブッククラブに作品をこの小説しました！

ドリームブッククラブは、読者支援により書籍出版化（紙）を目指す無料読み物サイトです。

掲載期間は90日間。その間に300ポイントがたまれば、出版となります。

予約購入一冊につき1ポイント。出資は一口で五ポイントです。予約購入は一人一冊のみとなっております。出資は一口一万円で、五口まで可能です。なお、出資者には、印税が0.1%、配当金として支給されます。

出資金の支払いは、出版化最終審議通過後となっております。不通過の場合、支払いはありません。特典は、書籍奥付けに支援者として記名（仮名可）。著者サイン本一冊を送付などがあります。

詳細は、こちらです！

[http://www.alphapolis.co.jp/
index|dbc.php](http://www.alphapolis.co.jp/index|dbc.php)

ねじまげ世界からのおねがい。

ドリームブックに登録された作品は、当サイト掲載のものとおなじです。作品を読み、支援したいと思われたかたは、ぜひご購入・出資をおねがいたします！

第三章 石川紗英、抱きつかれる

第二部 おさそい

章前 二〇二〇年 後日

一

佳代子はいつでも電話をかけてこいと書いていたが、高村利菜は数日がたつても、受話器をとる気にはなれなかった。携帯電話を片手に、アドレスを呼び出すところまではいったのだが、電話をかけるには至らなかった。正直、これほど佳代子が必要としたことは今までなかったと思うが、結局は連絡をとらないまま、漫然と日を過ごしていたのである。彼女がついに佳代子に電話をかける決意を固めたのは、五日後、ふたたび悪夢から目を覚ました朝のことだった。窓からは朝の光がカーテンを越してさしかけていた。彼女はその光の筋を眺めながら、無秩序にも思える幻覚にも、ある法則があることに気がついた。幻覚は、彼女が不安や恐怖にさらされたとき、あらわれる確率が高かった。まるで負の感情が、表に形をとってあらわれてくるかのよう。

不思議なことに佳代子からの手紙を受けてからというもの、幻覚や不眠症などの症状は下降線の一途をたどった。睡眠時間が増えはじめ、幻覚はほとんど見なくなった。利菜はこれを、佳代子の手紙の効果なのだと考えた。子供のころと同じで、結局佳代子は自分を救ってくれたのである。

佳代子は両神山で殺人事件があったと書いていた。彼女は記事の載った新聞を探してみたが、古い新聞は捨てており見つからずじまいに終わった。出版社につとめている秀男に訊けば、なにごとかわかるはずだが、手紙のことじたい話せずじまいで、故郷で起こった

殺人事件のことも伝えていなかった。言えばどうにかなったろうか？

あの夏の記憶は少しずつだがよみがえってきた。手紙が記憶の引き出しを探り当てたかのようだ。だが、その引き出しは混沌としていて、のぞき見るのも容易ではない。なにせ彼女自身がおっかなびつくり、その記憶にふたをしようとしているのだ。思い出すことが怖かった。佳代子たちはかなりの部分を思い出したようだが、利菜ときたら、ふとしたことで浮かぶ記憶にも一驚していたのである。

彼女は佳代子たちに会いたかった。会って相談がしたかったし、ことの真相が知りたかったのである。なによりも心配だった。佳代子はいやがらせを受けていると書いていた。誰に？ 殺人事件があり、犯罪が多発しはじめた町で、誰にいやがらせを受けているのか？ 友人の身に起こったこと、起こりうることを考えると、彼女は心配でたまらない……。

なによりも怖いのは、自分の中の変化だった。この一年間は、佳代子はおろか、神保町のことすら思い出さなかった。あの町に関する思考がすべて欠落していた感じなのである。なのに、いまでは故郷に帰らなくてはという感情が、強迫観念にまで高まっている。あの町に、あの山につ。じつのところ、彼女は独りぼっちで取り残されているような、そんな錯覚すら味わっていたのである。

いや取り残されているのはわたしだけじゃない。紗英もだ。あの子も神保町にはいない。

だが、その事実は少しも気休めにはならなかった。彼女はなるべく論理立てて考えようとしたが、理屈では割り切れないことがいくつもあった。第一に記憶喪失、第二に幻覚のことである。記憶喪失や幻覚に集団でかかるとは考えにくかった。部分的に記憶をなくすということはあるだろうが、集団で失うなどありえない。それも六人が六人と同じ時期の記憶をなくしている。集団で幻覚を見るということはあるだろう。だが、今回は、集団といっても互いに遠く離れた場所で起こっている……。子供のころも同じ体験をしていると佳代子は書いていたが、あのころ不眠症や夢遊病にさいなまれて

いたのなら、親が気づくはずではないのか？ 少なくとも、紗英の母親が（と利菜は皮肉めいた気持ちで考えた）。佳代子にかつがれているのなら話は別だ。あの手紙自体が、たんなるいたずらだったのならそれでいい。だけどそれはありそうにないと、利菜は思った。旦那と娘が出かけるのを待った。十時が来た。受話器とにらめっこをくりかえした。彼女はこう考えた。いつそ向こうからかければいいのに。それなら肚を固めて受話器に指をかけては、くじける苦労もなくなるのに。だけど、佳代子にたいする心配の情は強くなる一方だ。利菜はあの子たちがいなくなったら、もう自分の今の状況を理解してくれる人物は一人もいなくなることに気がついた。不眠症や幻覚にさいなまれる自分をわかってくれる人は、彼らをおいてほかにない。ひよっとして向こうからはかけられない事情があったとしたら……。佳代子は書いていたではないか、神保町には戻ってくるなど。

ここで電話をかけないということは、あの子を見捨てることと同じじゃないか、と、彼女は自分に問いかける。

利菜は佳代子のことを思い、自分と同じ目に合っているはずなのに、まだ自分を思ってくれる佳代子の気遣いに涙した。電話をかけたのは、その気遣いに応えるためでもあった。ことに対する好奇心もある。もちろん。だけど、相手をコールする電話の無機質な電子音をきいていたとき、彼女はこの一件をなんとか解決したいという一心だった。仲間の不眠症も、神保町での犯罪事件も、解決できるのは自分たちだけではないか……。そんな錯覚すら覚えるのだった。そして、コール音の陰では、こんな声がかすかにささやくのを感じる。世界はねじ曲げられている……。

受話器の向こうから佳代子の声が聞こえたとき、なつかしさと安堵で胸が暖まった。彼女は自分が思った以上に参っていることを知った。「佳代子？ あたしよ、上原利菜」

しばらく沈黙があった。佳代子はこう言った。「いまは高村利菜でしよっ……」

佳代子が歓迎しない口振りながらも、おなじように懐かしさを感じていることを知った。

「荷物は届いたわよ。手紙も読んだ」鼻をすする。「ありがとう。お仲間がいるって知ってほっとしてたところよ」

「お仲間……？ そう、じゃあ、あんたも不眠症で苦しんでるってわけね」

「そうよ」

「あの手紙を読んで、あたしがいかれたとはあんたは思わなかったわけだ……」

「元気がないじゃない」鼻をすすった。なんでこんなに涙が出るのか、胸が熱くなるのか、自分でもわからなかった。ひとつには安堵のためと思う。胸にためこんでいた不安が、あふれ出ていくようでもある。「あたしは、あたしはほっとしてる。自分がおかしくなったのかって疑ってたときに、病気で、だめになったかもしれないって思ってた。でも、あたしと、あたしのことを理解してくれるやつがいるんだって思ったら……」

「どつと安心したわけだ」と佳代子は言葉をついだ。「あたしはねえ、あんたが電話をかけてこなければよかつたって思ってた。でも、いづれこうなることはわかつたように思うよ」

「紗英には連絡をとったの？」

「とれてない。手紙は送っただけだね。忙しい子だから……読んだかどうか」佳代子がせきばらいをした。涙ぐんでいるのは容易に想像できた。「子供のころもさ、あんたはいちばんあたしのことわかつてくれたから、だから、電話もかけれなかったのは、きつかったよ」

「こつちもおんなじよ。ねえ、しばらく会わなかったなんてうそみたいだよねえ」

二人は電話越しに笑い声を通わせた。

利菜は言った。「あたしはちよつとずつ眠れるようになってね。

幻覚も見る回数が増えたわ。悪夢はみてるけど、でも、前ほどひど

くはないと思う。今日、電話をかけたのは「ぐつと声をつまらせる、唾を飲み下す。「あんたのことが心配だったからよ」

利菜は黙りこみ、相手の反応を待った。佳代子はなにも答えない。「両神山に行ったんでしよう？」と利菜は言ったが、電話は無言が続いた。

「なにを見たの？」

「なにも見てないわ」

「なにを思い出したの？」

「あんたはどうなの……どこまで覚えてるの？」

「詳しいことは思い出せない。山で迷ったときの記憶も出てこないのよ。でも、こんなことってありうるのかな？ だって、みんながいつせいに記憶をなくしたり、幻覚をみたり、不眠症にかかったり……それに、子供時代にも同じことがあったなんて、そんなこと信じられない……」

「そう、あんたは思い出していないのね。おさそいのこと、なにもおさそい？ おさそいと言ったのか？」

佳代子の声にいらだちがまじったようだった。利菜はとまどいを感じ、受話器をわずかに耳から離した。

「あんたの身になにもおこってないんなら、黙ったままでいようと思ってた。あんたはもう町を離れてるし、両神山のちかくにはいない。子どももいるしね」と佳代子はつづけた。「あたしたちは夢を見てただけじゃない。真つ昼間にだって、幻覚を見てたわ。二十五年も前のことだし、わたしもあれが現実だったのか確信がもてなかったけど、寛太は覚えてたし、新ちゃんや、達さんもね。いま思うと、大人になってからの幻覚は全部子供のころに関することだったし。あの二人に話すかどうかは、そりゃ迷ったわよ。新ちゃんはなんども捕まったし、いちばんおつかない目にあってたから」

「あんた、捕まったっていった？」

「そうだったわ」佳代子は言った。「おまもりさまにね。あたしたちはおまもりさまにおさそいをうけてた。いったいどこまで覚えて

るの？」

おぼえていた。心の奥深くではすべてを直覚していたが、見えな
い壁がせきとめるかのように、意識の表面にはのぼってこない。

「詳しいことはなにも」

「無理ないかもね。あんたはほんとうにつかまったわけだし」

「なにによっ」

「おまもりさまによ」

「……いいかげんにして。電話をきるわよっ」

利菜はほんとに切断ボタンを押そうと思った。受話器を耳から離
し、指をボタンに持っていた。だけど、そのとき受話器の向こう
から声がし、それは佳代子の声ではなく、低いにじみだすような男
の声で、「切るな」とそう言った。

利菜は受話器を耳にもどし、ゆっくりと顔をなでた。

「後ろに寛太がいるの」

「いないわ。聞こえたのね」

佳代子の答えは訊く前からわかっていた。「電話の混線かしらね」

「ありえないよ」

「寛太がいるんでしょ……」

「泣かないで」佳代子は昔とかわらぬやさしい声だ。そばにいた
ら髪をなでてくれたことだろう。必要なはそれだった。寛容と、
理解と。「あんたもまいつてるのね。肚をたてたりして悪かったよ。
寛太はいないわ。あんたに連絡をとるの、反対してたから」

「どうして……？」

「わかってるでしょ」

「わたしがつかまったからね」利菜は言った。佳代子が言ったよう
に泣いてはいなかった。でも、口元を抑えて、涙をこらえる必要は
あった。「思い出せないけど……なにかあったことはわかってる。
また危ない目にあうっていうの？」

電話の向こうで佳代子はなんどかうなずいた。「あぶないかもし
れない。あのおきのおさそいはだんだんひどくなったから。また始

まったのよ」と佳代子は言った。「いまのあなたになにが起こってるか、あたしは知らない。あたしたちは逃げられたんだと思ってた。でもちがった……あたしたち、つかまったままだったのよ」

利菜は言った。「わたしは半年前からいやな夢を見てるわ。幻覚も見てるし。それに夜中にかけてに歩きまわってるみたいなのよ」涙はこらえられなかった。かつてにあふれだしてきた。

「……わかってる」

「わかってる？ なにが？」鼻がつまり（それはたんなる鼻水とおもえないほどに熱かった）、利菜は言葉につまる。「なにがわかるの？ 目が覚めたらバスタブのなかにいたこと？ バスタブの向こうに女が立ってたこと？」

「溺死女……っ」

「なんだってっ？」

「なんでもないよ……でも夢遊病がおこってるのは、二十五年前と同じよ。やつぱり、あなたもあたしもおさそいをつけてるのよ」

「でも、あなたは……あなたは覚えてくれてる。わかってくれるのね？」

「わかってるわ。あたしたちは同じ目にあってたんだから」佳代子は間をおき、「今もって」

「寛太は？ どうなの？」

「おなじよ。おさそいを受けてる」

「あなたには？ あなたにはなにが起こってるの？」急に記憶があふれだし、彼女は一瞬言葉をうしなう。「思い出したよ。無意識に行動してたこともあった。わたしはあなたを見捨てようとしたこともあったわ」

「それはあなたのせいじゃないよ」

「だからこわいのよ。ますます、自分が……どうにかなったら？ 娘になにかしたら？」

佳代はなにも言わない。

「否定してくれないのね」

「あのころのおさそいとはちがうのよ。ちがうというか……ちがうと思う。大人になったからそう思うのかもしれない……だけど」

「山でなにがあったの？」

「言えないよ。あたし、あんたに戻ってきてとも言いたくない。そんな無責任なことは言えない。でも、どうしていいかわからなくて

……」

「つかまってるのはわたしもおんなじよ」

「こんどのはちがうのよ」

「なにが」

「みんながよ。こんどのおさそいは町中がつかまってる、そんな感じ」
「こんど泣いたのは佳代だった。」

「……泣かないでっていうのは気休めになりそうね」

「そうね」

「でもわたしがついてるわ。あんたがわたしについてるみたいに」

「そう、マンション仲間の絆は消えてないってわけだ」

「あのころの絆はね」

佳代子はため息をついた。「あと問題なのは……紗英ね」

「あの子も危険だって言いたいのに」

「わからない。彼女と連絡とってる？」

「最近のごぶさたなのよ。フライトでとびまわってるみたいだし」

「でも、両神山にいないかぎりは安全かもしれないね」佳代子は一人ずつやくように言った。しばらくだまり、やがて「ねえ、おぼえてる。こどものころの噂話。両神山でまよった子どもの話とか」

かすかに笑った。「おぼえてるよ。とうさんたち、こどもが林にはいるのをおっかながってたから。ずいぶんおどかされたわ」

「そうね」佳代子は言った。「でも、おじさんたちが怖かったのもむりなかつたのよ。あれをしらべてみた。両神山の噂、知ってることも知らないことも。ネットや図書館で記事をあさってね。警察にだって足を運んで、話をきいたわ」佳代子が喉を鳴らす音がした。

「あれはほんただった。あの森で、何人もこどもが死んでる。死体

が見つからなかったものもふくめて」

利菜は何も言わなかった。何も言えなかった。舌は石膏になった。佳代子は話した。

「さいきんうちのまわりもぶっそうだね。犯罪がよくあるのよ。ひつたくりとか、殺人事件とか。こんなちいさな町でよ？」佳代子は首をふる。「ここ最近の犯罪記録をしらべたのよ。それを地図にかきこんでいった。たんなる丸を書いたただけだけど。そうしたら、事件が多発してるのは、両神山周辺の町でだけだとわかった。あの山を中心に、円を描くみたいだね」と佳代子は言った。「それにあの山で、また殺人事件がおこってる」

「うそでしょ……」と利菜はつぶやいた。

「これがうそならつきたくもない。おまもりさまで死体が見つかったのよ」

二人は沈黙した。利菜の沈黙は単純な恐怖からだだったが、佳代子はべつの意味でとったようだ。「誤解しないで。こんどみつけたのはあたしじゃないわ」

「こんど？ なに？ 佳代子、何をいつてるの？」

「みつけたじゃない……二十五年前、あたしたち国村さんの死体を見つけたのよ」

利菜は言った。「うそよ……」

「ねえ、事件のことはなにも知らないの？ 新聞にだって載ったのよ」

「そんな話読んだおぼえは……」

そのとき、冷蔵庫の扉が目についた。なにかが貼ってある。その紙を目にとめ、「ちくしょう……」と彼女はうめいた。

「なに？」

「切り抜きよっ」

「なんだって？」

利菜は立ち上がって、冷蔵庫の前に行った。扉に手をついて、内容確かめた。それは古い紙で、薄汚れていて、ゴミ箱から拾い出

してきたかのようだった。紙にはガムの切れ端がついていた。五月五日の日付だ。すでに処分に出したものだ。

「新聞の切り抜きがここに……あんたの言ってる事件の記事よ」

「……あんたが貼ったんじゃないのね」

「あたりまえよ。旦那だって娘だって、こんなもん貼ったりしないっ」

利菜ははぎ取るうとした指をとめた。新聞は、冷凍庫の扉にはりつけてある。マグネットはつかっていない。最初は糊で貼ってあるのだと思っただが、そうではなかった。新聞紙の紙は、赤くにじんできた。

「やれやれだわ」と彼女は言った。

「あのときのことを覚えてなくても、あんたにはおさそいがかかっている みんなに」

そう、佳代子は言った。切り抜きのごときは、否定すらしなかった。子供のころもこんなことが頻繁に起こっていたのかな。

「わたしたちどうすればいいの？」利菜は訊いた。

「わからないよ。頼りはあんたなのよ。あのとき、あんたがもどってきて事件がおわったんだから」

「なにが起こってるのよ」と利菜は訊いた。

「おさそいよ」と佳代子は言った。「またおさそいがじまったのよ」

第三章 石川紗英、抱きつかれる

二〇二〇年 ヨーロッパ上空

二

あの年、寛太や利菜といった、幼なじみの面々と恐怖の夏を過

した石川紗英も、中学を卒業とともにイギリスへ留学をし、スチューワデス　フライトアテンダントの職に就いた。スチューワデスになりたい（フライトアテンダントなんて言葉、小学五年生の紗英には縁がなかった。スチューワデスが差別用語だったなんて。世の中……ああつ。とはいえ、フライトアテンダントとなった今では、紗英もスチューワデスなる呼び名の使用には反対だった）そのため外国に留学するのだという考えは小学生のころから頭について離れなかった。母親とは口論が絶えなかったし、始終束縛されるのがまんならなかった。紗英はことあるごとに母親に反抗するようになった。彼女の背丈はあの夏を過ぎてから急速にのびはじめ、六年生のはじめには母親を追い越していた。彼女の反抗は母親が期待したような「まわりの友達」のせいではなく、伸びすぎた骨格のせいなのだと彼女は信じている。

紗英はもともと帰国子女で、英語はあのころから話すことができた。一九八九年に石川紗英は日本を離れた。彼女が幼稚園の年長組だったときである。それから小学四年生で日本に戻るまで、都合五年ばかりをカナダで過ごしたことになる。石川家が引っ越したのは、父親の会社がカナダに新しく工場を建てることになり、その工場長に任命されたからだ。両親が思いついたのは紗英がまだ小さかったから、二人が若かったからでもある。会社は一戸建ての家を用意してくれた。三人は新しい家がすぐに気に入った。部屋数よりも、間取りを大きくとってある。場所は郊外で庭地は広々している。紗英は小さくて、なにがあつたのかよくわかっていなかったにしろ、新しい環境にはすぐになじんだ。日本人だけの学校もあつたのに、母親は父を説得してふつうの学校に通わせた。紗英は両親よりずっと早くに英語を身に付け、二人を喜ばせた。そのころは父親も家にいることが多く、家でパーティを開き、田舎に出かけたりした。友達をつれてキャンプ場に泊まることもあつた。そのころの母親には始終笑っている印象しかない。会社の業績が悪化し、父が工場長から降格されるまでは。両親は皮肉を言い合うようになり、会話がへり、

やがてはなくなつた。最後の一年間は、喧嘩のし通しだつた。紗英は家にいるのが苦痛だつた。母親は父親と喧嘩ばかりして、笑顔も見せずむつりしている。結局カナダの工場は閉鎖され、石川紗英は生まれ故郷の神保町にもどることになつた。

日本に戻つても事態は好転しなかつた。亭主が家に寄りつかなくなると、母親はすっかり変わつてしまつた。紗英のやることなすことに見張りをつけるようになった。ほうっておくと、悪いことがどんどん起こるのだと思ひこんでいるかのようだ。あのころの紗英は、母親の監視の目がいつも光っているような気がした。塾でがんじがらめにされていた。自分が娘なのか、奴隷なのかわからなくなる。かあさんは、友達にまで口を出すようになった。そうしないと、娘も帰つてこなくなるみたいに。

とはいえ、紗英が母親を憎んでいるかといつたら、そんなことはない。そんなことを他人に言われたら彼女は目を丸くして驚くだろう。たしかに中学の一時期は喧嘩三昧で、四六時中腹を立てていたようなこともあつたが、彼女は生来淡泊だつたし、根に持ち続けるには性格が前向きでありすぎた。それにイギリスでの生活は彼女から怒りをぬぐい落としてくれた。寛太郎の言つたとおり、怖いのも楽しいのも、みいんな薄れて消えてしまうものらしい……。

母さんのことをかわいそうだと思つたことはある、心配もしていた。母さんのことは今でも好きだ、彼女はカナダでの母親がとくに好きだつた。あのころの母さんは、精神的にも肉体的にもバランスがとれていたように思う。だけど、カナダの工場が閉鎖になり、日本に戻つてからは父が家によりつかなくなつた。両親の喧嘩と、だんだんまいっていく母親を目にするのはつらいことだつた。やがて両親が離婚をすると、紗英は母親と二人きりになつた。二人は高台のあの家で、少しずつバランスを狂わせながらいがみあうようになった。紗英は自分の道に進むことでその狂いを修正し、母親にはそれができなかつた。それだけのことだ。

とはいえ日本の家で、一人寂しく老後を過ごす母を思うと、紗英

はいつも心苦しくなる。なるべく電話をかけるようにしてはいるのだが、その電話越しですら、寂寞とした一人暮らしが覗けるようではつらかった。紗英が母親のことを見捨てたように思ってしまうのはそんな電話の後である。だけど、どうしろというのだろうか？ 電話の後、彼女はこう思い直す。母さんは自分の思うような人生を歩ませたがったけど、母さんは母さんの人生を歩むべきだったんだ。結局自分の人生は自分で作るしかないのだから、他人の生活をどうにかしてやるうなんて、おこがましい考えだと、彼女はいつも思い直すことにしている。

結局、幼なじみがママゴンと呼んだ母親の手を逃れ、イギリスに渡ることができたのも、あの夏の出来事が遠因だと思うようになるのだが、彼女がそのような考えを持つに至ったのはずっと後のこと

午後十一時四十五分。雷鳴と稲光がみたすフライトの中、石川紗英の乗るブリテュッシュエアウエズ41便は、進路を東京に向けて、大空のスラロームをくり返している。その日のフライトは多忙を極めた。コールボタンは雷鳴さながらにひらめいた。客室乗務員たちはそのたびに通路を走り回っている。気流は荒れ続け、41便は空飛ぶ酔っぱらいさながらだ。旅客機酔い袋は飛ぶようになくなった。乗客たちは生きた心地もしていない……。石川紗英はチーフアテンダントのナンシーにつぐ古株だった。その日も他のアテンダントたちと走り回っていた。彼女にとってはなんども経験したフライトのひとつにすぎない。だが、離陸から三時間がたち、ドイツ上空にさしかかるころになると、情況は一変した。

紗英は袋に機内食を戻しつづけるふとつちよの世話を焼きながら、機内に視線を走らせる。すると座席のいたるところに濡れそぼった髪の毛がいた。その連中が上目遣いで紗英に視線を注いでいた。女は血走った眼をしている。場違いな着物まで着こんで、水滴をしたたらせている。溺死女だと彼女は思う。最近いつも見かけるあの女だった。紗英はこらえきれずに悲鳴を上げるが、その声は偶然起こ

った乗客たちの驚声にまぎれる。

飛行機が傾き、乗客たちの悲鳴がまた上がる。シートベルトのサインはつきっぱなしだ。紗英の顔色は真っ青だった。何度フライトアテンダントの仕事を辞めようと思ったことか。仲間の乗務員は、彼女が精神失調にかかり、カウンセラーについていることも知っていた。旅はつねに快適ではないし、不測の事態もつきまとう。幻覚になやむ頭のいかれた人間がつづけられるほど、この仕事はやさしくない。紗英はカウンセラーと話し合った結果、飛行機を降りる覚悟を固めるまでにしたのだが、そんな彼女を支えたのは他でもない、ともに働くクルーたちだった。どんな客が相手でも落ち着いて対処する紗英は、彼女ももう36才。トウのたったベテランだ。他のアテンダントのみでなく操縦士たちからも頼りにされている。仲間は紗英の退職希望に猛反対した。不眠症、幻覚、幻聴、夢遊病。だが、仲間たちも彼女自身も、症状はいつか好転するものと思いきんでいた。この日もその予測はずれたわけだ。

窓の外では黒い雲が機体を取り巻いている。ときおりひらめく雷光が、その雲母を照らし出す。

紗英はその光とともに太った紳士に目を戻す。彼女は夢中でその背をなでる。紳士の背中が、なでればあの女を消してくれる魔法のランプだというかのように。分厚いスーツごしでもじっとりとした汗を感じるが、彼女は気にならない。他のことに気をとられていたからである。

「ありがとう君もういいよ」

紳士は袋から青白い顔をあげた。紗英がなんとか微笑をとりつくりい顔を上げると、窓の外では溺死女が分厚いガラスに手を貼りつかせていた。目を見開き、大口を開けて絶叫しているらしい女は、亡霊そのものだった。

うつろたえて、通路を後ずさると、腕をつかまれた。紗英は息をのんで身をこわばらせる。

「大丈夫なの、気分が悪いのなら、ギャレーにもどって」

ナンシーの声が耳元でささやく。様子をみかねて駆けつけてきたらしい。

「おい君、大丈夫なのか？」

太っちょが尋ねてくる。紗英は考える、チーフアテンダント万歳、このふとつちょ、反吐のことも忘れるぐらいわたしは顔色が悪いらしい……。

こんなときに客をさらに不安に陥れるだなんてフライトアテンダント失格だ。

ナンシーが紳士と言葉を交わしながら、嘔吐物の入ったふくろを受け取った。紗英はせかされるようにしてファーストクラスのギャレーに戻った。溺死女は複数に分裂したらしく、あちこちの席から顔をのぞかせ、彼女を目で追いつける。紗英は腰を滑らすようにして通路を進む。二人は何かに追い立てられるようにしてギャレーに駆けこんだ。

神さま、乗客がわたしたちの様子に気づきませんように。

ナンシーが追いかけてきた。ギャレーには他のアテンダントがいなかった（もちろんこの天候では乗客も当然のようにいなかった）。紗英は安堵の吐息をつきながら言った。「ナンシー、わたしなら本当に大丈夫だから」

「大丈夫？ そんなふうには見えないわね」ナンシーは飛行機酔い専用袋を片づけ、きつい視線を上げた。「またあの女を見たいんですよ？」

紗英はうなずいた。仕事仲間には自分の状況を包み隠さず話している。41便のクルーとは、公私にわたるつきあいがあったからだ。紗英のイギリスでの生活を支えたのは、まちがいなく彼らの存在だから、不眠症と幻覚という、フライトアテンダントとしては進退にかかわる話も、臆せず打ち明けることができた。それに仕事を辞めずにすんだのは彼らのおかげだ。紗英は症状の軽かった時期からジョン・ティムズというカウンセラーにかかっている、退職の覚悟も早くから固めていた。この分だと紗英が仕事をやめるにはナンシ

ーたちを説得するほかなかった。仲間たちの出した条件は、あと一ヶ月様子をみることに。それでもだめなようなら休職届けを出すことだった。ナンシーたちのフォローもあり、いまのところ紗英は休職届けを出さずにすんでいる。だが、それももう限界だ。

ナンシーの言うあの女とは、テムズ川を着物姿のまま泳いだような（しかもそのまま溺死したような）女のことだ、見た目は日本人だが紗英には見覚えがなかった。だから、紗英は名前など付けずにたんに溺死女と呼んでいる（だいいち彼女以外には見えないのだから。名前なんてくそくらえだ）。溺死女はこの数ヶ月繰り返し彼女の前に現れた。大通りを歩いていると、女は通りがかりに肩をつかんできたりする。恋人のジェームズと橋でキスをしているときは、欄干からよじ登ってきたものである。洗面台で歯を磨いていると、肩越しに女の顔がガラスにうつる。日本の幽霊ならかえりみると消えていなくなるのが定石だが、この女は突っ立ったまま襲いかかってくるのである。

紗英は何事にもイギリス仕こみのユーモアをもって対処してきたが、女も一流のユーモアを備えているようだ。トイレで用を足していると、鍵のかかったドアを急に開けてそのまま閉めたり、無意味な行動も多かった（ドアが開いたこと自体幻覚のはずなのだが）。問題は女が悪意をもっていることだ。ジョンは潜在意識に眠る抑圧された精神があらわれているのではないかと言ったが、紗英に思いつくのは母親との関係ぐらいなものだった。

わたしは正常だわたしは正常だわたしは正常だ。

紗英はシートに腰を下ろし、頭痛のする額を手でおさえる。ナンシーはそばを離れない。紗英の指のすきまからは、ストッキングをはいたか細い足が見える。ふと、新治たちがこのナンシーを見たらなんとというだろうな、とここ何年と会っていない幼なじみのことを考える。こんな美人を目の前にしたら、どぎまぎしてなにもしゃべれないんじゃないか。しかし、ナンシーは顔に似合わない気質を持った人間で、義理堅く、友情には厚い女である。情熱とガッツに満

ちた旅館のおかみのような女性だった。ナンシーはかがみこむと、紗英の手の上から額に手をあて熱をはかるようなそぶりを見せる。

「今日はとくにひどいみたいね」

「もうだめ。休職をとるって決めたわ。この忙しいのに、役にたてないのよ……」

「その話は後で訊くわ。わたしもみんなもベテランのあんたに抜ければたらきつい。なんともいわせないで」

「そんなこといって……いまじゃ新人の半分も働けないじゃないっ。気持ちはずれしいけど……やっぱり幻覚をみないなんて無理だったのよ。ジョンのいうとおりにはやってみただけど、コントロールできなかったわ」

ジョン・ティムズには、幻覚は君の頭が見せているんだから意志の力でコントロールできる、ということをおわった。彼の言うとおりに、幻覚をあるていどはコントロールしてみせた。ティムズに女を連れてきてくれと言われたときは、実際に呼び出すことができたし（そのためには相当の集中力が必要だったが。呼び出した後はいつもくたくたに疲れてしまった）、頭の中で念じると女はその通りに姿を変えた。女に体操服を着せ、笑い転げたあげくに追い払ったこともある（もちろんティムズには見えていないが）。だけど、もう疲れ果ててそんな力は残っていなかった。だいいち、コントロールはできたが、幻覚が消えて無くなることはなかったのだ。不意をついてはあらわれるのくりかえし。不眠症も強迫観念も、ひどくなる一方だ。

紗英はふさぎこんで首を垂れる。ナンシーはそんな彼女を包むように覆い被さる、髪越しにやさしいキスをした。

「そんなことない。今日は激務なんだから……しかたないじゃない。あんたはふだんはうまくやってた。あんたが事態を良くしようと努力したのはあたしが一番よく知ってる」コールが立て続けに鳴る。ナンシーは身を起こす。「しばらく休んで気を落ち着けることね」「紗英の膝にたばこを置いた。」「東京につくころにはきつとおさまっ

てるわよ」

紗英の頭をなでると、長い足をとばして行ってしまう。仲間が走り回っているときに煙草を吸うのは申し訳ない気がして、脇に押しやる。

数人の子供たちが通路を駆け抜けて行く。紗英はあわてて立ち上がったが、シートベルトの着用サインは消えていない。乗客は誰も席を立てないはずだ。

「見なさいよ。幻覚と現実の区別もつかなくなった」

紗英は自嘲気味の笑いを浮かべ、もう仕事に戻ろうかと通路に目をやった。すると、ファーストクラスとギャラーを仕切るカーテンの裏に人陰があった。紗英は凍り付いた。

またあいつだ……。

カーテンの裾からは裸の足が覗いている。着物から水滴がしたたり、通路の絨毯をまたたくまにぬらしていった。頭の中でジョンの声が鳴り響く。幻覚に同調するな、あれは君が生み出しものだ、君自身で消し去るんだっ。紗英は息を大きく吸い、目を閉じると消える消えろとなんども念じた。口の端からうめきが漏れ、紗英はおそるおそる目を開く。

女は目の前に立っており、充血した眼が彼女をのぞきこんでいる。女の背丈は見るたびにちがうのだが、今日は百七十五センチある紗英と変わらない。例の上目遣いの目で紗英を睨みつけ、女が腕を伸ばしてくる。

紗英は思わず手を出して、女の肩をつきのけた。すり抜けると思った手が骨にぶつかり、女はあっけない弱さで体をふらつかせる。

紗英は濡れたたてのひらを見つめて悲鳴を上げる。溺死女は彼女に非難の目を向けてきた。紗英は驚愕と怒りのいりまじった顔で、シートに置かれた雑誌を拾い上げた。幻覚にさわったのは初めてだった。幻覚は君に本当に触れることなんかできやしないとジョンは言ったが、彼女は幻覚の反撃を本気でおそれた。あわてて雑誌を丸めると、頭上に振りかざし、

「さわれるんなら、こうしてやるっ」

女の頭を打ち据えると、濡れた髪がびちゃりと鳴った。紗英はあまりの現実感にむかつきを覚える。彼女は怒れる調教師のように、女を追いかけては打ち据えた。びしゃりびしゃり。溺死女は通路を横切るとトイレに駆けこみ閉じこもった。

紗英は荒い息を吐きながら、揺れる機内に立ちつくした。

「幻覚にさわれるとはね……」

垂れた腕から雑誌が落ちる。すると、それを見越したかのように、扉の向こうからは、ひどいよ……という子供の声が出た。紗英はその声に聞き覚えがあり眉をしかめた。大急ぎで脳内をさぐると、大昔の親友が見つかった。

「利菜？」扉にむかって呼びかける。紗英は誰も様子を見に戻ってこないことにほっとしながら、さきほど打ち据えた女が仲間のアテナントでないことを祈り（あの女は幻覚のくせに、扉をあけてトイレに駆けこんだのだから、その可能性は大いにある）、扉にそっと指をそわす。彼女は今にも消え去りそうな笑みを浮かべる。

「ばかばかしい、あたしの頭が作り出した声じゃない。幻覚に話しかけるなんて……」

それは、あまりに弱々しい声で、彼女は自分さえコントロールできていないことをぼんやりと知った。休職をするところではない、そのうち自殺をするのではないのかと、そんな不安が脳裏をよぎった。そしてこんな疑問が、利菜と最後に会ったのはいつだったろうか？

扉はじつとしている。紗英は無意識のうちに手を伸ばし、ノブを回す……すると、内側から誰かが押さえたように、途中で動かなくなる。

そのとき機内の照明がまたいたかと思うと、41便は急激な气流に乗り、激しく機体を旋回させた。紗英は手を開き体を支えようとするが、立っていられず身を投げ出す。通路が体をたたいたかと思うと、あごを強打し、彼女は意識を昏倒させる。

「うっ……」

顔を上げると、口の端を血がしたたり落ちた。紗英は床に手を置いて身を起こそうとするが、視界がくらんでうまくいかない。彼女の職業意識は、乗客の様子を見に行くんだという責任感を訴えていたが、神経がどこかで切断をおこし、立とうとする意識は手足から滑り落ちていく。もう一度顔を上げると、今度は溺死女が直前に立っている。紗英は、その女を子供のころに見たのだということをし、自分が最初に見たのだということを感じ出す。

溺死女は一瞬で立ち消えた。紗英は、前方に見える光景に啞然となった。「なにあれば……」

外からは決して開くことのないコクピットルームのドアが開き（ドアは内側からしか開けられない）、機長のラルフと副操縦士のエングルが叫んでいた。

41便の前方はオーロラのような激しい光で満たされていた。だけではない。その光は風防を通って流れこみ、コクピットの中でうねりをあげていたのである。

光はギャレーまで届いている。照明が再度瞬いた。乗客の悲鳴が聞こえるが、それは何億光年も遠方から届いてきたかのようだ。紗英は四つ足のままはいすすんだ。ストッキングが大きくさけ、むきだしの肌が絨毯をこする。コクピットの直前まではいすすむと、彼女は壁に手をついて立ち上がる。光は生き物のように漏れてくる。金色のようでもあり、七色でもあり、いや、すべての色だと彼女は思う。

コクピットとギャレーには段差がもうけてある。彼女は転ばないようにまた近づく。光が頬をなでる、液体のようになめらかで確かな感触があった。揺れる機内で手をかざした彼女は、光にふれた部分がかすむのを見る。紗英は身動きをとめ、手を光の中へとつきこんでいく。腕は透明になり、大きくゆがんで伸びもした。

旅客機は轍を通る車のように振動している。紗英は光に導かれるようにして、コクピットに踏みこんだ。

コクピットに踏みこむと、紗英の体は光で満たされた。それは生きていた。暖色は熱く、寒色は冷たかった。彼女は盲目のようにゆっくりとすすみ、ラルフの操縦席に手をかけた。ラルフは操縦桿を引いて減速を試みていたが（この現象がはじまってすぐに自動操縦は切っていた）、隣にいる彼女を見てぎよっとなった。

「どうやって入った……っ」

紗英はちらりとラルフに目をやり、その顔がX線を浴びたように組織をむき出しにし、チーズのようにやわらかくゆがむのを見た。どうやら紗英の顔も同じのようだ。ねじまげられたラルフの顔が驚愕に変わり、ふたたび前方にむきなおる。

「この光はなんなの？」

「わからんっ、どんだん入りこんでくる。無線も通じないっ。ジエツトエンジンも止まりかけてるぞ！」

エンゲルが悲鳴のような怒鳴り声を上げる。紗英は驚いて乗客に訊かれては大変だ　ドアをかえりみた。

コクピットから通路に目を向けた紗英は、ファースト・クラスには声が届いていないことを知った。機内サービス準備室の通路は、百メートルばかりの延長工事をたったいま終えたらしい。紗英は今見たものを閉め出すかのように力一杯ドアをしめた。ラルフが席越しに怒鳴る。「なぜ、入れたんだっ」

「ドアが開いてたからよっ」

「くそっ、お互いの声も聞き取りにくくなってるぞっ」エンゲルが無線に八つ当たりをしながら言った。「ラルフ、進路を変えろおっ」エンゲルに言われるまでもなく、ラルフは操縦桿にむかって全体重をかけている。光の中ではすべてがゆがんでみえるらしく、かれが身動きするたびに残像がうまれる。ラルフの顔はなすびのようにカーブをえがくっ。

「操縦がきかない」ラルフが食いしばった歯の隙間から声を出した。41便がまた上下に跳ね飛んだ。エンゲルが紗英に言う。「席についてシートベルトを締めるんだっ」

しかし、彼女は言うことを利かない。上官の言葉を無視してさらに身乗り出した。光を、その先にあるものを、もつと見たかった。「なんなの、あれはっ？」

「わからない！」エンジンが計器パネルを叩いた。「管制塔、応答たのむ！ トラブル発生！ ただちに応答頼む！ こちらブリテュッシュエアウエズ41便！ 操縦がきかない！ 回線が混雑してる！ 聞こえないのか！？ 近くの空港まで誘導してくれ！」

41便の視界は光で覆われて何も見ることが出来ない。旅客機はその光を押し分け進んでいく……というより、ある方向に引き寄せられていた。その意味ではジェット機は今、川を進む船に似ていた。その禍々しい光は遙か前方から41便を引き寄せている。先端では光は消失している、その空間には星も雲もない。紗英はその場所のことをただ深いと感じた。あそこは深すぎるから、光も何も見えないので。彼女はその虚無をどこかで見えた気がする。

世界はねじ曲げられている……彼女はつぶやく。自分がつぶやいていることにも気づいていない。そのときコクピットを満たす光の中は、あらゆる音に満たされていたからだ。

機長のラルフは43才、副操縦士のエンジンは37才だ。二人とも経験は十分、息のあったベテランパイロットである。麻薬密売の疑いがある男がトイレにかけこもったときも、酔っぱらった男が空港に引き返せとコクピットにせまったときも、落ち着いて処理をしてきたが、今はとりみだし処置のしようもない。エンジンは計器を操作して管制塔との交信をこころみるが、高性能のスピーカーからは、陽気なロックや日本の歌謡曲が流れてくるばかりで、いつかかな用を果たさない。絶叫がする、誰かの金切り声、おっそろしく古い歌や訊いたこともないような歌、はては宴会の騒ぎのような声まで流れてくる。そして、ふいに静寂になり、とぎれ、とぎれてはまた聞こえだす。

彼女はその光のうちに、子供時代の光景を見る。草原いっぱいにひまわりが咲き乱れ、そのなかを紗英たちはひまわりをかき分け怖

々歩いている。彼女は恐怖よりも興奮を感じはじめる。

ラルフは光の川を脱しようと操縦桿ととつくみあいを演じている。彼の右腕は筋も千切れんばかりにふくれあがり、生き物みたいに脈打っているが、このやっかいな代物は万力で挟まれているかのようにぴくりともしなかった。かれらがこの奇態なオーロラを見つけてから五分とたつていない、それ以前にはオートパイロットが操縦桿に軽快なワルツを踊らせていたのである。ラルフは速度計の針をみるために頭を下げた（視界は光にふさがれていたから、通常的位置からでは計器板が読めなかった。）、巡航速度を保っているがしれたもんじやない。電磁波だかなんだか知らないが、忌々しい光のせいで最新のはずの電子機器がこぞって反乱を起こしたのだ。ラルフは緩慢な動きで体を起こす。光に重さがあるとは驚きだが、こいつは海水のごとくだ。

彼は操縦桿を倒そうとする努力を放棄して前方を見つめる。

彼はゆがんだ顔に涙を浮かべ紗英を見た。数秒間見つめ合った後、ラルフはこう言った。

「君の言ったとおりだ……世界はねじ曲げられている……」

彼らは前方に顔を向ける。光は手招きするように三人をなで回す。紗英は東京に戻ることをだけを願った（心の片隅では、神保町にもどることを願っていたのだが）。

41便は光の深部へと突き進んでいった。光の消失する空間へ。

紗英は操縦席のシートにしがみついた。腕をまきつけ、ちいさな胸をおしつぶし、けれどコクピットからは出ようともしない。彼女の胸は恐怖よりも興奮でわきたっていた。大量のエネルギーが宇宙からどこからなのかわからないが、注ぎこまれているかのようだ。五感も六感もまんべんなく高まりきった感じ、この感じは子供のころになんとも味わった気がする。その瞬間彼女はあの夏に起こったことを見たもののことを思い出した。なぜこのようなことが起こったのか、そのわけすら、おぼろげながらも理解した。彼女は機長の肩を揺り動かした。

「ラルフ！ しつかりしてよ！ わたしたちは東京に行くのよ！
落ちていて東京のことを考えて！」

「くそっ、メイン・キャビンの方はどうなってるんだ！」副長のエ
ンゲルが紗英に向かって怒鳴る。「君はなんでそんなところにしが
みついている！ キャビンの確認をしてこい！」

彼の声はかすれて金切り声のようになる。紗英はそのエンゲルに
鬼のような形相を向けた。

「うるさい、このくそったれえ！」

エンゲルは目を丸くした。

「わたしたちは東京に行くのよっ。おたおたしている暇があったら、
東京のことでも念じなさい！」

「しかし……っ」

穴が近づいてくる。

ラルフがシートアームに置かれたエンゲルの腕に手をのせ、「エ
ンゲル」と呼びかける、彼が平静を求めている。エンゲルに、紗英
に、自分自身に。「くぐるぞ……」

ブリテュッシュエアウエズ41便は虚無に吸いこまれていった。

紗英は東京のことを向こうに残した友達のことを考えつづけた。そ
の友達とは一年以上も連絡を取っていないのに、彼らが大変な危機
にさらされていることを知る。41便の機器はこぞつていかれたと
いうのに、紗英の頭にあるレーダーは極限まで性能を高めたかのよ
うだ。

コクピットの視界からは、光がとりはらわれてゆく。虚無が身を
のりだす。

「あの向こうにあるのは、東京よ……」と彼女は確信をこめた力強
い声で言った。「信じて……」

そして、真っ暗になった。

次に意識をとりもどしたとき、紗英は床にたおれ、副操縦士のエ
ンゲルに身を揺すぶられていた。紗英が顔を上げると、エンゲルは

驚愕の表情を浮かべて彼女を見下ろしていた。その顔には汗がしたたり落ち、憔悴のあとが濃い。ラルフがキャビンにむけて室内放送をする声が聞こえる。ブリテュッシュエアウエズ41便ラルフ・クライン機長です。当機ははげしい乱気流に見舞われましたが、無事東京上空に達しました。

「どうなったの……」

彼女は身を起こす。機内が明るくなっていることを知った。

コクピットの外は暗闇どころか、青空に変わっていた。

「君の言ったとおりだ」ラルフが言った。「東京上空だ。……正確には八丈島のうえだ。時刻は午前五時四十一分」

「そんな」紗英は立ち上がる。「さっきは午後の一十一時だったのよ。そんなに気を失ってたの？」

「われわれは意識を取り戻してすぐに君を起こした」とエンゲルは言った。

機体は安定している。光の残滓はかけらもない。紗英は言った。「じゃあ、あなたたちも六時間近く、意識をなくしてたってわけね」エンゲルは首をふり、操縦桿を指さした。「ありえない、オートパイロットは切つてある」

紗英とエンゲルはコクピットに立ちつくす。紗英はアームレストの脇についたサービスコンソールに置かれたコーヒーが、まだ湯気を放っているのに気がついた。

「つまり君の言った通りだったわけだ。われわれは東京を念じた。

そして、東京についた」

「そうらしいわね」

「もっと重要なのは、我々がロンドン東京間を二時間以上も短縮したということだ」とラルフが言った。

「君はなんで東京につくことがわかったんだ」エンゲルが紗英の肩をつかんだ。「あのとき言ったろう。東京でも念じろ、あの向こうにあるのは東京だつ。そう言ったぞ」

「そのようね」

「エンゲルはいぶかしむように眉をひそめる。「なぜ落ち着いてられるんだ？」」

「今日かぎりでこの仕事から開放されるからよ」

「なにっ？ 何を言ってるんだっ？」

「エンゲルよせ、なにが起こったかはわからないが、彼女のせいではないだろう」

とラルフは言ったが、エンゲルはそうは思えないと言いたげに顔をしかめている。ラルフは言った。「ジェットエンジンは正常に復した。無線もつながっている。我々の役目はこいつをふたたび地上につなげることだ」

「乗客がさわがないか」

「さわいだとしても、なにが起こったか説明のつけられるものはいやしない。それはわれわれもふくめてだ」

コクピットのドアがノックされた。三人は驚いて顔を見合わせた。紗英が開くと、ナンシーが外に立っていた。紗英がコクピットにいるのを見てぎょっとしたようだ。紗英はこう直覚した。わたしが幻覚をみて、騒いだとおもってるわね。ナンシーはさきほどの機の動揺はそれが原因だと考えたのだ。しかし、それでは説明のつかないことがいくつもあることに、同時に気がついたものらしい。

「機長、説明してもらえませんか。乱気流に飲まれたかと思うと、

乗客は わたしもふくめてですが 全員失神しました。気がつく
と窓の外の景色がちがう。朝になっているじゃありませんか」

「待て、乗客もみんな気を失っていたのか？」ラルフが訊いた。

「そうです」

ラルフはシートに身を預けた。沈黙の中でジェットエンジンの音だけが響いた。ややあつて彼は言った。「そういうことなら機内放送で状況を伝えよう。加減抵抗器の誤作動で……つまり客室与圧の異常で乗客は意識を失った。その間に東京について……」

「本当にそうなんですか？ 東京の上空なんですか？」ナンシーは言った。「たった4時間で東京についてたんですか？」

ラルフは振り向いて笑った。「なにをいつてるんだ、たしかに記録的な速さだが……」

しかし、ナンシーは毅然と言った。「機長、いまは何時だと」ラルフは計器に目をやった。

「いまは午前五時四十三分だ」計器のデジタル時計をみながらエンゲルが言った。

「わたしの時計ではそうではありません」

「なんだと？」

「あなが見たのは、パネルの時計でしょう？ わたしのアナログは十一時五十五分のままです」

ナンシーは腕をかがげながら言った。紗英も年代物のロレックスをみた。ラルフも。エンゲルは鼻で笑って二人の客室乗務員に言った「つまりこういうことか。コントロールパネルのものは電波時計だ。勝手に時刻を修正してる。正確な時刻はあれから五分とたっていないっ」

「なんとも言う方がいいさ」ラルフは疲れたように言った。「こっちだって説明のつけようがないんだ。さあ、みんなプロに戻ってくれ。ブリテュッシュ航空がわれわれに高い給料を払っているのはパニクるためじゃない」と言って、副長に、「エンゲルっ？」と訊いた。

「わかってる」エンゲルは投げやりに言ってこめかみをもむ。目を閉じる。じわりとした疲れが脳に染みこむ。「オーケーだ」

「君たちはキャビンに戻って乗客のめんどろをみてくれ」とラルフは二人に言った。「これから忙しくなるぞ……」

ラルフはマイクを取り上げ、乗客に説明をはじめた。ナンシーは紗英の手を取り上げ、コクピットから連れ出した。

「あなたはなんでコクピットにいたの？ ギャレーに戻ったときはあなたの姿が見えないんでぎょっとしたわ」と彼女は言った。「なにがあったの？」

「わからない。言っても信じてくれるかどうか……」

「言つてっ」

「わかつてるわ。飛行機が地に着いて、乗客が大人しく機を降りたら、みんな話す」

「そうしてくれるとありがたいわね」

ナンシーはファースト・クラスに戻りはじめる。機内にはラルフ・クラインの聲がひびき、乗客たちがざわめいている。

ナンシーの後を追おうとした紗英は、背後に気配のようなものを感じ振り向いた。すると、トイレのドアが開いており、びしょぬれの利菜が、子供の利菜が涙をながしながら扉によりかかっているのが見えた。紗英は言葉をなくして眉をひそめる。おさせい……と彼女は考える。わたしたちはおさせいがかかっている。

はて、おさせいってなんだ？ と彼女は自らに問い返す。わからない。だけど、あの町にもどればなにかがわかるかもしれない。

利菜はノブにしがみついている。その彼女にトイレの中から溺死女の手が伸びる。

「あせらなくなつて、すぐに戻るわよ……」

振り向くとナンシーが怪訝な顔で待っていた。トイレに目を戻すと、扉は開いていたが利菜の姿はなかった。紗英はそれでも心の中で利菜に声をかける。

安心なさいよ。わたしはあんたがおぼれるのをほつといたりしない。
い。

あんたたちがおぼれるのをだまってみてたりしない……。

三

一九九五年 八月十五日 火曜日

紗英は神社への服埋めには参加しなかった。翌日には母親が塾に行かせるために迎えに来たからだ。紗英は帰りたくなかったが、事情を説明しようにも山へ行ったことじたいが内緒だった。塾が終わ

ると、母親は愛用のクラウンで待ちかまえていた。家に帰ると、コードレスの受話器は隠してあるという始末。これじゃあ電話もかけられないっ。紗英は勇気を出して寛ちゃん家に遊びに行きたいと言った。

母さんは何も言わなかった。無言でその場を立ち去ったのだった。紗英は母親には相談できなかつたし、あの服がどうなったのかは気になった。だから、友達が来ることを期待して外ばかり気にしていたのだが、その日佳代子たちの姿を見かけることはなかった（本当は来ていたのだけど、折悪しく紗英の目に止まることはなかった）。紗英は調子が悪かった。お腹が痛かつたし、便もゆるいようだった。頭も重かつたが、最悪なのは悪いことが次々に重なったことだった。こんなふうを考えるのはもちろん母さんにたいしていけないことなのだと思っていたけれど、朝一番に母さんが迎えに来たことが第一（近頃、母さんを見かけると、母さんのけわしい姿をみかけると、胃袋がきゅっと縮まるのだ）、ピアノの稽古ではピアノ線が切れた。二度ばかり転んだ。トイレに入っているとき、何度もノックされた（返事をして叩きつづけた。外にでると誰もいなかった）。部屋にいとベッドの下で物音がしたし、屋根裏をなにかが駆け抜けた。こんなこと今までなかったことだ。紗英の記憶には、おまもりさままでの出来事がきつく残っている。一人でいると流れてきた血のことを考える。達郎や新治が捕まえられかけたことや、なめ太郎のぎらぎらした目のことを、思い出してしまふ……。あいつの臭いも、あの山での風のことも……。

紗英は母親が出かけることを懇願したが、母さんは夕食が間近になるまでねばりつづけた。夕食の買い出しのために、やっとこ家を出たときは六時に近かった。紗英は母親のクラウンが立ち去って音が聞こえなくなるまで待った。聞こえなくなつた後も、しばらくじっとしていた。ばかばかしいとは思つたが、部屋を出るときは懐中電灯を用意していった。母さんに内緒で出かける、いない間に出かける、こっそり出かける。それって紗英にとっては命がけのことだ。

自分が叱られるのはいい。だけど母さんと父さんの喧嘩の原因を作るのは最悪だ。だって二人の怒鳴り声は紗英の部屋にまで聞こえだし、きくまいとしても紗英の耳は一字一句も聞き逃さずに記憶してしまう（もつとも、こうした無意識の記憶力は、フライトアテンダントの職についてからはずいぶん役に立った）。両親の会話の内容は、ふだん思い出さないようつとめる分、夢や何気ない不安に立ち替わるのが常だった。

けれど、紗英は二人の喧嘩よりなめ太郎の方が怖かった。そりゃあ両親の不仲は紗英の精神を追いつめはしたけれど、命の危険までは感じさせなかった。母さんと父さんはどっちが好き？ という母さんの質問は怖い。質問が、というか、母さんの目つきや態度が怖い。その目は真剣で、彼女よりもずっと追いつめられた雰囲気をもっているから。でも、それですぐに死んだりはしない、殺されたりなんて、しつこくない。

友達に電話をして迎えにきてもらってもよかったのだが、そこまで頭が回らなかった。母親がなにか気を変えて引き返してくるんじゃないかと思うと、一刻も早く自転車に飛び乗って出かけてしまいたかった。娘の逃げ出すところに母さんが鉢合わせしたらどうなるか、彼女は想像するだに恐ろしい。駆け足で階段を下りると、廊下を走って、細い足に靴をつっこみ始めた。玄関の鍵がぴたりとしまったのは、その格闘の真っ最中である。

紗英が気配を感じて顔を上げると、ノブについたボタンがゆっくりと押しこまれていった。彼女はだめだめと言った。靴は片方であきらめて玄関に走り寄った。ノブを押した。ボタンは返ってこなかった。

「母さん、ごめんなさい……」

紗英は扉の外に何か超自然的な物を感じていたにもかかわらず母親に謝った。そのとき電話のベルが鳴った。

電話のベルは静かな家の中ではやかましかった。紗英は飛び上が

った。そして、ふりむきざま足を滑らせ尻餅をついた。父さんからかもしれない、と思った。父さんは家に帰ってくるのが減ったけど、紗英のことをうるさく言わなかったし、塾にしばらく母さんのやり方を苦々しく思っていた。父さんは日本に戻ってから紗英の味方で（対して母親は、母親に味方するときのみ紗英の味方になってくれる、ギブ・アンド・テイクの存在である）、だから、紗英はその期待にしがみついた。

紗英は片足に靴を履いたまま、廊下に飛び上がると受話器をとった。石川です。と彼女は言った。相手は無言だった。

「お父さん？」

と紗英は訊いたが、電話は母親からだった。部屋に戻ってなさい。と母親の声があった。

かあさん……母さんじゃないでしょ？ 紗英は言った。相手は沈黙した。なんでわたしが部屋にいないってわかるの？ どこにいるの？

家の前にいるわよ。母さんは言った。

どうやって電話をかけてるの？ 母さん携帯なんかもってないじゃない……。

もってなくなっちゃったかけれるわよ！ と母さんは怒鳴った。それは母さんがヒステリーを起こしたときにそっくりな声なので、紗英は母親のそんなときの表情まで、とっくりと目に見える気がする。

ごめんなさい。家を出ようなんてしてない。

靴を脱ぎなさいよ……っ。

怒りに震えた声だった。紗英はあわてて靴を脱いだ。脱ぎました、廊下もちゃんと拭いておくから……。

そのさきを言おうとして、紗英は言葉を飲みこむ。家の中に入っ
てこないで……なんて、そんなこと母さんに言えない。

そう、わかったのならいいわ。と母さんは言った。あんた母さんの娘よね。娘は母親の言うことをなんでも訊くものよね。期待に
えるのが当然とは思わないの？

思ってる、わかってる。

じゃあ……そうしなさいよ。

紗英はそうした。受話器を置くと、靴を並べ直し、タオルで床も磨き、玄関マットもはたいておいた。

紗英は居間に入るとテレビをつけた。そのまま、本物の母さんが帰ってくるまで、じっとしていた。

四

紗英の一九九五年八月十五日の一日はそうして過ぎていった。それなりに楽しかった夏休みに、大きなかげりがさしていた。母親は大きな買い物袋を三つも下げて帰り、荷物をおろすのを手伝って、と言った。母親が紗英のご機嫌をとろうと、ごちそうをふるまうつもりなのがわかった（つまり母さんも自分でしていることを間違いだと思っているふしがあつて、そうでなかったら反省はしないんじゃないだろうか？ そうしたことも紗英にとっては不安の種なのだった。間違いだとわかって間違いをおかすのは、大人のやることだろうか？）。母さんはいつも通りで、紗英は電話の母さんは聞き違いじゃないかと思つた。どうやったらあんなふうに聞き違ふのかまでは頭が回らなかった。回したくなかつた。彼女は小学五年生のころでも、柔軟性なら大人よりもごまんとある。理屈をつけなくたってへいちゃらだ。母さんは荷物を抱えてご機嫌のようだった。今日はすき焼きよお、いっしょに作る？ と訊いた。紗英はうなずいた。そんなときの母さんは好きだ。自分のことを思ってくれていると、わかるから。

ご飯を食べおわると、母親は紗英が十時まで起きていることを許可した。本当は九時に寝なくてはいけないのに。これも彼女なりのギブ・アンド・テイクである。

その間に紗英は対策を重ねた。まず部屋に懐中電灯を二つ持ちこみ、大好きな音楽をいつでもきけるようにMDコンポをセットした。

念のため、ヘッドフォンも。両親の喧嘩が聞こえないように買ったものののだが、そんなものを使えば使うほど彼女の聴覚はとぎすまされ聞こえてしまう。しかし寛太郎から教わった腹式呼吸とやらは幾分彼女の役に立った。呼吸に集中していると声が遠ざかるからである。紗英はおかしも用意した。眠れない夜は、時間をしのぐ対策が必要だ。紗英はこんなことが（つまりはおさそいが）始まる前から、不眠症のなんたるかを知っていた。問題は電気を消さなくてはいけないことである。灯りは窓から漏れるから、母さんに起きてることがわかってしまう。そんな対策もあって、彼女は自分用に大きな懐中電灯を（利菜たちはそれをデンチ、デンチというので、彼女もいつしかそう呼ぶようになっていた）お小遣いで買っていた。対策には出費がかかる。これも彼女なりに学んだギブ・アンド・テイクの一つだった。紗英はいつも思うのだが、母親が教えなくなつて子供は学んでいるものなのだ。

利菜たちから電話はあつた。電話はその日一度だけ鳴つたのである。紗英は出たかつたが、母さんの方が早かつた。母さんは電話に向かつて、いえ、ありません。そして早急に切つてしまった。母さんは、父さんに電話よ、と自分から言つた。たぶん、うそだと紗英は思った。父さんへの電話なら、母さんはもつとていねいに話すし、自分からそんなふうに言うことじたい不自然だった。紗英は腹をたてかけたけど、これから夜を過ごすのに、平常心をかいてはいけな
いと思つた。よけい眠れなくなつてしまう。

そんなわけで夜が深まつたときも、紗英は覚悟だけはしておいた。今日の夜は格別長いに違いない。漫画も用意したし（あまり持つことを許してもらえなかつたから、大半は利菜と佳代子から借りたものである。ふだんはベッドの下に隠している。お菓子を隠すこともある）ポテトチップも布団の中に持ちこんだ。眠気が全くやつてこないことがわかると、紗英は布団の中でそれらを楽しみはじめた。漫画を読まずにとつておくのも骨である。新鮮なものほど眠れない夜にはきくものだ。よけい眠くなくなつてしまうのは問題だが、不

安を振り払ってくれるのなら、これって効果的なのではないか？

とはいえ、目が悪くなってしまうのは不安だったが。

コンポは使う必要がなく静かな時間が過ぎていった。利菜から借りた漫画はおもしろかった。姫ちゃんのリボン、とかいう少女まんがだ。懐中電灯のあかりのなかではあったが、紗英は夢中でむさぼり読んだ。

紗英は時間を気にする必要がないよう、ベッドに時計は持ちこまない。だから、それが何時だかはわからないが、部屋のドアがふいに開いた。紗英はどきりとした。彼女の母親は急に入ってきて、寝ているかどうか確かめることがある。そんなときは黙って出ていくか、布団をめくるかのどちらかだ。紗英はお菓子と漫画を、見つからないよう体の下に押しやった。彼女は正座の姿勢で丸まっていたから（その方が足を伸ばすよりも腰が楽なことを発見した）、布団が盛り上がっているのはまずいな、と思いながらデんチを消した。デんチを消すタイミングは早かったとも遅かったともいえない。

微妙な線だ。

ドアを閉じる音はしなかった。かわりに、ずるっ、ずるっ、と床をはいずるような音がした。変だな、と思った。母親はスリッパを履くし、歩く音にしては不自然だ。両神山のできことが呼び起こされる。紗英はそっと息をのむ。音が近づく。紗英は丸まったまま、

かあさん……？

と声をかけた。体になにかがのしかかってきた。

母さんっ？ と彼女はもう一度言った。そのときには、それが母親でないことに気づいていた。何者かがタオルケット越しに抱きつき、彼女を押さえこんでいる。紗英はふりほどこうとしたが、正座をした姿勢だから、容易に立ち上がれない。やめて、やめて。声にださずに言った。声に出すゆとりがなかった。布団がじつとりと濡れてくる。それにものすごく重たい。苦しくて、息が吸えなかった。このままだと押しつぶされるっ。紗英は切迫した気持ちとともに考えた。

「どいて……どいてよ！」

紗英は立ち上がるうとした。腕を必死に突っ張った。布団の隙間からは、誰かの手がベッドの縁をつかんでいるのが見える。真っ白な痩せた手だった。それが濡れて光っている。相手が動かない気だとわかると、紗英のパニツクはひどくなった。

おかあさん、おかあさん。彼女は叫んだ。紗英の視界に髪がぱらぱらと落ちてくる。紗英は頭に顔を押しつけられるのを感じた。そいつはその姿勢のまま荒い息を吐きはじめた。湿った息だった。腐った水の臭いがした。紗英は腹が立った。彼女は意見を表に出さない代わりに、自分の領域を大事にする人間である。母親が勝手に部屋に入ることによって腹が立つ。彼女は、出ていけっ、と念じた。火みたいな怒りだった。ここはあたしの部屋で、あんたなんかが入っていい場所じゃないんだっ。

紗英は腕をつっぱると、折り畳んでいた足をなんとか引きあげ、足の裏をベッドにつけた。そのまま脚力をつかっていきおいよく腰を跳ね上げる。布団がずり落ち、上に乗っていた何者かが床に転がる音がした。

紗英は勝利の表情を浮かべて、布団をのける、部屋の外を女が走って逃げていく。着物と長いウェーブのかかった髪が見える。白くふやけた足の裏が目には焼き付く。

溺死女だっ。と紗英は思った。

紗英は布団の上のデンチを拾い上げると、スイッチを入れてベッドを降りた。べしやりという音とともに、足の裏に冷たい感覚が走った。フロリングは女からしたたった水でところどころ濡れていた。紗英はその水たまりをデンチで照らしながら、女の後を追い始めた。廊下に出ると、女の足跡は左に曲がっている。

テンポの速い吐息が、廊下にいくつもはきだされる。温度が、下がっている。吐息が白くそまっている。女の姿を見失うと、紗英の怒りはかき消えた。追いつめて正体を確かめてやるうという気もこらしめてやるうという気もなくなった。

恐ろしくなってきた。

両親の寝室は向かい側にあつた。紗英はその扉をデンチで照らした。ドアは沈黙して冷たく見えた。非常事態ではあつたが、紗英はこんな夜遅くに起こしたら母さんはまた怒るんじゃないかと考えた。デンチを振る。廊下の奥にある物置のドアが開いていた、女の肩がのぞいている。デンチの明かりがぶつんと消えた。ひつと息をのんだ。廊下が暗くなる。そつと、一步、母親の寝室に向かって足を踏み出すと、物置の腕が上がり、おいでおいでをし始めた。着物の袖がゆらゆらした。

紗英が寝室に駆け寄ると、物置から女が飛び出してくる、すごい形相で向かってくる。紗英は悲鳴を上げて、寝室の扉を開く。真っ暗だ。紗英が振り向くと、女が追いついた。大きな目玉をぎよりと剥いて仁王立ちをする。

「どつしたの？」

ベッドで母親が身を起こした。枕元のライトをつけた。

紗英は溺死女を無視して振り向いた。母さんが薄明かりの中に浮かび上がっている。

「母さん……」

紗英は助けを求めようとしたが、首に溺死女の息がかかり、声を詰まらせる。溺死女が頭を紗英の後頭部にぴつたりとつけた。母さんは、夢でも見たの、もう二時よ、と言っている。紗英はおまもりさまの血がみんなに見えなかつたことを思い出し、この女も母さんには見えないんだ、と考えた。紗英はガタガタ震えてる。恐怖もあつたが、それ以上に身を凍えさす寒気つ、紗英は、これは死体の冷たさなんだと考える。もう母さんのベッドに逃げこむことしか考えなくなつた。紗英がベッドの方に歩いていくと、女がついてきた。背中にぴつたりはりついている。紗英の歩く速さにあわせ、ときどき体がぶつかった。女の息が頭にかかる。口にドライアイスを詰めこんでいるみたいだ、冷たい息だった。

「母さん、女の人の夢見た。死んでる女の人の夢……」

紗英が泣き始めると、母さんはびっくりしたようだ。彼女が布団を持ち上げると、紗英は矢も楯もたまらず母親の膝に倒れこんでいった。

母さんは、一緒に寝てあげるから泣かないのよ、と言った。

体を抱き寄せられた。紗英は母親にしがみついた。母さんは娘の体をだきながら、小さな子どもにするみたいにあやしだす。こんなふうを抱かれて眠るなんて久しぶりだから、溺死女のことさえなければ紗英はうんとうれしかったろう。そして、自分が母さんのことをどんなに好きかと言うことを思い出し、母さんを憎んだことを

ときどきだけ。それでも。恥ずかしく思った。紗英は母さんのあつたかさにほっと安堵し、胸に顔を埋める。彼女の服が濡れているのに母親は気づかなかつた。紗英はその日くたびれきっていたから、溺死女のこともしつか意識を離れていき、深い眠りについたのであった。

溺死女はその間もずっと枕元に立ちつづけたが、母さんは何も言わなかつた。

五

紗英はみんなに話した。溺死女のことを伝えるためには、昨晚の出来事を詳細に思い出す必要があつた。あいつの体の重さとか、息のかかつた感触を。紗英はときおり震えた。それにこんなホラー映画みたいな話を人に言ってしまうのは勇気がいった。ふつうはばかにされるんじゃないだろうか。どもつたし、のどを湿らすためには何度も唾を飲まねばならなかつた。しかし、みんなにはうまく伝わったようだ。紗英が話し終わると、彼らは青い顔で不安げに互いの顔を見交わしたからである。

それは翌日の早朝のことだった。一同は大森神社の境内に集まっていた。そこは紗英をのぞいた一同が、服を埋めた場所でもある。服は神社の裏にある林に埋めた。大森神社は本殿の他にも四つばか

り建物をもっている。本殿の隣には事務所（と利菜たちは勝手に思っていた）があり、境内には稲荷をまつた小さな社もあった。神社と林の向こうには古い農村の回り舞台もあって、昔はそこで演劇を催していたらしい。神保町ではもつとも大きな神社だった。

子供たちは賽銭箱の置かれた階段に座っていた。その日は雲と青空が半々くらいのおだやかな天気だった。日は陰ったり照ったりした。木漏れ日が境内の土と、子どもたちの肌をちりちりと焼く。そんな陽気のわりにはうそ寒い話だった。

境内は蝉の声で満たされている。利菜は青空を見上げながら、あんなことがあったなんてうそみたいだな、と思った。じつさい、服も靴もなくなつて、証拠がぬぐい落とされると、おまもりさまでの出来事が遠い昔のように思えた。そのぐらい現実感のない出来事だったのだ。昨日は家にもどつて親子どんぶりを食べたし、ドラマをみて笑つたりした。紗英の話を聞くまでは、このまま何とか乗り切れるんじゃないか、と思つたほどだ。

達郎はリトルの練習でいなかった。そのこともみんなの不安を大きくした。達郎も子供だけど、大人みたいにしっかりしている。責任感がある。それに自分の考えで、指示を出すこともできた。寛太郎ほどは頼りにならないけれど、でもみんなは何かあることに自然に頼りにしていた。

みんなは紗英の話を疑いはしなかった。でも、とまどっているようだった。

「溺死女つて、それつて発電所で死んだ人のこといつてるの？」

佳代子が訊いた。みんなは水力発電所に出るといふ幽霊のことを自然と連想したらしかった。

「夢じゃないの？」利菜が言った。肯定して欲しげにみんなを見回す。「なめ太郎もけつきよく見なくなつたじゃん」

佳代子がさえぎつた。「埋める直前まで服についた血が見えてたつてのにつ？ 神主さんにも見えなかつたんだよ」

激しい語調だった。利菜は黙りこんだ。気まずい沈黙が、空気に

落ちた。

「紗英はどう思うんだよ」寛太が訊いた。

「今朝起きてから、部屋に戻ったんだよね……タオルケットは乾いてたけど、床の水はそのままだったよ。残ってた……」紗英は地面に向けていた目を上げる。一人一人に視線をあてがう。「気にしない方がいいのかな？」

「水はどうしたの？」と利菜が訊いた。

「拭いたよ。母さんが、廊下の水たまり、ふんだんだけど……」

「気づかなかったの？」

「うん」紗英は涙がこぼれるのをこらえるみたいに、震える唇で唾を飲んだ。「スリッパはいてたけど、ふつう気づくよ。音もしたもん」と彼女は言った。「バチャって」

紗英は母親に気づかれぬようにその水を拭いた。ぞうきんを手にして廊下に広がった水たまりの前にたつたとき、その水がさわつた瞬間に消えてしまうことを願った。でも、水は消えなかった。雑巾にじっとりとしみこんだ。彼女はその雑巾を洗面台でしぼつたのだが、なんだかみじめな気がして泣けてきたのを覚えている。誰にも見えない、自分でも幻覚だと思いきもうとしている水を絞っている。ばかげた話だと思つたのだ。だけど、友達にはそんなこまかな話まではしなかった。

境内は静かで秘密の話をするにはもってこいだつた。紗英たち以外に話をしているのは、鳥ぐらいなものだった。

「またお被いするか」

寛太は蟻の行列に砂をかけながら言った。紗英は知らなかったが、寛太郎は服を林に埋めることになったとき、神主に頼んで土や服を清めてもらっていた。

佳代子が眉をしかめた。「家の中で？ おばさんになんて言うのよ。それに神主さん、あんどきも乗り気じゃなかったもん。こんどはじいちゃんが頼んでも、やってくんないに決まってる」

「じいちゃんに話す？」利菜が訊くと、「話さない」紗英は頑固に

言った。「怖がってたから、あんな目にあつたんだと思う」

紗英はあれは見間違いだつたんじゃないか、そうでなかったら、幻覚みたいなもんなんじゃないかと思いたかった。妖怪なんていっこないし、幽霊だつてもちろんいない。でも、この手である水を拭いたのは事実だ。利菜たちは、穴の中の服に土をかける瞬間も、血の痕が見えていたと主張した。寛太の言ったとおりだ。そんなに長く幻覚をみつづけるのはおかしいんじゃないだろうか？ 寛太郎に話すのはみんな気が進まないようだった。じいちゃんは、おっかながっちゃだめだと言った。神社に服まで埋めてもらったのに、そんな話をしたら、寛太郎はがっかりするんじゃないかとみんなは思った。

それからみんなの話題は自然と水力発電所にうつっていった。その発電所は川そばの急斜面にあつた。紗英の住む高台の東にあたり、大森神社とは真反対に位置している。急斜面にどでかい鉄パイプを二本のばし、小高い山上から水をおろしていた。パイプの真下に施設があつて、水の力を利用して発電を行っているそうだった。

紗英が溺死女の話聞いたのは、神保小学校の写生大会のときだった。四年生のときだ。紗英は転校してきたばかりで、すでに佳代子たちとは仲良くなつていた。溺死女は（そのときは溺死していなかった）牛と一緒にそのパイプに流しこまれてしまったという。水が流れこむさまを横手にみながら話を聞いたから、その記憶はなまなましく体に残り続けた。山上には小さなほこらもあつて、子供たちは女の霊を慰めているんだと勝手に思っていた。

「紗英ちゃんが見たのがあすこの幽霊だったら、やっぱりお祓いするのは正解じゃないかな」新治が言った。ひかえめで消え入りそうな、今自分が口にしたことを恥じているみたいな声だった。

「どついつこと？」

佳代子がやさしく訊いた（そんなふうにきかないと新治は話さない。引っこみ思案な奴だから）。新治は話した。もし、こういうお化けだとか妖怪だとかがほんにあるもんだとして、そうだと

も、おまもりさまとその人は関係がないから、化けて出てくるのは変だということ。その女は紗英が写生大会のときにしたことで怒っているのかもしれない。そうなると謝っておいた方がいいんじゃないかということ。

新治はしゃべるのが得意じゃない。上がり症気味だし、横から話をさはまれると、口ごもったり小さな声になったりして、黙りこんだり話をはぐらかしたりすることがよくあった。はつきり自分の意見を言わないのである。だから、みんなは茶々をいれずに真剣に訊いた。今も新治の顔は真っ赤だった。紗英は先生に当てられたときみたいだな、と思ったが、何も言わなかった。新治は話すのは得意じゃないが、馬鹿ではなかったからだ。

新治はみんなの注目を浴びながら必死にしゃべった。今日は暑かったが、それ以上の大汗をかいて話した。まったく頭に血が上ると考えをまとめるのにも一苦労する。だけど、友達は自分のことをよく知っているし、女の子は男の子とはちがう。真っ赤になったつてからかいはいはしない。新治は男の子というより、女の子という方が楽しさに合っていた。佳代子と利菜という幼なじみの親友もいたから仕方がない。男の子たちにはそのことだからかわれた。寛太は五年D組ではガキ大将といつてもよかつたけど、新治をからかうことはぜつたくなかった。（理由はわからなかつたが）それとない形で助けてくれることが多かつたのだ。みんな新治が話し出すとばかにしてろくに訊いてくれないが、寛太はいつだつて耳を傾けてくれた。寛太がいつでも相手の話を聞こうとするのは、いつだつて真剣なやつだからである（そこが問題でもあつたけど）。言葉に裏がなくて、思ったことをずけずけ言う。それに寛太は女の子と違って同情で物を言わなかつた。新治は寛太のことが、苦手だけど好きだつた（変な言い方だけど）。

「つまり自分たちでお被いをするってこと？　どうかなあ、むずかしいよ。あたしは神主じゃないもん」

と佳代子は言った。利菜も言った。「心霊写真のお被いってさ、

方法を間違つと、もっとのろわれちゃうんだって。テレビでやってた」

「やめてよね」と紗英が言った。「みんなどう思ってるかしんないけど、わたしは真剣に怖いんだよ。あいつに抱きつかれて痕もあるもん」

「ほんとにかよ？」

寛太が言った。うん、と紗英はうなずいた。あいつの指の痕はお腹にあった。しかし、男の子の前で服をめくるのが恥ずかしかったから、あまり詳しくは話さなかった。彼女が寄つてこないで光線を発射すると、寛太は黙った。新治が言った。

「あすこの祠にお供えするって言うのはどうかな？」

「まんじゅうをか？」

「でも、ちようどお盆ではあるよね」と利菜が話をしめくくった。

みんなは、写生大会があつたのは去年で、いまごろ溺死女が出てくるのはおかしいということ、紗英はパイプのそばには近づかなかつたから、女を怒らすようなことはしていないこと、あの祠は女のお墓とは思えないということ話を話し合ったが、結局祠にはお参りをするこゝになつた。

六

くだんの水力発電所までは、山の裏手の道を自転車で漕ぎ漕ぎ、十分ばかりかかった。子供たちが水力発電所行きを決めたのは、他に紗英を安心させるような方法を思いつかなかつたからである。それに寛太郎と歌は信心深かつたし、お供えをするというのも彼らの性に合っていた。

発電所のある川のそばの道は細かつた。対岸には広い二車線道路があり、吊り橋でつながっている。学校では危ないから近づかないよう注意があつた。発電所のパイプは山の上から施設まで百メートル近くある。真っ黒なパイプが二本、ずでんと丘を走っていた。

山上まではコンクリートの階段がついていた。金網で囲ってあり、ふだんは鍵がしてあって入れないようになっていた。施設は可動しているらしく、水の流れる「おおお」という音と、独特の機械音がした。

子供たちは寛太の家でろうそくと線香を調達してきた。しかし、実際に発電所の近くになると、誰もがおじけづいてしまった。黒光りするパイプはなんだかまがまがしかった。発電所の辺りはあまり日も差さずじめじめしていた。発電所の中がどうなっているか、わからないのも不安だった。子供たちは女が流れてきたときはどんな騒ぎがあつたのかと想像をたくましくした。

「上までずいぶんあるよね」と佳代子が自転車のキックスタンドもおろさずに言った。佳代坊主は幽霊話が大嫌いだったから、まったく気が乗らないようだった。ここまで来たのは紗英のためで、なめたくされた顔だった。佳代子はいつだって場の雰囲気明るくする子だったが、その彼女がふてだすとその気分はみんなに伝染しはじめた。肝腎の紗英まで縮こまってため息をつく始末だった。いちばん弱虫の新治が「い、行こうよ」とどもりながらも言わなければ、みんなは吊り橋を渡って帰っていたに違いない。

一行はろうそくと花をもって階段に向かった。

「上の水路ってさ……」

利菜の言葉を佳代子がひきつぎ、「金網もはってないよね。落ちたら、水に流されて」と言った。「後はパイプまで直行よ」

佳代子の言い方は生々しかった。みんなは自分が水路に流されるさまを想像して気分が悪くなった。

「祠におそなえするだけだよ。水路には近づかないもん」と紗英。「ここはおまもりさまじゃないしな」寛太は浮かない顔で、扉を開ける。簡単に開いた。ふだんは嚴重に鍵がかけられているのだが、子どもたちはそのことを知らなかった。扉の鍵は近くの草むらに転がっていた。「大人が見かけたら、止められるに決まってるよ」と

彼は言った。

しかし、階段をのぼりはじめても、施設から顔を出す大人はなく、辺りは静かなものだった。山は杉並木でおおわれている。みんなはおもまりさまのことを思い出す。紗英が溺死女を見たことを、そんな話を自分たちにしたことをひそかに恨みはじめた。階段の脇にあるパイプからは、水の流れる音がする。先頭に行く寛太がふと立ち止まり、そのパイプに手を伸ばした。ごごごごごつ、と地響きのような振動が手のひらに伝わってくる。

「おい、すごいぞ。ここまでがたがたするっ」

寛太がふざけてのどもとを指でさした。佳代子が怒って言った。

「馬鹿な真似するんじゃないよ。あたしはさつさとお参りして帰りたいんだから。紗英ちゃん、今日はおつかさんに頼んでさ、またみんなで寛ちゃん家に泊まればいいじゃん。あんなところにのぼるよりそっちの方がずっと安全に決まって……」

ドン！ となにかを叩く音がして、佳代子は利菜に飛びつき、紗英と新治は恋人みたいに手をつなぎあい（顔つきはちっとも恋人らしくなかったけど）、寛太はその場で尻餅をついて、尾てい骨をたたか打った。寛太がしこたま驚いたのは、その音が、パイプの内側からしたからである。ちょうどてのひらがあつた真下から。

みんなは寛太が転がっているから、逃げるわけにも行かずに彼のまわりに集まった。寛太はすっかり泡を食いながらもなんとか身を立てなおして手をついた。寛太はその音とパイプ越しとはいえ直接ふれあつた。内側からなにかがパイプを叩いた。ものすごく邪悪なものを感じた。殺意にも似た、わるいものを。

パイプは内側からどんどんと大きな音をたてつづけた。まるで、中から拳で叩いているみたいだった。一同は顔を見合わすと、慌てて階段を下り始めた。寛太が振り向くと、山上では着物を着た女がこちらを見下ろし立っていた。逃げる逃げると口々にわめき、転げるように駆け下りる。自転車に飛び乗ると、吊り橋をゴトゴトゆらしながらわたった。

二車線道路の日だまりの下までくると、ようやく自転車をとめた。新治は山上に黒々とした穴が開いていて、そこから女が姿をあらわすのを確かに見たとおもった。彼は発電所に目をやった。川を挟んで吊り橋でつながっている、ここからだと大海の孤島みたいに見える。彼の目には、水力発電所はすごく離れて見えた。その方がよかった。

佳代子のはあはあと吐息をついて、ハンドルの間に突っ伏した。

「こ、腰が抜けた……」

寛太が大笑いした。佳代子が怒鳴った。「本気だよ、ばか！」

寛太はまだ笑いながら手をふった。「あ、あんな音、パイプになにか詰まったか、木の枝が流れこんだに決まってるよ」

「詰まったって、なにが詰まったの？」

利菜が真顔で訊いた。寛太は真顔で言い返した。

「やめるよな、ばか」

彼が自転車を押し出すと、新治が呼び止めた。

「ねえ、これはどうすんのさ？」

寛太は新治が手にしている花と線香を包んだ新聞紙をみた。彼はため息をついて引き返してきた。子供たちはしかたなく、発電所の入り口のガードレールに、花とまんじゅうをそなえた。みんなこんなことが効果があるなんて思っていなかった。さっきのが幽霊の仕業だとしたら、おっそろしく悪意を持った強烈なやつだ。子どもたちはろうそくに火をつけ、線香を燃やした。それからちよっとお祈りをしてから、帰り道についた。

その日は畑に出たり、水をぶっかけあってふざけいつものように一日を終えた。女の子たちは約束どおり寛太の家に泊まり、新治は帰った。誰も発電所の話はしなかった。

いつもと同じようにふるまっていると、おまもりさままでのことや、溺死女のことなど忘れることはたやすかった。彼らは子供で心も体も柔軟だった。だけど、それからもおさそいはつぎつぎと起こったし、世界はねじまがりつつあった。二十五年後には、彼らははつき

りと自覚してこのことに立ち向かうのだけど、このときは自分たちの身に起こりつつあることについて、何もわかっていなかった。世界がねじまがっていることに彼らが気づいたのはずっと後のこと、なめ太郎や溺死女が妖怪や幽霊なんて単純なものではないことを理解したときには、かなりのことが手遅れになっていた。彼女たちはしだいに寝付きが悪くなり、やがては眠りながら出歩くようになる。結局、溺死女のできごとは、その夏つづいたおさそいの、手始めにすぎなかったのだ。

第四章 尾上新治、マジシャンに会う

第四章 尾上新治、マジシャンに会う

二〇二〇年 神保町

七

新治は山の中腹にある自宅から、神保町の夕景色を見下ろしていた。その自宅は彼が手ずから建てたログハウスで、むきだしの丸太に影が落ちていいる。新治は輪切りにした櫛の椅子に座り、右手の金槌をもてあそんでいる。山裾からは風が吹き上げ、洗いざらしの力ツターをわずかにはためかせている……。

おのうえ 尾上新治は、高校を卒業すると、地元の建築家のもとで大工の基礎を学び始めた。眼鏡ネズミも得意なものを見つけたのである。もともと中学のころから工作には熱中していた。高校生になると、寛太郎が伝喜代という老人を紹介してくれた。伝喜代は小柄で痩せていたが、腕のいい職人氣質の男だった。新治は休みを利用してその老人のところでバイトに精を出すようになった。伝喜代は子供みたいな背格好なのに、腕はすこぶる立った。伝統工芸にも精通していた。一方新治は自分の体格には劣等感をもっていたから、はじめて会ったときから伝喜代と工芸にひきこまれていった。伝喜代は広く名を知られたわけじゃないけれど、きつと隠れた名人なのだとおもった。

新治は自分がこの手の物作りに才能があることに気がついていて、自分が作るのは椅子のようで椅子じゃない。言葉を正しくいうなら、きつと芸術なんだと彼は思った。

兄の達郎が、そんな新治の工芸熱にひきこまれるようになったのは、大学で肩をこわしてからである。達郎は野球ができなくなった。

彼は打ちこめるものをなくし、自堕落な生活に身を落としていた。地元にもどった達郎は、伝喜代のところに寄宿していた新治のもとを訪ねた。達郎は工芸家になろうとしたわけではなく、からかい半分遊び半分の気持ちで、金槌を手にしただけである。彼の肉体はもう球を投げれない。だけど心はまだ野球に向いていたし、彼の精神は、球を投げ、球をとり、球を打つことを欲していた。彼が引きこまれたのは、伝喜代と新治であつて、二人の打ちこむ姿にだつた。彼はふたたび打ちこめるものを求めていた。達郎は野球はできなくなつたが工芸はできた。その世界は真剣にむきあつてみると、野球に負けないぐらいおもしろく、複雑で長い通路が広がつていた。野球道があるのなら、そこには工芸道とも呼べる何かがあつた。達郎は新治と伝喜代を通して、ふたたび打ちこめる自分を見いだした。彼の伝喜代通いはひんばんになり、やがて大学に在ることの方がすくなくなつた。彼は伝喜代の家に寄宿するようになった。大学は単位を落とし留年をし、やがて放校になつたが頓着しなかつた。兄弟は工芸に熱中した。伝喜代が死ぬまで、その生活を続けただけのことである。

伝喜代は死んだが、二人のところには仕事がひっきりなしにやつてきた。伝喜代と暮らした八年間で、二人はじつに多くのことをあの小柄な老人にたたきこまれた。新治たちは伝喜代の後を継ぐ形で工務店をはじめた。工務店の名は、伝喜代、といつた。二人は自分の仕事を金儲けというより芸術のように思つていたから（そんなふうに話し合つたことも、口にすることもないが。そのような感情は常にあつた）、多くの同業者が真似のできない、いい仕事ができる。新治が伝喜代のもとを訪ねてから十八年がたち、二人はりっぱな職人になつていた。

新治の家から少し離れたところに達郎の家がある。江戸時代に建てられた古民家を買取り、解体したものをこの山腹に運んで建て直したのである。家も気に入つたのだが、その作業は二人にとつては勉強代わりでもあつた。かれらは飽きるほど物を作つてきたが、

工芸に対する情熱はまったくおとろえることがなかった。

「おいちゃん！」

達郎の家の小道から、裕太がかけてきた。兄は五年前に結婚している。裕太はその息子で新治にとっては甥にあたる。彼自身は三七才になって、いまだに独身だ。

三歳になる甥っ子が新治の膝もとに身を投げ出す。物思いにふけていた新治は、裕太の向ける明るい笑顔にふと救われたような気になる。

神保小の四年生、奥村民雄がいなくなったのは二日前のことだ。

五日前は中野区のアパートで殺人事件があった。

新治は裕太の頭をなでて言った。「裕太、もう飯時だろう。じきに暗くなっちまうぞ。家に戻った方がいいんじゃないか」

「かえらなあい」

裕太は新治の腕で、ぶらさがり遊びをしはじめた。

「おいちゃんここに泊まるのか。でもいいにおいがするなあ」

新治は匂いをかぐ仕草をした。裕太もかいでいる。夕闇に達郎宅から肉じゃがとおぼしき匂いがただよってきた。

「おいちゃんといると食いのがすぞ」

「おいちゃんがうちにきたらいいのに」

「おいちゃんは仕事があるからなあ」新治は残念そうに言った。「裕太、危ないから、暗くなる前に帰れ」

「あぶなくないよ」

「あぶないよ。夜は外に出るなよ」

新治は本気で心配して言った。いまの神保町は危ない、と彼は思う。裕太はしばらくこの町から離れたほうがいいんじゃないか、とさえ。不眠症は収まりかけていたが、幻覚は今もつづき、仕事も手に付かなくなっていた。怖れていた幻覚の実体化もはじまりだした。おさそい、と佳代子は口にした。四人で両神山を訪ねたときのことである。おさそいはみんなを追いつめていた。兄の達郎もすっかり調子を崩し、二人は仕事を断るか先延ばしをするを得ない情

況に追いこまれていた。もっとも、このぐらいでは、工務店伝喜代の屋台骨はぐらついたりはしない。

ぐらついているのはおれたちだな。新治はため息をつきながら、甥っ子の頭をほとほと叩いた。やれやれだ。二日前、奥村民雄の行方不明を知ったときには、達郎さえ、おまえ、うちに泊まりこんだ方がいいんじゃないのか、と切り出した。新治は冗談かと思いきや、飛ばそうとしたが、兄は本気だった。二人とも記憶がもどるにつれ、身の危険を感じるようになっていたからだ。

そんなわけだから、今兄の家に行く気はしなかった。この危機をのりきるのは、いつだって腹腰を定めることなのだと思っていたからである。あの夏を五体満足で乗り切れたのは、みんなが不安や恐怖といったものを腹を据えて乗り切ったからだ、と彼は信じていた。不安を追い払うのはいつだって信じる心なのだ。最初にそれを教えてくれたのは寛太郎だ。その後は伝喜代が、彼ら兄弟を鍛えてくれた。

「うちにもどれよ。そのかわり、明日はおいちゃんがたっぷり遊んでやる」

「やだなあ、明日なんて」

といいながらも裕太はとことと来た道を引き返し始めた。新治は裕太の尻のポケットにビニールボールがねじこまれているのを見てぎよつとした。

「ゆ、裕太あ」裕太が振り向く。彼は夕日の中で輝く裕太の顔にかつての友達を子供たちをのぞきみる。「そのボール誰にもらったんだ」

「外人のおっちゃん」

新治が声もなく呆然としてみると、裕太は続けてこう言った。「手品みせてくれた」

裕太が家に向かって走り出す。新治は、知らない人には近づくんじゃないぞ、と声をかけた。小道を遠ざかる裕太の背中を視界におさめながら、新治は、マジシャンだ……、とつぶやいた。あの夏に

見たマジシャンのことを思いだした。マジシャンは金髪で長身の優男、おまけにとてつもないいじめっこだった。大人で外人のいじめっこだ。その姿を、面影を頭に描き、新治は震えた。じつとしていると、すべての記憶がよみがえってきそうで、彼はそつと小道に背を向ける。おれたちのマジシャン……。それとも利菜の、佳代子のマジシャンだったんだろうか？　ともかく、あの夏はマジシャンのやつにしてやられた。とことんおっかない目にあわされたのだ。新治は裕太にビニールボールを渡したのがマジシャンであると疑わなかった。

兄貴はあのボールに気がついてるんだろうか？

新治はよろめくようにしてテーブルに近づいていく。あのボールについた細かな傷まで思い起こせるようだった。あのボールはマジシャンとともに彼らにつきまとったのだから。そのマジシャンが二十五年目にして戻ってきた。しかも、ビニールボールを甥っ子に手渡す念の入れようだ。恐怖のマジシャン　あのマジシャンは夏中彼らを追い回したのではなかったか？　溺死女も。なめ太郎も。

あいつらはいったい何だったのか？

彼らがああ夏に、おまもりさまのおさそいが、少なくともお化けや幽霊のたくいではないことに気がついたのは、結局はマジシャンの存在だった。あいつは実在した人間だったからだ。

今は専門店が多く入り、咲ランドというこじやれた名前も付いているが、一九九五年のジャスコは六階建てのさびれたビルだった。当時は最上階に服やアクセサリーが置かれ、屋上には子供用のアトラクションと望遠鏡があった。あの夏の前年、マジシャンはジャスコの屋上でショーを行うために、アメリカから来日していたはずだ。新治たちもトランプを華麗にあつかう男の姿を何度か見たことがある。その男はおそらく二十代前半の若者だったのだろうが、新治の記憶では子供に性的ないたずらをするという事件をおかしたはずだ。逮捕されたあげくに、本国に強制送還されたのではなかったらうか？　佳代子たちはあいつの生き霊だとか言っていたが、そうではな

い。おまもりさまから出てきたもの　あるいは今も彼をとりまくものが。なんであるにしろ　そいつはみんなの恐怖や記憶を食物にしている。わるいもの（そう、あの頃はこの現象をそんなふうに呼んでいた）は心を映す鏡のようなもので、彼らの悪い心を具現化している。だが、それ以上のものでもある。溺死女もマジシャンも、じつさいに現れたときは思い描くよりもはるかに邪悪になつていたからだ。

新治は神経質に髪をかき上げる。

新治は金槌をテーブルにおいた。手になじんだ道具ではあつたが、人に向けてみたいという衝動が心から離れない。彼はこう考えた。あの夏におれたちは最終的に答えを見つけたんじゃないやなかったのか？　だから、おさそいは終わりを告げたんじゃないのか？　記憶がなくなつた原因はその辺りにあるんじゃないのか？　明日はあのボールを捨てるように言つておかないとな、と新治は思う。裕太は強情だから、なかなか骨の折れる作業だろう。

なに、それだつておまもりさまのおさそいに比べたらたいしたことはない。

へみたいなものだ。

新治は庭の端により、神保町の家並みを目に納める。彼らはあの夏休みのことをかなりの部分で思い出していたが、なぜあのおさそいが終わりを告げたのかは今もつてわからなかった。そのことを確かめるために戻つた両神山からは、ほうほうの体で逃げ出す始末。佳代子も寛太も憔悴して、おまけに頼りにすべき寛太郎（伝喜代、伝喜代を忘れてはいけない）はいないときている。事態は25年前よりはるかに悪くなつていいる。彼らはもう子供ではなく、柔軟でなければタフでもない。

新治は、なにかを信じるには、自分は年をとりすぎたのではないかと考える。信じる力は、薄れてしまった。それをなくすというのは、可能性をなくすということじゃないのか？　力を薄れさせたのは、見栄や体面なのかもしれないが。

新治は25年の月日を思いしばし呆然となる。物事を色眼鏡で見
るようになったし、悪い経験も重なっている。真つ直ぐ生きたとは
とても言えない。彼も彼の仲間も、おさそいに、わるいものに立ち
向かうには、トウが立ちすぎたという感じだった。

なにより、事態は悪くなる一方なのに、彼の仲間はまだ全部そろ
つては、いなかったのである。

八

再び、一九九五年 八月十七日 木曜日

一九九五年の尾上新治は眼鏡ねずみと呼ばれていた。あの頃の友
人たちに新治はどんなやつかと訊いたら、目立たないやつ、大人し
いやつ、後は眼鏡と出っ歯で、同級生ときたら他に特徴を上げられ
なかった。それって取り柄といえるもんじゃあない。利菜や佳代子
といった幼なじみの面々なら 本好き、器用、気の利くやつ、や
さしいやつなど もう少し具体的なことをいったかもしれない。
本当の新治は物事を深く考えるやつなのだが、だけど、その分きま
じめで神経質な面がある。なにかをやるには慎重すぎるし、よけい
なことにまで気を回すのが癖だった。だから、寛太の家に泊まりこ
んでいたときでも、こんなに長く帰らなかつたら、母さんや新しい
父さんが気にするんじゃないかと考えた。両親は自分たちの結婚の
せいで家に寄りつかなくなつたのではないのかと考えるかもしれな
い。

それに自分がいないと、達郎が二人の間で二倍は気を使うことにな
る(と思う)。新治は新しい父親をそんなには嫌ってはいなかつ
た。いい人だ。でも、父親とは思えない。彼の父親はまだ生きてい
たし、会おうと思えばいつでも会える。現に達郎はいつでも会つて
る。新治にとって新しい父親は、気のいいおじさんに過ぎなかつた。
彼の心は父さんが二人いるなんてそれこそ変だと叫んでいた。でも、

彼の母親にとつては大事な人だ。新治は新治なりに、新しい両親にたいして折り合いをつけはじめた。彼があつた夏に急に大人び始めていたのは、こうした家庭の事情が重なつていたからだ。

溺死女の一件は子供たちに衝撃を与えはしたものの、それが徹底的なダメージとなることはなかった。彼らはこどもで溺死女の出来事を受け入れるだけの下地はまだあつた。結局は幻覚や聞き違いの一種なんだと思ひこむことにしたのだ、ノックアウトはまだ早かつた。軽いジャブを二三発、強烈なストレートをまともに食らつたわけじゃない。

新治は一件の後、二日ばかり寛太の家に泊まりこんでいた。女の子たちも一緒だつた。新治は自分が殺されたり何かに追いかけられたりする嫌な夢を何度も見た。そんなとき、目が覚めて隣に友達の姿があつたりするとほつと安心するのである。その友達が同じように悪夢にうなされていたとしてもだ。

だけど、いつまでも泊まつてはいられない。それは他の友達もおんなじだ。佳代子は母親のもとに帰ることを怖がつていたが、妹たちを放つてはおけなかつた。家を空けるのはいいが、しつぺ返しのお仕置きが怖い。その夏佳代子はふらふら出歩いていることを理由にこつぴどくぶたれることが何度かあつたのである（とはいへ、彼女の母親は娘の夢遊病についてまでは気がつかなくかつたようだが、新治の目から見ても、佳代子の母親が気づかないことはかなりたくさんあるように思う）。それに比べたら利菜の方はまだましだ。利菜の両親は彼女に対しては甘かつた。ただ彼女の母親は、新興宗教にどっぷりとはまりこんでいた。父親や娘におかしな様子を見せていた。利菜だつて悪夢や一人で寝ることへの不安はあつたが、家に帰ることに賛成した。母さんが心配だつたから。紗英に関しては、もはやくどくど述べる必要はないと思う。

一九九五年の夏、友達と別れた尾上新治は、一人図書館へと向かつていた。こんなときになんだが、本を手に入れるつもりだつた。できれば子供向けの（魔女の宅急便とか）童話がいいだろう。そり

やあ家には兄がいるし、両親も（ちぐはぐながら）そろっているが、眠れない夜を過ごすのはいつだって一人きりだ。新治にとって本は時間を忘れさせてくれるかっこうの道具だし、ときとして現実だつて忘れさせてくれる力があつた。尾上新治としてはその両方の効果を期待して、図書館までの坂道をえつちらおつちら、自転車をおしおし登つていったわけだつた。友達をさそつてもよかつたのだが、寛太は本なんて読まないやつだし、佳代子や利菜をさそつたら目的が見透かされそうでいやだつた。眼鏡ねずみだつて、女の子には見栄をはる。

その図書館は青葉図書館といつて、佳代子はだつさい名前と鼻で笑つていたが、新治はあの図書館の開放感が好きだつた。外壁は一枚ガラスで仕切り、光がふんだんに入ってくる。外には芝生敷きの庭が丘状に広がつて眼に優しい。明るい色の床板も好きだ。比べると、階段も本棚も、よく磨きこまれて黒光りしている。一階の半分は読書スペースになつていて、ソファ、大机、一人用に間仕切りにされた机、パソコン、テレビが用意され、好きなようにくつろぐことができる。雑誌や新聞も常備されていた。二階はロフト状に作られていて、読書スペースは全体が吹き抜けになつている。おかげで内側からは天井が外観よりも高く見えた。ここの開放感はまったくすばらしい。新治は机に座つていても、一、二階の本棚を両方見渡すことができるし、人の流れを観察できた。一杯50円のコーヒーカープをすすりながら大学生やサラリーマンが静かに読書をしている、そんな中にまじつてみると、新治は自分が大人になつたような気がしてくる。彼は（無意図的ではあるが）大人になることを求められていたから、だから、あの図書館に行くとはつと安心するのである。

正面玄関に回りこみ、自転車置き場に愛用のマウンテンバイクを置いた。彼は周りを見回して変なものが見えないことを確認する。何もいふことがわかると中に入った。

図書館は照明を落としていたが、外から入る採光のおかげで十分

に明る。席に着いている人は五人いる。奥の棚でも人がちらほらしている。新治はほっとした。ここは大人の居場所だ。ここにいれば幻覚なんて見ないんじゃないかと彼は気を強くする。新治はここ数日みてきたものを否定しようとした。あんなの幻覚だ、幻覚。寛太の家からねとまりしていたときも、人影や軒下に見える目玉に悩まされていたし、幻聴も何度か訊いた。子供たちはそうした現象を？わるいもの？と呼んでいた。それは「わるいもの聞こえた」とか「わるいもの見えた」といったふうに使われた。新治はおまもりさまに近づいてからというもの、繰り返しわるいものに出くわした。

とはいえ、寛太郎の言ったことはほんとうだった。腹を作って

寛太郎はよくこんな言葉を使う。新治には正確な言葉の意味はわからなかったけど。そういう言葉を使っていると落ち着くのはほんとかだ。子供にとっていつとうだいじなのは、くだらないへ理屈よりも、直観や事実なんじゃないか？ あんなのうそだ、見間違いだとかがんばれば、わるいものは見えなくなった。子供たちはどうやら悪い気持ちや考えがわるいものをおびきよせているのだということに、おぼろげながら気づき始めた。困るのは幻覚がしつこく現れることだ。新治は友達はもうなめ太郎もなにもへっちゃらになって、わるいものは見ていないんじゃないかと思うと不安だった。

新治は受付の脇を通って、子供用の本が並んでいる通路に向かった。軽い本を数冊と重い本を一冊借りるつもりだった（新治の言う軽い重いというのは、重量のことじゃなく内容のことだ）。軽い本は彼を楽しませてくれるし、重い本は眠らせてくれる。

新治は顔見知りになっていた受付のおばさんにこんにちはといった。彼が通り過ぎようとしたとき、こんな声がかかった。

「新治」

新治は振り向いた。後ろから呼ばれた気がしたが、こつちを向いている人はいない。新治は呼びかけてきたのが兄ちゃんだったらよかったのに、と思った。だけど達郎は、こんなときでもリトルリトルだ。

新治はこの数ヶ月ばかり、自分が宙ぶらりんになったような感じがした。頼れるところがなく、彼の立場は不安定だった。家にいる父親はおじさんでしかない。なのに、ほんとの父さんとは長いこと会っていないかった。会ったとしても少し話をするぐらいで、すっかり疎遠になっていたのである。

母さん？

母さんはいるが、今ではおじさんにとられたかっこうだ。二人は兄弟にあれこれと気をつかっていたが、新治は距離を置くようにしていた。小学五年生の彼にはどう接していいものかわからなかった。自分が邪魔者になったような気さえした。一方、ほんとの父さんには達郎がべったりだった。新治は本物の父さんにも、遠慮して会わなくなつた。達郎は新治が父親と仲良くしたからって腹を立てるような兄貴じゃないが、なにかあるとすぐ気が引けてしまうのは新治の性格なんだから仕方ない。今新治が頼りにできるのは友達だけだった。

「新治」

新治は思わず、誰？ と返事をしてしまった。受付のおばさんが顔を上げて、不審な顔で彼を見た。

幻聴つてやつだ、またうその声を聞いたんだ。

新治はごくりと唾をのみこむと、意を決して通路を進んだ。図書館でゆっくりしよう、家じゃあのんびりできないからと思っていたが（部屋にこもって本を読んだりしたら、おじさんや母さんがへんに気を回す。新治は人一倍気を使う一方、人に気を使われるのがいやな人たち）、今ではここを出たくて仕方なかった。ゆっくり本を選ぶなんてやめてしまおう。魔女の宅急便でも借りて、重い本は適当に選ぼう……。

ここにきて新治は友達をさそわなかったことを後悔しはじめた。彼は急ぎ足で一階の中央を進んだ。ときどきふりむいた。図書館の静寂が好きだったのに、今はこの静けさが不安で仕方ない。彼は、みんな自分に気づいてないんじゃないかとすら思った。さっきの声

に気づいていなかったみたいに。

新治は、なにも聞こえやしなかった、聞き違いだ、空耳だ、気をしっかり持て、と寛太郎がそばにいるみたいなきもちになって、必死で自分を保とうとしたが、

「やめとけよ」

声をかけられた。背中に蛇がはうような悪寒が走り、新治は、後ろに誰かいる、と信じた、誰かが立っている気配がした。彼はぴくりとも動けなかった。自分の影にもうひとつの影がかさなりあうのを見る。せいたかのっぼな影だ。新治は恐怖をふりはらいぐつと顔を上げる。三歩歩く。影はついてくる。それに足音がした。でっかい革靴が立てるような、しっかりした音が床をこづいている。新治は、怖がっちゃだめだ、と自分に言い聞かせる。わるいものは、新治たちが恐怖を感じるほどに強く具現化してくる。ちょうど紗英が溺死女に抱きつかれたときのように。気を強くもっているときは、やつらはおぼろげな影でしかない。でも今は……。

新治はここには誰もいないんだと思いこもうとしたが、背後の男は新治の肩に手を置いた。

「もうよせよ。強がるのは」

足が震えて、尿道におしっこがながれこむ。もれそうになる。新治はこみあげる吐き気を必死にのみ、

「あんたが幻覚じゃなくて、本物だって言うんなら、ぼくは人を呼ぶ」

新治はできるだけ気丈に答えようとしたが、声の震えは彼の期待を裏切っている。くすりと笑う声がある。後頭部に誰かの顔が近づく。男は言った。

「やってみせろよ」

新治は思わず振り向いた。男の青い眼とかちあつた。高い鼻、長い金髪の髪。細い顔をしている。シルクハットをかぶってる。燕尾服を着こんでいる。彼は身をかがめて、それで眼鏡ネズミの新治とも同じ顔の位置になっている。でも、すごく背が高い。頬には赤い

ひっかき傷があった。

「マジシャンだ」と新治はつぶやいた。足から力が抜け、くずおれそうになる。

マジシャンが手を打ち合わせて腕を広げた。すると空中にトランプが出現し、床にちらばった。彼は新治の肩に手をかけた。

「本なんて読むのはやめる。マジックを見たくはないか」

新治は首を横に振った。振ったのに

「見せてやるよ。うんと怖いのを。質問に答えてくれたら、うんとすごいを見せてやる。松井の息子がどうなったと思う？」

新治はそんなの見たくないよ、と言おうとしたがマジシャンの殺意のこもった目玉が答えさせてくれない。松井の息子は死んだ、と新治は繰り返しそのことを考えた。松井の息子は父ちゃんに殺されたのだ。義理の父親に。松井の息子はまだ四つだった。

マジシャンはそのでっかい熱っぽい手で（なのに冷たい）新治の顔をつかみ上げた。「町で子供がいなくなるのは、なあんでだ？

松井の親父が息子をいじめたのは、なあんでだ？ おまえの親父がおまえに見向きもしなくて兄貴にばかりかまってるのは、なあんでだ？」

新治は震えて答えることができない。内臓は縮み上がって、呼吸が止まつてる。マジシャンは続けた。

「母親だって、おまえに見向きもしない？ みんなおまえが大事じゃないんだ」

マジシャンは新治の顔をはさみ上げた。喉がのびて息が苦しくなった。マジシャンがカツと口を開けると、オオカミみたいに凶暴な牙がのぞいた。

「そんなのうそだ」新治は言ったが、声は震えていた。

「答えは外れだ。できそこないの眼鏡ネズミめっ」

「ぼくはできそこないじゃない。手を離せっ」

新治がわめくと、通路の奥から若い男が顔をのぞかせる。新治のおびえた泣き顔と目が合う。でも、その大学生は変な顔をしてひっ

こんでしまつ。マジシャンは肩をすくめて言う。「助けなんてないさ」

「おまえは……」

新治は言い返そうとしたが、喉が詰まってできなかった。かわりにマジシャンの手を振り払ってその場から逃げだした。涙を流し、はあはあ息を切らし、通路を駆け抜けた。スニーカーの足音が二階にまでひびきわたるが、かまってなどいられない。両神山でなめ太郎に足首をつかまれて引きずり倒された。そのときの恐怖がまざまざとよみがえる。新治はトイレのドアを開くと、中に駆けこみ扉をしめた。ドアには鍵がなかった。新治は扉に頭を押しつける。

「助けて、助けてじいちゃん……」

「寛太郎なんていないだろうが」

マジシャンは世界一性悪ないじめっこそのものだった。新治が振り向くと、マジシャンは先回りをして用を足していた。燕尾服を着こんで、シルクハットをかぶってはいるが、振り向いたその顔は義理の父親のものだった。

「おじさん……」

「お父さんと呼べよ」おじさんはしょんべんを終えたのか、ジツパ一を上げながら振り向く。「おれはおまえの母ちゃんと結婚した。だから、おまえの父ちゃんだ。ちがうか？」

三田のおじさんは、ひねくれて唇をむいてしゃべっている。新治はそんな姿をはじめて見る。そんなふうに変えられるのが怖くもあった。こころのどこかではいつかこんなふうにおじさんにひどい目にあわされるんじゃないかとおびえていたから。

あれはおじさんじゃない、マジシャンだっ。

新治は後ろをむいた。ドアノブに手を伸ばして……ノブがなかった

「そんな……っ」

新治はドアに手をかける。「誰か……」震える手でドアを叩く。弱々しく……だけど、マジシャンが近づいてくるのがわかると、き

つくたたき出した。「誰か！ 助けて！ ドアを開けて、開けてよ！」

新治は肩をつかまれたかと思うと、後ろにふつとばされた。そのときにはマジシャンは変身を終えていて、お気に入りのおじさんがだ）スーツに着替えている。

「おまえとは仲良くやりたんだ」

「やってるよ。いつも仲良くしてるよっ」

「してないじゃないかっ」おじさんは新治の胸をついた、何度も、何度も、何度も。「おまえは心を開いてないっ。いつもいつもおれの顔をうかがってるじゃないかっ。おれのことを怖がってる、何を考えてるかさぐりを入れてるっ。それで家族といえるかっ？」

びっくりしたことにおじさんは眼に涙をにじませている。いつもは大人しい人なのに。子供たちに対しては声を荒げることもなかった。

「おまえはひどい子供だ。すこしもいい奴じゃない。おれはやさしい、いい子供だと言ってやったのにな」

おじさんは確かに言った。ずっと前のことだが。母親が三田とろくに話をしない息子を見て、なじるように大人しい子でねえ、と言うと、おじさんはそんなことはない、やさしいいい子だと言ってくれた。新治が本当の父親のところに行かなくなったのはそれからだ。ささいなことだけど、本当だ。このおじさんがなんであれ、そんなことまで知っていることに新治は驚いた。

「そんな、そんなつもりないんだ。ぼく、おじさんのことよく知らないし……」

「知らないんじゃない、おまえは知ろうともしなかったっ。おれからは一生懸命歩み寄ったというのにだぞっ。そんなことは、ひどいじゃないか……」

三田は首を垂れてしよげはじめ、持っていたスニーカーがトイレの床に落ちた。三田自身は偽物でも、傷ついたところは本物だった。新治はその傷みを感じ、苦しくなる。三田に対する恨みみた

いな気持ち、それとは正反対の罪悪感は、以前からあった。三田がいなければ父さんと母さんは元に戻れたかもしれないと思っていたからだ。この三田が何であれ、言っていることはよくわかった。新治は目の前の三田が本物にしか見えなくなった。その瞬間、偽物の三田を受け入れかけたのだが、彼はやつとのことと言った。

「おじさんは……おじさんは本物じゃない……」

「本物の父さんじゃないと言いたいんだなっ。おまえはまだあのボロアパートに住むろくでなしを父親と思っているのかっ。おまえは達郎とおんなじだっ」

「ちがうよっ、おじさんは……」

「父さんと呼べと言ってるだろっ！」

「うそだっ」後ずさる。壁に当たる。「前はなんて呼んでもいいって言っただ。母さんが、ぼくらがおじさんと呼んでるのを怒ったら……」

「そんなもの、本心のはずがあるか！」

三田は駆け寄ると新治の襟首をつかんだ。新治はつかみ上げられて、個室のトイレに押しこまれた。新治は暴力をおそれ、頭を抱えて丸まった。

「じゃまなんだ、おまえらは！ おれは百合子と結婚したんだぞ！

おまけみたいについてきやがって！」三田は平手で新治の両腕をはたきはじめた。「くそがきども！ くそがきども！ くそがきども！」

新治は叩かれたことに呆然となる。父親に暴力をふるわれたのはこれがはじめてだった。

「おまえらはおれを迎え入れようという気が最初からない！ 最初からじゃまものあつかいしている！ おれはよそ者なのか！ 転校生か！ おれは悪くないじゃないか！ 百合子のことをせいっぱい愛してる！ おまえたちを愛す努力もしてきた！ なのに、おまえはなんだ！ 家族つてのは互いの歩み寄りが大切なんだぞ！」

三田の怒りの激しさは新治を圧倒した。それに間違っただことは言

つていなかった。新治はその場へたりこんでしまった。三田はつぶやくように言った。

「それができないなら出ていけよ。家を出て、両神山にでも行っちまえ……おまもりさまに行くんだ」

新治は震えながら顔を上げた、三田の顔は涙でにじんでいる。だけど、憎しみに満ちた表情で見下ろしているのはわかる。

「なんでそんなことを言うの……？」

「家を出ろって行ってるんだよ。一足早い自立みたいなものだ。そつすりやおれは百合子と二人で暮らせる。母さんだつてそれを望んでる」三田はつぶやく。「あそこだつて悪くない。そう悪いところじゃない……」三田は言った。「自分が必要とされると思っているなら大間違いだぞ。必要でない奴、邪魔者な奴はごまんといえるだつ」三田は言った。「すべてを丸く収めたいんなら、そうしろ。山に行け」

「あんたはやつぱりマジシャンだ……」新治は涙でむせびながら非難した。「佳代子の言ってる、わるいものじゃないか」

「そんなことが関係あるのか？ わるいのはおまえじゃないのか？」三田は声を荒げ出す。「おまえは心根の醜い子供だつ。お仕置きをされて、いなくなつて当然だろうが！ おまえたちは悪い子供だ。いけない奴らだつ。佳代子がほんとの母親にぶたれるのはなんでだと思つ？ 大人がおまえたちを叱るのはなんでなんだつ？」と言つた。「間違つてるからじゃないのか？」

とおじさんは言った。

「自分の方が正しいなんて、よく言えたもんだ」

おじさんはトイレの扉を閉めた。新治は個室に閉じこめられた。彼は便器の足下にうづくまり、荒い息を吐いた。おじさんが出ていくまでじつとしていようと思つた。じつとしてあのわるいものが出ていくまで隠れていようと思つた。新治はもうなにも考えたくなかつたが、そのあいだ、ずつとおじさんの言つた言葉をかみしめた。

おじさんの出ていく足音はしなかった。まったく。新治はうづく

まっつて顔を伏せると、むせび泣いたのだった。

それから新治が個室を出たときには、トイレは静まりかえっていた。ドアを見ると、ノブは元に戻っている。窓からはあかね色の光が落ちている。新治はまた三田のやつが、あの扉を開けて入ってくるんじゃないか外で待ちかまえているんじゃないかと思ったが、戸を開けたとき、そこに人の姿はなかった。三田も、マジシャンも。図書館からはひそりとも音がしない。時計の針は午後六時半をさしている。もう二時間もたつたなんて信じられなかった。トイレにうずくまっていたのは十分ほどだと思っていたからだ。新治は重い足をひきずり読書スペースの脇を通る。閉館をしたわけでもあるまいに、誰もいない。受付のおばさんは顔を上げもしなかった。

新治は外に飛び出し、自転車のキックスタンドを上げた。彼はサドルに乗ると、ペダルをこぎはじめ。夕日に向かって、歩道を走っていく。振り返らずに、家路を急いだ。

九

一九九五年の夏、尾上達郎はリトルリーグで汗を流していた。神保町のリトルには、小学三年から、六年までの児童が参加しており、仲間たちのほとんどはこのあと神保中学の同じ野球部に入る。だけど、達郎にとってリーグは今年で最後だった。練習がないときだつて、達郎は父ちゃんと（本物の父ちゃんと）キャッチボールで汗をながすのがつねだった。彼に野球を教えたのは父ちゃん、達郎はヒットを打ってベースにいるときに、父ちゃんに手を振るのがなにより好きな少年だった。そのために母ちゃんに試合を見に来るな、というのはつらかった。でも、達郎に野球を覚えてくれたのは父ちゃんだし、それに父ちゃんは今では独りぼっちだ。比べて、母ちゃんには今ではおじさんがいる。父ちゃんにはおれと新治だけなんだよな、と思うと、どうしても彼の心は中野区のボロアパートに住む

父親よりになつてしまふ。

当時、神保町では連続殺人が噂されていたから、親はリトルにさえ子供を出したがらず、練習に参加する児童は三分の一ばかりにへつていた。送り迎えのできないときは、監督がかわりをひきうけるという条件で、親たちはリトルへの参加を許可している。達郎たちは大会が中止になるんじゃないかと心配した。今年のチームはかなりの成績を残しそうだったのだ。

達郎にとって今年は最後のリーグ戦だった。リーグ優勝、そして県大会出場にむけて胸を燃やしていたのだが、そんな情熱がつづいたのも八月の十四日までのことだ。おさそいがはじまって以来、達郎はめつきり調子を落としていた。やる気はあるのだが集中力をつねに欠くようになり、得意のしなやかなキャッチングも影をひそめはじめた。達郎はピッチャーもこなせる。本来のポジションはサードだ。チームの主砲だったから、コーチや監督の心配は一樣ではなかった。調子を落としたことも苦しかったが、なによりつらいのは、そうなった事情をみんなに説明できないことだ。おまもりさまでなめ太郎を見ていらい調子がとち狂っているなんて、そんなことは話せない、話したらあほだと思われるだろう。そいつは最悪だ。達郎はチームの面子からも頼りにされていた、ときとして父親からも。達郎は、自分がすっかりしているから（あるいはそのような素振りを見せているから）父親は安心してボロアパートに暮らせているのだと、子供ながらに気づいていた。言葉として理解していなくとも、なんとなく。とはいえ、両神山で見たものまで理解したわけじゃない。達郎はわるいものだなんて子供っぽい言い方がどうしても好きになれず、自分たちが見て、聞いたものについてはたんに？あいつ？とか？あれ？と呼んでいた。自分でも幻覚とと思っている（思おうとしている）ものにたいして名前を付けたがるなんておかしな話だが、寛太郎が言っていたように、人はなんにでも言葉をつけて整理したがる場所があるらしい。そうしないとケツの据わりが悪くって、落ち着かないのだ。

だから、達郎は野球はすっかりだめになったけど、それ以外はすべて大丈夫といった振りをしていた。もちろん目の下にできたクマと憔悴した表情はそうした努力を裏切っていたけれど。しっかりといるといつてもまだ小学六年生だ、達郎が他のメンバーとちがって懸命に自分を保たせていたのは、リトルの試合があつたから、というきわめて平凡な事情にすぎない。希望や夢はときに人をしゃんとさせる。しゃんと。

だけど、達郎のリトルに対する情熱も、一九九五年八月十七日には切れかかっていた。かれはサードのポジションを他の子に奪われかけている。若い情熱の炎は、焦燥感となつて彼の心を焦がしている。決定打となつたのは、八月十七日午後四時十一分コーチの放つた一撃だつた。そのとき弟の尾上新治は図書館でマジシャンこと三田秋吉と対決しており、わるいものはこの日、尾上兄弟に猛威をふるつたことになる。

達郎たちのチームはよその地区と同じように、ひまをみつけたOBが子供たちに指導をしている。この日は、藤尾という大学生が町民グラウンドに姿を見せていた。きっかけは、やっぱり、？あいつ？のせいだつた。

コーチの様子が変わつたことに気づいたのはなにも達郎ばかりではない。他の子たちも気づいていた。ノックが達郎に集中しはじめ、子供に打つにはかなりきつくなってきた。打球もコースも。達郎は何度か取り損ねた。みんなは最初の内、達郎はほんとに下手になつたのかな、と心配をした。そのうち、そんなにきつく打つて大丈夫なのかな、とおもいはじめた。怪我をしないのかな？

それにコーチは達郎がボールを後ろに逃がすと、気が狂つたみたいにわめき散らした。達郎はコーチの目が赤く光っているような気すらした。達郎は監督やOBにとってはお気に入り選手だつた。そんなふうにとやされるのにはなれていない。コーチの発する怒声の一つ一つに彼の身は縮み上がった。この位置でもボールが取れて

いないというのに、コーチはそれでも前に出るといった。達郎が進み出ると、まだ前だ、まだ前だ、ノックの手も休めずに要求する。達郎は本能的に、これ以上コーチに近寄ったから、打球で頭を砕かれる、と思った。達郎は定位置から三メートルばかりコーチにちかよったところで粘った。ここ数日来本気でボールに集中しはじめたが、体がこわばって、動きにはいつも鋭さが無い。正面にきたボールは何度かグローブにおさめた。右に左にふられると、追いつけなくなった。体勢を崩したところに、コーチの連続したノックをくらって、どてつぱらにボールがくいこんだ。ボールがとりにくくなっていたのは藤尾の目のせいもある。藤尾は強烈なノックを続けているのに、まったくボールをみなかった。達郎に憎悪と殺意のこもった視線をひたとすえていたのである。彼の筋肉は猛烈に動いているのに、首は微動すらしていない。藤尾はこのときのノックのせいで二日後には立ち上がれないほど体が痛むことになるのだが、いっぽう達郎は藤尾の目とわめき散らされる罵詈雑言にじまされてノックの方向が予測できなかった。バットの振りやボールの上がり方には集中ができなかった。

「達郎、むりすんなっ」

チームメイトの槇野が（彼は達郎と三遊間を守っており、もつとも仲がよかった）声をかけてきた。彼の顔は青かった。コーチが達郎を殺すんじゃないかと心配したのだ。

藤尾は教え方がうまくて子供たちから好かれていたが、このときばかりはまったくの別人になり変わっていた。達郎が倒れて痛みをこらえかねても、彼はまったく気にしなかった。いつもは量をこなすより、いい動きをすることを考えると子供たちには教えていた。藤尾自身は本気で野球にはうちこまず、たいした技術はなかったが、それでもいい動きがなんであるかは知っていた。無意味な根性ノックは嫌いだった。だけど、このときばかりは熱情が脳内を駆けめぐって、自らの野球論も達郎を心配する心情も消し飛んでいたのである。彼の様子は怒気天をつくばかりで、髪はさかだち、歯を剥いて

いた。年かさのいかない下級生の中には泣き出す子もいた。藤尾の牙がオオカミみたいに見えたことを何日も夢に見た子がいたほどだった。

「うづくまるな！ 立って前に出る！ このへたくそ！」藤尾はボールの詰まったかごにバットをたたきつけた。

「親が離婚した！ 母ちゃんが他の男と寝た！」

ちがうつ。と達郎は友達の様子を気にして仲間をみわたした。藤尾は一言一言に渾身の力をこめたボールをはたき返してくる。いつもなら、コーチたちは気を使って家のことは口に出したりしない。それどころか。藤尾は達郎の相談にだって乗ってくれたのだ。

あいつはわるいものだ、と達郎は思った。わるいものがコーチの頭をのつとつたんだ。

「父ちゃんは追い出される！ おまえの親父はくずだ！ おやしみたいになりたくなかったら、前に出る！ 体ばかりでかくなりやがって！ 野球がなきやおまえなんてうすらとんかちのとうへんぼくだ！ このうど野郎！」

もつと前に入る！

達郎は棒立ちになった 追い出されたのか？ 父ちゃんは追い出されたのか？ 達郎の心で疑問がうねりを上げた。達郎はその瞬間コーチの言葉が真実に思えた。離婚してそんなに経っていないのに、母ちゃんは三田のおじさんときあい始めたじゃないか。

打球が右に抜けるかと思っただけの瞬間、イレギュラーを起こし顔めがけて飛んでくる。彼の目はそれを見ていたが、心は何も感じなかった、心が動かなかった。達郎は右耳にボールを食らって、その場に崩れ落ちた。耳がわんわん鳴って、視界が回りだす。右手で耳を触った。目元に上げた指が、血に濡れている。もんどり打ったまま動けなかった。チームメイトたちが慌てた様子で駆け寄ってくる。驚いたことにコーチもだ。藤尾は我に返ったように（あいつに解放されたんだ、達郎はちらりとそんな考えをつかべる）バットを投げだしてすつ飛んでくる。

「達郎！」コーチは達郎の名前を連呼した。「たいへんだ、耳から血が出てるぞ！ みんな達郎にさわっちゃだめだ！ おまえも動くんじゃないぞ、頭を打ったからな。ああ、なんでこんなことに、なんでこんなことに……」

みんなは啞然とコーチを眺めおろした。藤尾はあわてふためいて、さわるかさわるまいか手を伸ばしたり引っこめたりしている。子供たちはコーチこそ頭を打ったんじゃないかと疑った。ひどいノックで怪我をさせたのはコーチなのに。

達郎はぼんやりとした視界のなかで、奥歯をかみしめていた。不思議と藤尾を恨む気持ちはわかかなかった。達郎はグラウンドの隅でともに座って自分の話に耳を傾けてくれるコーチのことを覚えていた。あの時のコーチの態度を彼は忘れることが出来ない。達郎は少年だが、義理堅い男だった。コーチの打撃は頭を直撃したけど、彼の脳みそは澄み切っていた。

藤尾は子供たちにタンカをもつてくるよう命じる。それから、監督に連絡しないと、親御さんにも連絡しないと、達郎しつかりしろ、俺がわるかった、どうかしてたんだ、まったくおれは頭がおかしくなったんじゃないかと、うわごとのようにつぶやきながらこんな事態を悔やんでる。達郎はそんなコーチの様子を傍観者のごとく眺めながらひたと心に誓っていた。肚にちかかってこう思ったのである。もう幻覚だなんて思わないぞ、こんなことをした奴がいるんなら、コーチや俺をこんな目に合わせたやつがいるんなら、おれはぜったいにゆるさないっ。

達郎の決意はこっけいなようでいて、そうではなかった。

ああ、なんでこんなことに、なんでこんなことに。

藤尾はそうつぶやいたが、そのようなつぶやきは、その夏神保町のあちこちでささやかれたはずだからである。

二十五年後の尾上新治は、あのとき見た三田はなんだったのかと考える。だけど、あれがなんであったにしろ、三田の本心を（少なくとも新治の感じた三田の本心を）かなり正確につけていたものであったことは言える。あれほど強い思いではなかったにしろ、マジシャンは三田の本心のあるていど代弁していたんじゃないかと新治は思う。あれは心の奥に眠る一人一人のわるいものを増幅する。恐怖や、いけない考えを。あいつらは人の弱味につけこむのだ。

あのあと、尾上新治は家に帰る気がしなかった。マンションのほど近くで兄貴を捕まえようと待ちかまえた。だが、達郎はいつまでもまってもこなかった。彼の兄はコーチの車で病院に連れて行かれ、その足で自宅に届けられていたからだ。新治は家に帰り、布団に寝かされた痛々しい兄の姿。達郎は耳にどでかいガーゼをあてがわれ、それを包帯でぐるぐる巻きにされていた。無敵のはずの兄の姿をみてシヨックをうけた。そのときにはコーチの藤尾は家にはいなかったし（新治の方がずっと帰宅が遅かったのだ）、だから新治は、にいちゃんは怒り狂ったおじさんにやられたのだ、と信じたのである。達郎は新治に、リトルで怪我をした、おまえは？ と訊いた。新治は図書館でマジシャンを見たことを小声で話した。別室では母親が聞き耳を立てていた。話し終わると彼は、六年生にしてはでっかかった達郎にとりすがって泣いた。ユニフォームの汗と太陽の匂いと、その下で脈打っていた心臓のことを今でも思い出すことができる。あのとき、自分たちは若く、たとえ強い恐怖におびえていたとしても、可能性はひめていたのだと、大人になった新治はそう考える。

新治は達郎の、コーチがわるいものに乗っ取られた、それでむちやなノックを受けたんだ、という話を信じた。あやうく兄の頭が割られかけたことも。今でも達郎の耳には傷跡が残っている。新治は今までそんなことは思い出さなかったし、達郎の耳の傷については気にもとめてこなかった。だけど、一九九五年の夏、自宅で達郎から話を聞かされたときは、金玉がのどもとに迷いこむほど縮み上が

った。わるいものが善良な　少なくとも達郎に恨みを抱くとは思えない　コーチを操ったというのなら……おじさんはどうなっちゃうんだろう？　そう思ったのである。

「ばかっているけど、本当だ」

新治は竹林をふるわすほどの大声で笑い声を上げた。あの当時、殺人事件は本当によく起こった。あの小さな町で　行方不明や傷害まであわせると、いったいいかほどの犯罪件数にのぼるのか。だけど、それもおまもりさまの力が関係していることを思うと彼には理解できたのだ。そいつは人々の影響をうけて変化するのだと新治は考える。だが、ときとして人を支配しかえしもするのである。

夕景色は闇にかわりつつあった。下からのぼる町の灯が、丘の斜面をてらしていた。空は藍色になり星が瞬き始めている。天地の間は埋まりつつあった、もうじき全部が真っ暗になる。

立ちつくした体が冷えてきた。新治は金槌を拾い上げると、家へと引き返した。

コテージの窓からは明かりが落ちていた。戸口に三田が立っていた。

脇の下を冷たい汗が流れ落ちる、口の中が一拳に乾いた。「あんなのはずがない……」と言う。「なんで今更つきまとうんだ……？」

「山に戻れよ新治」

三田はスーツ姿にコートを着ている。高い鼻が目につき、おじさんは意外に男前だったんだなあ、と新治は考える。思えば、自分もこの三田と変わらぬ年になったわけだ。

三田は家を省みて言った。「いい暮らしをしてるじゃないか」

「裕太に近づいたのか」新治は足を踏み出す。右手の金槌が彼に勇気を与えた。三田は答えない。「近づいたんだろ。あいつは関係ないぞっ」

「おいおい、ふざけるなよ。誰だつてなにかに関わりを持ってる。生まれ落ちたこの世に関わりを持って当然じゃないか。無責任なことを言うな」

「あの子に近づくな。血のつながった甥っ子だぞ！」

三田は肩をすくめた。「おやおや、おれのことは赤の他人だと言いたげだな」

まわりの林からはケタケタという笑い声が聞こえた。風がでて、杉や竹林をゆらしている。新治はそこかしこに影をみる。影は木にしがみついている、彼はそれを猿か何かだと思おうとした。

見上げると、空はいつのまにか曇っている。

「あなたは死んだ」新治は肩を落としていった。「死人じゃないか…… おまえはおもりさまの化け物だ。おまえがおじさんを操ったんだ。悪い人じゃ、なかったのに……」

「だが、弱い人間だった」

「ちくしょお、そんな姿をするなっ」新治は金槌を振り上げる。「ほんとの姿を見せろっ」

三田はコートにポケットをつつこんだままめきだした。「おまえは何もわかってないっ。なんにも思い出してないっ。ちんけながきのまんまだっ。キンキンわめくしか能がない！ けりをつけたきやな、おもりさまに戻ってこいよ！ 俺を殺したくせになにもかも中途半端に終わらせたっ。おまけに二十五年をむだにすごしたっ。自分の姿を見たらどうだ！ 独り身で寂しい限りだろうがっ。なくさめときたら、あにきの甥っ子だけときてる？ おまえは眼鏡ネズミのままだっ、いや、あのころよりずっと悪くなってる！」

「帰れよ」と新治は言った。「消えてくれ」

おじさんはそうした。顔を上げると、三田はいなくなっていた。

新治はしばらくその場に立ちつくしたまま、三田の言ったことを反芻する。二十五年を無駄に過ごしたといえ、しかり。椅子や小物を器用に作る程度では、わるいものには対抗できるはずもない。

新治はゆっくりと足を動かした。家に入り、自分がやり残したことを考えた。

第五章 杉浦佳代子、話に乗る

第五章 杉浦佳代子、話に乗る

二〇二〇年 自然農園にて

十一

そのとき佳代子はキャベツについた虫の点検をしていたのだが、ふとした拍子にいやな気配を感じ、腰をかがめてうつむいた。今にも襲われるんじゃないかと思い、じいっとした。息をひそめながらそうつと振り向く。地面に這うように身を潜める。辺りをうかがった。そこはビニールハウスの合間にあるキャベツ畑である。寛太は婆ちゃんと、トラクターに乗って行商に出ている。そうなると昼頃まで戻ってこない。だから、農園にいるのは自分だけのはずである。佳代子は中腰になると、さらに油断なくビニールハウスを見渡した。ベルトにはよくといだ鎌をさしてある。低い姿勢のまま、その鎌を探る。ゆつたりした長袖のシャツを、肘もとまでまくりあげている。お気に入りのジーパンには泥がこびりついていた。青ざめてはいるが、肌つやのいい女性だ。37才の年には見えない。

坊主が帰ってきたのかな、と思ったが、学校が終わるには早い時刻だ。舌打ちをすると、ゆつくりと足をふみかえ視線を左に移していった。また幻覚が始まったんだろうか？ 幻覚ならまだいい、本当に人がいたんだったらいへんなことだ。神保町ではふたたび連続殺人がはじまっている。彼女たちは？ あいつ？ が誰かをそそのかして自分たちを殺そうとするかもしれないと考えていたからだ。あいつ おまもりさまにいたわるいやつ。

ハウスの内側に人影が見える、ぐつと唾を飲む。「誰？」と佳代子はつぶやく。しばらくじっとその影を見つめる。人だと思ったの

は見間違いだつたようだ。佳代子はしゃがみこむと、首を垂れ、大きく息をつく。

利菜と言葉を交わしてから二日がたっていた。その間、彼女はいつそう混乱していた。利菜は戻ってくるのか、紗英はどうする気なのかと、そのことばかりを心配していた。二人が姿を見せたら、一体どうすればいいのか？ 戻ってくるのは、いいとも悪いとも言えない。それによって事態が動き出すのが怖かった。

神保町では、ひったくりから殺人事件にいたるまで、あらゆる犯罪が頻発している。三月十四日、引原ダムの湖で、子供の水死体が見つかった。行方不明となっていた井上久司という少年で、遺体には肋骨がなかった。第一発見者の話では、傷口は熊に食いちぎられたように見えたという。四月には吉川浩二少年がいなくなり、竹葉屋神社の境内で発見された。軒下に押しこまれており、濡れ縁から足が覗いていた。やはり動物に食われた痕跡があり、警察は野犬の仕業ではないかという感想を発表している。神保町にそんな野犬はいないというのがおかたの町民の意見だった。父兄は子供たちの外出を禁止するようになり、登下校の付き添いも始めた。小学校はバスを用意し、送迎のできない親のために備えている。そんな中、森隆信君が行方しれずとなった。警察は一連の事件に、関連があるのか、同一犯の犯行なのかは断言できないと発表しているが、佳代子はこれをやったのが誰であれ、なんであるにしろ、すべてに同じものが関わっていることを知っている。そいつは彼女自身と仲間たちにも、関わってきていたからである。

佳代子は利菜も不眠症にかかり、幻覚を見ていたことを暗い気持ちで考えた。その事実、町を離ればおさそいからも逃げられるのではないかという、淡い期待を裏切っていた。またその事実、石川紗英の身にも、危険が迫っていることを知らせる予兆でもあった。佳代子はあのとときの友達、あのとときの面子に、また召集がかかっていることを考えると怖ろしかった。またおさそいがはじまっている……おまもりさまからの？ それとももつと別のものなんだろう

うか？ 安全な場所はないんだ、と思うと、さすがに佳代子はつらかった。子供だけでも、親戚のところにもやろうとおもっていたのだが。

彼女は今見た影は利菜ではないかと辺りを見返す。だが、それとおぼしき人影もなければ、声もまたない。舌打ちをし、両手を叩きあわせて泥を払った。おびえているのがいやになり、勢いをつけて立ち上がる。そんなふうにおびえて隠れていると、佳代子はいつも母親を恐れて息をひそめた少女時代を連想する。

佳代子は腰を伸ばすと、空を見上げる。彼女は母親のことを考える。

杉浦登美子は八年前に失そうしている。伸子が高校三年生のときで、それ以来妹の面倒は、佳代子が一手にひきうけてきた。母親からは一度電話があつたが、それでも喧嘩別れをして、以来連絡は一度もない。佳代子はその電話を思い出し、苦い汁が口中にわいて顔をしかめる、母さんは自分のことしか頭になんだ。手にした鎌をぎゅっとにぎった。あ那时的電話だつて金の催促だつた。佳代子が口答えをしはじめると、登美子は一方的にきってしまった。

佳代子はうつむきため息をついた。

母親との力関係が変わつたのは、高校生ときだつた。子供のころは、力でも口先でも、母親に抑えられていたのだが、長じて佳代子が理屈でさとするようになると、登美子はぶつたたくか耳を貸さないかのどちらかだつた。佳代子が母親にはじめて手を挙げたのは、高校二年生のときだつた。喧嘩の原因は、たぶん伸子のことだつたのだろうが（佳代子が手に負えなくなると、伸子を攻撃するようになっていた）よく覚えていない。記憶にあるのは、登美子の平手なものすごい勢いでぶつ飛んできたこと、はり倒されて、畳みに倒れ伏したことだ。佳代子はそのときの母親を今でも思い出すことができる。娘に馬乗りになり手をふりあげる形相までも。佳代子は母親の腹に右足を押し当てると、思い切り蹴飛ばした。その勢いで立ち上がると、逆に馬乗りになって、横っ面をおもいきり張り飛ばして

やったのだ。怒鳴りながら、なんどもなんども母さんを打った。頭が熱くなって、母親をぶつという罪悪感はあるでわなかった、そのときは。母親をぶちながら、どんな言葉をいったのだから……。佳代子はそのときの言葉を反芻しはじめた。あのあと、なんどもその場面を思い出し、利菜や寛太に打ち明けたのだから、覚えているのだが……

今度あたしに手を挙げたら、この程度じゃすまさないよ、と佳代子は言ったのだ。あたしの見ているところで伸子をいびるのだって許さない。弟だって、もう母さんよかずとずっと腕力だって強いんだ。いつまでも子供のままでいる訳じゃないんだよ、知恵だつてついている。自分がどんなに見られてるか考えてごらんよ。どんなふうに使われているか……

「べつにこのとおり言ったわけじゃないけどね……十年と昔の話だし……」

だが、これに近いことは言ったのだろう。佳代子はその後、母親から暴力を受けた記憶がない。いつも手を挙げようとはするのだが、こどもの眼光におびえて捨てぜりふを吐くのがせいぜいだった。

あのとき、紗英はもう留学してそばにはいなかった。佳代子は電話で利菜を呼び出し、夜の公園でいつまでもいつまでも話をした。部活で遅くなつた達郎が、二人を見つけてそばにきた。新治と寛太も呼び出された。そう考えると、彼らおさそい仲間、ずっと関係を保ってきたといえて、佳代子はおかしかった。

佳代子は登美子のことを気ちがいだと信じていたから、母親をおびえさせても悪いとは思わなかった。あんなふうには振る舞つたのは、ただ自分の身を守るため、そして伸子を守るためだった。母親のことをそんなふうには考えるのは悲しいことだが、本当だから仕方がない。ただ、自分の母親があんなふうで、結局がみあうような関係しか築けなかったことに関しては情けなく思った。佳代子は登美子がいっつかまともになるんじゃないかと心のどこかで願っていたが、あのとき母親の顔を張り飛ばすことで、そんな思いを断ち切つたの

かもしれない。

佳代子は鎌をもった手で、こみあげてくる涙と鼻をぬぐった。その行為がよけい涙をさそったのか、せきあげるように悲しみがこみ上げ、ときおり嗚咽をもらしながら泣きはじめる。

母親が失踪しても、佳代子は一度として探さなかった。寛太郎が心配して、口添えをしてくることもあったが（それは佳代子のためというよりは伸子のためであつたらしいが。あの人はあの人で誰より彼女を理解してくれた）、佳代子は頑として訊かなかった。それが、今になって、自分が悪い娘だつたんだらうかと、伸子のためにも探せばよかつたのかと、今更ながらの罪悪感を我が心に植え付けるのである。そんなときは、なぜだか知らないが、母親に会いたくなり、もう一度やりなおしたいんだらうかと、佳代子は自分に問いかけるようになる。

顔を上げて涙をぬぐう。蒼天がまなこに染みていたかつた。

杉浦家は五人兄弟だが、末の妹だけは父親がちがう。ほんとの父親は、死んだ、とも、女と逃げた、ともきいている。母親の答えは訊くたびにちがつたし、答えが暴力にかわることも手伝って、正確なことは誰も知らなかつた。

佳代子は鼻をすすりながらぶらぶらと畑を歩き出す。

長男の駿夫は、トラックの運転手となつた、次男の義典は地元の工務店に勤めている。三男の達治は測量技師になつて、隣町に住み、近々結婚する予定だ。佳代子がいちばん心配しているのは、末の伸子のことである。

伸子は高校を立派に卒業して、地元のJAに就職した。窓口に行けばあの子に会えるし、今でもあのマンションに　佳代子が母親といがみ合いつづけたマンションに　住んでいる。恋人がいるともいないとも訊くのだが、あの子なりに、母親の失踪にショックを受けたことは確かだつた。あの子のために探せばよかつたと思うと、なおさら涙がこみ上げてきた。佳代子は登美子がいなくなつてからは、人生の半分ばかりを伸子のために生きてきた。伸子は伸子で、

一生懸命佳代子につくしてくれた。勉強だつて懸命にやつて首席で卒業したし、卒業式には答辞だつて読んだのだ。卒業式の晴れ姿を寛太や弟たちと眼にした佳代子は誇らしくて泣けたのだった。あのときは、こんなに立派に娘を育てくせに、なんでこの場にいないのかと、そう思うと、また情けなくて泣けたのだった。彼女らの母親は、悪いだめな女ではあつたが、それでも立派な反面教師ではあつたわけだ。

彼女はあぜ道をあがり、道路をわたつた。脇に畑を従えながら、私道を通つて、家に戻つた。近辺の畑はすべて寛太郎が買い占めたもので、五百坪ほどの土地にビニールハウスや畑が広がっている。

自然農園を手伝い始めたのは十八のときだつた。高校を卒業してからは、親戚のついでで地元の農業組合に就職したのだが、そんなところに寛太がとつぜんやつてきて、仕事を手伝えと言つてきた。寛太郎と寛太は竹村自然農園を立ち上げ、農薬抜き自然農法で、よい品種をうみだす研究をはじめていた。二人は畑を出来るだけ自然の状態に近づけようと奮闘していた。最初は虫にやられたり、冷夏にやられたりしていたが、二年の苦闘の末、大きくて旨みのある品種が育ち始めた。自然農園は料亭に野菜を卸すまでに成長し、ちやくちやくと耕作地を広げていった。寛太と結婚したのは二十歳のころだ。二十五才には子供も生まれた。二人は農園が忙しかつたから、子供を産むのは後にしようとして決めていた。自然農園が軌道にのりはじめた時期に生まれたのは、まことに都合がよかつた。寛太郎が亡くなつたのはその二年後のことだつた。

寛太郎は寝室で眠つたまま亡くなり、誰も彼が死んだのには気づかなかつた。前日まで畑に出ていることを考えると、まったく彼らしい亡くなり方だと佳代子は思った。願わくば、ばあちゃんにも寛太にもそんな亡くなり方をして欲しいし、自分もそうありたいと思う。佳代子はなかに影響されて、自分を見失うのはいやだつた。寛太郎は耳も遠くなつていたし、物忘れなんかしょっちゅうではあつたが、それでも寛太郎は、最後まで寛太郎らしかつた。

そのころには、農園を開いて十年がたっていた。ちょうどテレビ局から取材の申しこみがあったときで、それも寛太郎の死去で取りやめになってしまった。寛太郎が死ぬと、受注は一気に落ちこんだが、寛太と佳代子のがんばりで最近は盛り返しつつある。竹村農園が品質を落としていないことがわかると、顧客は少しずつ戻ってきた。ばあちゃんは今年九十八になるが、いまだに野菜をせおって近所に売り歩いている。大森神社の鳥居のわきには無人の販売所もだしていた。竹村のばあちゃんといえば、地元でも有名人だ。昔は寛太郎が毎日トラクターを駆り出していたものだが、いまでは寛太が週に二度ばかり、その役を買って出ている。変わらないのは家だけだった。この家だけが、二十五年の月日にも負けずに建っている。

佳代子は庭に立ち、我が家を見上げる。庭の一角に大きな鶏小屋がある。最盛期には十羽ばかりの雌鳥が毎朝卵を提供しつづけたその小屋も、今では雌鳥が数羽いるだけだった。先月何者かに首を刈りとられたのだ。犬のジョンはそのとき大けがを負って、今も寝たきりの状態だ。ひどい話だが、神保町全体に目を向ければ、もっとむごたらしいことはいくらでもあった。

佳代子は鶏から目を離すと、縁下におかれた踏み石に腰をつけ、物思いにふけりはじめた。二十五年前、自分たちがなぜ山に戻ったのかというのが最大の疑問だった。彼女の思考は、現在から、過去へとさかのぼり出す。答えは、今ではなく、小学五年生の自分にある気がした。二十五年前も犯罪が多発していたはずだ……。あの夏、町では自殺他殺をふくめて葬式が多かった。親たちは隠していても子供たちはそのことを知っていた。葬式に参列する人々をいくつも目にしていたし、パトカーが赤い回転灯をつけて通り過ぎるのを、なんども見ている。いつだろう、いつ山に戻ったんだろう？ なめ太郎を見て、さんざんおつかない目にあっていたというのに？ 両神山に向かうことは最終の選択だったはずだ。なめ太郎に出くわして、数日の間に、そこまで追いつめられていたというのか？

佳代子は、学校の校庭に集まったことを思い出した。すでに紗英

が溺死女に、新治がマジシャンに会い、それぞれに恐ろしい体験をしていたころだった。

おまもりさまへの最初の訪問が、八月十四日のことだった。なめ太郎をはじめて見た。紗英が溺死女を見たのは翌日のことだ。十八日には達郎がリトルで怪我をした。彼は大学生コーチの打球を耳にうけ、大きなガーゼを右耳にはつけていた。達郎がその夜に電話をかけてみんなに召集をかけたのは、神保小学校の五年生に行方不明者が出たからである（もっとも行方不明になったのはその子だけではないのだが）。被害者は瀬田英二。佳代子たちとは顔見知りだった。達郎も知っていた。瀬田英二は先日から帰ってこなくなっていた。搜索願いが出たのは当日のことだ。子供たちの耳に入ったのがその翌日、達郎はすぐさまみんなをかきあつめたのだった。

瀬田英二は川に行くといつて、遊びに出たまま帰らなくなった。彼は友達と待ち合わせをしていたが、その場には現れなかった。自転車と水泳バツクだけが発見された。水力発電所の門の脇にとめられていたのだ。発電所の地域にも民家は数件あるが、住民に目撃情報はなかった。該当の時間帯に通りがかった車も、警察の捜査対象となったが、瀬田英二本人を見かけたものはいなかった。彼らにはそうしたこと、すべておまもりさまと関係があると考えた。

いつだったか、新治に訊いたのだが、家を建てる時、鬼門ではかならずわるいことが起こると言う。その場所では、板の間尺をまぢがえるといった失敗をくり返したり、誰かが怪我をしたりするそうだ。伝言代は皆に口をすっぱくして注意をするのだが、それでも最後までしくじりをする場所があるのだという。あの山が、それと同じ場所だとしたら？　もっとも、鬼門にしてもうそみたいな強力版だ。佳代子が調べた範囲だけでも、一桁を数える死者と行方不明者を出している。つまり悪いスポットみたいなものが、あそこにあるとしたら……。

「じゃあ、なんで山に近づいたんだろ……？」

利菜が救助されたのは八月二十五日のことだ。搜索には七日かか

った。山に戻ったのは八月二十日あたりだ。そして、十月には神保町は、完全に平常に復している……。とすると、その二ヶ月ばかりの間になにかが起こったのだ。

佳代子はそうした想念にふけっていたから、軒下から腕が伸びてきたときには、びっくり仰天するあまり、踏み石からずり落ちかけた。出てきたのは白い細い腕で、指には蜘蛛の巣がついていた。その指がかつと地面に突き立ったかと思うと、軒下からは真つ黒な頭と白い肩が見えた。

利菜だった。

「あんだ……」

佳代子が言葉をなくしているうちに、軒下からは、紗英や寛太がはい出てくる。新治に、子供のころの自分まで。佳代子は立ち上がると、無意識に鎌をベルトから抜きとった。子供たちがみんな口をゆがめて邪悪に笑っていたからだ。最後に出てきた達郎が、「あんたは自分たちがまずいことをしたと思ってる」と彼女を指さし言った。子供たちはいびつに笑いながら、家の中に駆けこんだ。

「ま、まて」佳代子は一歩足を踏み出す、それで呪縛がとかれたかのように駆け出す。「待ちなさいっ」

家に入ると、二階の渡し木からは首つり死体が下がっていて、ここでは本当に腰を抜かした。佳代子は土間に手をつき、死体を見上げる。その下で笑っていることもたちが見える。「じいちゃん……」
つり下がっているのは寛太郎だった。佳代子は怒鳴った。「あんなたちなにやってるのよお！　じいちゃんをおろしなさいよ！　早くしなさい！」

佳代子に怒鳴られると、子供たちは例の魚の腐ったような笑顔のまま、右往左往し始めた。佳代子にはこれは幻覚であることを、心の隅っこで意識しながら子どもたちをかき分け寛太郎の足にとりついた。

「じいちゃん！　じいちゃあん！」佳代子は足を持って上げようとするが、寛太郎の身体はずしりと重い。糞尿を垂れ漏らし、手足か

らは血が流れ落ちてくる。佳代子はロープを切ろうと鎌を振り上げた。

ロープがなかった。

寛太郎は宙に浮いていて、佳代子は眼を疑う。「こんな……っ」と彼女は言う。「こんなひどいよ！ おろして！ じいちゃんをおろしてよ！」

佳代子は鎌を振り上げ、子供たちに打ちかかった。子供のころの友達がきやらきやらと笑い声を上げながら、するりするりと鎌を逃れて逃げはじめた。

「こんな、こんな幻覚にまいるもんか！ 子供のあたしたちにやつつけられたくせに！ いまさら出てきたって遅いんだ！ 何度でだって追い払ってやる！ そうともし」

寛太郎の足にしがみつく。そのとき、死体の背後に隠れていた人影がにゅつと出て、佳代子の肩をつきとばした。佳代子は土間に転げて、背骨をしたたかに打つ。子供の寛太が鎌をさらって逃げた。佳代子はすりむいた肘に顔をしかめながら顔を上げ、自分を突き飛ばしたのがなめ太郎であることを確認する。子供ぐらいの背丈で、お腹を妊婦みたいに突きだし、猿みたいな腕を土間に垂らしている。今、しかとたしかめてみると、髪の毛がほとんどなかった。こいつも年をとったんだろうか？ なめ太郎の顔は今ではスターウォーズのヨーダに近く、思慮深くなっている。少なくとも佳代子の想像の中では成長していたわけだった。

「おろしてよ。じいちゃんを……」

「じいいは死んだ」なめ太郎は言った。甲高い声と野太くひび割れた声が同時に響いた。

「うちのじいちゃんを侮辱すると承知しない」

「泣けよ、佳代子」なめ太郎は傲然と見下ろす。「悲しいだろう。母親がいなくて。自分がこんなふうで。その証拠におまえは自分が出てきたことを後悔してる。おさそいがまた始まっているのに、おまえたちはなんの準備もしてこなかった。おまえと寛太は畑を耕して

ただけだ。くたびれた大人なんて怖くも何ともない。それでおれにかなうのか？ 二十五年前に比べて何が変わった？ どこがどう変わったんだ？ 大人になったから有利だと？ 年をとっただけだ。おまえらはだめになった」

「ちがう……」

「強がってもむだなのにな……」

「強がってなんかいない、いないわよっ」

佳代子は肘をついて後ずさる。なめ太郎の声は悲しげですらあった。

「でも、おまえはこう思ってる。あたしたちはもうわるいものにはかなわないんじゃないか？ おまえの不安が手にとるようにわかるぞっ。おまえは自分が弱くなったことも知ってる。子供はある面でも強いつてことも」

なめ太郎は子供といった。佳代子は殺された少年のことを思い出した。

「あんたが殺したんでしょ……」

「ちがう……」

「じゃあ、誰よ。誰が子供の体を食べたりするってのよ！」

絶叫は泣き声のようだ。

なめ太郎は、心だよ……という。佳代子は、誰のよ、と尋ねる。

なめ太郎が近づいてくる。佳代子はさらに後ろにはいずろうとして倒れこんだ。

なめ太郎はがに股で傲然と立つ。そして、言った。

「おまえはわかってる。事態はますます悪くなって。なのに、結束は弱くなってる。その証拠に、おまえは二人が戻ってきててもどうにもならないと思ってる。こうも思ってるな。記憶が戻ってこないのは、思い出したあげくに絶望するのが怖いせいなんじゃないかと。おまえは信じる心をなくしてる。想像力はしぼんだし、頭でっかちになったしな。いろんなことがおまえをしばってる。子供もいるし……」

「手を出さないで……」

なめ太郎の手が、長い指が首にのび、じわじわと締めつける。佳代子はその腕を叩き、うちの子に、春助に手を出すな、と言うが、視界は暗くなり、舌からは力が抜け、内臓が重だるくなっていく。佳代子の手が力無く垂れ落ちた。彼女の頭が土間を叩く。薄れゆく意識の中で、佳代子は耳をそばだてる、わるいものが話している。ここに子供の死体を持ちこんで、おまえらをひどい目にあわせることもできるんだよ、と。

だから、佳代子の心は友達を求める。利菜を、紗英を……あの夏、そばにいてくれた友達のことを。二十五年前は彼らがいたから乗り切れたのだ。彼女はいまはつきりと気が付く。おまもりさまに捕まった子どもたちと、自分たちとのちがいが。それは仲間がいたことなのだ。泥酔した母親にこっぴどく痛めつけられたときも、そばにいてくれたのは利菜だった。利菜がいたためつけられたときも、自分にはそばにいたとも言える。だからこそ、互いを信頼した。あの夏、彼女たちの互いを信じる気持ちは高まり、決定的なものとなった。そのつながりは、いまも互いを縛っている。危険だというのに、あの子は戻ってこようとしてる。

だから、彼女は心の中で、いまいちど、戻ってこないでと呼びかける。二人が必ず戻ってくると、信じていたから。

十二

一九九五年 八月十七日 木曜日

夕暮れ近いマンションまでつづく県道を、二人は短い影をのびし、歩道の砂利を拾うようにとぼとぼと歩いている。自転車を押し、すごく疲れた様子だ。利菜は真っ白なＴシャツに紺のジーンズ、佳代子はピンクのＴシャツに、カーゴパンツをはいている。二人の女の子はやせっぽちで、決して細くはないジーンズがぶかぶかに見える。

利菜のシャツには、血糊の手形がついていた。佳代子のほっぺにも。昨日泥酔した母親に殴られたせいで（拳で殴られたのはたぶん初めてだと思う）かなり濃い青あざができていたが、そのうえに重なるように血の筋が伸びていた。

利菜は涙目でうつむいている。そのうち彼女が立ち止まったので、佳代子も立ち止まった。

佳代子は所在なげに体をゆらしながら、利菜が動き出すのを待っていたが、利菜は唇をふるわずばかりで、ものも言おうとしない。

「お母さんいなかったね」と佳代子は言う。利菜は無言でうなずいた。その瞬間、彼女の顔から鼻水が垂れ、涙がぼとりとおちて、歩道の白いタイルに染みこんだ。利菜はいっそう深く顔を伏せたから、佳代子からは顔が見えなくなる。彼女はなんといいいかわからず、もじもじして自分がいっとう泣きたくなつた。そのうち、利菜が、

「おかあさん、どこいつちやつたんだろ……」

喉がひび割れたみたいになしゃがれ声で言った。佳代子は子供ながらに胸をつかれて、「おばさん、戻ってるかもしれないじゃん」と涙声で言った。

佳代子は利菜の肩に手をかけようと腕をあげたが、けつきよくふられずに胸へと引き戻す。利菜が嗚咽をもらすと、がまんできずに二人は抱き合う。

二人の子供がそんなふうによく傷つき、なぐさめあうかのごとく、熱い抱擁をかわすことになったそのわけは、目黒区にある一戸建てを尋ねたことが原因だった。二人は利菜の母親を捜しに出かけたのだが、肝腎の母親には会えず、危うくわるいものに捕まりかけたのだった。利菜は以前にもそれはおさそいがはじまるよりずっと前のことだったが、その家に連れて行かれたことがあったから、そこがどんなところでどんな人がいるのかもわかっていた。そうでなければ、佳代子をさそうはずがない。だけど、わるいものが佳代子の思うとおり、みんなの心に忍びこんでくるのだとしたら、利菜

だってあいつの思うとおりに行動させられたということになる。

利菜の母親は、おまもりさまから戻ったその日にいなくなったらしいのだが、父親に訊いてもあいまいな答えがもどるばかりで（彼女の父は炭酸のぬけたコーラみたいになっていた）、所在を知ることができなかつた。

彼女の母親　三津子　は、釈栄会という仏教系の宗派に二年前から所属していた。娘をこっそり連れ去ったのはその宗派に入信させるため、こっそり連れ出したのは父親が反対していたからだ。その家は、どこにでもあるふつ々の民家だ。会長先生という人も、ふつうのおじさんにしか見えなかつた。ただ、こどもながらにその人たちの言っていることはへんてこに聞こえた。あの世がどうか、霊界がどうか、もんりんしょうがどうか（正確には文理真証と書くそうだが）、そんな言葉をきいても、脳みそのなかでぐるぐるまわって、どこにもひっかからずに抜けだる始末。目をまわすぐらいがせいぜいだ。利菜はこどもだったから、そのときの心象を言葉であらわすなら、迷惑の一言でことがたりてしまう。玄関先で頭に塩をかけられるのも迷惑だし、知らない大人に囲まれるのも迷惑だった（本当はちょっと怖かつた）、知らない子供に会わされて仲良くするように命じられるのも迷惑なら、正座をさせられるのも、たすきをかけられるのも、お経本を読まされるのもかなりの迷惑。それに宗教のことで悪く言おうものなら、ふだんは大人しい母さんが気が変わった（本当は狂ったという方が正しいけれど。自分の母さんに対して、そんな言葉は使いたくない）みたいに怒り出すので、ほんとうにとまどってしまふ。母さんが言うには、利菜はもうその宗教に入信していて（それも迷惑だ）、このことは父さんには言っではいけないということだった。母さんはそのとき真剣な　利菜の頭に穴を開けるみたいなの目つきでじつと見つめて、あの人にもそのうちなかが正しいかがわかるはずだから、と言い切つた。でも、正しいことなのに父さんに隠し立てをするのは、それこそ変じゃないかと彼女は感じた。利菜は父親のことも信頼していた

から、黙っていること自体がつかつた。利菜は積極的にそのことを忘れて、母さんが宗教を話題にしようとしても他人とそのことを話していても、なるべく関わらずに聞かないように、疑問やいやな気持ちにはふたをするようつとめてきた。母さんがおかしいんじゃないかと、宗教が母さんをおかしくしたんだと思つた。そして、心のどこかではあの家を憎むようになった。ホラーハウスムみたいに邪悪なものと感じるようになったのだ。母さんがいなくなって、まっさきに頭に浮かんだのがあの家だつた。あの家に入りこんで（捕まつて）それで帰つてこないんだと。そう考えたのだ。

おまもりさまに入りこんで四日がたつていたが、母さんはまだ戻つてこなかつた。父親が仕事に行くと、利菜は友達と遊びに出かけた。母さんがいなくなつたことは誰にも話していなかった。こんなときに、幻覚やおかしな声をきいて夜も眠れなくなつているときに母親がいらないなんて最悪だが、父親すらいなくて家にいる母親にはぶつ飛ばされてる佳代子よりはましだと思つた（そんなふうに分をなくさめるのは、佳代子にたいして悪いと思つたけど）。けど、新治と別れ、佳代子と二人帰ることになつたあのとき、急に何もかもががまんできなくなつた。家に帰るのが、いやになつたのだ。利菜は母親がいなくなつたのは、おまもりさまのせいだと考えた。幻覚や眠れないことにもがまんならなくなつた。ストレスなんて言葉は小学五年生にはぴんとこなかつたけど、子供は大人より柔軟だけど、なんでも許容できるわけじゃない。そのピークがあるとすればなら今だつた。心のなかにへどろみたいに不快な何かがたまりにたまつて、それはこれまで必死にこらえてきたけれど、風呂場にためすぎた水みたいにあふれ出してきた。

「佳代子、あたしがついてきてつて頼んだら来てくれる」と彼女は言つた。その言葉はいきなりで形相もすさまじかつたから、さすがに佳代子も言葉につまつた。来るのこないのつ、と彼女は切り口上に言つた。佳代子は思わずいくよ、と答えた。言つてからしまつたと考えた。

「かあさんが帰ってこなくなっただよね」利菜は急に肩をおとしてそうつぶやいた。佳代子はおばさんの宗教のことも（あの家に始終出入りすれば自然に知ることになるのだが）かなり詳しく知っていたから、すぐにどこに行けばいいのか事情はのみこめた。そうしたことを理解するのは、鼻づまりを吸いこむより簡単だったけど、鼻水のみこむよりはずっと不快な経験だった。

「じゃあ、おばさんはその家にいるんだ」

「他に行くところなんかはないよ」と利菜は憎々しげに言った。「佳代子ついてきてくれる？ あたし、母さんに戻ってきて欲しいんだ。父さんはなんにも言ってくんないしさ、洗いもんとか洗濯もんとかたまるばっかだしさ、うちがなんか悪い場所みたいで、ちがっちゃったみたいで、やなんだよね……」ほんとは父親もすっかり変わってしまったし、母親がいなくなったのは他の行方不明事件と（殺人事件と）同じなのかもしれないと考えていた。でもそうしたことは、口に出すのも怖かった。「ここんとこ、夜眠れないし」

佳代子は驚いて言い出した。「あたしもだよ。あたしも眠れない……」

「だからさ。母さんが戻ってきたからって眠れるとは思えないけど……幻覚もみるんだろっけど、でも、今よりずっとましだよ。あたし一人でも行こうと思ったもん」

それはうそだった。

「でも、佳代子がついてきてくれるんなら安心する」

そんなふうに頼られて悪い気はしなかった。

佳代子は利菜の話を聞いたとき半分がた肚は定まっていた。母親のお腹が大きくなって、噂が学校中に広まったとき、佳代子はずいぶんいやな思いをした。女の子たちは陰に回って彼女の話をしたからだ。佳代子は思わず口論になることもあったが、たいていは黙りこくっていた。佳代子はずいぶんがまんしていた。面と向かって言われるのなら言い返すこともできる。でも、みんな聞こえよがしにしか言わない。いちばん陰険だったのは、幸田頼子だった。佳代子

が振り向くと、素知らぬ顔で目もあわせなくなる。佳代子がぐつとこらえてそつぽを向くと、また噂話が再開する。そんなことが積み重なって、佳代子はある日、しつこくうわさ話をしていた頼子のグループにつかつかと歩み寄った。そして、抗弁する一同に平然と言いつ返した。

「そうよ、赤ちゃんが生まれるんよ。それっていいことですよ。悪い？」そして、頼子をひっぱりたいのだ。

すぐさま教室中が騒ぎになった。関係ないのも騒いだし、関係あるのはおおいにあわてふためいた。すぐさま先生が飛んできた。掃除の時間中で、利菜はゴミ捨てに行っていた。帰ってきたときは、佳代子と頼子の二人が、職員室まで連れて行かれるところだった。

先生はそうなった理由を二人に訊こうとしたが、佳代子は何となく言わなかった。そのうちに事情がわかって、先生も佳代子のしたことを理解してくれた。もちろん佳代子に同情的だったのだが、さて、お互いに謝ろうという段になったとき、佳代子はどんなにすすめられても頭を下げなかった。「子供が生まれるんは、すばらしいことだってじいちゃんが言った。だからあたしは悪くない」と言ったのだ。ともあれ、佳代子のやったのは暴力だったし、頼子の母親は、小学校の役員会ときくと、すぐに顔を出す人でもある。先生は一生懸命説得した。それでも佳代子が頑固をはるものだから、双方の母親が呼ばれることになった。

登美子は職員室に入るとすぐさまヒステリーを起こし、先生も頼子の母も、佳代子のこととも口汚く罵った。その間、佳代子は真っ赤な顔をしながらも、必死で泣くのはだけはこらえていた。

結局、登美子のおかげで佳代子は無罪放免になったのだが、家に帰ると、妊娠した母親から暴行を受けた。

夕方になり、利菜に電話をかけた。利菜は自宅ですつと佳代子の心配をしていた。二人の自宅は、同じ県営マンションの隣の棟だからすぐ近くである。佳代子が利菜の家に現れるまでは、ちょっとばかり時間がかかった。利菜はあらわれた佳代子の様子を見て驚いた。

泣いたせいなのか、あんまりひどく叩かれすぎたせいなのか、彼女の顔は腫れぼったかった。大事な顔に切り傷がいくつもあつた。三津子が、登美子に嚴重に抗議すると息巻いたが、二人はさほど期待しなかった。部屋にはいり座つた。利菜は椅子に、佳代子は床に。佳代子はそれまで学校でも、家でも泣かなかつたのだが、そのときはじめて腫れ上がった頬に、ぼろぼろと涙をこぼしたのだった。

そういうことがあつたから、竹村佳代子は利菜にたいして恩義があつた。自分のいちばん惨めな部分を受け止めてくれるのは、両親ではなく、利菜だった。

しばらく佳代子は小刻みに首を縦に振つた。やがて自分でも納得がいったのか、大きく一つうなずいた。

「じゃあ、あたしたち気をつけて行かなきゃいけない。おさそのこともあるし。おうむ教とか、おつかない宗教だつてあるもんね。寛太か達郎ちゃんを誘つてもいいけど、二人で行く？」

「行く」と利菜は言った。「あたし、今日連れ戻したいのよ。いますぐに。母さんに戻ってきて欲しいの」

佳代子はうなずいた。

その日は、八月十七日。図書館では三時に別れた尾上新治がマジシャンに捕まつており、達郎はノックをうけて家で寝こみ、紗英は塾につかまっていた。だから、その坪井という宗教家の家には、利菜と佳代子だけで出かけた。結局、二人は自宅に向かつていた足の行き先を変えたことで、その後の人生までも変えてしまったことになる。

その家は閑静な住宅街の一角にあつて、不気味な雰囲気を放つていた。家自体はいたって普通だ。門はありふれたアルミ製だし、どこのホームセンターにも売つてあるような四角いポストがついている。表札には坪井とある。佳代子は宗教というと、お寺を想像したから、こんなところに教祖とか会長がいるのはちよつと想像しにくかつた。二人は少し離れた電柱の影から、緊張した面もちで家を眺めたが、ブロック塀の向こうは静まりかえっている。佳代子は、静

か、という言葉だけでは足りないような気がした。その辺り一帯では、空気すら沈黙してしまつたみたいだ（本当はあらゆる音がひどく遠のいた感じだつたのだが、彼女たちはそのことに気づかなかつた）。佳代子はすっかり気後れがしたが、利菜の手前引き返すわけにはいかなかつた。佳代子はその家がどんなふうだつたかは、利菜から訊いてある程度は知つていた。ここに来るまでは玄関に近づいたら知らない大人に塩をぶっかけられるんじゃないかと心配していたのだが、今はもっと危険な目に合うような気がした。怖がったらだめだ、と佳代子は自分に言い聞かせた。利菜は本気で母親を取り戻したがつていたから、引き返したら、一人でも行くかもしれない。「火曜と木曜が集会なんだ」

と利菜は言つた。今日は、ちょうどその木曜だつた。利菜の話だと集会の日は二、三十人からの人がこの家に集まるという。それにしては家はひっそりしすぎているようだつた（夜集まるのかもしれないが）。

佳代子は急に、近所の人が私たちのことを見ていたらいいのに、子供があの家にはいつていくのをちゃんと気づいてたらしいのにと思つたが、通りには人つ子一人、近所の窓影にも人の姿は見あたらない、それもこの地区に人がいないというのではなく、いるのに息を潜めているといったふうだつた。みんないるのに……。集団でかくれんぼをしているような気がしてくる。

「行くこう」

利菜が門に手をかける、門はかすかにきしみながら内側に開いていった。わずかなすきまに身をくねらせるように入っていく。佳代子もつづいた。庭では洗濯物がひらめいている、心配した番犬もいない。小さな庭なのに、池があつて錦鯉がはなされている。佳代子はわるいものがいやしないか、おさそいが今になって始まりやしないかと心配したが、わるいものはその家そのものだつたし、おさそいはとつくの昔にはじまつていた。ブザーを押して家にはいるまで、そのことに気づいていなかったのだ。

利菜はブザーに手を伸ばし、あわてて 熱いお湯に触れたみたいに、引っこめた。

「静電気だよ」

と彼女は苦笑いをして言った。

ブザーは二回むなしく響いた。利菜はもう一度押した。もう一度。返事がない。

「誰もいないんじゃない？」

「いないかもしれないけど……」

でも利菜はみいられたようにノブをみつめ、やがてそれに手を伸ばした。

彼女はびっくりしたみたいに振り向いた。「開いてる」

利菜はゆっくりと戸を開いていった。中は暗く、空気は何世紀も放逐された家のようによどんでいる。戸をしめきっている。そのせいで外よりも蒸し暑いくらいだ。すぐさま汗がふきだしてきた。玄関からはいつてすぐに階段がある。そのわきで廊下がまつすぐにのびている。廊下と階段は家の中央にあり、左右の部屋をしきっていた。以前来たときと、見た目は全く変わらないのに、利菜はものすごく違和感を感じた。圧迫感を。

「ごめんください」

利菜の震えた声が暗い玄関に吸いこまれていく。それにつれて二人は一步二歩と家のなかに入っていった。利菜の背中には佳代子が貼りついていて、その肌の暖かさが彼女をほっと安心させる。

「誰もいないのかな？」

佳代子が言う。

「隠れてるのかもしれない」

「けど、かつてに入るのはまずいんじゃない？」

「あたしはこの宗教の一員だもん」

だから、入ってもいいはずだと思った。

「あたしが怖いって言ったら、あんたどう思う？」 佳代子が言う。

「その気持ちわかるって言うよ」 前を向いた。「あたしだって怖い

もん」

廊下にあがった。右側の扉を開けるとリビングだった。ワイドテレビと大きな机が目についた。利菜は右手にあるじゃばら式の戸を開けた。台所だ。南側の窓から明かりが落ちていいる。部屋は蒸し暑かった。空気がよどんでいる。前きたときは大勢のおばさんたちが料理をつくっていたけど、いまはその姿もない。奥には勝手口があるが、利菜は鍵が閉まっていると思った、そこだけではなく家中の鍵が。利菜がそんな嫌な予感におそわれて振り向くと、玄関の扉が閉まっていた。

「閉めたの？」

佳代子が首をふる。二人は凍り付いた視線をかわした。どちらからともなく手を握りあう。佳代子の手は冷たい。というより部屋の温度がどつと下がった感じだ。家中が冷気を放出しているように。汗でぬれたTシャツも冷たく感じはじめた。しめきった部屋のなかで足下にだけ風を感じた。そのとき、

「利菜……」

と声がした。母親の声だった。

「二階からだ……」

利菜は言った。佳代子の手を引いてリビングを出た。廊下はさらに暗くなっている。がたがたとなが閉まる音がする。「雨戸をしめる音だよ」と佳代子がせっぱ詰まった声で言う。「おさそいをはじめたんだっ。やばいよ、利菜っ。はやく出ないと……」

でも、母さんが……と利菜は言いかけ、その言葉を飲みこんでしまふ。上から母親の声がしたのに、ひさしぶりに声をきいたのに、彼女はすごく怖かった。母さんのあの声、名前を呼ぶ声……でも、なんだか邪悪な気配がまじる声でもある。利菜はここ数日、幻覚をみて幻聴だつて訊いてるのに、なんでこんなところにいるんだろう。思いはじめ。ここにきたのはまちがいでもないまちがいをおかしているような……だつてかあさんの声はかあさんがいつているんじゃないかもしれない佳代子の言うようにおさそいなのか

もこれはわなにはまったのかもしれないだつておさそいをうけてるのはわたしたちだけじゃないかもしれないしゆくえふめいとかじことかれんぞくさつじんとかさいきんやたらおおい……でも、足は階段を一步登りはじめたので彼女はすこし驚く。まだ佳代子の手を引いている、友達を道連れにするみたいに。しかし、階段を一步、また一步とのぼるたびに、さきほどまで頭にうかんでいた疑問はかききえ、佳代子に対する心配の情もきえてしまう。頭の中の耳に栓をされたみたいに。彼女たちはなにかにみちびかれるように階段をのぼりだす。そのあいだ、いまは夏でまだ日も高いというのに家の中がどんどん暗くなつていくことに気が付く。わずか数分で曇つたんだらうか？ さつき外で見上げたときは雲なんてなかったのに。でもここでは時間がどんどん過ぎるのかもしれない。そんなことを頭の片隅で考える。前頭部は霞がかかったようなのに、脳みその中心はフルスピードで回転している感じだ。アドレナリンやらホルモンやらが、バルブ全開であふれ出している感じ。二人は階段の手すりに手をかける。最後の数段を残し、利菜は立ち止まる。そこから見える廊下の壁に、亀裂が入っていることに気づいたからだ。その亀裂からは煙が出ているようにも見えた。

利菜はあれが見えるかどうか佳代子に訊こうかとおもつた。出力全開の脳みそが佳代子にも見えていると教えてくれる。彼女は佳代子と強く結びついているのを感じる。どんな周波数もひろえる高性能の受信機みたいに、彼女の脳はふだんは見えないものを、見てはいけないものまで見せてくれる。そして、亀裂からあふれ出るものは煙よりもどす黒く、黒ずんだ光みたいに見えた。やばい……と利菜は心臓のあたりを右手で探った。彼女は振り向いていないが、佳代子も同じように心臓に手を当てているのを見た。肉眼では見えないが、彼女の脳みそは肉眼の限界を超えたらしい。

そして、亀裂がさらに大きくさけ、どす黒い光があふれ出してきたかと思うと、その光ともに指が幾本も突き出て、亀裂の壁を、がつつつかんだ。

利菜はそこから紗英が見たという溺死女が出てくるんだと思った。じっさい頭が見えたときは濡れた海草みたいな縮れ髪で、その髪の毛の間から血走った眼が覗いていたのだが、佳代子が、　母さん？　とつぶやいた瞬間に、その女は杉浦登美子にかわっていた。佳代子が叫び始めた。

「母さんだ！　母さんだ！　母さんだ！」

佳代子の母親はスカートをまくりあげ、亀裂の中から大きく足を踏み出す。登美子の来ているワンピースに亀裂からあふれるどす黒い光がまとわりついた。登美子は腕を左右に押し広げる、亀裂がめきめきと大きくなった。中からは風と光が猛烈に吹き出し、利菜と佳代子は思わずバランスを崩しそうになる。あやうく階段を踏み外すところだったが、利菜が手すりをつかんだので（手すりはサラダ油が塗られたみたいに急にぬるぬると滑りだし、利菜は手すりの留め具に指を引っかけることでどうか二人分の体重を支えることが出来た、そして佳代子と体がふれたその瞬間、佳代子があんな母親を見るぐらいならここから落ちて死にたがっていることを知った、そんな親友の思いに利菜は身を引き裂かれるみたいな悲しみを感じた）なんとかその難だけは逃れた。

彼女は我に返って言った。

「佳代子すっかりしてよ！　おばさんがこんなところにいるわけない！」

振り向くと、階段は三十度ばかり勾配を急にしてみた。利菜は佳代子のことを腕一本で支えている。二人は崖から落ちかけた口ツククライマーみたいになっている。「あれはわるいものだ、これはおさそいだ、あんなのおばさんじゃないっ」

佳代子と言った。「母さんがあたしを殺すんだ！」

「殺したりするもんか！　はっ倒すよこの野郎！」

「だって母さんが……」

佳代子は言葉に詰まったが、利菜はその言葉の続き、もしくは佳

代子の気持ちみたいなのを全部理解してしまった。佳代子の母親が、酔っぱらって二人で死のうかとすすめたことも、今すぐ殺してやるつか、とか、あんななんか生まなきゃよかったと言ったこと、それはドラマからしたら月並みな言葉ばかりかもしれないけれど、佳代子がうけたショックは月並みな感じがじゃなく深かった。佳代子は思い出せないけれど、幼いころから、ろくにしゃべれもしないころからそんな言葉を浴びつづけていたし、それは彼女が思い出さなくても潜在意識のなかで厚くぶっとく根をはっている。利菜は佳代子と精神がつながるのを感じた。佳代子のうけた傷跡を、痛みを、その身で再現しながらのぞき見た。

利菜は悲しみよりもずつと強い憤りのなかでこう言った。「ちくしょう、あんたのかあさんがあんたにどういったってあたしはあんたといたいだよ。死にたいなんて死んだほうがいいなんて心のかたすみでだつて思わないでよ。こんなところ出るんだ。あたしもあんなもあんな方になんかいかない」と利菜は上を見る。

「さあ、気持ちを強く持つてよ。じいちゃんに言われたみたいにつ」「じいちゃん……」

佳代子が言葉が飲みこめないみたいに呆然とする。

「そう、じいちゃんつ。階段はこんな急じゃない。手すりもすべつたりしない！」

利菜が手すりをぶつたいた。その瞬間、勾配が元に戻って二人は階段にたたきつけられた。利菜は階段の角に肋と骨盤を打ち当て、痛みにつめきながら階上を見上げる、佳代子の母親は階段の上がり口に傲然と立ち、さあ、こっちに来るんだよ、と言った。男みたいに野太い声だった。その声を聞いた瞬間利菜は、こいつにはかなわない、こんな奴にはかなわない、数秒でも一秒でも長く一緒にいたら、説得されて心をへし折られてきつと絶対に引きこまれる、と思つた。手でも口でも。こんな手強い奴にはかないつこない、と。利菜はあわててわるいもの登美子から目を離すと、佳代子をせきたてた。

「さあ、下に降りて。玄関開けて逃げるんだよっ」

二人は音をたてて階段を駆け下りはじめたが、後ろからはそれをはるかに越えるおおきな足音が響いて、利菜は頭の真後ろにわるいものがびったりはりつくのを感じ、あいつがはき出す死の息が髪の毛を吹き払い、わあたいたいへんだ佳代子のかあちゃんかびったり後ろに食いついてる、と思った。三人が階段を文字通り波打たせながら駆けきつた瞬間、リビングから登美子が出てきた。一瞬で階下にワープして二人の行く手をぴたりとふせいだ。

「母さん……」

佳代子がうめいている。登美子は腕をふりあげ、娘のほおを手痛く張り飛ばした。

「やめて！」利菜は悲鳴を上げた。登美子が名状しがたいような顔つきで見下ろす。佳代子に殺すと言ったとき、おばさんはこんな顔をしていたんだろうか？「人の母さんに化けるなんて最低だよ……」震え声でつぶやく、登美子がまた手を振り上げたときには利菜はそのわるいものをつきとばしていた。未知のエネルギーは脳みそだけじゃなく体中を駆けめぐっていた。「佳代子をぶつたたくと許さないよ！」

そのとき、リビングと反対側の、仏間の戸が開いた。釈栄会の会長にして、この家の主人、坪井善三が頭をかきながら、

「うるさいぞ！ なにを騒いでるんだ！」

お経でも上げていたらしく、肩には文字の入ったたすきを掛け、手には数珠を持っている。彼は三人を（正確には倒れている三人目の人物を）見て、口をあめぐりと開けた。利菜は思った。この人には見えてる。

こんど有無を言わずに手を引っ張ったのは佳代子だった。彼女は家宅侵入を見つけたことで、全く度肝を抜かれて必死になっていた。

「行くっ！」

佳代子は玄関のドアをあけた。その瞬間、表の真夏の外気が家の

中の冷え切った空気と対立しあい、空間がぐわんとしなるのを二人は感じた。感じるどころか空間のねじ曲がる音まで聞いたのである。それでも二人は手で水を切るようにして空間の境をかきわけ（境目は泥みたいに二人のこどもをとりまいた）、なんとか表に身を乗り出した。利菜の肺に八月の正常な空気と熱気がながれはいいり、肌と全内臓はその急激な温度変化にきゅつと縮み上がる。

表に数歩かけだしたところで、二人は振り向いた。家の中では登美子から姿を変えた何かが、坪井に覆い被さるところだった。

二人が坪井を助けようか何か声をかけようかと迷っているうちに、玄関の戸がぱたんと閉まった。そして、アニメのコマが停止したみたいに静かになった。悲鳴もなにもきこえない。二人は顔を見合わせると、次の瞬間には自転車に駆けだし、サドルにとびのると一目散にペダルをこぎはじめた。もう肝も勇気も消し飛んで、後ろを振り返るゆとりすらない。

坪井家から遠ざかるその一時、辺りは確かに静まりかえっていたけれど、二人の心だけが悲鳴をきいていた。空間がねじ曲がってしまった家からは、すべての音が漏れなくなっていたけれど、フル回転の頭脳がそんな悲鳴を訊かせてくれたのである。

十三

二人が家までつづく帰り道で肩を寄せ抱き合い泣いたのは右のような事情があったからで、二人が無事坪井家から出られたのは、彼女たちが一人ではなく二人でおさそいにひっかかってしまったという、ただそれだけの理由にすぎない。佳代子の頬と利菜の背中についた血の痕は、わるいものが見つけた手形のようなものだった（その痕を二人はずっと気にしていたのだけど、道行く人で気づいた人はいなかった）。二つの自転車は全速力でかっとなだ。悲鳴が聞こえなくなるまで。あの音がなくなるまで。脳みそが元に戻るまでペダルをこいだ。そうしていれば、脳みそに回ったオイルを足が使い果

たしてくるみたいにペダルをこいだ。自宅のマンションがある方角とは道が違っていただけけれど、約一〇分間の全力疾走は、肉食動物が獲物を平らげるときの、バリバリびちゃびちゃいう音を遠ざけてくれた。どちらからともなくスピードをゆるめ、そのうち利菜はブレーキレバーを握りしめた。佳代子も止まった。

自転車は止まったが、心臓は全力疾走を続けていた。血液は体中を駆けめぐり、血管はふくらみっぱなしだ。二人はハンドルにつっぱした姿勢のまま目をみかわす。利菜は辺りを見回して、自分たちが矢追坂の途中まで登ってきたことに気が付いた。そこは町の西側で、彼女たちの自宅はもつと南の方にある。

二人はもういちど互いの顔をのぞく。彼女は見た？ と顔で訊いた。佳代子は見た、と顔でうなずいた。

二人は自転車で坂を下りた。後は歩いて家までの道を辿りはじめた。

佳代子は利菜に心の中を覗かれたような気がして、とくに母親との関係については誰にも知られたくないことが多かったから気まずい思いをしていた。利菜もそれがわかっていなかったから、登美子については触れずじまいでここまで来た。ただ、今日受けたおさそいは今までにない強烈なものだったし、おまもりさまへのおさそいというよりはあの世へのおさそいみたいだったな、と彼女は感じ、それですっかり怖じ気づいて泣いたのだった。今日ばかりはただのおどしやすかしじゃなく、本物の命の危険を感じた。なのに母親はいなくて、父親も様子がおかしく、相談すべき大人はもう誰も周りにいなかった。母さんはあんなふうに悪い者に捕まって、何処かに連れて行かれたのかもしれないと彼女は考え絶望した。最悪なのは寛太郎がこのことをまったく信じていないことだった。子供たちの様子がおかしいのには気づいている。でも、なにが起こっているのか、ほんのところは知らないのだ。利菜と佳代子は今日の出来事で、おさそいは頭がつくった幻覚なんかじゃないということをも身に染みるほどに理解した。そうして、自分たちがすっかり追いつめられてい

ることを、子供ながらに感じたのだった。

利菜は他のメンバーがどう思っているのか知りたかったが、家に帰りつくとほどなくして達郎から電話があった。あまりうれしい電話ではなかった。彼は自分が怪我をしたことと、瀬田英二がいなくなったことを伝えてきたからだ。達郎は明日、校庭にみんなで集まるうと、それまでに自分は寛太と英二のことを調べに行くつもりだと言った。彼はみんなが集まって話をした方がいいと言った。それから、新治が帰ってこないんだけど、一緒じゃなかったのか、と訊いた。

利菜は新治とはついさつきまで一緒だったのだということと、自分たちは新治と別れた後にひどい目にあっただけだということを一拳にまくしたてたかったのだが、そうはせずに明日は必ず行くから、と言って、慌てて電話を切ってしまった。そのあと佳代子から電話があった。佳代子はさつき達郎から電話があったことを告げた後、明日必ず行くよね、と変に真剣な声で念を押してきた。佳代子がそんなことを訊くこと自体、利菜は恐ろしかった。

電話の音がなくなると、部屋は黙りこんでしまった。居間には父親と自分が脱いだ服がとっちらかっている。台所に行くと、カップラーメンの開けたのや、使ったままの皿やコップが、テーブルや洗面台に散乱している。ここ数日のゴミで目一杯ふくらんだゴミ箱、入るだけ詰めこまれたまま結ばれてもいないゴミ袋が二つある。西日がさしこむ台所は、すっぱい匂いがした。ゴミ袋に近づくと、ナイロンにはレタスの腐った茶色いヘドロみたいのがこびりついていた。虫もいた。夏場に誰も窓を開けることもなくクーラーをかけることもなかった部屋は、蒸し暑い空気がこもっており、かさこそとゴキブリの走る音がした。

「こんなあんたしん家じゃない……」

口に出すと泣けてきて、利菜は腐ったゴミの匂いのなかで、しゃくり上げながら鼻水を垂らした。あの家に行けば母さんに会えると思っただのに、それだからこそ危険を犯してまで佳代子に付いてきて

もらったのに、結果は違ったのだ。

ひとしきり泣くと気が落ち着き、利菜は少しだけ気持ち前向きになった。こんなふうに泣いてちゃいけない。泣いてもいいけど、その後はきっぱり元気をださなきゃだめだ、と寛太郎に言われたとおり、臭い部屋で胸一杯に空気をすった。

利菜は部屋を歩き回って、あちらこちらの窓を開けた。クーラーも全開でかけてやった。ほんとはそんなことをしたら、かあさんに電気代がかかるでしょ、と怒られるけど、今日ばかりはその心配もない。「いない方が悪いんだよ」というと、清々とした気分になった。母親は几帳面な人で、部屋を散らかすのは厳禁主義で、掃除機を一日一度はかけ、窓ガラスも週に一度は拭く人だった。その反動で利菜はまったく家のことをやらなくなっていたが（ちよっと潔癖性気味にはなっていたが）、生まれて初めて家事をやるうという気になった。利菜は父親のタンスから軍手を見つけた。花粉症用のマスクもつけた。ゴミ袋の口を三つともしめてまわり、下のゴミ回収場までもっておいた。その後、彼女はたまったゴミを集めてまわり、たまった汚れ物を洗い、たまった服を洗濯機におしこみ、見よう見まねで回してみた。粉を入れ忘れたが、後で追加した。風呂を洗うと、お湯をためだし、それから部屋という部屋に掃除機をかけた。六時になると、父親がローソンの弁当をもって帰ってきた。片づいた部屋を見て、父親はしばらく無言だったが、ややあつて頭に手を置いた。

父さんがまともな反応を返したのはそのときだけで、後はずっと上の空だった。まるで頭の中の考えに熱中して、まわりのことには何も気が付かない様子だった。利菜は湯船に浸かり、なるべくリラックスしようとしてめながら、父さんはだんだんひどくなってくな、と考えた。風呂に顔をつけて涙をお湯に垂れ流す。父親が食事をするながら口からご飯をとりこぼす様子や、痴呆患者みたいにテレビをつけているのにまるで見ていない様子を思い出した。利菜はまるで父さんじゃない、誰か他人と暮らしているみたいだな、と考えた。

そうすると怖くなって、怖がったり不安がったりするとよく幻覚をみるから、お湯をジャバジャバと顔にぶっかけて気を紛らした。

こうして上原利菜の精神は日一日と追いこまれていったのだが、おまもりさまに戻る決心をしたのは、風呂から上がり髪を拭きながら部屋に戻り、そして机の上に置かれたある物を見つけたからだった。

ビニールボールがあった。

彼女はしばらく戸口に立ちつくし、それからゆっくりとした足取りで机に近づき、そのビニールボールを震える指で手にとった。ビニールボールにはひっかき傷がいくつもあった。色はピンクだった。茶色い染みのような物がこびりついていて、山で捨てたビニールボールだった。なめ太郎が投げ返してきたやつだ。利菜はビニールボールをテーブルに落とす。

そのとき、後ろで戸が開いて、利菜はなめ太郎が入ってきたと思っただが、戸を勢いよく開けたのは父親で、彼は爛々とした目で「ビニールボールは見つかったらっ！」と一声叫ぶと、本棚が揺れるほどきつく戸を閉め出ていった。

利菜は息を乱しながら、しばらくその場で立ちつくした。捨てたのに……と彼女はつぶやいた。捨てたのにどうやって戻ってきたんだらう？ 父さんがここに置いたのかな？ ビニールボールに手を伸ばす、彼女は指先で触れようとす。そのとき、ボールは自然に転がった。ボールについた茶色の染み、それはあのときついた血の痕なのだけど、その血痕はボールに幾重にもくっついて、笑った顔のようにも見える。

あれは父さんなんかじゃない、と考えると震えが起きた。部屋を出て、わき目もふらずに居間を横切り、玄関を開けると外に出た。家を出ていった。

第六章 竹村寛太、おさそいを受ける

第六章 竹村寛太、おさそいを受ける

二〇二〇年 移動農園にて

十四

佳代子が自宅の土間で意識をなくすころ、竹村寛太は荷台付きのトラクターを転がし、大森神社の鳥居の影を、ゆっくりとしたスピードでふみこえていった。寛太郎ゆらいのトラクターは、どんなに急いでも十五キロと出ることはない。寛太のとなりにはばっちゃんがついて、こくりこくりと首をこゆらし、居眠りをしているみたいだった。

寛太郎が死んでもう十年がたつ。その間自然農園は浮き沈みが激しかった。新しい方法を試みて、失敗をしたこともある。借金を抱えたこともある。寛太郎が死んで、失った信用を取り戻すのもたいへんだった。それまで自然農園の仕事の八割は、寛太郎の才腕によるものだった。だけど、農園は回復しつつある。収入が劇的にふえることはなかったが、いい作物が実るようになってきた。寛太はよいと思われるものはなんでも取り入れた。永田農法はその一つだ。昔ながらの方法で肥やしもつくった。金にはならないが、仕事自体は充実していた。ばあちゃんの行商はその、金にはならないがおもしろい仕事、の代表みたいなもんだ。

本日は上天気。木漏れ日の下を通りがかる車はなく、トラクターを走らすのはじつにいい気分だ。風は頃合いに吹き、寛太はここ数日 ときとすれば数ヶ月 なかったほどに、気が晴れ晴れとしてくるのを感じた。しかし、失踪し、あるいは亡くなった少年たちに思いがおよぶと、心の痛みはいつでもぶり返してくる。連続殺人

の被害者について、昔と変わらないことがある。彼らは六人と関係のある子ばかりだ。最近の被害者……井上久司少年は、達郎がコーチをしているリトルリーグに所属していた、古川浩二は寛太自身が自然農園に呼んで面倒をみた子供たちの一人だった。寛太には、あの子たちが、自分のせいで死んだように思えてならない。子供たちいなくなつた子どもたち。かれらはみんな死んだ、もしくは死体が見つからなかつた。そんな死体の一つ一つに、おまもりさまが関係しているのではないかと疑っている。おまもりさまに関わつて、助かつたのは自分たちだけだ。彼ら六人だけが助かつた。なぜ助かつたのかとあれこれ考えを巡らせるが、肝腎の記憶がどうしても戻つてこない。記憶が戻らないのは、利菜と紗英がこの町にいないせいかもしれない。新治もそう考えているようだ。だけど、二人に戻ってきてくれと言えるだろうか？ 紗英とは十年以上も会っていない。紗英はきつとおまもりさまのことなんて忘れているだろう。だけど、利菜は……？ 彼女はときおり郷里に顔を出す。その意味ではおまもりさまとの関係を絶つてはいない。昔の仲間にはみんなおさそいがかじまっている。二十五年前にも見られた症状がすべてあらわれている。あいつだけ例外なんてことがあるのだろうか？ それとも山の力は町を離れば薄まってしまうものなのか？ あいつが連絡をとつてこないのは理由があるのではないか？

「寛太！」

驚いて顔を上げると、軽トラが脇を併走していた。乗っているのは尾上達郎だった。寛太は明るい笑顔をわざとつくつて声をかけた。「よう達さん、どこ行くんだよっ」

達郎はトラクターのエンジン音に負けない大声で言った。「おまえに話があつてなつ。ちよつといいかつ」

寛太がうなずくと、達郎はトラクターを追い越し、少し行つたところにある空き地に車を停めた。

達郎は車を降りてトラクターの脇にきた。今日は紺の作業服、首にタオルを巻いている。もう四十に近く、最近では佳代子におっさ

ん呼びわりされている。

寛太はためらいがちに視線をそらした。達郎が、あのときと同じように、召集をかけるつもりなのだとわかったからだ。「なんだよ、話って」

「隆信の死体が見つかったらしい」

寛太は意表をつかれて言葉に詰まった。「隆信の？ 本当か？」

達郎がうなずいた。森隆信は最近の行方不明者の一人で、リトルではライトのレギュラーだった。

達郎は憔悴した表情をうつむかせる。「川で見つかったらしい。松の木の、いちばん深いところに沈んでるのを、子供が発見したんだ」

「子供がか？」ショックだった。水底にしずんだ死体を見つけたときの子供の様子は容易に想像できた。あるいはその遺体とは友人だったのかもしれない。「ひどいことになったなあ」

「ああ」

二人はしばらく黙り、やがて、達郎が「最近眠れるか？」

「前とかわんねえよ。こんなときに眠るのはむりだろう？」

「おれもだよ。まったくなあ、ひどいもんだ」達郎はタオルをはずして顔を拭き始めた。「さつきは、なにぼうつとしてたんだ？」

訊かれたが寛太は答えなかった。

「……子供の何か？」

と達郎は言い当てた。葬式には二人とも出ていたから、気持ちは同じようなものだった。寛太は耳をこすった。葬式の最後になつて突然泣き崩れた母親の悲鳴じみた泣き声が、いつまでもはりついている。達郎は母親を慰めていたから、思いはなおのことだった。無精髭の目立つあごをなで、

「なあ、寛太。おれたち、もう一度おまもりさまに戻るべきだと思わないか」

寛太は達郎をじつと見た。「本気か？」

「ああ」達郎はたばこをとりだしたが、火はつけなかった。「なん

ども考えたよ。おまえだつて考えてたんじゃないのか？ 戻るべきだと思っただよ。昔だつてそうしたんだ。おれと新治とおまえとだ。佳代子を誘うわけには行かないだろう？ 利菜と紗英はもともといないんだし、おれがさそえるやつは新治とおまえしかいないんだよ」

おまもりさまに戻ることは、寛太も考えていた。子供の葬式ほどひどいものはないと思う。悲鳴じみた泣き声　あの声を思うと、寛太はじつとしていられなくなる。とくに悲鳴を聞いて飛びおきる夜には。そんなとき、寛太はすぐさま身支度をして、山に向かおうかと、そんなふうを考えるのだ。

彼らが両神山のキャンプ場に出かけたのは四月の末に当たる。寛太はそのときのことを思い出し、身震いをした。あのときは山ほど死体を見せられて逃げ出したのである。彼らはその後山に戻ることはなかった。だが、二ヶ月近くがたつたいまも、事態は悪くなる一方でまるで好転していない。惜しむべきは、連続殺人の原因があの山にあると考えているのが彼らだけだったことだ。

「あんたが声をかけたときから、そんなことを言い出すんじゃないのかとは思ったよ」と言う。「新ちゃんは行ってくつていつてんのか？」

「まだ言つてない」

「四月に行つたときは、さんざんだつた」

「まったくだ」

「世の中ホラー映画じみてきたよな」

「でも、子供が死んでるのは現実だ。それも、おれたちのよく知ってる子ばかりが死んでる」

「おれたちのせいだつてののか？」

「なんともいえん」

「あの山になにがあるつてんだ」

「さっぱりわからん」

吐き捨てるような口調だ。寛太は思わず苦笑した。「じゃあ行つてどうするんだよ」

寛太が訊くと、達郎は怒りに燃えた目で彼を見た。「おまえはど

う思ってるんだよ。久司やほかのみんなを殺したのは、ただの殺人犯なのか？　こんな小さな町で犯罪がやまほど起こってるんだぞっ。昔から治安が悪かったわけじゃない。たった一年で、何もかも変わったんだっ」

寛太は言葉がでなかった。同じことは考えていた。久司は達郎のチームで、三遊間を守っていた。行方不明になった少年の中には、小学生のころクラスメイトだった、友達の息子もふくまれていた。寛太は達郎を見下ろし、「ほんとにおまもりさまに原因があるとして、できることってなんなんだ？　おれたちの考えてるとおり、おまもりさまにあるなにかが人の悪い感情を増幅するんだとするよな。あいつら悪い考えばかりふきこみやがるっ……だけど、そんなもんはどうやって対処したらいいんだ？　こどものとき、いったいなにがあっただよ」と言った。「あんたはなにか思い出したのか？」

達郎は黙ってポケットからライターを取り出した、手は震えていた。くわえ煙草に火をつけようとしたのだが、結局あきらめてたばこをしまった。

「新治はな、利菜と紗英を呼ぶべきじゃないかと言ってる」

寛太はうなずいた。「利菜は山で遭難したからな」

「そうだ。おれたちはがきのころ、確かにおまもりさまに入ったんだ。国村のじいさんの死体もみつけた。これをおぼえてるか？」

達郎が胸元から取り出したボールを見て、寛太の目は二倍ぐらいに大きくなった。彼は喉をしゃくり上げるとそのボールに手を伸ばした。二十五年前になくした、ビニールボール。「どこにあったんだよ……」

「息子が持ってた」達郎は奇妙に抑揚をかけた声音で言った。「これもおさそいだよ。おれたちはどっちみち山に戻るしかないんだ。そうするしか、方法がないんだ」

寛太は日焼けした腕にひたいを押し当てた。「このままふつうに……ふつうにというか、いままでと同じように暮らしているのかと

は、俺も考えるよ。だって、つぎに犠牲になるのはおれたちの子供かもしれないもん。葬式で泣いてる親のこと、あれ見たか？」

達郎はうなずく。

「おれはあんな目にあいたくないし、誰もあんな目にあうべきじゃないと思ってる」寛太はむっつりと黙りこむ。やがて、「……他にこのことを知ってるやつは、いると思うか？」

「おまもりさまに原因があるってことをか？」

「そうだ」

「寛太、もし、人殺しが現実にしたとしても、たとえそいつが捕まっても、つぎの殺人犯が出てくるかもしれないだろ？ コーチがおれをノックで痛めつけたみたいに、あの場所は人間の悪い心を増幅しちまうんだ。おれたちはガキのころかなり正確にそのことがわかってた。おまもりさまに何かがあるのを突き止めてたんじゃないのか？」達郎は、「誰かが知ってるとは おれは思えない。いるかもしれない、だけど、いたからどうすりゃいい。疑ってる奴が他にもいたとして、それで何かが変わるのか？」

寛太はトラクターのハンドルにおおいかぶさるようにして顔を伏せた。「おれたちでなにかしなきゃいけないっていいんだな」「そうだ」と達郎は答えた。「そう思うよ」

達郎はトラクターの座席によりかかる。やがて彼は煙草に火をつける。寛太にも差し出す。二人は空を見上げ煙草をふかします。五月の風のなか、二人のはき出す煙は雲に吸いこまれていくようだ。雨になるなあ、と寛太は思う。正確に天気を読む力も、寛太がこの仕事について身につけた特技の一つだ。だけど、あれからの二十五年間でしてきたことが、はたしておまもりさまの力に対抗しうるものなのかどうか、寛太にはわからなかった。神保町には今まさに人殺しという嵐が吹き荒れている。それに対抗するすべは、彼らのうち、誰も身につけていなかったのである。

寛太は寒気を感じ、首に巻いたタオルをはずした。達郎も感じているようだった。二人がかえりみると、大森神社の石の階段には、

死んだ子供たちが居並んでいた。久司、浩二、隆信……それだけではない。二十五年前に死んだ子供たちも、見知らぬ亡霊までもがひしめくように立っている。なんてこった……と寛太はつぶやく。こいつらみんなおまもりさまにやられたんだ。

「おまえらの敵はとつてやるぞつ、隆信！」と達郎がわめいた。すると、彼にも見えているらしい。達郎は亡霊に向かって近づきはじめた。寛太はトラクターを飛び降りた。「二十五年前、おれたちはけりをつけるために山に行った。それでもやり残しがあるっていうんなら、もう一度だつて行ってやる。だからおまえらは亡霊みたいにして出てくることはないんだ！」

寛太は亡霊に駆け寄ろうとする達郎の体にしがみつく。

「誓つておまもりさまに戻つてやる。だから、息子には手を出すな、他の誰にもだつ。ちくしょう、これ以上、人を殺すなつ、殺すなよ……っ」

達郎は子供たちというより、わるいものそのものに話しかけていた。亡霊たちの姿がゆがんだ。寛太の腕のなかで達郎が泣いている。亡霊たちは無言のまま、だから寛太には承諾か否かがわからない。達郎が身を震わせるうちに、二人が感じていた悪寒はかき消え、そして、彼らの姿もかき消えた。後には大人になった二人の少年だけが残されていたのである。

十五

一九九五年 八月十七日〜十八日

八月十七日の夜、家を出た上原利菜は杉浦佳代子呼びだした。公園脇にある公衆電話から連絡をとった。彼女たちが住むのは県営のマンションで、佳代子が住むのは隣の棟だ。

コールをならすと、佳代子はすぐに出た。佳代子の母親は仕事に出していない。佳代子は弟たちを風呂に入らせ、ご飯を食べ終えたと

ころだった。

中野区でわるいものを見たその日のことだ。部屋にビニールボールがあつたこと、父親に怒鳴られたことを話すと、佳代子はすぐに駆け下りてきた。利菜の髪はろくすっぽ乾いていなかったから、公園で佳代子を待つ間に身体はすっかり冷え切っていた。二人は利菜の部屋にもどり、そのビニールボールが山で捨てたものなのかどうかを確認した。本物なのかどうかはわからなかった。そこにあること自体が問題だった。父親が持ちこんだとしても、両神山に行ったこと自体話していない。

佳代子は泊まっていくことにした。母親は怒るだろうが（彼女の母にとつて一日の三分の二は怒りの時間だ　このところは以前よりいっそう起こりやすくなっていたとはいえ。それだけ怒っていれば気がおかしくなつて当然と思われる）、こっぴどく痛めつけられるかもしれないが、佳代子はなににもまして会いたくない気分だった。帰ってきてもひどく酔っぱらっているから、娘がいなくなっていることに気づかないかもしれない。後は昼までバタンキューだ。佳代子はわずかに悩んだあと泊まることを申し出た。ぶん殴られても利菜というやろうと思つたのだ。

翌朝、一人早く起きた利菜が、父親を捜して家の中を歩き回っていた。父親の姿はなかった。もう十時を過ぎていたから当然である。台所のテーブルには千円札が置かれていた。折れ曲がった千円札が、ポツンと。顔を洗い歯を磨くと、部屋に戻った。

「佳代子、お父さんもういないみたい。パンもないしさ、ご飯はコンビンでも行つて……」

佳代子は起きていた。くだんのボールをじつと見つめていた。脇の窓からは朝日がさし、ピンクのビニールボールをじつと照らしている。茶色の染みを日差しがジリジリと熱している。佳代子は物も言わずに見つめている。

「佳代子……」

利菜が近づくと佳代は振り向いた。

「……やっぱりこのボール本物だよ。おさそいが幻覚ならさ……ボールがここにあるのはおかしいんじゃないかな」

佳代子はボールに手を伸ばす。

「ほら、さわれるもん。だったらさ、このボールは現実ってことでしょ？ それともこれも頭がつくってるだけなのかな？」

「みんなに見えない血みたいに？」

「みんなに見えないから、それがうそだなんてかぎんないよ。このボール、たしかに池に捨てたんだから」

二人は黙ってボールを見つめた。佳代子はうまく説明できなかったが、そのボールは雄弁にしゃべっているみたいだ。このおさそいは現実だぞ、と。二人は昨日登美子に（登美子の姿をした何かに）つかまりかかった。佳代子はいつに頬をはられた。ほっぺたはまだ赤く腫れている。あいつはあたしにさわることができた。幻覚なの？ さわることができるんなら、もつとひどいこともできるんじゃないだろうか？ 佳代子の疑念はつきない。

「そのボールどうするの？」と利菜は訊いた。

「達郎ちゃんたちにも見せる。昨日のことも全部はなそう。向こうも言いたいことがあるみたいだし」

二人は着替えを始めた。佳代子は家に帰る気がしなかった。母さんには会う気がしない。服は利菜のを貸ることにした。背丈が同じでこれまでもよく貸し借りっこをしていた。佳代子は注意をして服を選んだ。利菜が気に入ってそうな服は借りないことにした。おさそいがはじまったら、どんな目にあうかわからない。いつ汚して捨てることになるかわからない。

佳代子は時計を見て驚いた。「もう十時まわってるっ。新ちゃんたち下で待ってるよ」

二人は急いで身支度をすませると、バタバタと部屋を出ていった。利菜は鍵をかけるのを忘れなかった。彼女は郵便受けの隙間に扉の鍵を押しこんだ。佳代子と一緒にエレベーターに飛びこんだ。結局彼女は山でふたたび発見されるまで、この家には戻らなかったこと

になる。

新治はすでに駐車場に来ていた。自転車の荷台に腰をかけ、片足をぶらぶらさせている。彼は降りてきた二人を浮かぬ顔で出迎えた。朝日の下でそんな浮かぬ顔をしていると、新治は本物のネズミ男みたいに見えた。

利菜が訊いた。「達郎ちゃんは？」

「寛ちゃんと出かけた。さきに阿曾商店で待つててくれって」

寛太と水力発電所まで出かけたという。そこで瀬田英二の自転車が発見されたのだ。瀬田英二は友達との待ち合わせ場所にも姿を見せず、家にも帰ってこなかった。ちょうど連続殺人の話で町はもぢきりだったから親はすぐさま警察に通報をした。そして、友達との待ち合わせ場所とさほど遠くない発電所の入り口で、英二の乗り捨てられた自転車が発見されたのだ。

佳代子と利菜はともに親と会わないか、会ってもろくに話さなideいたから、そのあたりの詳しい話は初耳だった。新治は昨日両親から訊いた話を（三田のおじさんと話すのはつらかったが）二人に話して訊かせた。英二の荷物は自転車にくくりつけられたままだった、ということ。警察が目下金熊川を捜索中だ、ということ。早くみつかるといいな、と三田のおじさんは言った。それから新治たちに、一人で川に近づくんじゃないぞ、と心配顔で言った。そんなおじさんを見てみると、新治は図書館での出来事がますます恥ずかしくなったのだった。

十六

校門前の駄菓子屋には、すでに紗英がきていた。阿曾商店は勘定場が広い畳みの縁台になっていて、そこに腰かけ、くつろげるようになっている。利菜は二人にもビニールボールを見せた。新治と紗英は無言だった。みんなひどく無口になった。ときおり駄菓子を買っては食べたが、妙に味がわからなかった。阿曾商店の婆ちゃんが、

「ごそごそと茶を入れては静かに飲んだ。

十分ほどすると寛太たちがきた。佳代子たちが駄菓子屋を出ると、学校の門は封鎖され、運動場には子供たちの姿がない。その方が好都合だった。みんなは買いこんだお菓子をもつて、裏門にまわった。門のそばに自転車を固めて置いた。達郎を先頭に門をこえて中に入った。達郎からリトルでの怪我の話をせびりながら運動場にまわると、テラスの階段に腰を落ち着けた。そのときには雨はやみ、テラスの赤いタイルは乾いていた。六人は黙々とお菓子を広げ、黙りこくって校庭や雲を眺めた。

口火を切ったのは佳代子だった。達郎に、「敷地には入れたの？」
「入れなかった」

警察がいたからだと言ったので、みんなはちょっと緊張した。達郎は寛太と連れだって、発電所の様子を見に行った。行こうと言い出したのは寛太で、彼は今も青い顔をしている。佳代子は、様子が変だな、と思ったが、それは彼女の精神状態が影響していたのかもしれない。佳代子は頬にできたあざをさすりながら、物思いに沈んだ。坪井の家で腕を振りかぶる母親の姿を思い描き、身震いする。松井という子が父親に殺されて、それからというもの佳代子は母親が怖かった。親が子供を殺すなんてことがあるのなら、あたしも母さんに殺されるんじゃないかと疑った。だから、あの家ではわるいものが登美子に変わったのかもしれない。ちかごろの母親は始終酔っぱらって、自分で自分のことが、どうにもできない様子だった。

誰から話す。達郎が言った。佳代子はみんなの顔を見た。自分のことを相談したかったが、一番に話すのはいやだった。昨日のことを話すとしたら、母さんについても話す必要が出てくるだろう。母親がそんなふうだなんて　酒乱だなんて　友達にも話すのは恥ずかしかった。それに母さんが悪いのか、自分が悪いのか、その辺りにも確信が持てないでいた。登美子は娘がうんと幼いころから、こんな惨めな生活をするのはみんなおまえのせいだと言い聞かせてきた。もちろん利菜や紗英が、そんなことはないと言い聞かせてく

れる。でも、弟たちの世話をいやがったり反論しようものなら、こつぴどくやいとを据えられた。弟たちの面倒をみるのは当然なのだとしてつけられた。利菜の入れ知恵も、やいとの前には効果が薄れた。佳代子はそつとそつぽを向いて、にじんだ涙をこつそりぬぐった。誰にも気づかれずに泣くすべも、この十二年で佳代子が身につけた生活技術のようなものだった。

利菜は瀬田英二とは、四年のときクラスメイトだった。当時は、あの子のことを英二君と呼んでいた。「英二君、水泳パンツはいてなかったんでしょ？」奇妙な視線が集中した。「バツクの中に入つたままだたつてことつ。そう訊いたんだよね……」

達郎が言った。「警察は川を捜してた。おぼれたと思ってるんじゃないかな？」

「おぼれたんじゃないんでしょ？」佳代子の言い方は断定的だった。利菜が言いたかったことを代弁していた。「おぼれたんじゃないんだよ。水泳パンツもはずかに泳ぐなんておかしいもんつ。それに発電所の下で泳げるわけない」

佳代子が言ったのは、あの辺りの水深が浅いからだ。子供たちはもう少し上にある松の木あたりで泳ぐし、瀬田英二が友達と集まるうとしていたのもその場所だ。英二の自転車があつた場所とはそんなに離れてない。佳代子はこう質問した。

「英二君がいなくなつたの、おさそいと関係あると思うつ？」

「わからないよ。発電所の近くでいなくなつたなんて気味が悪いけどさ、でも、あいつは山には行つてないだろ？」

「別のときにおまもりさまに行つたつてことはない？」みんなはいつせいに紗英を見た。「英二君、わたしたちとは別のときにおまもりさまに行つたのかも。そんであいつに捕まつたんじゃないかな」「捕まつたなんて言わないでよ。英二君いなくなつただけかもしれないじゃん」

佳代子の声は震えていた。でも、みんなの表情は、おさそいと関係ある、と言つていた。こんな目に合っているのが、自分たちだけ

だとは思えなかつたし、思いたくもなかつた。英二の身に何かあつたなんて、もつと考えたくなかつたが、発電所に置き捨てられた自転車はなにかを暗示している気がした。一同は　いなくなつた子供のことを話し合うだなんて、不気味なことだつたけど　お互いが同じように感じているかを確かめたかつた。

達郎が吐息をついた。彼の顔は蒼白で、大きなガーゼが痛々しかつた。達郎の頭からはある考えがこびりついて離れない。それにみんなにうまく伝えられるか自信がなかつた。

「おまもりさまに行つてから変なことばかり起こるよな」と彼は切り出した。実際には夏休みに入る前から、町の様子はおかしかつた。集団下校が始まつて、遠方の生徒のために送迎バスまで用意されていた（達郎たちはあぶれた口だが）。表で遊ぶ子どもたちの姿が、目立つてへつたころでもある。なのに大人は肝腎なところで子供たちに注意を払わなかつた。いちばん顕著なのは自分たちの親だつた（かわらないのは紗英の親だけだつたが、これは彼女の母が子育てについて、強烈な信念を持っていたからだと思われる）。これだけ外を出歩いて、寛太の家に泊まりこんでも、苦情らしい苦情を言つてこない。達郎はそんなことを思い出しながら話した。

「おれはじいちゃん言うとおり、おさそいのは、幻なんだと思いたかつた。でも、そうは思えないんだよな。溺死女とかなめ太郎とか、おれはばかばかしいつて、そんなのいるはずない、こんなこと起こるはずないつて思いこもつてたけど、おれたちそんなことしちゃいけないだよ」

達郎は一気にまくしたて、みんなのことを挑発するような目つきで見渡した。

紗英が言つた。「でも、じいちゃんは幻覚だつて言つた。達郎ちゃんだつてなめ太郎のことばかにしたじゃん」

「それは謝るよ。正直言うと、おれはいまリトルの試合がいちばん大事だつたんだよな。でも、コーチの打球をうけて、ほんとに危険なんじゃないかっておもいだした。わるいものつて、おれたちの頭

がつくつた幻覚なんかじゃなくって、ほんとにあるんじゃないかっておれは思うんだ」

達郎の顔は真っ赤になって、しゃべる声は甲高かった。見えないのに存在するものについて説明するのは難しかった。達郎がおさそいについて認めるような発言をしたのはこれがはじめてだった。達郎の熱心な話しぶりにみんなは身を乗り出した。

「あんときの練習は監督がいなくてさ、藤尾って大学生のコーチが代理でノックをしてたんだ。最初はふつうだった。ランニングもストレッチもいつもとおなじにやっただ。キャッチボールのときは人数がたなくてコーチもまじってやった。そのときはふつうだったんだ。でも、ノックがはじまって、コーチの様子が、おかしくなった」達郎の顔は赤くなり、この告白を恥じているようなそぶりだった。佳代子は達郎がもう黙ってしまふんじゃないかと思ったが、彼はやめなかった。「そのことはリトルのみんなも認めてる。コーチのノックがおれに集中しはじめてさ、いやってほどきつくなつて、なのに俺にもっと近寄れっていうんだよ。もっと、もっとだっ。みんな目え丸くしてさ、コーチはおれに近寄れっていうだけじゃなくて、ののしるんだよ。おれはもうやばいって思ったけど、そのときにはもう遅くって……」

「ボールが当たったんだ……」佳代子が言った。

「そのコーチ、俺知ってるぜ」寛太が言うのと、達郎はうなずいた。

「やさしいいい人だろ。きびしいけどさ。終わるとジューズおごってくれたりするし、面倒見がよくって、俺は好きなんだよな。だけど、あときはコーチの顔がゆがんで見えてさ、コーチの顔がその

……」

「わるいものみたいに見えた？」利菜が言った。達郎はまたうなずき、「そうなんだよ。おれおつかなくてさ。ボールが当たったのは、身がすくんだせいだ。ボールが来るのは見えたんだけど、脚が動かなくてさ。おれがぶつ倒れたら、コーチは元に戻って……」唾を飲む。「へんな言い方だけどほんとなんだよな。鬼みたいに見えたの

が、いつもの顔になって、慌てて飛んできたよ。おれのこと本気で心配してた」

「達郎ちゃんにけがさせたんだから当たり前だよ」佳代子が言った。「コーチのこと悪くいうな。コーチのせいじゃないんだ。おれはこんなことみんなに言いたくないし、考えたくもないよ。でもな、もしかしたら、ほんとに危ないかもしれないだろ？」

「つまり、何が言いたいのよ」紗英が不機嫌に言う。

「つまり知つといた方がいいってことだよ。みんな油断しちゃいけない。じいちゃんが言ってることは間違いだ。ほんとだけどもちがいないんだ」

利菜が眉をとがらせ、「それってわけわかんないよ。間違いなのに、ほんとなわけ？」

「半分はほんとしてことだよ。度胸があれば、わるいものをおっぱえる。これはほんとだっただろ？ でも、じいちゃんはおれたちが見てるのを、ただの幻だつて思ってる」間をおいて、「でも、おれはそうじゃないって思ってる」

「ボールが頭に当たつたりするから、そんなこと考えんよ」

紗英がつっけんどんに言った。みんなの視線が集中して、彼女は赤ら顔を伏せてしまった。

達郎は大人びてうなずいた。「あのノックではつきりしたのはほんとなんだ。おまもりさまになにがあるかはわかんないけど、そいつはおれたちになめ太郎を見せたり、コーチを操つたりしてるんだと思う。お化けだかなんだか知らないけど、おさそいつてのがほんとにあつて、そいつはだんだん強くなつてる。とおれは思う」達郎の口調は力強かった。「松井が親父に殺されたのも、町を歩き回ってる殺人犯も、みんなおまもりさまが操ってるのかもしれない。みんなはどう思う？」

みんなは顔を見合わせた。そしたら新治がぽつりぽつりと話し始めた。新治の心は、あのことを思い出すのをしぶつたが、にいちゃんには逆らえない。正直に話したにいちゃんには。それに新治はみ

んなに訊いて欲しくもあつた。心にしまつておくには負担の大きい話だつた。そいつが三田のおじさんに変わったことも、そいつがしゃべつた話の内容についても、できるかぎり正確に思い出し、みんなに伝えた。自分が三田のことをどう思つていたかという下りになると、新治はうつむいて涙とよだれをこぼしてしまつた。でも、みんなはあるていど兄弟の置かれた状況を知つていたから、軽蔑したりはしなかつた。新治も達郎も、新しいおじさんに意地悪をするような奴じゃない。友達が自分の話を受けて入れてくれたのを感じ、新治はほつと安堵した。みんなのことがますます好きになつた。あの事件以来、ずっとつづいていたいやな気分が少しだけほぐれた。新治は最後に、兄ちゃんの言うとおりだと思う、幻なんかじゃなくてほんとに危険だと思う、と言つた。

新治の話が終わると、一同は黙りこんだ。佳代子と利菜は顔を見合わせ、昨日起こつたことを話しはじめた。新治と別れたあと、利菜が母親を見つけに行きたいと言いはじめたこと、坪井という宗教家の家に行ったことを包み隠さず正確に話した。その家では階段や手すりが増したし、壁の裂け目からは佳代子の母親があらわれた。あいつはあたしたちの心が読めるんだよ、佳代子はそう言つた。それで一番いやなふうに姿を変えるんだ。佳代子がそんなふうに言つたので、達郎は身震いしながらこう思つた。あいつらはおれたちのことを知りつくしてるんだ。

二人の話にみんなは真剣な表情で訊きいつていたが、利菜がビールボールを取り出すと、食い入るような目つきに変わった。達郎と寛太は信じられないと言いたげにボールに顔を近づけた。

達郎が、「なんだよ、それ。おまえ持つて帰つてきたのかよ」

「ちがう、気が付いたら机の上にあつたのよ。昨日の晩だけ……朝出かけるときはなかつたのに」

みんなはビールボールに目を落とした。佳代子が言つた。「あたし、それ捨てる時一緒にいたから、知つてんだ。部屋にあるはずないんだよね」

「達郎ちゃんの言うとおりでよ。親がおかしいのは幻覚じゃないもん」

利菜が言うと、達郎はうなずきを返しながらこう言った。「大人がいうみたいになさ、殺人犯はほんとにいるんだろうな。だけどそれだっておまもりさまと無関係とは言えないかもしれない」

「どういうことよ？」紗英が訊いた。

達郎は立ち上がった。彼は頭をがしがしとかいた。「コーチを操ったみたいにな、おまもりさまの力が犯人を動かしてるかもしれない。幻はあいつそのものじゃなくて、おれたちの心がみせてるのかもわからないよな。だけど、おまもりさまの力が働いて、きっとそれが原因でみんながおかしくなってるんじゃないかな」

佳代子是不機嫌そうに口をとがらせた。彼女は達郎が言ったことを認めたくなかった。「じゃあ、おまもりさまに何があるの？ ダースベイダーみたいな悪役がいるっての？」

「そんな妖怪なんていないんじゃないかな……」達郎は言った。彼は少しうつむいて沈思熟考しているようだった。「おれはとってもそうは思えない。でも、満月の夜は人間が凶暴になるっていうだろ？ あの山にある何かみんなをおかしくさせてるんじゃないかって、おれはそう思うんだ」

みんなは満月の話は、テレビで見るか、雑誌で読むかしてそれぞれに知ってはいた。満月のもつある波長が、人を凶悪にさせるのだ。そんなとき、犯罪件数はうなぎ登りになる。それに両神山にはおまもりさまという誰も近づかない場所まである。みんなはあの山にある何かについて真剣に考えはじめた。

「寛ちゃんは？」佳代子が訊いた。

そういえば、寛太はみんなが合流してから、一言も口を利いてない。

「そうだよ、寛太はなにもなかったのかよ？」達郎も訊いた。

みんなの視線は竹村寛太に集中した。むしろ寛太の身にも何か起こっていることを、期待しているかのような目つきだった。そんな

集中砲火を浴びても、寛太はあいかわらず青い顔をしてうつむいている。達郎は寛太はもうしゃべんないのかな、と思つてそつぽをむいた。そりゃしゃべりたくないこともある。すると、寛太が口を開いた。

「おれいたかもしんないんだよな……」

いたんだよな、と彼は言った。

なにが？ という顔で達郎は向き直る。寛太は一気にまくしたてた。

「おれ、ほんとには松の木で泳ぐメンバーに入つてた。でも、あそこは発電所に近いから、行くのやだつたんだよ。だから、断つた。もしたら、英二のやつが代わりに行くことになつた」

寛太はあぐらをかいて足首をつかみ、そのあしくびにうんと顔を近づけた。泣くのをこらえているみたいだつた。寛太が発電所に行きたがつたのは、英二のことを確かめるためだつた。英二が自分の身代わりになつたみたいな、そんな罪悪感を感じていたのだ。

「おまえのせいじゃないよ」

達郎はたまらなくなつて寛太の背を叩いた。寛太はただっこみたいに首を振つた。それも激しく。彼の顔から鼻水と涙が垂れて左右に散つた。寛太に元気がないのも無理からぬことだつた。みんなの目にも涙が浮かんだ。達郎だけが考え深げな顔をしている。

「達郎ちゃん、あたしたちどうすればいい？」

佳代子が涙をぬぐつて訊いた。彼女は手の甲についた涙をじつと見つめた。

「図書館に行つて山について調べてみないか」と達郎は提案した。彼は新治に目をやった。「青葉図書館じゃなくてさくら図書館に行こう。すぐ近くだし。あそこの方が古い本とか、神保町のこと書いてある本がたくさんあるはずだ」

達郎は寛太の肘に手を回して彼を立たせた。みんなも立つた。かれらは校門の外に置いた自転車のところまで歩いていった。

殺人事件が起こり始めてからこちら、校庭での遊びは禁じられて

いた。学校には当直の先生がいて、六人の姿も目にしていた。けど、なにも言わなかった。注意もなかった。そのことに彼らは気づいていない。おまもりさまの血が誰にも見えなかったみたいに、町の人たちは彼らに関心をはらわなくなっていた。後年佳代子は家の土間に倒れ、薄れゆく意識のなかでこう考えた。あのときは、六人の存在が急に町から消えつつあるみたいだったな、と。

校庭を出るとき、最後に紗英がこう訊いた。「あたしたちもうにげられないの？」

みんなは互いの顔を、盗み見るみたいに目を見交わした。達郎はじつと前を見た。佳代子も利菜もうつむいて、靴をいじくりはじめた。それについては、誰もこたえようとはしなかった。

十七

さくら図書館は神保南幼稚園のほど近くにある。戦前に建てられたという、木造のふるぼけた二階建てだった。屋根は赤く塗られて駐車場のまわりには桜がたくさん植えてある。窓は大きい。南側の窓からは鉄橋を走る電車が見える。新治はこのさくら図書館も好きだった。バーコード式の青葉図書館と比べればすべてアナログという感じだったが、それはそれでよかったのだ。

さくら図書館はその昔学校として使われていた。そのせいか、教室状の部屋がいくつもある。各教室はテーマごとにわけてあった。児童文学、日本文学、海外文学。目当ての郷土史は保健室があてがわれ、他の部屋に比べるとずいぶん手狭だ。六人はそこで山にかんする記述をさがしはじめたが、はじめてすぐにこんなやり方では一日たっても終わらないと佳代子は気づいた。そこで片端から調べるのをやめ、両神山について書いてありそうな本だけを棚から抜き出し、机の上に山積みにしていった。その上で一人一山のノルマをつくった。

女の子たちはまめだが、こういうことは大嫌いなはずの達郎と寛

太も（とくに寛太！）今日だけは文句をいわずに仕事をこなしていた。本がひとりでにめくれたり、外の低木が窓をふさいだり、廊下を走ってきた誰かが扉をしめたり（座敷わらしだと紗英は思った）、妨害はさまざまあったが、それぞれに仕事をこなしていった。だけど、おさそいに関する記述はどこにもなかった。達郎は、あの山はずっと昔からあそこにあったのに、誰もこのことに気づかなかつたんだろうかと思った。犯罪が多発する現象は一九九五年に突然始まったのか？ 両神山には、昔山村があり、山の中には神社もあったということだけはわかった。だが、それがおさそいとどう関係があるのかまではわからなかった。

みんなは近くのコンビニで食料を買いこみ、昼を過ぎても食べながら調べた。

そのうち達郎が本を置いた。彼は黙って窓の外に目をやった。外では昔裏庭と呼ばれた場所で子供たちがドッジボールをやっていた（ちなみに表の校庭は、半分は町に買いとられて道路になり、もう半分は図書館の駐車場になっている）。みんなは黙って達郎を見つめた。もう三時になっていた。

「もう帰ろう」

達郎は不機嫌な声で言った。

「調べないの」佳代子が訊いた。

「調べてもわかるわけないよ」

「じゃあ、どうすんのよ？」

佳代子が訊いた。達郎は振り向いた。憔悴した表情だった。そういえば、みんなちゃんと睡眠をとれなくて、目の下にくまを作っている。おまもりさまでなめ太郎を見てから、四日がたっていた。その間、まともだった日は一日たりともない。それぞれに恐ろしい体験をし、幻覚も見続けていた。

「みんなこのまま我慢できるか？」と訊く。「いまのままだといつまでたつてもおさそいは終わらないかもしれない」

「だから、どうするつもりなのよ」

佳代子が不機嫌に口をとがらせた。達郎は不機嫌そうに腰に手を当てる。わかつてるくせに、と言いたげな表情だった。

「おれたちもう一度山に戻るべきだよ。おまもりさまに何かがあるかわかんない。けど、そいつはおれたちに戻ることを望んでると思うもんな」

「そんなの……っ」と佳代子は絶句した。「危ないに決まってるじやんっ。あたしたちの人生まで終わっちゃうかもしんないんだよ。ひでゆきって子や英二君みたいに殺されるかもしんないっ」

「英二はまだ死んでない。それにおれはじいちゃんについてきてもらえばいいと思う」

達郎は言った。寛太郎が一緒と訊いて、みんなの顔つきが変わった。話は急に現実味を帯びはじめた。

紗英の泣き声がそんな妄想をうち破った。「でも、なんで戻んなきゃいけないの？ すっごく怖いよ。殺人犯がいたらどうする？

あんどきだつてさ、蔓草の向こうで国村さんほんとに死にかけてたのかも」

みんなはびっくりして彼女を見た。誰もそんなふうには考えてこなかったのだ。

佳代子が言った。真剣な決意めいた表情だった。「でも、あたしは行きたいと思うんだよね……母さんのこともあるしさ。これ以上あんな目にはあいたくない、あんな母さん、たとえ本物じゃなくても見たくないよ。あたしの妄想だとしたらさ、妄想が現実になったもんだとしたら、なおさら悪いよ。あたし母さんのことあんなふうに見てるの？」

誰も答えることができなかった。

「なおさら悪いよ……」と佳代子は言い終えた。

次に口を利いたのは利菜だった。図書室の机はその場所柄もあって、急速に会議室の様相を呈しはじめた。「うちも、母さんがいなくなっただじゃん。それっておまもりさまのせいかもしれない。父さんの様子もあんなだしさ。元にもどってくれるんならなんでもした

い

新治も同じ気持ちだった。寛太も（彼の場合は罪悪感から）戻すべきなんだろうなと思った。英二が戻ってくるんならなんでもしたかった。その意味では瀬田英二はおまもりさまに取られた人質のよくなものだった。紗英はこんなことがはじまる前から、家の中はめちゃくちゃだった。でも、溺死女をみたり、おそわれたり……こんなことがつづいたら気が狂うのはほんとうだ。そのうち、みんなとばらばらになったとき（どんなに気をつけても、引き離されることはあると思った）、なにか事件に巻きこまれるんじゃないだろうか？ 行方がしれなくなったり、そのうえ死体の一部が食べられていたりするのもかもしれない。自分の死体を想像するのはうそざむいとだった。紗英はむずがゆげに身を縮め、誰かの反対意見をまっただ出なかった。

「今日は寛太の家に泊まろう」と達郎は言った。「そんでじいちゃんについてきてくれって頼むんだ。明日は両神山に行く」

そして利菜に視線をあてがった。彼女は机の上でビニールボールをもてあそんでいる。みんなの視線が彼女の手元に集中する。利菜はそれに気づいてボールをしまった。

「そのボールもなんとかしなきゃな」

「神社に埋める？」

「そうしてもいいけど、まずはじいちゃんに頼みに行こう」

達郎は机の上に散らばった本を片づけはじめた。みんなもそれにならった。彼らが外に出るころには、時刻は三時をまわり、分厚い雲が目立ちはじめている。天候は怪しくなっていた。彼らがさくら図書館を後にするころには、両神山ではすでに雨が降っていた。その雨粒は、瀬田英二の遺体を洗っていたのだった。

十八

「じいちゃんがないっ？」

寛太の声が家の土間に響いていった。一同は寛太の家に戻っていた。寛太はばあちゃんと話していた。じいちゃんに両神山に着いてきてくれるよう頼もうと、寛太の家に集合したのに、肝腎の寛太郎が出かけていないという。

「なんでいないんだよ。どこいったんだよっ」

「同窓会で隣町に行くというとった」

「同窓会？」

みんなは顔を見合わせた。寛太郎みたいなじいさんでも、同級生が集まったりするのだろうかと疑問を持ったのだ。ふつうはもっと早くからはがきか何かで知らせるはずだと達郎は考えた。利菜はいなくなつた母親のことを、紗英は溺死女のことを思い出し怖くなつた。そりゃあじいちゃんは直接おさそいを追ひ払ってくれたりはない。そんなことはできない（見えないんだから）。でも子どもたちにとつて、寛太郎は心理的な防波堤のようなものだった。みんなはいつせいにうるたえた。泥棒がとりにいるのがわかつて、戸締まりをしようとするのに、肝腎の鍵がないようなものだった、しかも、この泥棒は、鍵がないのを知っている……。そんな気分だった。寛太はこの家にわるいものが制限なしに踏みこんでくるような気がして、さすがにおっかなくなつた。

「いつもどるんだよっ？」

ばあちゃんにつめよりなじる寛太を、達郎が止めた。

「やめるよ。隣町に行つたんなら明日には戻ってくるだろ」

「でも……」

「あたしたち急いでいきたいわけじゃないし、あたしは待つてもいい」

と佳代子は言った。二日ばかりがまんすれば、じいちゃんは戻ってくると思つたのだ。みんなは同じ気持ちだった。寛太も引き下がることになつた。

だが、夜になつても寛太郎が戻ってくる気配はなかった。連絡もなければ行き先もわからない。風呂にはいり浴衣にきがえるころに

なると、達郎もおかしいと思い始めた。寛太はやきもきしつぱなしだ。竹村家には男親がいないから、寛太郎は出かけるときは行き先と連絡先をかならず残していくし、出先で帰れないときは必ず電話をかけてくる。寛太は腹をたてたり、心配したりで忙しかった。

六時を過ぎると寛太家の周辺でも雨が降り始めた。寛太も達郎もいらだつていた。両神山に行く行かないよりも、寛太郎までいなくなつたことに不安を覚えた。

食事が終わつた。テレビはつまらなかつた。バラエティをみても誰も笑わない。八人も人がいて、話し声がつづかない。利菜と佳代子がトランプをはじめたが、カードをきつて配るさいちゅうにどちらもやめようと言ひ出す始末。男の子たちは蹴つたり叩いたりしてふざけていたが、それよりもじつと押し黙っていることの方が多かつた。屋根をうつ雨の音がいやに高く響いてくる。雨の音が子どもたちを屋内に閉じこめているみたいに思う。その大雨はわるいものの挨拶のようでもあつた。今からそこへ行くぞと。黒雲とともに舞いこんできそうだ。おさそいは時と場所を選ばない。これはほんただ。

一同は早めに就寝することにした。いつものように蚊帳を吊ると、布団をひいて横並びとなつた。雨はやまなかつた。

今日は大変だつたなあ。

達郎が布団のなかでぼんやりとつぶやいたが、その今日というのは、まだ終わつたわけではなかつたのだ。

十九

利菜が物音で目を覚ましたとき、家の中は真つ暗だつた。

外では嵐がおさまっていない。雨と風の音が部屋の中までとどろいてくる。雨戸がガタガタ鳴っている。利菜はじつと息を潜ませながら、さつき聞いた物音はまちがいか、と思った。耳をすます。みんなのいびき声がしたし、すこやかな吐息もした。だけど、かり

かりという音はまだ聞こえた。一人ごとく、ずつとつづいた。二つの音は夢まで届いて、彼女の目を覚まさせたのだ。

利菜の左には紗英と佳代子がいる。右隣には新治と達郎がいた。佳代子のはじっこはいやだというので、寛太は佳代子の隣にいる。利菜は掛け布団の下でじつとしたまま、誰かの独り言を（少なくとも友達との寝言ではなかった。声は床下から聞こえたから）訊きながら、これがまだ夢なのかを考えた。雨戸が烈しく鳴り、彼女は身を震わせる。

ピシヤア！

ふすまの閉まる音がした。利菜は布団の中で魚みたいに身をひるがえした。俯せになり、恐る恐る上を見ると、寛太の部屋の戸がすすかに揺れて閉まっていた。閉まった　　ということは、

開いてたっけ？

閉じていた気がする。眠るときは閉じていた気がする。寛ちゃんが夜中に起きて、開けたんだろうか？　じゃあ、いまは誰が閉めたんだろう？

利菜は眠っている人数を数えはじめた。自分を含めて六人いた。歌と寛太の母親香奈恵は別の部屋に寝ている、この部屋にいるのは子どもたちばかりだ。利菜はそうつと身を起こし、蚊帳の外まで視線を飛ばした。部屋のとなりは廊下で雨戸につづいている。利菜は雨戸が開きはしないかと怖かった。布団の中で手をついた。今日はみんな寝相が悪い、夢のなかで苦しんでみたいだ。寛太達郎新治、男の子たちもみんないる。ばあちゃんが部屋に入ったんだろうか……？　　なんのために？

利菜にはいつもの蚊帳が檻みたいに見える。襖はじつとしていてるが、気配がある。寛太の部屋に誰がいる……と彼女は信じた。

「佳代子……」利菜は紗英の体を越して、佳代子の体をゆすった。

佳代子は恐がりだけど、いちばん頼りになるのは彼女だった。「佳代子、起きてよっ」

佳代子はびくつと身を震わせ目を覚ましたが、しばらくにも答

えず身動きすらしなかった。そのとき佳代子は隣に寝ているのがなめ太郎だと信じていたのだが、やがてここが寛太の家で、今自分を揺すったのが利菜だということに気が付くと猛然と腹を立てた。トイレについてきてと言うつもりなら、絞め殺してやるうとさえ思った。

佳代子は身を起こし、

「なにっ？」

と利菜を睨みつけた。雨戸がごとごと鳴って、二人は布団をそつと引きつけた。風かな？ と利菜は疑った。ほんとに風なのかな？

佳代子が蚊帳の向こうでささやいた。

「なんなのよ？ まだ夜でしょ」

「床の下から音がすんのよ。それにさつきはふすまが閉まった」

佳代子は畳をみた。襖もみた。そして、「勘違いじゃないの？」

と彼女は訊いた。だけど、鼻で笑ったりはしなかった。佳代子はより緊張したのだ。

利菜はみんなを見て言った。「どうしよう？」

「開けよう」

佳代子は蚊帳の端をそつと押し上げ、四つんばいのまま外にでていった。利菜もつづいた。蚊帳の外では電池式の蚊取り線香が赤い発光灯をつけている。佳代子は畳に耳を近づけて、「ほんとだ、かりかり音がする」

利菜は佳代子の肩をつかんだ。「みんなを起こそうよ」

「だめだよ、騒いだらばあちゃんたちが起きてくる」と佳代子は言った。

利菜はそれが重大事であるかのようにうなずいた。寛太郎の言葉を思い出す　怖いときに怖がるだけの奴はしみつたれだ。利菜はじいちゃんに怖がっていると思われのはいやだった。寛太郎は常に誇り高い人間だ。そのことを寛太やみんなにも要求している節がある。利菜は子供ながらにその期待に応えたかった。佳代子も同じ気持ちらしかった。

佳代子がこう言う、「襖は一人でにしまったりしない。あたしたちは怖がったりしない」

「しない」と利菜はうなずいた。

佳代子が襖に手をかけ、素早く言った。「反対側から開けてよ。いっしょに開けるんだよ」

二人は左右から襖を同時に引いた。おばさんが棧に石けんを塗っていたから、襖は思ったよりもいきおいよく開いた。佳代子は尻餅をついた。利菜がうめくような吐息をもらした。「ひゃああああ……」

部屋の中には、服がぶら下がっていた。両神山に着ていった服、神社に埋めたはずの服だった。それも単にぶら下がっているだけじゃない、服は新たな血にまみれ、びしょ濡れになっている。古い血はえび茶色になり、泥も付いていた。掘り出してきたみたい……。

佳代子が、持ち場の襖をそつと閉めた。利菜も閉めた。

「ありえない、ありえないよ」佳代子がつぶやくような早口で「いたずらだったらいいのに、寛ちゃんのいたずらだったいいのに」

「それこそありえないよ、あの服、神社に埋めたんだもん。掘り出すなんてむりじゃん。寛ちゃんもこわがってた」と利菜は襖までお化けになったというような顔つきで戸を見上げる。「それに床も汚れてた。自分の部屋なのにそんないたずらしっこないよ」

佳代子は、揺れるような目つきで、利菜を見、「あの服、雨で濡れてたのかな？」

「ちがうと思う」

その証拠に臭いがする。燃え立つような、血の臭いが。

何かが天井裏を駆け抜け、二人は悲鳴を上げて飛び上がった。その音で達郎が起きた。彼は布団が空っぽになっているのに気が付き驚いた。「利菜っ」と新治の体をこして、二人が寝ていたはずの布団をなでた。「佳代子っ」

「ここだよ」

背中に声をかけられ、達郎は身を反りかえらせる。

「おどかすな、ぎっくり腰になるじゃんかよっ」

達郎は肚がたつたのと、ほっと安心したのとでおどけて言ったが、二人はまったく笑わず手をにぎり合っている。

達郎の下敷きになった新治が、

「なんだよにいちちゃん？」

枕元のめがねをつかむ、彼は冷たい寝汗をかいたせいで、寝間着がぐっしよりと濡れている。

「こつちに来てよ」

佳代子が静かな声で言う、自分たちが起きているのがばれるのを、こわがっているみたいな声色だ。兄弟は無言で顔を見合わせる。何があつたのかは考えたくもなかった。

「開ける気？」 利菜が佳代子に訊いた。「また開ける気？」

「そうよ」

「冗談っ、あんなのもう見たくもないよっ。気いついてんでしょ、臭いもすんじゃん」

「臭い？」 達郎が蚊帳からはい出てくる。懐かしい血の匂いが嗅覚をみたす。彼は部屋へとつづく襖を見た。いつもの扉が邪悪に見えた。「なにがあるんだよ？ 開けたのか？」

達郎が二人のそばへ行つた。彼はまだ子どもだが、中学生ぐらいには大きい。利菜はわずかに安堵する。佳代子が答えた。「服があった」

ひつと息を呑む音がし、三人は飛び上がった。振り向くと、新治が手で口を押さえている。新治はすまなそうな顔をし、視線をそらした。

達郎が、「神社に埋めたのにか？」

「なめ太郎だよ」 新治が布団をひきよせ、ふるえながらくるまる。

達郎はそれを見て迷った顔をし、「新治はそこで待ってる」と弟に言った。彼は襖に顔を近づけた。襖の向こうになめ太郎がいて、開けると黄色い目玉が向こうから覗いて、いなごみたいに素早い腕

が首をつかむにちがいない、と思いつながら扉に手をかけた。襖が五センチ開いた……むせかえるほどの血の臭いが、隣の部屋から返ってきた。達郎は震えた。寛太は仏間を兼用しているから、部屋には仏壇があり位牌が祀つてある。床の間にはへんてこな絵の描かれた巻物が垂れ下がっている。その上にはご先祖さまの写真が飾つてある、そのうちの若々しい写真は寛太郎の兄弟のもので、先の戦争で死んだ人だという。達郎はいつも、気味が悪いな、と思つていたが、いまはそんなもの目に入らなかつた、利菜と佳代子の目にもあの服が見えた。達郎の体がじゃまをして、新治には見えなかつたみたいだ。

達郎は唾をのんだ。襖を閉めた。今見たものを考えた。寛太は部屋の天井にロープをわたして、そこにプラモデルや野球のペナントをつつていた。服はそのロープにかかつていた。達郎は服をとめている洗濯ばさみもしかと見た。確かに血糊で真っ赤だつた。

「どうしよう?」

佳代子が訊いた。ばあちゃんと香奈恵はその部屋の隣で寝ている。佳代子はそれを起こそうかと言つているのだ。

達郎は服が独りでに戻つてくるなんて、その目で見ても信じるこゝとができなかつた。自分が見た物を確かめたくてこついつた。「電気をつけよう」

佳代子がすばやく立つてスイッチを入れた。利菜が言った。「すつごい血の匂いがするよ……あの服、ぐしょぬれで、真っ黒みたに見えたもん」

すると達郎は怒つて振り向き、「このかりかり言う音はなんだ? みんなは大きな声だつたから、ばあちゃんたちに聞こえなかつたか心配をした。かりかり言う音は四人がひそひそ話す間もずっとやまずに続いていたのである。寛太も紗英も起きてきた。二人は寝ている間にすっかり事情をのみこんだようで(夢も現実もおんなじぐらいにわるかつた)、恐怖に目を見開いている。」「おばちゃんを起こさないの?」利菜が訊いた。

「だめだ。だって、二人には見えないんだぞ」と達郎は答えた、他人に 大人に見えないこと自体が今では怖かった。「寛太、おまえの部屋に服がぶらさがってるぞ」

寛太の顔がみるみる青ざめる。みんなの顔も。

「神社に埋めたやつか？」

「そうだ」

「埋めたのに戻ってきたのか？」

「そうだっ」

「なによ、この臭い？」

紗英が両手で口をおおう。達郎が扉を開けたことで血の臭いはますますきつくなっている。寛太と紗英も蚊帳から出てきた。それを見て利菜は、これだけ血があったら、蚊の心配はいらないよね……と思った。口にしたら、佳代子にまちがいはなくぶたれると思った。

佳代子は他人をぶつのをこわがっている。おばさんと同じになるのが怖いのだ。それでも手が出てしまうことはある。

新治が達郎のそばにくる。

「見ない方がいいぞ」と達郎は弟に言った。

「見る。見ないよりいい」と新治は兄に言った。

寛太が率先して襖を開けた。寢床の明かりが部屋へと伸びた。おかげで恐怖心は減ったのだが、血も服も減っていなかった。びしょぬれの服はそこにあり、さきほどよりもよく見えた。服は雨のかわりに血をあびたらしく、裾からぽつぽつと滴り、畳に血溜まりをつくっている。

「最悪だよ」寛太は言った。「最悪だよ。みるよ、畳までぐっしょりだ。どうすんだ？ これ、どうすんだよ？」

これには達郎たちも同情をした。寛太はこれからもあの部屋で生活をしなければならぬのだ。

「もちこんだのおれじゃないぞ」寛太が涙目で達郎をみあげた。

「わかつてる」

寛太は額を手で押さえ、精一杯気丈な声で言った。「手伝ってく

れよ。あの服外に出さない」と

佳代子が言った。「血も拭かないと。早く拭かないと取れなくなるよ」

「あれにさわるの」紗英が言う。「吐くよ。まちがいなく」彼女はもうえずいている。

全員が泣き出しそうになっていた。女の子たちはすでに泣いていた。こらえようとしていたが、こらえきれていなかった。新治はシヨックでみじろぎもしない。寛太は畳が畳ごと、おろおろしている。パニックの波がみんなを包んで收拾が着かなくなり始めた。達郎は思った。じいちゃんに見つかる前になんとかしないと。べつに悪いことをしたわけじゃない。いたずらや悪さをしたわけじゃない。達郎のせいでも誰かのせいでもなかった。だけど、彼は怖かった。達郎はいつも弟たちのめんどうをみるようしつけられていたから、みんながこんなめにあっているのは自分の責任だと感じた。

「お、落ちついてくれよ」彼は寛太をつかまえた。「おまえ、かごをもつてこい。服を入れるから」

寛太が隣の部屋に駆けこんだ。その背中に、「新聞紙とティッシュ……それにぞうきんもだっ」と言った。

紗英が「おばちゃんを起こそうよっ」と言ったが、誰も耳を貸さうとしない。これだけ物音をたてたのに、起き出さないこと自体がふしぎだった。

誰も言うことを訊いてくれないとわかると、紗英もティッシュをとりにいった。達郎と新治は物に血がつかないよう、部屋に散らばっている物を片づけ始める。

「わたし、火箸をとってくる」佳代子が言った。彼女は振り向き、「利菜、ついてきてよ」佳代子が部屋を出ていこうとする。利菜は慌ててつづいた。

二人は寢床から土間につづく戸を開けた。障子戸の外には、土間に降りるための段差が一段あった。そこに足をおろすと寛太家の広い土間が見渡せる。居間からは寛太がつけた電灯の明かりが落ちて

いる。その先では真つ暗闇がずつと奥まで続いている。二人はすっかり怖じ気づいた。

利菜がスイッチをおすと、かちかちという音がつづくばかりで、電灯は反応しなかった。

「やっぱりだよ。こんなこつたるうと思つたんだ……」

佳代子は小声で「誰がいる……？」と訊いた。

「そんなこと訊かないでよ」利菜は小声で言い返した。いつたい誰に訊いてるのかと、疑いたくもなる。土間は暗く何も見えないが、誰かがいるとは考えたくもない。懐中電灯が欲しいと思つたが、同時に暗がりを照らしたくなかつた。明るくなつたところに、誰かが（つまりなめ太郎が）うずくまっていたら、どうしようと思つ気持ちが強かつた。

佳代子は利菜の手をまだ握っている。手首に跡が残るくらい強く。彼女はその手を引きながらこう言つた。「い、行こう」

「行くのっ？」

「あの服、素手でつかむ気？」佳代子は訊いた。「それも怖いよ……」

突っかけの上に飛び降り足を通した。二人は履き物のイボイボにさえぞうつとなつた。

「火箸は？」佳代子が訊いた。二人は風呂場の方を見た。風呂場は土間の奥手にある。火箸はその煙突を支えるわっか型の金具に引っかけられている。その方向はちょうど台所の出っ張りの陰になつていてもつとも暗かつた。

二人はぞうりをひきずるようにして煙突に近づいていく。風呂場は台所の半分ほどの広さしかなく、そのぶん奥まつている。利菜は佳代子の腕にしがみつく。居間から明かりは落ちてはいるけど、目の届かない場所がいつぱいあつた。心臓はどくどくと鳴っている。感覚が鋭敏になり、わずかな物音にも飛び上がる。土間の土はでこぼこしており、二人の怖々足はそのかすかなでつぱりにもひつかかつた。何でもない地面がこのときだけは危なっかしく感じた。佳代子

はまず台所に近づいた。角つこまで行き、背中を壁に押し当てた。そして、腕だけを煙突の方に伸ばしていった。呼吸が早くなる。利菜は暗がりの向こうから手が伸びて佳代子を引きずっていくんじゃないかと考え佳代子の腰にしがみつく。崖から落ちかける人を助けるみたいに。

佳代子の手は煙突を二度三度と叩いた。寛太郎は子供たちがとりやすい位置に火箸をつっていた。佳代子が金具にそって指をすべらすと、火箸にふれた。佳代子はうめきをもらしながら火箸をさぐった。だが、壁に背を貼り付けた体勢ではうまくつかむことができなかった。佳代子はしばらくもどかしさと奮闘した後、利菜に向かつて、「とりにくいっ」と怒ったように言った。泣き出しそうな口調でもあった。「とれないよっ。だつてつかめないんだもんっ」利菜は、その体勢じゃ無理だよと言いたかったが、煙突側にまわつてとれなんて言えない。あんたがやれ、と言われるのが怖かった。

佳代子は、利菜の気持ちを察したのか、「二人で行くからね」と切りつけるように言った。利菜はうなずいた。二人は寛太郎に教わった腹式呼吸をやることにした。息をぐうつと下っ腹まですいこむ腕を垂らし、お腹に向かつて息を吐いた（吸つても吐いても、体が垂れるよう力を抜くのが骨だった）。三度くりかえすと、少しだが気分が落ち着いた。壁際を離れると、風呂場側に回りこんだ。

「なんだ、なにもいないよ」

佳代子が安堵の口調で言った。煙突の辺りには暗がり広がるばかりで、その闇はじつととしている。何かがつごめく物音もしなかった。

利菜がささやく。「はやくとつてもどろっ」

「わかつてるよ」と佳代子は言った。佳代子を先頭に煙突に近づくと、風呂場には土間からしか入れない。色ガラスの引き戸がついている。彼女たちが煙突に近づいたとき、その戸が、キイイ……、と開いた。二人は悲鳴すらも凍り付かせて、縮み上がった。

五右衛門風呂はかまどの上に乗っている。だから、風呂の入り口

は高い。二人はぼつかりとあいた四角い空間を見つめる。奥に据え付けられた洗濯機の白い肌……その高い踏み段の上に、真っ白な手が伸び、ひらひらした。手には濡れた長い髪がおちかかる。佳代子は口を開けて固まった、悲鳴を上げようとしたのだが、息すらも出てこなかった。彼女は息を出そうと腰を折り曲げじたばたした。行動を起こしたのは利菜だった。

彼女は素早く火箸をひつつかむと佳代子の腕をひっぱった。ぞうりを蹴立てて逃げた。土間を通りぬけようとする、居間の障子戸がぴいっと開く、畳の上には瘦せた女が濡れた着物をたらして立っている。二人は頬骨をぶつけあいながら抱き合って飛び上がり、寢床に戻ろうと壁際まで遠ざかったあげくにはしご段にぶつかり、そのはしごは屋根裏の物置にのぼるためのものだが、その屋根裏でもかさかさとなにかが駆けずる音がおりてくる、彼女らは夢中で部屋にあがった。はいていたつつかけを脱ぎ飛ばし、蚊帳に潜りこみ、そこを通り抜けようとする、隣の部屋から、タタタツ、と何かが駆けてくる音がした。

二人は夢中で蚊帳をぐぐり抜けると、寛太の部屋にもどった。みんなはしばらくあつけにとられ、無言で二人を見つめていた。四人は軍手をはめていて、それは子供の手にはなんとも不釣り合いで、利菜は軍手の白と血の赤の対比のせい、みんなのことも怖かった。彼女はごくりと唾を飲む。佳代子がそうつと扉を閉めた。

「なにかあったのか？」

達郎がこわごわ訊いた、利菜は説明しようとしたが、言葉がでてこなかった。喉が渴いて貼りついた感じがする。

佳代子はなんでもないと答えた。みんなにうちあけるよりは、その方がずっとよかった。

畳みの血だまりには、すでに新聞紙とティッシュがばらまかれていた。どれも血を吸って、重赤くなっている。利菜は火箸でティッシュをつまんだ。紗英がゴミ袋を広げる、そこに放りこんでいった彼女だつてさっきの女が気になる。着物を着て濡れそぼってるなん

て、幽霊女の定番みたいなやつだ。でも、彼女はつとめて気にしないようにした。あんなの幻だ、幻。呼吸を深くして、さつきみたいに胸をくつろげようとしてみたが、喉の栓を閉められたみたいになまくいかない。ふすまの外に、さっきの女が立っているんじゃないかと思うと、気が気ではなかったからだ。

みんなはティッシュをばらまき、新聞紙を広げる作業を続けた。なんだか繰り返すと、床の血だまりはうすくなった。女の子たちはしゃがみこむと、雑巾で畳の隙間に入りこんだ血をふきとりだした。寛太が椅子にのぼった。達郎がかごをさしだす。寛太は背伸びをして洗濯ばさみはずしていった。服が落ち、それを達郎がかごでうけとめる。ロープがぐらぐら揺れて血がとびちった（広げた新聞紙に落ちる血滴はボタボタという音を響かせる）。血まみれの服が腕をかすめ、くそっ、気をつけるよっ、と達郎が言った。

しばらくして、利菜はパジャマをこした素足を、ひやひやと風がなでるのに気がついた。彼女はおそろおそろ振り向く、喉のポンプがあやまって作動したみたいに気管が詰まった。襖が、あいていた。彼女の視線は寢床の蚊帳を通り越して、一気に土間まで飛んだ。玄関の戸も開いている……。

土間に続く障子戸は開け放したままだ。佳代子も自分も閉めてはいない。だけど、その外にある玄関の扉が、今では開いていた。嵐の音は、さきほどよりも強くなっている。土間になだれこむ雨が見えた。

利菜は、詰めていた息をようやくと吐いた。

玄関の戸があいているなら、じゃあ誰が入って来たんだろ……それとも、でていったのか？

彼女は出ていってくれた方がいいと思った。さっきの女が出ていってくれたんならいいのに。

「戸が開いてるよ……」

声をかけると、女の子たちは顔を上げ、男の子たちは振り向いた。みんなぎよっとした表情をしている。誰かの口から蚊の泣くような

悲鳴が漏れた。

「お、おまえら玄関も開けたのかよ」

達郎が言った。利菜と佳代子は首を振った。それどころか寢床につづく襖がいつ開いたかもわからなかったのだ。

「くそつ、ちくしょうつ」

寛太は手が血まみれになるのもかまわず服をはずしていく。みんなは表をじつと見つめる。まるで、なにか入ってくるものがないか、見張っているみたいに。服を集め終わり、軍手もかごに放りこんだ。みんなは無言で互いを見合った。

「服を外に出さない」と……」寛太が言った。

「ああ……」と達郎が答えた。

外から響く風の音は、人の悲鳴のようだった。

寛太と達郎はためらいがちに部屋を出た。すると後ろでひいという音がした。利菜が振り向くと、仏壇の扉が音を立てて閉まるどころだった。一同が悲鳴を上げると、掛け軸の絵がゆれ、和紙からは墨の線が浮かび上がった。柳と川、釣りをしていた男が出てこようとした。

利菜の目の前で（彼女は悲鳴も上げていない。いつのまにか肺の空気は出尽くしていた）襖がしまった。佳代子と紗英があわてて閉めたのだ。

「みたっ？ みたっ？」佳代子が振り向き涙目で訊いた。

利菜は首を横に振った。「見てない、なんも見えなかった」

そのとき襖がかすかに開きはじめ、新治が罵声をあげながら飛び出し、その戸をふさいだ。彼は丸いとつてを両側からはさみこんでいたが、利菜がこれまでに見たこともない動揺した顔で振り向くとこう言った。「開けようとしてる……っ」

寛太は廊下に飛び出すと、雨戸に使っていたつかい棒を取り外した。利菜と紗英は棒をうけると、柱と襖の間におしこんだ。新治は放心したように座りこんだ。

みんなは無言で目を見交わした。

「かごを外へ出さない」と

達郎は言った。

みんなは駆け足で土間に向かった。達郎が踏み段に足をおろす、空気が足を叩いた。玄関は大開きに開いている。達郎は素足のまま土間におりると、階段の下にかごをおいた。寛太家の庭には安つばい外灯がひとつある。その明かりがついているから、みんなの目に雨に濡れた畑がうつった。利菜は佳代子と視線をかわした。二人とも玄関の扉は開けていなかった。

「じゃあ誰が開けたのよ」佳代子が訊いた。

「両神山からついてきたんだと思うか？」

達郎が振り向きもせず言った。利菜はぎゅつと唇をかんだ。佳代子はこらえきれなくなつて後ろをむいた。寛太の手は血まみれで、新聞紙で血をぬぐっている。

「わかんねえよ、そんなことつ」寛太は新聞紙を投げた。血で黒くなつた紙の固まりが、居間から落ちる光の中をころころところがった。

「確かめるか？」達郎が訊いた。

「なにをよつ」

佳代子がわめき返した。でも、達郎が何を確かめたいのかはわかつてる。神社にうめた服をここまで持ってきた奴の正体だ。最悪なのは、みんながすでに答えをもっていることだった。両神山に着ていった服を持つてきたのは、両神山にいたあいつに決まつてる。

「軒下にいるに決まつてるよ」新治が言った。「にいちちゃんも言つたじゃんか。このかりかりいう音はなんだつて」彼はその瞬間なめ太郎につかまれた足のことを思い出したのだ。新治は怪我をしていたから、その感覚はよりいっそうなまめかしくよみがえつた。「あいつ、床板をはがそうとしてるんだ。それで、ぼくらを一人ずつ連れさるんだ」

「待てよ。音はしたけど、猫かもしれないだろ？」

「でも、わたしもそう思ったよ」利菜が言った。「そんなふうに考

えんのやだけどさ。そう思うんだもん。佳代ちゃんはどう思った？
「思いたくもなかったよ。あいつ、両神山からついてきたの？ なののために？」

「ぼくたちを捕まえるためだ」と新治が絶望的な声で言う。

「ちがう。そんなはずない」達郎が言った。「新治、おまえの言うてるのは、先生の話そのまんま……」

そのとき、庭の暗闇を左から右へと陰が走った。

新治は言った。「もういやだよ。あんなのに足首つかまれたり、怪我したり、怖い夢みたり、もううんざりだよ」

みんなは表を見ている。開いた、玄関の方を。

達郎が振り向いた。

「お、落ち着けよ……っ」

「落ちつけて、どうやんのよつ。達郎ちゃん説明つくの。服が一人で戻ってきたりさ、血まみれになってたりさ、そんなことの説明が付くつてのっ？」佳代子の声はヒステリーを起こしたときみたいに大きくなった。「そんでその血がじいちゃんには見えないかもしないんだよ！」

利菜にはその瞬間の佳代子が、怒ったときの登美子に見えた。そんなことを口に出したら、佳代子にはぶつたたかれるだろうけど。佳代子は他人に暴力をふるうのを極端にこわがってもいる。利菜が手を伸ばすと佳代子はがっくりとうなだれてその手を握り返した。利菜は達郎に向かって言った。

「あたしたち、風呂場んとこで女のお化けを見たのよ。濡れてて、着物きてた」

利菜が言うつと佳代子も、

「あれつて紗英が見た奴でしょ。溺死女だよ……」

と言った。そのお化けのことならみんな知っていた。神保南小学校では写生大会を水力発電で行うから、その怪談はなかば伝統のようになっている。

「うそでしょ……」

紗英がきくと、利菜と佳代子は首をふって否定する。

達郎はすばやく扉によつた。勢いよく閉めようとしたのだが、そのとき玄関の向こうから手が伸びて、扉の縁をかつと押さえた。達郎はたたらを踏んであとずさつた。みんなには血まみれの指だけが見えた。しばらく一同は無言だつた。寛太は、たいへんだ英二が怒つて戻つてきた、と思つた。死ぬとなめ太郎の子分にされるんだつ。指は、扉をひたひたと叩き、リズムを取つた。

達郎が動く、指はとまつた。

「動かない方がいいよ」

利菜が言つた。指がまた動きはじめた。童謡が一同の頭に響いて、気が狂いそうになる。

達郎は寛太と目を合わせた。二人は寛太郎の言つた言葉を思い出した。おっかないのをやつつけるぐらいの気持ちがあれば大丈夫、という言葉。寛太郎の言つたことは根拠がない。だけど、幽霊をやつつけられないかという、答えはノーだつた。体はむりでも、精神の力なら。寛太はなめ太郎に石をぶつけたから、そのことを体で学んで知つていた。それに相手は子どもだ。少なくとも大人のモンスターじゃない。

達郎が身を翻し、ファインプレーみたいなしなやかな動きでほうきを取つた。寛太が土間に飛び降り、壁の懐中電灯をとつた。

「あいつをやつつけろっ」

達郎が震える声で叫んだ。

佳代子も利菜も土間に飛び降りた、紗英も。新治は迷つたが、それでもみんなの後につづいた。

達郎は箒を振りかぶると、夢中で手を打ち据えた。男の子が顔を出した。達郎は目を疑つた、思わずごめんよと誤りそうになつた。男の子は血まみれどころじゃない。ほんとに腐っている。おまけに怒つていた。歯をむき出して雄叫びを上げた。達郎は一番前にいたから口の奥にある金歯が見えた。彼はひるんだ。

寛太が懐中電灯のスイッチをいれ、モンスターの顔を光で照らし

た。そいつは顔を押しさえて、悲鳴を上げる。彼が苦悶に踊ると、血と腐った肉が飛び散る。土間とガラスにべちゃりと貼りつく。そいつは踊りながら庭に出た、みんなの耳に、ぬれた土をふむビチャビチャという音がした。男の子の体は、はがれるか食われるかしたように、脛の骨はむき出しだ。みんなの心におじけがさす。

彼らは達郎を先頭に、外へと踏み出した。

外では風と雨が舞っている。落ち葉が庭を満たしている。鶏たちが騒ぎ、子どもたちは雨に濡れるのもかまわず立ちつくした。寛太の光は男の子の影をおったが形もなかった。

寛太は電灯を振り回す。光りのなかを雨は白い筋をつけて落ちてくる。トイレを見た。屋根を探した。電灯の光はサーチライトのように旋回する、最後に畑と庭のあいだにある、どでかい蒲焼きみたいな稲木を照らした。寛太はあつと声を上げた。なめ太郎はそこにいた。相撲の蹲踞にも似た姿勢で座りこんでいる。長い髪がびしゃびしゃに濡れている。上半身にパジャマを着て。そのパジャマの間からは妊婦のようにふくれあがった腹がのぞく。

女の子たちは悲鳴を上げて寛太に抱きついた。達郎が助けを求めて振り向くと、

「呼ぶなよ」

なめ太郎が、ひび割れた、肋をきしますような声を投げかけた。

彼は猿のようにしゃがんでいる、痩せた脛が目立つ。

「じじいは呼ばないでくれよ。あいつは嫌いだ。おまえらは好きだ。おれのものだから」

「お、おまえの子分はやつつけたっ」

寛太が電灯を向けた。なめ太郎が長い舌を垂らした。あかんべをしたんだろうか。

「光はきかない」と言った。「このこと、誰にも言うな」

彼の舌が地面にとどくほどにのびた。達郎は箒で叩こうとしたが、その前になめ太郎のパンチをくらった、腕だけが、ゴム人形みたいに伸びてきたのだ。達郎は棒みたいにぶち倒れた。達郎の耳からガ

「ゼガべろりとはがれ、傷口があらわになる。あいつの手は縮まり、胴体に収まった。利菜たちは達郎を助けにかかる。なめ太郎が右手をふった。ゴムボールが落ちてきた。利菜の胸元に。彼女はそれをキヤッチした。利菜は額に貼りついた髪をかきわけながら稲木を見上げる。雨と涙のせいでなめ太郎の姿はゆがんで見えた。

「他人にいうな。親にも友だちにも。おまえたちは戻ってくればいいんだっ」

「いやよっ」佳代子は泣いた。「あんなとこ、もどんないもんっ」なめ太郎は雲をつかむように両腕を上げた。「逃げられると思うなよ！ おれさまはいつでもおまえらを見てるぞ！ おまえらを見て、おまえらをかならず連れ戻してやる！ 暗闇にひきずりこんでやる！」

なめ太郎は両腕を雄々しく天にのぼす。子どもたちは力がおまもりさまの力なのか、どす黒いものが空気をみたし、渦を巻くのを感じた。現実ではない別の場所に迷いこんだ感じが強くなった。

「弱気になれ！ おびえてしまえ！ 悪いもので心を満たせ！ もうおしまいだと信じこめ！」

なめ太郎の首がのびた、ろくろ首みたいに地面に降りた。なめ太郎は叫びながら、一人一人の顔に近づき、契約を迫った。血と腐った肉の臭いで息もできない。

「言わないっ」ついに新治は言った。「言いません。約束しますっ」なめ太郎は首を振り、勝利の雄叫びを上げた。「ガーガーガーガ」髪から泥と垢が飛び散った。この声はばあちゃんには聞こえないんだ、利菜は思った、血が見えなかったみたいに。だから自分の声で助けを呼ぼうとした。涙と鼻水にまみれた顔を、家に向けた。「呼ばない約束だろうっ」腕をつかまれた。「呼ばない約束だ。ボールにかけて絶対だ」

「そんな約束してない……」利菜は答えた。なめ太郎は前腕の骨をいじくりいたぶる。唇をかんで痛みをこらえる。

「やめるよ、言うこと利く」達郎は言った。「だれにも言わない」

なめ太郎は黄色い目玉でにたりと笑った。乱杭歯をむきだした。「安心安心」なめ太郎は首と手を戻していく。「言つとくけど、逃げ場はないぞお」彼は笑った。「助けもなあし。ひどい目にあうのは約束するよ。ひどい目にあわせるオレが請け合う」

なめ太郎は呵々大笑した。その声は耳ではなく、ちよくせつ頭に響き、頭蓋骨の裂け目が開きそうだ、新治は頭を手で押さえた、てっぺんから裂けてしまわないよう両手ではさんだ。そのうちに耐えきれなくなり、新治は家に駆けこんだ。佳代子と紗英もつづいた。利菜が遅れたのは彼女がビニールボールをまだ持っていたからで、なめ太郎はボールに誓つてと言ったから、こんなものを持っているのは決定的にまずいな、と思つたのだった。彼女はボールを捨てた。達郎と寛太が両脇から利菜の腕を引っぱった。

寛太が振り向くと、なめ太郎は稲木の上でとんぼ返りをうった。ぼわつという音がして、彼の体は空中に吸いこまれた。闇に飲まれたみたいだと寛太は思った。

そして 二〇二〇年

そして 二〇二〇年

二十

「佳代子！ 佳代子！」

誰かが肩を叩いている。薄目を開けた。ぼやけた視界の中に誰かがいる。心配げな顔で唾を飛ばして、手を振り上げている。

「寛太……」

彼女が頭を持ち上げるとそこは暗い土間で、二十五年前のあのときの風景があざやかによみがえり重なり合う。階段の下でほうきをかまえ仁王立ちした達郎、踏み段の上で外を見つめる利菜たち

だけど、今は昼間で表からは明るい日差しが幾筋にも混じり合いながら土間へと降りかかっている。あれは遠い昔の話、今へとつづく昔の話だ。倒れていた間、佳代子はあの夜の情景を映画の早回しのように思い出した。その後、彼女たちが泣きながら腕についた血をぬぐい落としたこと、朝になると川に行き、服とビニールボールを捨てたこと、服は石に引っかかりながらもせせらぎをきらきらと流れていった。その後、自転車に戻ると、そのかごに両神山でなくした新治の靴と寛太の帽子が入っていたこと。佳代子はそうした記憶を思い出していただけでなく、現在の寛太と達郎、二人の精神ともシンクロしていて、その会話を訊いていた。だから、おぼろげながらも寛太たちが三人だけで山に戻ろうとしていることや、それに利菜と紗英、二人の友達がいま東京にいて、ともに神保町に戻ろうとしていることもそれとなく知ることができた。それは、おまもさりさまのわるいものが見せたのではないのだと彼女は思った。あいつなら、みんながバラバラになることを望むはずだ。だけど、そうさせなかったのは、別の力の働きなのだろう。彼女たちはあの現象

を、わるいもの、と単純に呼んだ。だけど、世の中は悪いことばかりではないし、いいことやいい人やいいものだってたくさんある。子供のころ彼女たちはそうしたことを信じてわるいものと対決した。彼女はそんなことを感じて、涙を流す。なぜだか泣けて仕方がなかった。寛太が心配して佳代子の頭を膝へと乗せる。彼女は瞼を開く。「寛太……」

佳代子は身を起こす。冷たい土間に倒れていた間に三七才の肌には細かな石がくいこみ、血管のようなあとが幾筋もつき赤く腫れている。さきほど見たものを思い出し、天井の梁をかえりみるが、そこにかかった首つり死体はなくなっていた。

「佳代子、なんでこんなところに倒れてるんだ？」

「寛太、両神山にいったらだめ。あんたたちだけで行ったら」佳代子は旦那の腕をつかむ。寛太は驚いた顔で彼女を見下ろす。

「なんで知ってるんだ？」

「訊いてなくてもわかるのよっ。あの夏にあたしたちが無事だったのは、みんなでいたからよっ。あたしたちみんなでいたから助かった。一人つきりにはならなかったもん。一人でいたときだって、あたしたちは一緒だったのかもしれない。そう思うのよっ。ばらばらになったら、あいつはあたしたちを簡単に殺す。だから……」

寛太はなすすべもなく、佳代子の頭をなでる。

「落ち着いてくれよ……」

佳代子はひどくじりじりを起こしたときのように手を額にあてがう。「ああ、利菜っ」

「なんだ、利菜がどうした？」

「もどってきたらだめ……」

「なんだと？」

「あたし、連絡した……あの子に。手紙を書いたのよ」

「なにっ？」

「電話でも話したわ。あの子の身にも起こってる……」

寛太は無言で佳代子を見つめる。

「あのときの仲間みんなに。町を離れても関係ないのよ。あいつは時も場所も選ばない。どんなに離れても関係なんてないのかも知れない……」と彼女は言う。「だからあんたたちだけで行ったらだめよ。あいつは人を操るなんて簡単なんだ。あのときだって、じいちゃんはいなかった。待っても戻ってこなかったのよ」

佳代子は川に服を捨てたあの日、寛太郎が戻ってこなくて、そして、みんながそれぞれの親に電話をかけたことを思い出す。夜になつて、なめ太郎の訪問を受けるのはもうごめんだった。紗英の母親はふしぎなことに両神山行きを反対しなかった、達郎たちの親も。息子が怪我をしたのに？

佳代子の母親はそもそもいなかった。利菜の父親が車を出すと言った。電話を切った後、利菜が泣いたこと、みんなが抱き合つて輪になったことを佳代子は思い出す。あの夏若い彼女たちは強く、そして一つだった。

寛太が涙にくれる妻を見下ろし、こう訊いた。「なんのことだ？」
「おぼえてないの？ あんたの部屋は血まみれだった……。あのとき、神社に埋めた服が戻ってきて、そこら中に血が飛び散ってた。あたしがあの子の腕をぬぐってやった。利菜の……」
「なにをいつてるんだ……」

寛太は放心したように座りこんだが、佳代子はすべてを思いだしていた。あの夜、みんなは泣きながら腕についた血を洗い流した。洗面台に血と水が混じり合いながら流れていった。一同は服を着替えて朝を待った。だが、朝がきて長い昼が過ぎ、夜になつても寛太郎はもどつてこず、連絡もなかった。

「あたしたち、それで親に連絡したのよ……。じいちゃん抜きで山に戻ることに決めたの。だって夜になつたら、またあいつが……」
「なんだよ、あれ……」

寛太がつぶやいた。

佳代子は寛太の顔を見上げる。その視線の先を追う。その先には古ぼけて虫食いだらけになった靴と帽子が、釘で壁に打ち付けられ

ている。ぶつとく長い鉄釘が根元まで。なんだか悪意のある打ち込み方だ。寛太が立ち上がるとさきほどのことばをくり返した。「なんだよ、あれは……」

「あんたのよ」佳代子が言うと、寛太は振り向く。「その帽子はあんなのよ。両神山でなくしたやつ……あのときも戻ってきたじゃない」

寛太は目をみはった。

「あたしたち服もボールも、川に捨てに行つたのよ。神社にはもう戻る気にならなかつたから。川に流してから、家に帰ろうとしたら、自転車のかごに靴と帽子があつたわ」

寛太は靴と帽子に手を触れる。「新治のか？」

「思い出せないの……？」

「いや覚えてる。あいつは山で靴をなくしたんだ。なめ太郎にとられた。おれの帽子もだ」と彼は言った。「もう片方の靴は川に流した。なのに、あの日、自転車に戻つたら、両方ともかごの中に入つてたんだ。俺の帽子は血で汚れてた」

新治の靴も茶色い染みがある。靴も帽子も茶色に変色してしまっている。新治の右足の靴は紐が切れている。子供用の二十センチの小さな靴。どちらも二十五年の旅を耐え　こうして、ぼろぼろになりながらも、戻ってきたわけだ。

「あたしたちは助かつた。何人も行方不明になり、何人も死んでるのに。友達がいたから……そうじゃないの？」

寛太は帽子を持ったまま、立ちつくす。「だけど、どうすればいい。利菜は戻ってくるのか？」

佳代子はうなずいた。

「紗英には？　連絡をとつたのか？」

「とれてない……。でも戻ってくる気ではわかつてる」

と確信を持って言った。彼らの結末も、記憶の蘇りとともに強くなっている。気絶をしているあいだ、寛太や達郎をすごく近くに感じた。いま、寛太は利菜が戻ってくると訊いてとまどっている。寛

太が男だけで山へ行こうとしたこと、自分を説得しようと考えたことを彼女は知っている。そして、彼女はこれまでにないほど強く寛太を愛していることを知っている。わからないのは最善の方法だけあのとときと変わらないことがもう一つ。彼女は今も迷っている。自分の行動を。決断を。いつだってそうなのではないか？ はつきりとわかる未来など、何一つないのだから。

佳代子は顔を伏せ、泣き始める。「寛太、あたしどうすればよかったの？ 利菜に連絡を取らない方がよかったの？ でも、あたしだって苦しくて、あの子の助けが必要だった。あの子が心配だった……」

そのとき寛太は名状しがたい表情をし、そして佳代子を抱き寄せた。「なにもまちがってなんかない。おまえの言うとおり、おまえが利菜のことをわかってるんなら、利菜だって、おまえが危険にさらされてることをわかって、遅かれ早かれ戻ってきたかもしれない。紗英はどうだ？ あいつには連絡すらとってない。日本にだってほとんどいないのに、おまえは紗英がここにくるのを知ってるんだろ？」

「ええ。隣にいるみたいに感じるわっ」

「それならもういい。もう泣くなっ」

と寛太は言つて、佳代子をさらに強く抱き寄せた。達郎と一緒に戻ると約束したあのとときですら、こうなることをわかっていたような気がする。自分たちがまたふたたびそろいあのに戻ることを、わるいものに、立ち向かうことを。

だが、彼らは恐ろしかった。あのことと同じように、自分たちがしだいに追いつめられていくのを知っていて、たとえ結束を強めようと、子供のようになにかを信じることはできなくなっている。肉体は成長したのに精神はしぼんで、自分を信じ、誰かを信じる強い心がもはやない。彼らに与えられた希望があるとすればたった一つ、あのととき生き延びたという事実のみだった。自分を信じる強い心がなければだめなのに、二十五年で身につけた知識も分別も、

互いをつなぐ信頼という名のパイプをつまらせる塵芥にすぎないことを、六人がそれぞれに感じていたからである。

だけど、戻るしかないんだ。と寛太は上をみあげて思う。苦しいときこそ下を向くな、これも寛太郎から教わったことだ。寛太は子どもたちのためにも仲間のためにも山に戻るしかないことを知っている。二十五年前にそうしたように。

結局彼らはあるときと同じでそうするしかないからそうするのであり、確固たる信念がないときに、行動や決断に対する不安を感じるのは当然のことだった。彼らはずっと子供のころから、怖がっているだけではだめだということを知っている。決意したらとことんやりぬくことこそ、あるとき学んで忘れなかったことの一つなのだ。だから、寛太は恐怖を感じながらもこう信じている。人は人といえるからこそ強くもなれる。信念こそがすべてを可能にするのであり、わるいものを克服するのは、たった一つ、信じる力のみなのだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1851a/>

ねじまげ世界の冒険

2010年10月19日05時50分発行